

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

7月号



9-SEPTEMBER '66

昭和四十一年九月号 奇譚クラス 定価 三〇〇円



奇譚クラス



昭和四十一年九月号



定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



9月号 300

アルバム「美しき縛しめ」第十集 完成

責められる美女百態

一部 一〇〇〇円 (千共) 略号 美10

特アート紙グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

〔出演モデル〕 ○一宮百合子 ○東浦ひかる ○美木乃々子

○増田みゆき ○木村洋子 ○大塚啓子 ○絹川文代 ○山原清子

○長野良子 ○玉田美佐子の十名の美女。

ビチビチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った細目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。特製アート紙に對する極鮮明なグラビア印刷の女体緊縛のフオトを、心よりお楽しみ下さい。

●美しき縛しめ「第十集」責められる美女百態内容●

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
全身緊縛首攻めの場面(東浦)	縄でくびる豊麗な女身(東浦)	足首で引回される女(東浦)	ムチ打ちに悶えぬく少女(東浦)	少女羞らひの緊縛姿(一宮)	剥がされたパンティ(一宮)	豊麗を無理に晒される(美木)	Pタイルに転がされる(美木)	逆さ吊りの緊縛女体(増田)	インナーベルト縛り(増田)	M女性陶酔の表情(木村)	瘦身は細にくびれる(木村)	脚線美も露わな女体(美木)	松樹に晒された奴隷(木村)	立木の枝から逆さ吊り(木村)
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
色づいた乳首を晒す(大塚)	全裸後手縛り豊満女体(玉田)	二の腕に喰い込む紐(木村)	鏡に写す縛られた裸身(大塚)	縄目と猿轡にあえぐ(東浦)	全裸後手足首連繫縛り(玉田)	長髪をアップにして(長野)	華麗な刺青裸身並縛り(山原)	後手縛りに空ろな表情(木村)	柔肌に喰い込む縄目(山原)	後手細縛りの美女裸体(絹川)	片足吊りにあう女体(大塚)	後手吊りに喘ぐ全裸身(東浦)	緑の柱に晒された女(玉田)	

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女ドレイの品定め(大塚)	強烈股間縛りに泣く女(東浦)	初めて縛りに恥じる(一宮)	隣室に見た驚異の縛り(大塚)	乳房の巨大になる縛り(山原)	吊りを嫌がるモデル嬢(玉田)	真紅の腰巻でポーズ(山原)	驚づかみにされた黒髪(東浦)	麻縄縛りにのびた女体(大塚)	開孔器による鼻責め(大塚)	エビ責めに耐えぬく女(東浦)	豊胸を黒帯に托して(長野)	雪白の柔肌を晒す細目(大塚)	人身御供の緊縛全裸像(大塚)	股間縛りに投げ出す脚(一宮)	エビ縛りに苦悶の表情(大塚)	伸びやかな二本の脚線(一宮)	滑車後手吊りの準備(大塚)	みゆきの素顔と緊縛像(増田)	竹に拘束された洋子嬢(木村)	離家の縁に縛られる(大塚)	輝く白肌を晒す全裸身(絹川)	身動きできぬ後手縛り(大塚)	腰巻を剥ぎとられる(木村)	大の字逆さ吊り女体(増田)	美しい裸身にからむ縄(美木)	若肌の手首を晒して(一宮)	後手股間足首縛り(東浦)	浴室の荒縄縛りにあう(山原)	股間縛りと腰縄縛り(木村)	緑蔭の庭を背景にして(大塚)	立木で両手吊りにあう(大塚)	縄の反応とその表情(一宮)	強烈縛りでなる弓反り(大塚)	麻縄は豊かな肌を抉る(東浦)
--------------	----------------	---------------	----------------	----------------	----------------	---------------	----------------	----------------	---------------	----------------	---------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	---------------	----------------	----------------	---------------	----------------	----------------	---------------	---------------	----------------	---------------	--------------	----------------	---------------	----------------	----------------	---------------	----------------	----------------

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情(山原)	胡坐縛りでもたえる(絹川)	股間縛り正面で立つ(大塚)	ムチ打ちを願うポーズ(木村)	伸びやかな女体の細目(一宮)	責めぬかれた股間縛り(一宮)	後手滑車吊りにあう女(大塚)	縛られて歩かされる(大塚)	亀甲縛りと股間縛り(美木)	正坐で放置する縛体(木村)	夫から鼻責めを受ける(増田)	可愛い小悪魔の表情(一宮)	徐々に吊られる片足(大塚)	強烈縛りで受ける鼻責(美木)	均斉のとれた美麗縛体(大塚)	室の隅に逃げた女奴隷(美木)	首綱股間縛猿轡の表情(美木)	可愛い裸身の鑑賞(木村)	セーラー服の後手縛り(大塚)	後手股間縛りで引返し(一宮)	海老責めで耐え忍ぶ(木村)	縄でくびった柔肌地獄(一宮)	エビ縛りの苦悶と戦う(大塚)	台上に晒す緊縛裸身(山原)	火あふりにあう女囚(大塚)	アグラ縛りで頭張る女(大塚)	がっちり後手縛りで(東浦)	柱縛りでもがく清子(山原)	石橋の上に放置される(玉田)	ムチ打ちに悶える女体(大塚)	猿轡を三面鏡に映す(大塚)	庭園を引き回される(山原)	首綱にあえぐ哀婉表情(大塚)	太縄が柔肌をくびる(大塚)	大の字荒縄ハリツケ(山原)
--------------	---------------	---------------	----------------	----------------	----------------	----------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------	----------------	----------------	----------------	----------------	--------------	----------------	----------------	---------------	----------------	----------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------	----------------	----------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------

アルバム「美しき縛しめ」第九集

革具に拘束される女

一部 一〇〇〇円
略号「美9」

△女性刑罰拷問特集▽ 「西洋篇」

【出演モデル】美木乃々子、大塚 啓子、山原 清子

予約募集！ 八月上旬刊行予定。お申込みを乞う。

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号5」の姉妹篇として、ここに「革具に拘束される女」特集のグラビア写真集を企画しました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りする革具によって嚴重に拘束されるさまを数十枚の鮮明なフォトによって、ごらんいただけます。

限定版グラビアM結集アルバム

Mフオト・オンパレード「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇〇〇円（送50円） 略号「M特」

予約募集！ 八月下旬刊行の予定。お申込を乞う。

待望久しく初めて刊行されるM派ばかりの限定版Mグラビア写真集です。今まで応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを、豊富な写真資料によって提供いたします。このチャンスをお逃すと二度と入手できません。

せん。以前に臨時増刊号「M特集号」定価三〇〇円を刊行した折、案外申込者が少く、その後売切れになってから、注文が殺到した例があります。現在では十倍の金を払うからといってでも入手不能になっております。是非お早目に御予約下さるよう、お待ちいたします。

【今月の新版分譲品】

両手吊りにもがく

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号「むさ」

生ゴムの猿ぐつわ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むこ」

後手吊りのもだえ

大手四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むれ」

強烈縛りにうめく

大手札五枚一組 六〇〇円
木村洋子 略号「むそ」

顔を凌辱される

大手札四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むよ」

後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号「むか」

大の字逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
増田みゆき 略号「むの」

鼻責めに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円
木村洋子 略号「むる」

エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やこ」

股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やひ」

後手足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やせ」

淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やす」

縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やく」

白晒フンドシ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やに」

相撲マワシ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やは」



先日、或る販売店を訪れたところ七月号から一割余分に貰ったがまだそれでも足りないという。本当は余り調子にのって増刷はしたくないので、なんとか今の発行部数の範囲内でやりくりしようと思えておいた。グラビアもない、口絵もない、それに挿絵だってロクなものはない。表紙だって見出しだって、ありふれている。きつと注文は月を追うて減るだろうと考えていたのが、逆に今年に入ってから月毎、尻上りに好調になってきたのだから予想外である。

十年程前、本誌の見切本を多量扱ってくれたことのある人が突然訪れてきて、昭和二十九年、三十年に発行した本誌を何冊でもいいから譲ってくれという。発行所だから無いといっても、十冊や二十冊は残っているだろうから、是非分けてくれというのである。よく事情を聞いてみると、その

人は今古書店を開いているのだがお客さんから一部千円でもいいから探して呉れと頼まれたというのだ。有れば譲ってあげたいのだが一冊も残っていないというと、怪訝な顔をして帰っていった。あの頃、たしか見切本として一冊三十五円で卸した定価百四十円の雑誌が十年以上経った現在、千円で取引きされるとは、世の中も変わったものである。

或るデパートの催場で古書展が開かれていたので、のぞいてみたところ、昭和の初年頃に刊行された『変態十二史』というのが一揃い十二冊出ていた。表示されている値段が一万二千元。発行された当時は、きつと十二冊で二十円は出なかったと思うのだが、三十数

年の月日は、物の値段を変えてしまっている。もっとも電車の座席に置き捨てられた週刊紙のように拾う人もない雑誌も、多いことは多いのだが――。

本誌も内容を後世になっても文献的に価値のあるものにする以上やはり紙質も、保存しておくために適当な良質のものにする必要がある。十年後、二十年後、三十年後になっても読まれるということになれば、これは当然のことだろう。この点、表紙はアート紙よりも上質紙の方がよいのだが、光沢がなくて見劣りするものが難点である。本文はザラ紙ではなく中質紙を使って、印刷の鮮明さと保存性の良さを狙いたいと思う。

発行部数の僅少ということは、稀少価値を高める点から必要なことであるが、注文があるのに、余りにも発行部数をセーブし続けていると、類似誌の輩出を誘うという虞れがある。これは昭和二十七年頃に経験済である。

然し、現在のような状況下では内容に制約を加えると共に、発行

部数を極力控え目にするということも大切なことと思う。本誌のような雑誌は、本当に必要なとする人達の間でだけ読まれるというのがいいのであって、徒らに発行部数の大を誇るべきではない。

グラビア写真と四馬孝氏の口絵を豊富に収録した臨時増刊号「花と蛇」特集号なんか、とても今後あの形式のものは市販されようとは思われないが、当時としてはS一辺倒であるため、大分控え目に印刷したものである。現在では、もう古本店でも絶対に見かけることは出来ないくらい、貴重な文献となっている。せめて、直接申込まれる方のために、もう少し余分に刷っておけばよかったと、今にして思えるのだが、これも後の祭りである。

とにかく、特異風俗文献研究についての資料が極めて僅少な現状の日本なので、なんとか、そのブランクを補う意味で本誌の内容を一步一步充実させると共に、特集号や限定版或は単行本などを刊行してゆきたいと思う。但し、至って地味なやり方しかやれない陣容なので、長い目で見て期待していただきたいものだ、お願いしておく。

この頃の本誌

編集子

初めての緊縛旅行

田中恭一

私がここ数年の間、緊縛した女性には四名になりますが、この中二名は三年前に結婚し、一名はいつとはなしに疎遠となり、最後の一名の西山嬢も先月結婚しました。私と彼女とのSM交際は数年になりますが、思い出は深く拙い筆ですが、その一部を披露してみたいと思います。

私達が自動車旅行を考えたのは十月も終り頃で当時行楽時季を控えて種々選沢したあげく、冬季利用者数の少ない新舞子に定め、旅館予約の上、十一月中旬の週末を利用して出かけました。普通だったら三時間位の行程を初めての事で四時間近くも要し現地へ到着したのは五時前でした。部屋は見晴しの良い高台の離れの一室でした。週末というのに他に泊り客はなくSM遊戯には最良の状態でした。

で物足りなく思っていました。そんなわけで今度の初めての緊縛旅行には相当期待を抱いていました。丹前に着換えた私は彼女を促して第一の調教の場所である浴室へ急ぎました。私は彼女に身体中を洗わせた後、持ってきたゴム紐で緊縛にかかりました。方法は簡単で両手を肩先へ手の甲を合せて丁度背中中で拝む様な姿勢にしてゴム紐を手首に巻きつけ、残りを首へまわして思いきり締め上げました。手首は今までの調教と入浴の影響で思ったより上へあがりました。そのままの姿勢で、私はゆっくり身体を洗ってやりながら首へ廻したゴム紐を念を入れて再度締め上げました。ゴム紐は中空の硬質ゴムで、緊縛遊戯の準備運動としては効果的でした。部屋へ帰って食事を済ませた後、女中に寝具を敷かせて施錠をし彼女を全裸にしました。

今日私の予定は、緊縛二種類と海老責めで、使用する縄は用意して行きました。が、丹前の紐が非常に軟らかく且つ胴を三巻きする程の長さがありましたので、先ずこの紐で緊縛する事にしました。

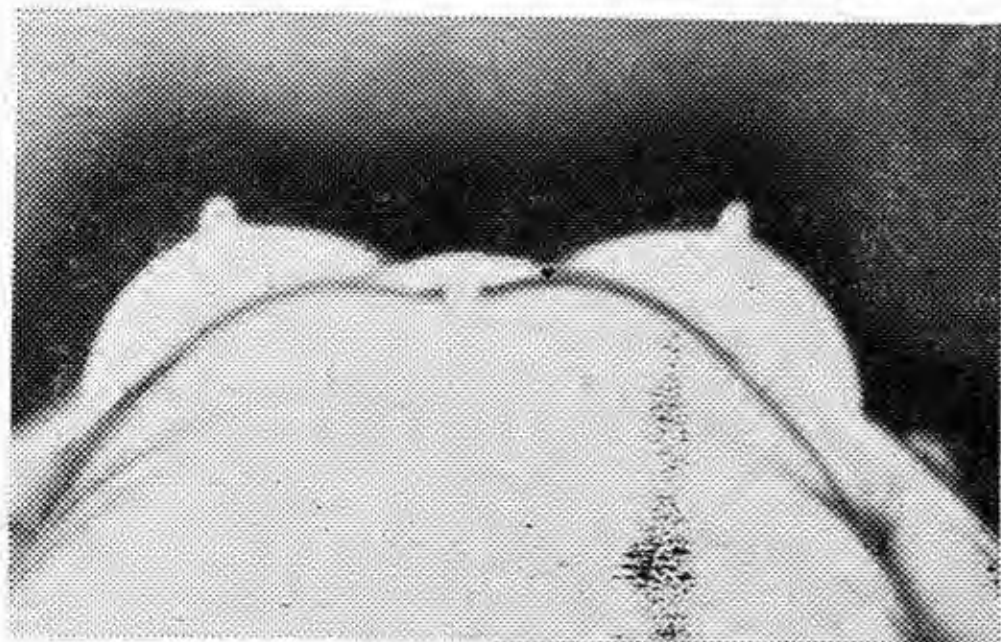


最初の緊縛方法は何時もよく実施する方法で、先ず右腕の一番つけ根の所をしっかりと縛ります。真むすびにする時、えてしてゆるみ勝ちですが人さし指で結び目を押さえ口を使って締めますと、よく締めまり腕に喰い込みました。次に紐を前から廻した左腕つけ根を締めあげ、最初の左腕の所へ通して引き締めます。更にこの紐を下げて肘から少し上を左腕と同じ様に締めつけ、順次肩の方へあげてゆきます。紐は途中で継いで身体を四巻きしますが、乳房の所は片側は紐で上下を挟みこみ、片側は真上を通して締めます。紐がやわらかいので、すばらしく喰い込み、丁度ソーセジかハムのようになります。次に右手首を肩先へ捻じ上げて身体に廻した紐の下をくぐらせます。くぐらす紐

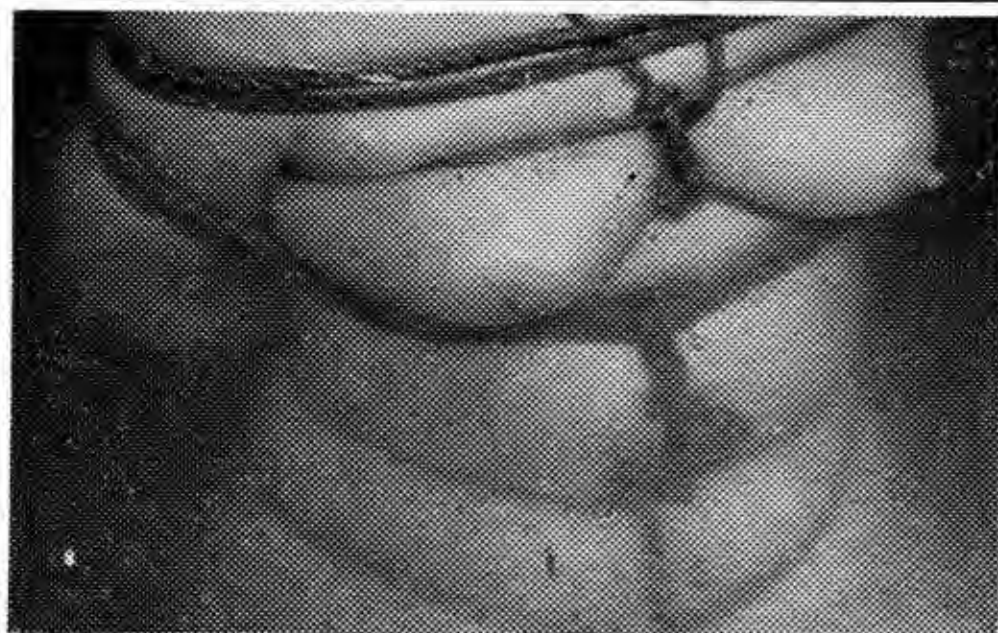
私の撮ったフォト

「乳 首」

小 竹 一 浩



<写 真 A>



<写 真 B>

は上から二本ですが、この紐の下をくぐらすのが中々大変で、指を一本一本紐の下へ入れてゆくのですが、十分ばかりかかって、やっと四まわりの紐の下をくぐらせ肩先へ手首を寄せます。次に左手首を同じく紐の下を通すのですが、これは前より困難です。

先ず用意の竹棒をこじてゆるみを作り、右手と同じ様に紐の下をくぐらし、両手の甲を合せて肩先まで上げることが出来ました。そのままの姿勢で寝かせると胸に力が入り、一層紐が肌に喰い込みます。二の腕はまるで蜂かソーセージのようになっていきます。少し休んでから、抱き起して緊縛姿勢を見えますと、実に素晴らしいので

更に首は縛って余った紐を首へ廻して締め、前後左右から観賞をして、その上竹棒を両乳房の間の紐の下へ入れて、こじてみたりしました。

縛っている間は両腕は完全にしびれているため、つめったり噛んだりしても痛がりませんでしたが、紐を解くと両腕を組んでかがみ込み、わずかに触れても、飛び上って悲鳴をあげました。後で彼女にきついかどうか参考に聞きました。彼女が痛いことは痛いですが辛抱できるということであり、始めて縛った時は、すぐ悲鳴をあげた彼女が良くここまでなったものだと思いました。

プレイに喘ぎながらも、悦びにふるえ突起する乳首(A)——わざとピントを甘くして、どきついものではなく、共に楽しむというプレイ・ムードを表現してみたかったのですが、果して成功しているか、どうか……。

水責めにふるえる乳首(B)——充分に水を吸い、ギリギリと肌に締ってゆく縄目にピントをあわせ、水の冷たさと、縄目のむごたらしさ、痛さ苦しさ悶える乳首に狙いをつけたのですが……。

大層なことを書きましたが、現像処理に失敗し、写真のむずかしさを痛感している次第です。失敗作ながら、敢て皆さま同好者の方々の御笑覧に供しました。何かと御批評を賜れば幸いです。次回はもう少しましなものを御覧に入れるべく考えております。他の方の作も期待いたします。

サロンの展望台

刺青ダンサー

目出鯛三

ストリップファンの方へ

関西ストリップのスター淳・川内嬢の道楽は刺青、腋の下や内股の亀の刺青で人気をよんでいたが病嵩じて、この程、パンティの刺青をしてしまった。舞台に出ると眼の悪い客が「早よ脱げ」ご本人にいわせると一生はきっぱなしのこのパンティ、経済的ではき心地も満点。近くブラジャーも刺青するよし——。

これは雑誌八宝石V六月号二〇六頁に載った一文。奇クファンで関西方面在住の方なら、すでに御存知の方もあるかと思えます。刺青に興味のある諸兄にとっては必見の価値ありと思われるので御紹介します。更に一度是非カメラハントで取材されます様、お願い。さて、一見何んの深みもない文

章と考えられ、案外軽く見過され勝ちな記事ですが、そこはちよいと奇クファン根性にものを言わせて推理すると、意外と興趣に溢れた真実がかくされていることに気付かれた方も居られることと思います。

第一に川内嬢は「刺青が道楽」であるといっていること。

刺青については何も知らない小生ではあるが、知らないなりに想像は出来るということです。つまり刺青には可成りの苦痛と忍耐が要求されると思われます。柔肌にチクリチクリと針を突き刺す苦痛をもものともせず、内股や腋の下に道楽として刺青を施した川内嬢を分析すれば、そこには彫師と彼女との間に、SMの世界が展開されていることに気がつく。

或いは既に川内嬢は奇クファンの一人で有ったかもしれない。川内嬢はストリップパーである。従って露出症であることはまちがいない。次に刺青マニアであることが挙げられよう。その間には、Mとしての願望が充たされるわけである。

第二に施刺する部分が粘膜に近く、しかも身体の中で最も鋭敏で柔い部分に限られているというこ

と。そこに何かがかくされていると推理出来はしないであろうか。只単なる刺青マニアであれば、二の腕でも背中でも構わない筈である。ところが彼女の場合、ストリップパーであるということも理由



編集部だより

○男性Mモデルの志願者が多数応募され、大いに感謝している。出来るだけ御希望に添うよう努めているが、何にしろ数が多いため条件の合わない方は後回しになっているので御諒承を願っておく。

○奇クサロン欄に「夫婦SMプレイフォト」を掲載して以来、漸次投稿者が増え、大いに意を強くしているが、△妊婦フォトVについても、誌上に掲載以来、月を追って新しい写真を送って来られるので有難いと思っている。

○△妊婦フォトVといえば、今までのところ、志望者は数件あったのだが、写真撮影は実現していない。編集部においても極力妊婦モデルの獲得のために努力している次第だが、若し可能な方があれば御協力をお願いしたい。

○先日乳児を抱えたモデル志願者が訪れたが、何故もう少し早く妊娠中に連絡しなかったのかと悔やまれてならない。

○小誌十月号は従来、何かと転機になったことが多い。今年も来月号(十月号)から三五〇円に値上

の一つではあるが、いわゆる性感帯に刺青が集中されていることを見逃すことは出来ないと思う。

腋の下とか内股、更にパンティの刺青、そして次に乳房へブラジャーの刺青を施すことは、全てが柔い最も苦痛の激しい鋭敏な部分にある。然るに苦痛が大きければ大であ程、そこから湧き上る快感感も大きいといえることではなからうか。従って彼女が刺青の持つ魔力に魅せられた最大の原因が浮か



「夜尾探郎」M男にされる！

よるをさぐる

ハ鞭打ち、蹴とばし、彼を追いつて行くルミの後ろ姿を、檻の中の女獣達は、無関心に見送っていた。

かれとは、よく、夜乃探郎のことらしい。辻村さんのカメラ・ハントですでに、よくはハ夜尾Vという名前を呈呈されているから。

この所、「死の美学」などに耽溺しているばかりにとって、この八

び上ってくる様に考えられるのだが、如何なものであろうか。

第三にパンティの刺青をして経済的であるということ。恐らく普段もノーパンではなからうかと淫らなことを考える。もしそうだとすれば、至極便利になる。トイレに立った場合でも、スカートを捲くれば用が足せるわけだ。洗濯する必要も新しいものを買う必要もなく、成る程便利で経済的なことは間違いない。

月号河津安春さんの「戯文列伝」二の章は久し振りに呵々大笑させられた。どだい、ひとりの人間にSとMは程度の差こそあれ、伏在しているのだから、よくがサディスティンの大姐姐、春日ルミさまによつて、コテンパにM男にされる巻も不自然ではないだろう。それにしても、まことに、くすぐったい、表題通りの戯文ではあった。

第四に道楽であれば彼女には馴染みの彫師があるわけで、どのようにならうか。うめき、もだえのたうつ柔肌を前にして、彼はどんな気持ちで施刺するであろうか。

川内嬢と彫師だけが知っている秘められた物語である。さて、読者の皆様、こんな風に思い思いに推理してみること面白く思われませんか。

すぐお返しに、こん度は河津氏をモデルにした——など、すぐ、ぼくは義理がたいからペンを取ることになるのだが、いつも、ぼくを幼稚園のこどもあつかいにしてしまふ、天道公平大先生などの、血圧をまたあげることになるのでやめにした。ここで、サービスに、はじめて河津さんに告白するが、一度だけ、マゾウ小説を書いて投稿したことがあるのですよ。勿論、没でしたがね(呵々)。

では、この所、快調なスタートを切っていただける貴兄のご健筆を切望します。

—六月二十五日記—

(夜乃探郎)

げの上、増頁内容充実に踏みきりたいと思っている。思えば定価三〇〇円に改訂して以来二年有余。このあたりで、増頁しても早きに過ぎないだろう。

○増頁に関して、グラビア頁開設か本文充実か、ということについて大分考えた。用紙を良質のものにするとは今春来、企画していたことだが、グラビア頁を再開するということは、ハ読む雑誌Vへの逆行でもあり考えさせられた。

○本文充実ということであれば、原稿幅の折柄、投稿作品の収容能力が大幅に増すことでもあり、最も無難な方法ではあるが、新味に乏しいことはいなめない。

○もっともグラビア頁開設ということは、いきなり十月号から実現しなくとも、今後の進展を慮って含みとしておいておき、慎重な準備の上決行してもよい筈だ。

○本誌の内容に関しての熱心な読者の方々からの御意見御批評が多数寄せられ、その一部は誌上に掲載しているが、掲載外のものについても、大いに参考にさせて頂いている。急激な転換は為すべくもないが、多数読者の意図を十分に察して、文献誌として後世まで残る雑誌に仕上げたいものである。

映画通信



見たり聞いたり

サジスチック映画

テレビ、舞台から

東山映史

一、映画では、あいかわらず独立プロ、エロダクション作品に、サジスチックシーンが多い。とくに小森白監督作品など白眉だ。その中でも「毛」が最近面白かった。題名からエロチックだが、ストーリーは、都会をあこがれ出した二人の女学生が売春婦への道を辿る転落の詩集である。その売春婦への飼育の過程がきわめて面白い。

パンパンの殺人事件に巻き込まれる。そのパンパンの一本の毛から犯人を引き出そうとする科学者に協力させられるが、そのために裏切者としてのリンチにあう。二人の新人女優が椅子に縛られたり、ムチ打たれたり迫力があつた。

一、テレビでは、最近捕物帖が多いが、これには必ずといっていいほど緊縛シーンが多い。特に無実の罪で拷問に泣く美女など、設定はいくらでもでき、視聴者の目

を楽しませている。

最近では長谷川一夫の「半七捕物帖」の「張子の虎」最初から長谷川裕見子らのお江戸の芸者のさまざまいとくみあいの喧嘩。一人の男の取りあいから、そして、長谷川は「殺してやる」と絶叫。

そして、その芸者は殺される。勿論、彼女は容疑者として縛られる。岡う引は半七ならぬ拷問で犯人をでっち上げようとする悪親分。彼女は長襦袢一枚にひんむか

れ、荒縄で縛られムチ打たれ、苦悶にあえぐ。このシーンは大いによかった。そこへ半七親分が乗り出して、真犯人逮捕という段取りになる。

もう一つ、市川和子が縛られるという「半七捕物帖」もあった。大映の清純スター姿美千子が、テレビ初出演で、これも間違つて縄打たれ、お白洲に引き出されるシーンをとるという。何だか悲しい気分になったそうだ。



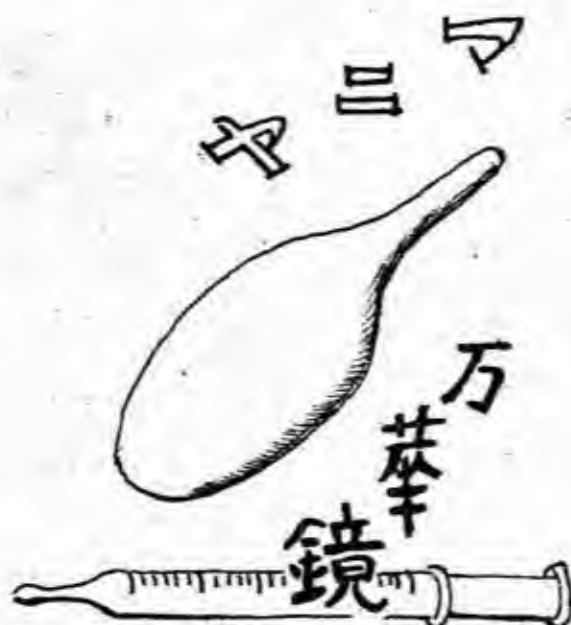
大映「競艶八剣伝」

一、舞台では——大阪の大劇は
実演とショーの舞台になったが、
六月は大友柳太朗と高田浩吉が出
演。大友は映画でヒットした林不
忘作「大岡政談——魔像」から、
「謎の血文字屋敷」という題名で
映画を使った連鎖劇という形式の

舞台で好評を博している。
ご直参神尾喬之助と喧嘩浪人茨
右近の二役だ。喬之助は同輩たち
にいじめぬかれ、ついに、「一番
首」「二番首」と同輩たちを斬り
最愛の妻雪乃を残して逐電。追わ
れる身になる。

この雪乃が長谷川一夫の娘——
長谷川季子。そして「主人の行方
を白状せよ」と拷問される。スク
リーンを洩れて、せつない悲鳴が
きこえる。
彼女はかつて、新橋演舞場で武
智鉄二演出「番町皿屋敷」のお菊

で、吊し責めなど、すさまじい拷
問の舞台で名声をはせたことがあ
る。その悲鳴はさすがにうまい。
縛られていなかったのが淋しか
ったが……。そこへ恋しい大友の
姿があらわれる。舞台としては楽
しかった。



保健婦さん と 浣 腸

吉 野 珠 子

私は浣腸にとっても興味を持って
おります。物心のつかない頃は別
としまして、恥しく思う年頃にな
りましてから浣腸を受けましたの
は、中学の二年生の時でした。
別に便秘をしたわけではござい
ませんが、辞書で「浣腸」の項目
を見い出しまして、浣腸に興味を
持ったのでございます。ここで初

めて浣腸器を買った時のことを少
し申し上げておきます。
その年の五月頃でした。私はイ
チジク浣腸を町の薬局で買い求め
ました。始めてその女店員さん
に「浣腸」という言葉を口に出し
た時、全身がほてって、思わず顔
が赤くなったのを覚えています。
早速、家へ帰って母に浣腸して貰

いました。便秘と偽って……。
それからというものは、浣腸の
魅力にとりつかれて、イチジク浣
腸を愛用するようになりました。
中学三年の修学旅行にも、三個
のイチジク浣腸を携帯しました。
けれども旅先の旅館でスーツケー
スの底にあるイチジクを取り出す
ことはできませんでした。私の室
にも五、六人の友達が一緒でした
から。やつのことで家に帰ると
イチジクを掴んで、お風呂場で浣
腸いたしました。
その後、イチジク浣腸の常用は
よくないと思ひまして、ガラス製
の浣腸器を買ってまいりました。
それから専ら、五〇CCのこの
浣腸器を愛用しております。しか
し、そのうち自分独りで浣腸する
のが、つまらなくなり、高校の二
年のとき、学校の保健婦さんに浣
腸していただきました。

二日ほど排便を辛抱した上、衛
生室の扉をノックしました。便秘
なので浣腸してほしいと申します
と、保健婦さんはすぐ準備にとり
かかりました。浣腸器はガラスの
シリンダーです。五〇CCを二度
注入されました。それから、その
保健婦さんに、数回、卒業まで浣
腸して貰いました。
今、商社会社の事務員をしてお
りますが、浣腸に対する習慣はま
だ続いております。私にこんな変
った性癖がありますため、男友達
も出来ません。どなたか私に心ゆ
くまで浣腸して下さいる人って、い
ないでしようか。私は生れてこの
方、異性の方に浣腸されたことは
ございません。心の奥では、それ
を強く願っておりますが、浣腸に
対する関心が余りにも強いばかり
に、恥しさが先にたってしまうの
でございす。



辻村 隆

(第二十七回)

東京のH氏からの便りで、早くて七月下旬の、遅くとも八月の中旬に、紫千鶴さんのカメラハントと対談が出来そうである。こんなことなら映画『花と蛇』が関西で上映されていた時、是非見ておくのだったかと悔んでも、あとの祭りである。

『花と蛇』が映画化されたとき、私はまず何を置いても、こ

れだけは見ておかねばと腹をきめたのに、その映画が小説の題名を借りただけの、所謂羊頭狗肉ものだと知人から知らされ、奇々誌上でも、映画に関しては評判がかなり悪くなかったのに逡巡して、とうとう機会を逃してしまったのだ。

勿論公開の映画なら、原作通りは到底無理だとはしりつつも、映画を見て、反って原作のイメージの壊れるのを懼れて見なかった私は、現在の心境はハタと困惑の状態にあるのである。紫千鶴さんは諸賢もとくにご存知の通り、映画『花と蛇』の女主人公静子夫人になった主演女優である。

彼女とのインタビュー以前に、場末でもいいから『花と蛇』の再映はないかと、毎日毎日スポーツ新聞の映画欄とにらめっこだが、運の悪い時はこんなもので、見込薄である。いざとなれば当って砕けるで白紙で彼女と会うより仕方がないと腹をくくっているのだが。

× × ×
一宮百合子から私への音沙汰はその後全然ない。しかし箕田編集長からの電話によれば、百合子は再三彼のカメラの前に立っている様子であるし、ドライブもねだっ

映画にみる鼻責

△この刹那の甘美▽

藤村 若葉



休日の雨降りには、いささか無聊をもて余す。すこぶる健全な肉体と貧弱な経済という、いみじくも相反する両面を持ち合せているから尚更である。こんな時、根が好きであるから、自然と三本立二〇〇円也のエロダクシオン映画に足が向く。

四時間余を二〇〇円で過すのだから、暇つぶしには、すこぶる経済的である。但し、見終った時、

期待外れでガックリするのと、胸のあたりが、変にモヤモヤするのが頭にくる。なら、よせばいいのに、やっぱり行く。根が好きなのである。たまに期待以上のシロモノに出合う時がある。そんなときは愛しい恋人に出会ったような期待がする。

△十七才の経験▽は、そういう稀にある作品の一つであった。とにかく『鼻責』そのものが、長いシ



おむつマニアの履歴書

山 本 一 郎

私はおむつマニアで、しかも多
少女性的傾向を持っています。こ
の傾向は既に七、八才頃よりあり
幼い妹のおむつカバーを人目を忍
んで着用したこともありました。
しかし当時小学生だった私には、
乳児用のカバーは小さすぎ、完全
に着用できませんでした。

青年時代になるに従って、おむ
つカバーやゴム製品に対する関心
は強くなるばかりでしたが、当時
大人用のおむつカバーなどは、ま
だ発売されておらず、全く入手不
可能でした。それで同じゴム製品
である婦人用生理帯をおむつカバ
ーの代用にする事を考えました。

昭和二十四、五年頃の生理帯は
現在のものと異り股間部は前開式
のパンツ型で、前は二重のゴム布
が当ててありましたので、おむつ
カバーに似ています。男子が婦人
用生理帯を買い求める事は大変恥
しい事であり、何度かためらいま
したが、意を決して人通りの少い
薬局で購入し、始めて生理帯を購
入したときの喜びは、今でも明ら
かに思い出される程です。

男子用のパンツと異り、ピッタ
リとしていて、しかも直接肌に触
れるゴムの感触は、何とも言えぬ
ものでした。以来、日夜生理帯を
愛用し更に数枚の各種生理帯を購

入しました。現在でも時々使用し
ていますが、然し生理帯のゴムの
部分は一部に過ぎませんので尚十
分に満足できません。従って今度
はゴムシートでおむつカバーを自
作しました。何分自作品なので市
販品のようなスマートさは無いの
ですが、生理帯と異り全体がゴム
布である点でマニアとしての夢を
或る程度満足させてくれました。

昭和三十三年、婦人雑誌で大人
用（病人用）おむつカバーの広告
を発見し、早速メーカーへ発注取
寄せました。自作品と異り甚だス
マートで、表はサックス色のナイ
ロン、内面はクリーム色のゴム布
で大腿部はゴム紐で調節できるよ
うになっていました。ここに於て
長年のマニアの夢が満足された感
じがあり、以後今日に至るまで毎
夜愛用しています。

「華麗なる傀儡」……室井亜砂路画



SM戯画「女王様君臨」

春川ナオミ画



若くて美しい臀部の下に敷かれ
ている男性群を、いかにも誇まし

げに眺めている風俗画は、果して
何を象徴しているだろうか。

大人用は従来通りの和式即ち輪になつたおむつをT字型にして当てるのがよいと思います。おむつカバーのみでは、歩くとズレますので私はおむつカバーの上に婦人用のパンティ式ガードル又はコルセツトを使用し、更にその上に婦人用のズロースを着用しています。

おむつを着用していると、小用の時に不便で時として間に合わずに濡らす事もあります。これはおむつカバーの目的にもかなった事でもあり、又それだけおむつマニアとしての喜びも倍加される筈です。私は現在数枚のおむつカバーを所有していますが、近年大人

用もビニール製が多くなり、ゴムに愛着を持つものにとって淋しい事です。おむつマニアは本質的にはゴムの感触を楽しむべきものでありビニール製を使用する事はあくまで変則的なものと思います。現在、大人用おむつカバーも各種市販品を見る様になりましたが

いずれも一長一短、完全な品はありません。私も色々と研究し、私なりに理想的なカバーの製図をしてみました。これは又の機会にお知らせしましょう。全国のオムツマニアの皆様方の多数の御寄稿をお待ちします。

短歌

うしろ手

高村 初子

後手のいましめ肌にくいいて
処女の乳房切なくあえぐ
黒髪は肩にみだれて後手の裸身
うなだれ羞恥にもだゆ
悲しきは女のさだめ身にまとう
腰紐をもていましめられぬ
もがけども縄目は固くくいこみ
てあえかな裸身切なくあえぐ
後手の縄尻高くつながれてうず
くまりえず足ふみしいぬ
後手を柱にかたくゆわかれて裾
の乱れを直すすべなし
もだゆればもだゆるほどに裾わ
れてあらわなる膝後手かなし
やわ肌はむざんや幾重にくびら

れて白き女体は激しくあえぐ
三重二重乳房をくびる麻縄の痛
みにうめき足指曲げぬ
ぬめ肌の乳房をせめぐいましめ
に悶えも空し地下のひとやに
後手にねじ上げられてひしひし
と縄かけられて涙うかびぬ
後手の縄をとかれて泣き伏せる
乙女の背に汗の玉浮く
投げだした足ひくひくとふるわ
せて大きく喘ぐ後手しぱり
後手の縄尻とられ引かれたる娘
の悲鳴壁にこだます
後手に肌もあらわに括られて酒
買いきし男らを待つ
酒盛りの車のなかに乙女らの悲
鳴ひびきぬ姿見えぬど
身もだえば身もだえる程あらわ
なる太股かなし後手の身は
吊られたる後手むなし掩うべき
腰に冷やや風吹きすぎぬ

モデル通信

沖村れい子嬢へ

麒麟児久

料理人は鷺鳥の毛をむしる
 ああ、雪が降る、雪が降る
 それにつけても思いだす
 可愛い娘はなぜ去った

—アポリネール

冬枯れの古都奈良でのカメラハント——。乳房の美しいあなたは三枚の写真だけをのこして、消えてしまった。

あなたに呼びかけるとき、ぼくの気持は複雑だ。あなたを裸にしたいい好きどころと、あなたを大切に、そっとしておきたい、美しい人に恋い焦れる心と、その矛盾にぼくは悩むのです。

一日中、あなたの写真を眺め、あなたを想って暮す日もあるのです。そして、あなたにプレーの申

込みをする読者の通信を見ると、ぼくは嫉妬で胸がやるせなくなつて、その男をとて憎むのです。ぼくは誰よりも妻を愛しているつもりなのに、そんな過剰な気持ちになつてしまふのです。それが果して恋といえるか、ぼくは自信がありません。しかし、このぼくは女性の理想像を「肉体的にも精神的にも女らしさを切実に感じさせること」と思っています。

あなたと一言も、お話したことのないぼくに、あなたの魂まで判る筈はありません。ぼくには、あなたのすべてが、ぼくの理想像なのです。ぼくの愛妻にも、いや過去にぼくが恋したどの女にも、あなたのような乳房はありません。だから、見果てぬ夢——あなたに

憧れるのです。

しかし、あなたを追ってはいけない、とぼくは自戒しています。いくらぼくが、ぼくの心を、あなたの心のそば近くにおいて貰いたいと願つても、若くて美しいあなたと、相手にしてくださるわけもないことです。ぼくは、ただあなたの讃仰の詩をうたうだけで満足します。だから、ぼくはあなたに逢いたいとも、お返事をいただきたいとも思いません。

もともと、ぼくはプレーする勇氣も欲望もない男なのです。あなたの写真を、幻をじつと胸に抱きしめていただけで幸福なのです。ぼく独りの胸に秘めた恋人に、そつと恋をささやいている限り、あなたの御迷惑にもならないし、誰の迷惑にもなりません。その他しいけれど、ちよつぱり甘い片恋のロマンが、ぼくの心を僅かに慰めてくれるのです。

そこで、ぼくはあなたにお願いがあるのです。奇巧編集部にも熱望しているのですが、あなたの写真、分譲フォトにすること、お許し願えないでしょうか。積極的、消極的の違いはあつても、あなたに対する讚美や、慕情や、憧憬は読者の誰にも共通した願望と、ぼ

代理部だより

○待望久しい「美しき縛しめ」第九集及び第十集が愈々今月末発売されることになりました。即ち、
 △女性刑罰拷問特集▽「西洋篇」
 「革具に拘束される女」一部一〇〇〇円（略号「美9」）と△責められる美女一〇〇〇組▽一部一〇〇〇円（略号「美10」）です。

○更に始めて企画された限定版グラビアM写真集△Mフォト・オンパレード▽「女王様に飼育される日々」一部一〇〇〇円（略号「M特」）今月末発売になります。いずれも列項にて詳細広告いたしますから、是非お求め下さい。

○従来分譲しておりました印画紙焼付の写真の中で、若干分譲中止となりました分があります。今月号の広告からは取り除いてありますが、以前の広告をごらんになられた方は御留意下さい。分譲中止になりました分の略号は、左記の通りです。「てな」「ちの」「みう」「らほ」「らわ」「かと」「ぬい」「あう」「まふ」の九組。○ここ一年来、地方の書店にて本誌が見かけないという便りをよく

<発言>

雑草の強さに自信をもて

読める奇クを支持する

菊 熱愛 生



奇クは教える、教えられる雑誌ではなく、マニア共通の広場であった筈であり、それだからこそ、二百号突破という輝やかしい誌歴をきざんだ。その内容は、考える——ではなく、共感し、灰色の現実生きる楽しさをもたらしにくれた。

ミーハー的文章、総花的編集、かならずしも「低俗」にあらず、むしろ雑草の強さを持つ庶民の街大阪が生んだ奇クならこそ、独自の足跡ではなかったか。いま奇クは見る雑誌より読む雑誌と脱皮した。発行ごとの読者の増加がそれを裏付けしている。精

くは信じます。五月中旬へれい子旅愁Vという四十枚ばかりの拙稿を書き上げて投稿しました。分譲フォトの粒子の奇麗な写真で、あなたの魅惑的な緊縛裸身を鑑賞できたい欲求不満からくる淋しさがよくに筆をとらせたのです。どうか、この心貧しい男の、おろかしさに御同情下さって分譲フォトの件、お許し下さるよう改め

てお願い致します。奇ク編集部に朗報がくることを祈ってやみませう。貴嬢の御多幸を心から祈りあげます。

一杯の女性の読者の告白も発表されてきた。一方交通的な編集者と読者による他誌の独善的なあり方を尻目に、奇クは座談的記事その他によって、一層、奇ク百年の大计は、あくまで読者中心として、その異色の歯車の回転をけつしとめようとしなさい。

ひとりの読者もファンであるからには、手をさしのべ、共に歩もう！現今の奇クは、まるで低俗化（下駄ばきで入れる親しさを低俗と混同する、その独善さ）といわんばかりの八提唱Vが出たことを残念に思う。

奇クは教科書ではない。他誌には学問はいたるところあれど、マニアの人生はドングリの背くらべこそあれ。

八月号にて花山馨氏が「低俗化より脱せよ、奇ク」という場違いの提唱を寄せられたので、敢てここに私の八発言Vを提して、編集子の参考に使いたい。

頂きます。中には販売店名を知らせてほしいという要望があります。その点は発行所にてわかりかねますので、お手数でも直接発行所へお申込み願います。

○七月一日より郵便法の改正により第五種便が廃止されましたので雑誌のみ第三種郵便によって発送いたしますが、その他の限定版写真集、写真類はすべて第一種郵便（密封信書扱い）にて発送いたします。但し大量にて第一種郵便に適しないものは小包にて発送することがあります。送料は雑誌一冊をお申込みになるとき以外は、当方にて負担いたします。

○尚、速達或は書留にて発送御希望の方は、実費御加算願います。雑誌を第一種郵便にて発送御希望のときの送料は七十五円です。

○局留にて発送する郵便物は、出来るだけ一括してお送りするようにしておりますが、都合によって別包になることがあります故御留意願います。御注文品の中の一部品切品などの連絡は内部にメモいたしますから御承願願います。

○美しき縛しめ第六集、略号「美6」は今回売切れとなりました。残部はございませんので、お申込み下さらないよう願います。

第二回琵琶湖畔の女相撲

大塚啓子、東浦ひかる両嬢（分譲写真）に寄せる

雪 崎 京 人

湖畔は台風の前触れの強い風が吹いていた。ちぎれ雲が南から北へ激しく動いて九月始めの澄切った青空がその間から見えては消え時々太陽の強い光が湖畔の白砂を照らし、まばゆいばかりに輝く。

松林の中は前夜からの松葉がかなり散り敷いている。八月まで砂浜を埋めるばかりの水泳する人達の群も、九月に入ると殆ど見かけず、茶店も戸を締めたばかりになって寂しい。この人気がない湖畔にきた二人の美女、松林の中で服をするすると脱ぎすて一糸まとわぬ素裸になり、バッグの中から用意してきた相撲褌を取り出し手伝いあって締め込むのだった。

松の枝を通して日がさしては又かける二人の薄紅の肌の美しさ。引きしまった如何にも運動神経の発達したピチピチした体つきの精悍な感じの女鹿の様な美女は、ライトブルーのまわしを手際よく前

に当て股を通して後ろへまわし締め込むのだった。

豊かな肉づきの大柄なもう一人の美女は真白なまわし、少しなれないらしく締めるのに手間どるのを先に支度の済んだ水いろのまわしの美女が手伝って締め込む。二人共腰にしっかりと褌をつけて白砂を踏んで立った見事さよ。さあやりましょう。今日は負けないわよ。なにいつてるのよ。この間の様で又コテンコテンに負かしてあげるから。嬉々として二人は波打ち際に走った。

湖面は風を受けて波立って海の様だ。それでも遠くの波打際では数人泳いでいる人達が見える。二人は仕切る間ももどかしく懸け声をかけ合っつてぶつかり合った。激しい風が二人の髪を吹き乱す。右四つになり上手下手に褌を引き合った。遠くの水泳をしている人達、この思いがけぬ砂浜の美女

の相撲に好奇の目を輝かして集ってくる。

やめようか。かまわないわよ。いやだわ、羞かしいわ。見るなら、見せてやりましょうよ。大柄な美女は羞かしにためらう所を精悍な美女が足をからんで下手投を打てば、もんどり打って大柄な美女は砂上に投げ出される。

起き上って又組みつく所を下り乍ら又上手投。体重体力に優る白褌の大柄の美女、大きな相手の体を吊上げて投げる水色褌の美女、激しい相撲と強い風に髪は

乱れ二人共流れる汗で肌が光る。褌は股間に喰い入り大きな二つの尻の隆起が目を見はるばかりの美しさだ。九月の陽光は二人の体を照らし日やけして、少しずつ赤くなってくる。奮起した白褌の



美女は相手が寄ってくる所を強く体をおっつけければ、さしもの相手もたまらず砂上にどっと仰向けに押倒される。比良岳が薄紫に霞んで二人の美女の類稀れな相撲を見まもっている様だ。勝ったり負け



荒馬と女

THE MISFITS

たり、滝の様に流れる汗をぬぐお
おうともせず、砂にまみれ乍ら息
をはずませて二人の取組は、水泳
に来ていた男女の目を見張る中で
続いていた。

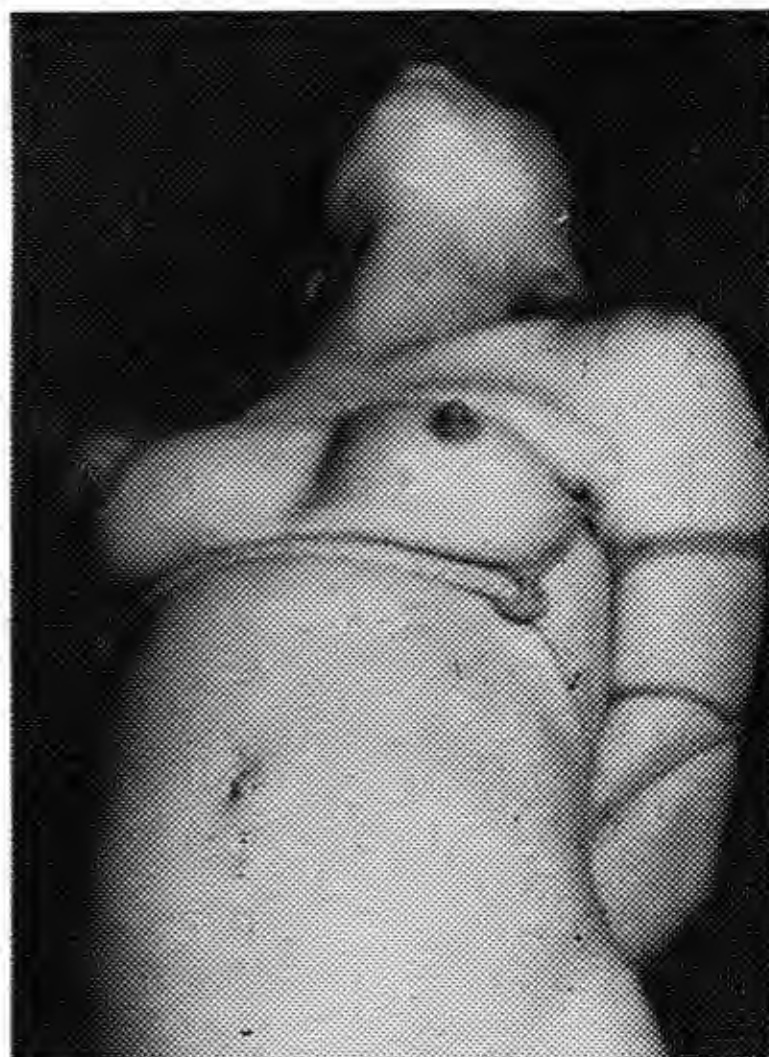
△編集部より▽掲載しました記事
中の写真は、第二回琵琶湖畔女相
撲写真撮影の際、カラーにて撮影

したものの中の一枚で、大塚啓子
嬢が東浦ひかる嬢を下手投げにき
めたところでした。背景には琵琶湖
の水面を隔てて近江舞子の松林が
遥か彼方に連なっています。カラー
では緑と青と二嬢のピンクの肌が
美しい対照を見せています。

妊婦写真雑感

会津綾 研二

編集部の皆様、ご苦労様でござ
います。奇ク七月号、AT氏の臨
月妻のフォト拝見いたしました羽
村京子さんの人真実です▽と告白
された強烈なプレイを想い出しま
した。実は私もSMプレイの多く
の記録をフォトに残してきました
が妊婦の緊縛フォトだけは神聖な
ものに感じられて送付することな
ど、思いもよらないことだったの



ですが、編集子が「臨月腹を送っ
てくる人が少く残念」との言葉に
永い間の愛読者の一人として協力
出来たらと思いい同封致しました。
フォトは最初の妊娠で最後のそ
れになった妻のものです。撮影
から全部自分でやりますので、よ
い出来ではございませんが、AT
氏同様、カットがわりにご使用下
さい。本当は妊娠中の緊縛で吾な
がら素晴らしいのや雪の中(雪国
ですので)でのフォトなどござい
ますが、只今は無難と思えるもの
をトリミングして送りました。

夫婦SMプレイ通信

新妻の緊縛フォト

須磨松男

前略、皆様の夫婦のSMプレイを誌上で拝見致して居ります中にお仲間入りさせて頂きたくなりペンをとりました。

SMに興味をおぼえ貴誌を知って以来、十数年。ずっと愛読を続けて参りましたが、二年前待望の結婚にふみきました。結婚によって好伴侶を得て以来、月に一度

位の割でSMプレイを写真に撮影して居ります。

私は元来、欧米のもののような洋装が好きで、大半がストッキング、靴を着用させて頂いて居ります。K誌を見ますと、色々な傾向の方が居られますが、洋装、下着、靴での縛り、責めを好まれる方は、ほとんど居られない様で残念です。



現在、日常生活がほとんど洋風化されている時、もう少し洋装での責めに興味を持たれる方がふえても良いと思うのですが。

幸い妻も積極的に協力して呉れて居りますが、私はあまり苦痛を与え責めは好みませんので、特に派手なポーズはありません。今後も洋装でいろいろな責めや縛りを試みてみたいと思っています。

拙作ですが、ここ数枚同封致します。編集長か辻村様のコレクションの一部でも加えて頂ければ幸いです。DPEはカラー以外は全部自家で、カラーは現像のみ現像所にしました。カラーのプリントは、まだ始めたばかりで、同じ所で同じ条件で撮ったものの色が、かなり違ったものになってしまいました。



今度はカラープリントと共にカラーネガの現像も試みたかと思っておりますが、国産のメーカーはプロセスを公表して居りませんし、薬品も入手し難く、資料も中々入手出来ません。どなたか御存知の方があれば御教え頂ければと思っております。

奇譚クラブ

昭和41年9月号

(1966年・9月号〈第20巻第9号・通刊第218号〉)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



サジズムとは何か

福田久文

はじめに成瀬氏を憶う

たしか昭和二十九年の末頃に出た本誌だったと記憶するが、成瀬氏の感動的な論評が巻頭を飾っていたことがある。太古人類がまだ集団生活を知らずに洞窟に住んでいたとき、人は棍棒を振るって競争者を倒したのち、妻となるべき婦人を緊縛して洞窟に持ち帰り、そのまま子を得るための聖なる行為を行わねばならなかったことを指摘して、「その血がいまわたしに流れていて、婦人の緊縛に心惹かれるのであろうか」という意味の述懐をされていた。

過去というものがあったという事実、未来というものがあるだろうという事実、しかも

この双方が現在どこにもないという事実、これらの事実を見詰めてふと我を忘れることができる人はやがて、五官が素朴に捉えている負担の多い世界こそ夢幻の世界であって、そこに安住できる人たちが観念的だと信じている領域こそ實在性をもつのではないかと気づくようになる。そしてさらに、この實在の領域が現実の素朴な世界をひそかに支えていて素朴な世界の一切の脆さ、惨めさ、醜さ、不齊合にかかわらず、生き続ける力をわたしたちに与えているのだと気づくに至ったとき、ようやくサジズムとマゾヒズム(SM)の世界を違った眼で見ることができるようになるのではないだろうか。

本稿の意図は成瀬氏とは別のところに鍼を入れることであるが、SMの異常な世界を是

認するには(弁解するというような弱者の態度を捨てるのである)高度の観念性を描いてはかに方法がないということが氏によってはじめて示されたものとして、冒頭に敬意を表する次第である。

以下徹底した観念論を展開するに当り、唯物論に対し、一言とどめを刺しておきたい。「主体なくして客体はない」。この命題の意味を掴めない人たちが(困ったことに大變多いのだが)人類の文化史上の二大偉観であるといわれるソクラテス、プラトンのギリシャ観念論とカント、ショーペンハウエル、ドイッ観念論とを知らずに過すのである。エンゲルスの好餌になったヘーゲルの観念論などはショーペンハウエルが詐欺だといって怒った出来そこないの亜流に過ぎない。

観念論だと笑われても仕方のない観念性の方が世間には圧倒的に多く存在するのだし、また理解しにくいことを悪くいうのは、手のとどこかないところにある葡萄を眺めてあれば酸っぱいといったイソップの狐以来、極めて普通のことであるが、何か別のものを得ようとするなら、わたしたちは謙虚でなければならぬ。特に書く者は不用意や不誠実のために読者に負担をかけないよう一層の留意を要する。

二、「おじさん愉しい？」

創立もない東京大学において哲学を講じた孤高の哲学者ケーベル博士は、その随筆集のなかで、ショーペンハウエルを支持して書いている。「わたしは近世哲学史の厭世哲学の項においてショーペンハウエルを読んだのではなく、ショーペンハウエル自身を読んだのです」。そしてショーペンハウエル自身は数学者が自己の創見になる理論を発表するときの自信をもって、主著の巻頭に自ら序していった。「同時代人たちにはなく、同国人たちにでもない、人類に、わたしは今完成したばかりのこの書物を手渡しする」。

麻生氏がマゾッホを読まれたように、わたしはショーペンハウエルを読んだといえる。この哲学者は、わたしの読んだ範囲では、

SNについては一言も触れていない。しかし「耳あるものは」その沈静の文字の背後に、SMの本質を読み取ることができる。

一人の宗教的乃至哲学的天才に触れることは一つの宇宙に触れることである。人はその天才によって初めて最高等の動物の眼以上の眼をもって自己と自己のまわりの世界とを見ることが可能になる。ショーペンハウエルは似て非なるものが特に多い哲学者のなかにおいて光芒を放つ稀な存在だ。この人の眼を借りることなしにSMの世界に光明を与えることは不可能であろう。

辻村氏を理解するために、しばらく我慢して読んで頂きたい。

個体も液体も重力によって高いところから低いところへ動く。植物の種子は盛んな細胞分裂によって、芽を出し、太陽に向かって葉を拡げていく。これらの力までショーペンハウエルは「意志」といったのである。「意志」は動物においてさらに複雑になってくる。蜘蛛の幼虫は、変態期間中の宿にしたいと思ふ樽を喰い破って穴をうがつのであるが、それが雄の場合は雌の場合の二倍の大きさの穴をあける。これは角に対する余地をこしらえるためであって、猿が木登りをおぼえ、女が嫉妬をするような自然の智慧である。動物の「意志」にはこのように認識が随伴しているが、人間のように認識によって指導されている

ない。

人間の意志についてわたしたちの哲人は推論した。「人間が今改めて自分自身の身体とその動きを分析してみるとき、われわれはそれが表象であるということ以外には、意志以外のなにものも見出さない。それだけで身体の実在性そのものが尽されているのである。だから無機物や動植物の世界が単にわれわれの表象としてある以上のなにものかであるならば、すなわちそのもっとも内的な本質において存在するものであるとすれば、これは、われわれがわれわれ自身のなかに直接に意志として見出すものであらう」(土井虎賀寿訳「意志と表象としての世界」本論第一九節、一部加除)。

仏教に深い敬意を払っていたショーペンハウエルをまのあたりに見るような気がする。「見ずや、竹の声に道を悟り、桃の花に心を明らむ」(正法眼蔵隨記第四)という東洋の英智を理解できる碧眼紅毛の哲人だったのである。

ところで、意志というものはすべて何ものかへの意志である。すなわち意慾の目標をもっている。ところがわたしたちの世界の本質自体として示されたあの「意志」は結局何を意志するのか? 起り得る疑問だが、この問いは実は無意味なのである。根拠の原理(因果動機、認識の根拠、存在の根拠の四種)は現

象（「意志」が表象となって具体的に現れたもの）にだけ適用されるのであって、世界の内的本質として、すなわちカントのいう物自体（時間と空間の制約すら受けないもの）として遍在する「意志」は根拠の原理とかかわりのない無根拠なものだからである。わたしたちは絶えず行動を導く目的と動機をもち、個々の行為についてはいつでも釈明することができる。けれども、なぜ一般にわたしたちが意志するのかと問われたら、答えることができない。答えられなくて当然なのである。

「意志」は、また単に無根拠なだけでない。「意志」の今一つの本質は飢えていることである。ところが「意志」以外には世界には何もないのであるから、「意志」は自分自身を貪り、苛むのである。弱肉強食は虫の世界から人間の戦争に至るまで、「意志」の現象するところにつきまといっている。この「意志」が同じ人間仲間として現れた者相互の間で、加虐、被虐の結びつきをそのかすのに何の不思議もない。ゆえに

命題一 SMは個々の人間の意識を超えた「意志」の本質に基くものである。

SMなどにかかわりないと公言するのは、偽善でなければ、大脳中枢の機能不全だ。まして撲滅しようとするのは、巨大な風車に向かって突撃するドン・キホーテとして、むしろ敬意を表しよう。笑いは人生において貴重だ

から。

辻村氏のようにこの道に徹した紳士は、小娘に「なぜこんなことするの？」といわれても何ともいいようがないであろう。扉を叩いていく子供になぜこんなことするのかと尋ねるようなものである。黒沢氏などは賀集子^{カチユシ}夫人を豆の機銃弾で「虐殺」している。これらは命題一の具体例に過ぎない。

三、「悪魔的になった日」

「カメラ・ハント」における辻村氏の行動は比較的簡単に肯定することができたが、団氏の「花と蛇」に現れる悪人たち、すなわち原稿用紙に向って悪魔的になった或る日の団氏（鬼六談義、七月号）の心を肯定するには、さらに進んだ分析が必要になる。

悪人とは何か？「意志」の意味を理解した人だけが正確にこの問いに答えられる。生きようとする意志の極めて激しい人間のことである。悪人は意志の激しさのために認識が盲いてしまつて、他人も自分も唯一の「意志」が個体化の原理（時間と空間のこと）によって別れて具体化したものだということに気づかず、自分の激しい意志の渴きを満たすためには他人を利用し、圧迫するばかりか、抹殺することさえある。

およそ何が苦しいといって、激しい意志は

ど苦悩に満ちたものはないのである。それは満足するということを知らずに、しかも重苦しい渴きをもって常に満足を求めている。悪人は、だから、直接に得られない緩和を間接に求める。すなわち悪人は他人の苦悩を眺めることによって自分の苦悩を和らげようとする。しかも同時に彼は他人の苦悩を自分の力の結果として誇るのである。今や他人の苦悩は悪人にとって目的自体であり、眺めて楽しむ見物である。

あからさまに飢えた存在であるからこそ悪人はまた房事においても單純かつ淡泊な交接では満足できない、かくて悪人が房事と加虐とを結びつけることは極めて自然になる。すなわち

命題二 サジズムは病氣ではなく「悪人」の特徴である。

悪人が房事と加虐をサジズムの名において同時に行なうということは一体どういう意味をもつのか。これを検討しよう。生きようとする「意志」はその本質において死滅を厭うものである。だからこそ「意志」は人間の生殖作用において最高の激しさを示現するのである。「意志」がいかに飢えていて、認識を欠いているかは、わたしたちが自己の性衝動において如実にこれを見ている。ここからわたしたちは見通すことができるであろう。一般に意志から自由になることなしに、光明の

なかにはいれないことを。宗教的天才たちはだから、意志を煽るすべてのものを捨てるのである。パスカルは数学の研究をさえ放棄して修道院にはいった。確率論も射影幾何学もそのために発展が遅れた、などというのは、「意志」の背後にある莊嚴華麗な世界を知らぬ愚者の言葉である。とすると、他人を房事に誘って性衝動に走らせるのは、他人の認識（解脱力でもある）を苛むことといえる。加虐はいうまでもなく他人の肉体を苛むことである。ゆえに

命題三 サジズムは他人の「認識」と身体をとともに苛むことである。

この命題によって、しなやかな美しい体とともに、認識の光で意志の柔らげられていることが選ぶべき他人の条件になる。団氏の好む羞恥は、女に見られる認識の微弱なものであるが、詩人原口統三（あるマゾヒストについて、六月号）のような容姿端麗にして認識の光芒を放つ少年を奸計によって捕捉する中年の婦人があると仮定すると、そのサジズムは凄絶なものとなる。しかもこの場合は、女は、分娩育児機能の負担のために認識能力が手抜きになっているから、男より残酷であり、また大脳生理的にも男より性衝動が激しい（時実利彦「脳の話」岩波新書、註一）ので、そのサジズムは一層加重される。

なお命題三について今一つ注意して頂きた

いのは、本稿では凌辱行為をSMにおける來雑物として取り除き、それを精神的呵責とみていないことである。汚物を食べたり、足を舐めたりするのは、医学上の疾病や単なる痴愚行為である場合もあって、取り除く方が好都合であろう。

人間の一つの行為がサジズムと呼ばれるためには以上二つの命題を満足することが必要かつ充分となるであろう。わたしはここで、このサジズムを異常だ、変態だ、罪悪だという「正しい考えの人たち」に指摘したいことがある。それは、わたしたちは、時間と空間のなかに個体として現象してしまった以上、宗教的天才を除けば皆大なり小なり悪人だという事実である。要するに程度の問題だ。善人と悪人とを画する線は任意に引ける。これが人間の原罪というものである。原罪の思想を嘲笑乃至盲信するのは「正しい考えの人たち」である。この「正しい考えの人たち」のなかにには自覚症状のない極悪悪人が特に多いのである。具体例としてわたしたちはジョンソン大統領以下ベトナム戦争を指導している人たちを見ることが出来る。

古来宗教的天才にとって正しさを誇る善人ほど度し難いものはなかった。親鸞などは「善人なをもて住生をとぐ。況んや悪人をや」（歎異抄）と直截に述べている。ショーペンハウエルは、お喋りに熱中している中年女が

不愉快で、彼女を階段の踊り場から突き落した。立派な前科一犯の悪人である。イタリヤの観光地で放蕩していた（彼は「美」を味ったと表現している）若い頃などはサジズムを楽んでいたかも知れない。こういう人だったからこそ、自己の暗さの奥によく真理を見ることができたのだと思う。

だが彼には、その発見の喜びよりも、発見によって生じた悲哀の方が大きかったのではないか、美学は芸術家を創らず、哲学は宗教的天才を創らない、あの輝く青銅のような「意志と表象としての世界」の本論も、宗教的天才について論じた箇所は哀調の曇りを帯びている。時として三十才の彼が高貴な涙をさえ湛えているのを感じる。「生存とはふと迷い込んだ難所」（ショーペンハウエル、随感補説）。宗教的天才だけがよく路を拓いて出て行くのである。

団氏が哲学の分野において業績を残されたり、出家して自得される確率は大きくないから、本稿はここで終ることはできない。以下一層変な推量と断定に移る。わたしはただ詩的な作家リチャード・ジェフリーズ（一八四八—一八八四、イギリス人）の言葉を呟くほかはない。「心には思いきり考えさせ、夢をみさせ、想像させよう」（わが心の記）

通り一遍の考察でサジズムが、そのあるがままの状態において是認できるものなら、す

でにだれかが済ませていたのである。アポリヤ(行きづまり)に陥ったとき数学者が見せる鮮やかな手法を見習いたい。一例をあげる。平行線は無限遠直線上で交る——地平線の彼方まで続く一本道の情景と酷似したこの着想が同次座標の発見に助けられてデカルトの解折幾何学の限界を破ったといえる。幻想だという非難を虞れていては数学でも行きづまるのだ。では、わたしたちも勇敢に試行錯誤を始めようではないか。

四、SMとエロスとアガペ

エロスという言葉をプラトンが用いた正しい意味で使おう。エロスとは価値あるものへの重苦しい憧憬なのである。三原氏の告白「INTERSECTION」(一月号)に典型的に現われているように、マゾヒストは女の悪人へのエロスを維持するために自己を性具、家畜または奴隷の位置にまで下げるのである。知性と教養を兼ね備えた良家の子弟が茶房の小娘を天使のように思い込むのと同じ心理である。これは、女の悪人にエロスを抱くことができず、そのサジスティックな多情を却って性具として利用しようとする似非マゾヒストとは異なるところのいわゆる「精神貴族」(麻生氏の言葉)の行為である。芸術家との違いはただ一つ——芸術家はエロスの対

象としてプラトンのイデヤを選んで意志を鎮めようとするのに対して、「精神貴族」は対象として性的人間を選ぶために意志を却って煽っているということである。

しかしながら、「精神貴族」は、プラトンの観察どおり、いつまでもそのエロスを低い段階にとどめて置かないであろう。もしいつまでも低いエロスを固執していれば彼は似非マゾヒスト、すなわち精神賤民の群れのなかに倫落する虞れがある。「精神貴族」であるからこそ、その対象を転じ、一人の芸術家として、純文学の光輝を放つSM小説を創造しようとする情熱に到達しないだろうか。あるいは過酷なサディスティンとの激しいプレイの果てに、芸術を跳び越えて、一挙に徳と聖境の彼方へエロスを向けないであろうか。この最終段階においてはサジズムの実行者もまた同様の機会がある。すなわち激しい加虐と肉の悦楽の果てに自己の悪性の深さを知り忽然翻意することは可能である。宗教的天才のなかにはサジストの転身者もある筈だ。だが、サジストに芸術的作品を求めるのはどうであろう? 彼には「精神貴族」のもつエロスがない筈だが……。

芸術といい、真正の宗教の実践といい、女性には狭い門であって、M女性にこれらを期待するのはまず絶望的である。だからこそわたしにはSMの極致はS女性とM男性であっ

て、S男性とM女性(この組み合わせのサジズムは白痴や痴漢が実行する場合もある)ではないと思われるのである。しかも、女性の方が残酷で、かつ性衝動の持続することはすでに述べた。

さて、エロスというギリシャ語を知っている、アガペというギリシャ語を知らないのはマゾヒズムという英語を知っていて、サジズムという英語を知らないのと全く同一だ(実はある意味ではこれが以下の論証の結末でもある)が、同じ愛を表わす言葉であっても、アガペは高弟ヨハネを見詰めるイエスの眼に宿っていた光であることを念のため指摘させて頂きたい。ヨハネは高貴なエロスの持主。

このエロスの立場に人が立つとき、たとえばそのエロスがアガペを志向するまでに昂揚したとしても、なおそれは意志の段階にとどまり、苦悩から離れることはできない。できないどころか、どんなものを志向するよりも激しい苦悩を負わなければならない。ユークリッド平面における平行線と同様、エロスがアガペに到達することは不可能だからである。アガペは意志を越えたものだから。にもかかわらず、エロスはアガペに近づこうとしてやまないのである。臨済はこの事実を見詰めて書いた。「求仏求法即是地獄業」(臨済録)。

何という著しい近親性がマゾヒストと求道

の僧の間にあることか。マゾヒストにとってサディスティンは仏法そのものである。そしてマゾヒストの地獄は、それが心身ともにどんなに惨たるものであるかは、優れたマゾヒストのよく知るところであろう。彼の求めてやまない現実のサディスティンは、しかし、こんな論議や彼の激痛とかかわりなく、細い編み鞭を彼の背に振るい、灼熱の煙草の火を彼の腕に押しつける（三原氏の告白）。彼女は多分その体さえ許さないであろう。M女性古川裕子が本誌において告白したように、優れたマゾヒストはサジズムの実行者の加虐だけで性衝動を完結するのであるから、この場合でもサジズムは成立している。そしてマゾヒストは一層サジスティンへの憧憬を高めていく。つまりわたしたちは、アガペを求めてやまない高級なエロスのアナログ（類似のもの）をマゾヒズムに見出すと同時に、サジズムとアガペの近親性に気づくのである。

いつかマゾヒストが、その地獄のなかで意志の恐しさを知り、優れた悲劇の主人公のように、わたしたちを罪深い存在にしているところの個体化の原理を看破して、マゾヒズムのみならず一般に自己の内なる意志全体を否定することを知ることになったとすれば、サジスティンはアガペの遣わした天使でなくて何であろう。あらゆる精神の高貴と静かな緊張とは意志を抑えることなしには不可能だからである。ゆえに

らである。ゆえに

命題四 サジズムは自覚せずして行ぜられアガペの秘法となることができる。

終りに、本稿は、勇気を出していま一つの証明すべき命題を示す。すなわち

命題五 マゾヒズムは本質的にはサジズムである。

さきほど「あらゆる精神の高貴と静かな緊張」という表現がなされた。これがアガペでなくて何であろう。故京大教授木村素衛はここのアガペとエロスの同一性を次のように看破した。

「アガペはエロスを超越している。しかもかくの如きアガペが、——敵をも愛せずには措かしめないアガペが、まさしくアガペとして現われんが為めには、それにも拘らずエロスの価値の位置にみずから置かなければならぬのである。自覚的にアガペが実践され表現される為めには、そのエロス超越的性格のままでもエロスの構造を取り、これ（エロスの構造のこと）に依って個的主体をしてこれ（この「これ」はアガペのこと・註二）を志向せしめるより他に、その在り方をもたないものである」（岩波書店昭和十四年刊「表現愛第八九頁」）

晩年のショーペンホウエルを以ってしてもなお的確に捕捉できなかった「永遠の今」がここに示されている。木村博士はなぜもう一

歩前進しなかったのでしょうか？——人間の意志のこの底深い動的連関こそ「意志」が盲目のままに認識（人間の千里眼や第二節に示した鉄形虫の行動等）や作用（天体の運行や鉱物の結晶作用等）を随伴している奇蹟を解いたものではないか。（註三）

さて、わたしたちは第一節以来の準備により前掲の木村博士の言葉において「エロス」を「マゾヒズム」に、「アガペ」を「サジズム」に置き換えるだけで、最後に述べたものとも奇妙な命題五の証明にすることが多分できると思う。マゾヒズムは自虐自瀆に近い。本節の二つの命題によってわたしたちは、その性癖を、SM二つながらアガペの光に近づけたのではないか。とすれば、命題五の意味するところは実は命題一の深化となり、描いて来た理論の円をここに閉じることができ。（註四）

註一 時実医博は東大教授。たしか神奈川県教育センターの顧問をしてられるのは、憂鬱です。

註二 土井虎賀寿氏や木村素衛博士（いずれも西田門下の逸材）の初期の論文は本誌のどんな悪文よりも悪い箇所があります。

註三 盲目の意志に認識が伴っているのはなぜかという質問にショーペンホウエルは答えることができませんでした。（ショーペンホウエルとの対話、アテネ文庫）

註四 わたしの理論は千葉氏のそれと異なりわたしの「内」にありました。ちなみに「意志と表象としての世界」の補遺論文、附載論文および「随感補説」の翻訳が戦後出たでしょう。か。どなたかご教示ください。

S M カメラ・ハント

・・・・・△菊田アツ子の巻▽・・・・・

「黒髪長き柔肌に」

辻 村 隆

うっとうしい梅雨空が続いている。何もかもじめじめしていて、私の心にもカビが生えそうな今日この頃、何かカラッとしたニュースはないものだろうか――。

雨に崇られて、仕事も思うように捗らない。天を恨んだとて、どうなるものでもないが、何となく心も鬱々と愉しまない。こんな気候の変わりめは私の体にも悪いのか、近頃また少し糖が出始めている。

夕食後漫然とテレビを見ていたら電話。出ると箕田編集長の声が響いて来た。例のことながら話はすぐ用件に入る。彼の電話は世間並みな挨拶は一切抜きだ。

「大分前の話だが、あんたにフォト廻した菊田アツ子って、覚えているだろう？ どんな子だったかって？ ホラ、髪の長い伊賀上野市の娘だよ」

「モデル志望で箕田さんから連絡あって、あれから五日目に逢った子だったネ。覚えているよ。それがどうかしたの――」

「今度は熱烈にたのんで来たよ。まさか前のような事もないだろう。もう一度会ってみないか」

「そりゃ会ってもいいけど、何時？」

「明日なんだ。雨でも出てくるそうさ。折角ああいって来たのだから、ご気嫌直して会っ

て見たらどうだい」

「じゃとも角行くよ。あの時は、どうもウマクゆかなかったのでネ」

それで私は箕田氏に、時間や場所をきいて電話をきった。菊田アツ子には既に一回会っている。それで撮れなかったのだった。話は一カ月半許り遡のぼらなければならない。

× × ×

打合せをかねて先月、箕田編集長を訪問した時、私は一葉のフォトと便箋一枚の便りを見せて貰った。それが菊田アツ子であった。

フォトは訪問着姿の写真館でとった、まるで見合写真のようなものであった。このての

フォトは、往々にして修正が加えられてあるが、それを幾分割引して見ても、若い素直な感じの、何かいい育ちのお嬢様タイプの女性をフォトからは感じとられた。七三に髪を分けて造花をさし、黒髪は優美な曲線を描いて肩近くまで垂れていた。

「モデル志願で、こんな見合写真のようなものを送ってくる子も少ないよ。あんたがいつかいついた髪の長い娘だぜ。少し食指が動いたでしょう」

「いいとこのお嬢さん見たいだネ。どこに住んでるの？」

「これを読めば判るよ」

箕田氏は一枚の便箋を私に手渡した。

（前文ご免下さいませ。貴誌を拝見しましてモデル募集に応じます。未経験でございますが、自分では何とかござい添えと存じますので申し込めます。委細を折返し左記の所にご連絡下さいませ。同封の写真は本年の正月にうつしたものです。わたしは本年二十一才、唯今家事の手伝いです。高校卒業後一年足らず就職し、今は官庁をやめて家におります。貴誌の条件や撮影の日時などお知らせ下さいませ。たいていの日は出られると思います。ではくれぐれもよろしく。

三重県上野市×××町××地

菊田 敦子

奇譚クラブ企画部長様 みもとへ

以上のような、ごく簡単なモデル志望の一件のみしるしたものである。

「企画部長とは、どういうことなの？」

私は大袈裟な書き方に一寸茶化するようにいった。

「カメラ・ハントの企画部長ならさしずめあんなだろう。文面は簡単でも、案外こんなのに限ってまっとうなものが多いいんだよ。女性のモデル志望で、余りいろいろとSMプレイのことや、あおしてくれ、こうしてくれとクドクド書いてあるのはマユツバものが多いんだ。端的だからむしろ真実だと思うよ」

「このフォト通りなら、素晴らしいじゃないか——。私が会ってもいいの？」

「どうぞどうぞ。私は近頃株の方で忙がしくてネ。それどころじゃない。あんたにお任せしますよ」

「近頃、少し動きが活発だから、大分儲かったでしょう」

「それがシロウト考えさ。昨日一八〇万円パツチりいかれたよ。しかし今日は朝から調子よくアゲ潮で、今の処一五〇万円許りいた

いたが、値動きが激しいので、家内の奴が止める止めるっていうんだよ。一億のゲンナマをパンと積みあげたら、やめるといってんだが……」

「奥さんにして見りゃ気が気じゃないよ、そりゃ。私なんか怖くて全然手が出ないがね」
「今の株はシロウトは、手を出さない方がいい。私はクロウトじゃないが、もうこの道じや随分古いからね。なんていうか特有の坎ってヤツさ。しかしね。辻村さん。これをやっていないと、この不況の折柄、とても奇クを続刊しちゃゆけないよ。本の赤字をこれで埋めてるようなもんさ。本だけやっていてゴランよ。とうの昔にお手あげだ」

「何十万と発行する大資本だけが尚更ふくれ上り、小さいホンヤは大抵淘汰されてしまったからね。有難いと思うよ」

ハナシはどうも妙な横道に逸れてしまったが、要するに、私はいわば企画部長辻村隆の資格で菊田アツ子と会うことになったのである。

箕田氏も一度実物を拝見しておきたかったので、五月の下旬某日、彼のゆきつけのモータープール隣の喫茶Kで待ち合せた。

午後一時、予定通り菊田アツ子は、彼の指



定した喫茶店に和服姿であられた。

フォトよりうけた感じに違わず、淑やかな育ちのよさを感じさせる物腰である。箕田氏は、私を辻村隆だと紹介し、カメラ・ハントしたいからといった。彼女はつつましく私に頭を下げ、注文のコーヒーを静かにスプンでかき廻し小指を軽く曲げてつまんで、音も立てずにのみ込んでいた。囁くという感じは全然ない。コーヒーにも茶道のようなみ方があるのだろうか。無口で、きくことに対しては時々合槌をうつだけで、自分から進んで話すことはなかった。この優雅な女性が、大

胆なるSMフォトのモデルを志望してきたとはどうも受取れない。凡そモデルの持味とはチグハグな感じの女性である。形よく整った鼻、可愛い口許、涼やかな瞳、そして雪国の娘のように白く輝やく頬。理智と聡明と典雅な香りがその全身からただよっているようであった。そして何よりも彼女を楚々と見せたのは

豊かな黒髪であった。近頃流行りのヘヤダイなど、おそらく一度もかけた事もあるまい。ナイーブな柔かいウェーブを描いて、黒髪は長々と肩に垂れ、小さいふじ色のカトレアの花一輪、ピンにつけてさしてある。実物の菊田アツ子は、フォトを遥かに上廻る美しさに光り輝やいていた。出入りする客もウェイトレスも、ちらりと流し目で彼女を見過していた。

(こりゃ、モデル最大の収穫だぞ。もしも彼女が、私の意図する俤に動き、協力してくれば、どんなに素晴らしいフォトが出来るこ

とだろうか。余りの美しさに、箕田氏も気が変ってグラビヤにのせるかも知れない)

そんな予測に私の胸は次第に疼き始め、めめ美しく情ある佳人を撮りまくれる欲びに内心ひたりつつあった。

箕田氏も流石に心残りありそんな素振りであったが、そこは思いきりよく、さっと立上ると伝票を掴み、架空の用事にかこつけて去ろうとした。

「箕田さんも一緒にいて下さいよ」

私は彼女の優雅な振舞いにやや気圧されて真実、彼にいて貰いたかった。彼ならいともながらの単刀直入式にプレイにうまく導入してくれるだろうに。

「いや紹介のわたしの役目は終わったよ。あんたうまくやってくれ給え。よろしく頼むよ」それからヒソと耳に口を寄せて、
「スゴい上等やで。分譲フォトになるよう、アンジョウたのんまっせ」

ボンと肩を叩いて出ていった。私は席に戻る。眼を伏せて菊田アツ子は姿勢を崩さず私を待っていた。

「私の書いたもの読まれたことありますか」

「いいえ、私一向に存じませんの」

「ほう、じゃあ、どんなのを読んでおられる

の？」

「本は何でございましたか？」

言葉は丁寧だし、どうも少々勝手が違う。

「本って、そら、奇クのことですよ」

「キク？」

不審そうに彼女は、涼やかな瞳を私にむけた。

「あれ知らないんですか。じゃあ、どうしてモデルに募集して来られたんです」

「モデルって、私が？」

菊田アツ子はいぶかしげに呟やき、それからハッと気付いたように頬を染めた。

「事情は、今日お会いする方がすべて話してくれる筈だからと、いところが申したものですから、私何も……」

「じゃあ、先日お手紙とフォトを編集部宛に出して来られたのは、貴女じゃなかったんですね」

「まあ、そんなこと——。私、全然お出ししませんことよ。いところが勝手に出したのですわ。困りましたわ。私どうしましょう」

真実、菊田アツ子は眉を曇らし、困惑した表情になった。

「困るのはこちらですよ。お手紙を信じて、こうして時間を割いて出掛けて来たのですか

らね。私だって、どうしていいかわからないですよ。そうだ、恰度ここにあなたの手紙があります。一度ご覧になって下さい」

私は運よく、彼女のフォトと便りの入った封筒を、箕田氏から受取って持参していた。それを差出すと、彼女はおずおず私の手より受取って中味をとり出した。

見る見る彼女の頬が染まってきた。読む手が心なしか微かに震えている。読み終って彼女は思い切った口調で訊ねた。

「これはいとこの字でございますわ。あの人がどうしてこんなことを書いたのでしょうか。ここにあるモデルとは一体どんなモデルなんですか？」

「SMプレイの緊縛のモデルなんですよ」

私も思い切ってズバリと言ってやった。もう彼女とのプレイなど、思いもよらないことは、先程からの事情から察しておよそ見当がついている。

「SMプレイと申しますと……」

無理もない。何も知らぬらしい。

私は咄嗟にとまどったが、一口でいえるものではない、仕方なく奇クの性質を述べ、SMの概念を話してやった。菊田アツ子は次第に消えも入りたげに顔を伏せていった。

「要するに幾分かの確率をねらって仕組んだ菊田さんのイトコの仕業と分りましたが、そうと分っちゃ、貴女も尚更モデルなんかにはなり難いでしょうね」

「勿論ですわ。いとこのした仕業と分りましたは、とてもその気にはなれませんわ。仮りにいつか、私がその気になりましたも、私一存の考えでないと、そんな気は起らないと存じますわ」

「こんな世界もあるという事を知ってもらいたかったですが、事情が分ればご無理もいえない。潔きよくお別れしましょう。フォトとお手紙は一応お返しします。ご縁があればまたお目にかかりましょう。いとこの方には余り仰有らず、黙殺された方が反って、あなたの場合立場がラクでしょう。編集部でも、全部が全部とり上げるとは限りませんから、いとこの方はきつと没になったと思っただけでしょうから……」

「ご忠告有難うございます。本当に失礼を申し上げます。じゃあ、お先に……」

こうして私達は何事もなく、飽気なく別れたのであった。

優雅な菊田アツ子の大島つむぎの渋い着流しの和服姿のうしろを眺めながら、私は話が

ウマすぎたと、ほろ苦い苦笑を浮べたのであったが――。

× × ×
まぎれもなく、あの日の菊田アツ子が、私の眼前に坐っている。今日は爽やかなブルーの腕も露わな袖なしのブラウスに、とも色の短かいスカートといった、夏らしい軽快ないでたちだった。長い黒髪もアップに形よく結いあげて、この前あった時より少し成熟した感じだった。しばらく待ったのか彼女の前にはコールドコーヒのカップが、半分許り残っておかれてあった。場所は箕田氏ゆきつけの喫茶K。

「再びお目にかかれましたネ。本当いって、私には意外だったですよ」

彼女のうるんだ瞳が心なしかハニかんだ。伏せていた眼をスーッとあげて、

「いとこが亡くなりましたのよ。半月許り前に……」

「えッ、またどうして？」

「交通事故ですの。スピードを出しすぎていて、止っていたダンプに激突したのです。同乗していたお友達もダメでしたわ。私、いとこの卑劣なやり方に、激しい憤りと屈辱を感じたのですけど、遂々仰有っていた通り一言

も申しませんでした。私、先日やっとの思いで、奇クを二冊許り手に入れました。今日は私の一存でまいりましたの。私の氣持分っていただけますかしら……」

「はっきり申し上げて、分らないというところですが……」

「誰一人知らない、私だけの秘密。せつかくこんなアバンチュールの機会を掴んだのですから、一度だけ自分自身を試して見たかったのですわ。私にとっては生れて始めての大冒険ですけど」

所詮女心の微妙な変化は私には分らない。

この深窓の処女然たる、潔らかな乙女が、何故今度は自分から好んで身を投げ出して来たのであろうか。物質的には全然困っていそうにはないし、S M的観念は持っていそうにもないこの女性が、何もかも承知の上で、しかも奇クを読んでいながら、自からこの世界に飛び込んでみようと試みている。何か有り得べくもない現象が、突発的珍事によって起り得たとしか考えられない。

「どうも貴女の心境の変化が、私にはピンとこないのですが」

「私以前から本を読むことは、大好きなので。数年前よりあれこれ推理小説を読み始め

ましたが、梶山季之や戸川昌子のものに、S Mと辻村さんが仰有る、その観念が底流をなしているように思われるのです。戸川昌子の『ソドムの罫』や『蒼ざめた肌』の、あの大人の世界の神秘さが、小説上のもものだけと考えていたのですが、そんな世界が現存していることは驚きでした。梶山季之の小説にも、S M的と思われるプレイ的なものが、しばしば根底にあるように思われるのです。何一つ世間知らずだった私だけに、そんな世界の妖しさというか、私などには思いもよらないテーマに、一度、自分も身を置いて見たい氣持にかり立てられたのです。浅はかな行為かも知れませんが、辻村さんが私に対して、どんなことをなさるのか、それをこの身で、はっきり確かめて見たくなったのです。ハシタなйтとお考えでしょうが、今日はこうして私がお願ひするのです。叶えていただけでしうか」

菊田アツ子は羞らいを精一杯に押え、自身を励ますような切口上で私を直視していた。黒い眸はぬれて、清純さの奥に未知に對する妖しい昂奮を秘めて燐光のように光っていた。

「試されるのもよろしいが、もっと軽い氣持

でプレイしていただかないと失望なさるかも知れませんよ。思いつめた観念で余り大きな期待をかけられると、落胆なさるのじゃないでしょうか。字の通りプレイはプレイ。いわばややアブノーマルめいた遊戯に過ぎない。

プレイによって、私も愉しむと共に、あなたもまた愉しまねばキュークツです。SといいMといい、すべては観念的なものです。実践的なSMもあれば、概念的な夢幻のSMもある。観念と実践とは交わる点もあれば、単なる想像以上の産物の時だってある。女の方が大体に於て被虐の立場にあつて、夢寐にM的なさまざまを心で欲求しても、なかなか実践が伴わないものです。あなたの場合、観念的なものを実践にもってゆかれようとしていく。これはかなり努力がいります。そして実践は所詮観念的なものにはおおよびもつかないことが多いのです。でも、あなたのその勇氣には敬服しますよ」

持って廻ったいい方で、果して菊田アツ子は分ったのか、分らないのか、私には彼女の心境は完全にキャッチ出来はしなかったが、私の言葉の合間合間に彼女は大きくうなづいていた。

黒髪長き柔肌を、思いもかけず緊縛出来得

るチャンスを手に入れた私は、今こそ箕田流に、迅速果敢にコトを運ばねばならぬ環境にあつた。何かと下手な理論をコネ廻しているより彼女の氣の変らぬうち、ドンドンと結実を急がねばならないのだ。

とあれ百の理論より一の実行あるのみだ。触れなば落ちん珍香の成熟果を目前にして、私の心は俄然ふるい立って来た。

この深窓育ちのお嬢さんに、意表をつくようなプレイを実施してこそ、男冥利につきるといわざるを得ない。

雨上りの舗道は、蒸し風呂のように熱氣が地上よりにじみ出して来て、ゆらゆらと湿潤した空氣が上昇し、じんわりと汗がひたいや首に流れ出した。

余りお粗末なホテルでは彼女の夢のムードが壊れると、私はモータープールから車を出してくると、桜の宮界隈のホテル街に行先を向けた。

車中でも菊田アツ子は端麗に納まって、身じろぎもしなかった。とりようによつては、必死に心に城砦を構えている感じであつた。これから開かれるであろう、SMプレイへの饗宴に、未知の恐怖と危惧が交錯して、しらずしらず彼女に、そんな硬い姿勢をとらして

いたのかも知れない。

ウィークデイの夏の真昼は、セックスの夜の巷と化すこの辺り一帯も、流石に白茶けて黒くさびよれた、ホテル毎のネオンのとりどりの枠も味けなく空々しかった。

デラックスを誇るその一軒、Sホテルの玄関で車を止めて彼女を下車させ、駐車場の方へ車を廻して鍵をかけていると、出て来たクリーニング屋の若い男が奇妙な笑いを口辺にただよわせた。連想したことは分っている。しかしSMの世界までは懼らく連想し得なかったに違いない。

外氣と比較してこれはまた何という相違であろう、熱氣をはらんだ私と菊田アツ子が、一步ホテル内に足を踏み入れると、冷めたい空氣が皮膚に沁み渡った。暗く、ところどころ赤く青く点滅する小さい灯り、深海魚になった私達は、澱んだ蒼ぐろい海底を遊歩するように、そのホテルの一室に案内をされて辿りついた。

×

×

×

悪びれず、私のすすめる俚に菊田アツ子はバスにひたっていた。バスのルームランプを点じ、部屋の灯りを小さくすると、浮彫りのように入浴中の彼女の、赤裸々な肢態が、人

魚のすかし模様の一枚硝子からありありと透けて見えてくる。無心に彼女は体を洗っていた。のぞくつもりはなくとも、部屋の右側の壁面一杯の型板硝子のはめこみの構造は、否応なく視線をその方向に行けるよう、部屋は作られてあったのだ。アベックの欲情をより刺激させるには効果満点の構造だったが、私にはいささか面映ゆかった。立場をかえて私が入浴すれば私の体を見まいとしても、彼女はその部屋にいる限り見ざるを得ないであろう。

狭い坪を最大限に活用した建て方にムダはない。次の間には部屋一杯をしめて、夜具が大きく敷かれてある。アベックのもっとも行動しやすい態勢がチャンとしかれてある。

写真を撮るには、しかし勝手が悪かった。私のカメラは広角であるから、狭い部屋でもうつしようによっては、かなり被写体をとらえる事が出来るが、動きが余りとれない。

私の要請もあって、アツ子は折角結い上げたアップの髪をとき、乱れ髪となって出てきた。バスタオルを腰に巻いた俤、三面鏡に向い、ハンドバッグの中から、小さい容器に入れたクリームをとり出して、軽くつけただけだった。素顔には若々しいハリとツヤが生き

いきと躍動して、それが暗い部屋の中で、妖しくも艶やかな陰影をつくって浮き上って見えた。これから先は私の指図をまつ態度で、自若と腹を据えた彼女は悪びれもせず、私から眼を外らせて、その時を待っていた。

その均整のとれた体に私はうっとり見とれている。処女のみが持つ鮮やかな女体の清潔な美しさだ。プレイを忘れて、私は思わず彼女のヌードをとりたい欲望にかられた。こんなことは私にとってはいささか不愉快なものであった。

部屋の中央にバスタオルの俤膝をにじらせて坐してもらうと、もう耐え性もなくシャッターを数度きっていた。

私はバスタオルをとる。羞しい気味に膝を斜めに揃え、菊田アツ子は、それでも馴れぬ手付で、何処で見たのか、一応裸婦のポーズめいた恰好をして見せた。お互いにものをいうと、その場の雰囲気がかわるようで、以心伝心で無言の俤、こんなパントマイムの時間が少しづついた。

こんな空気にあると、いよいよ縄をとり出して緊縛のプレイにかかるのが、何か生臭く場違いな感じにすら思えてくる。バッグから縄を二条とり出したものの、そろそろここら

で何とか声をかけなくてはならぬ。

余りジャジャ馬も困るけれど、こう淑やかな女性も一寸苦手である。そのくせ、彼女はちっとも、プレイを拒む様子もなく、ヌードの撮影に際しても、むしろ自分の若さと、豊かな体を誇示しているかのようにすら思われたのである。作為のない不自然さのみが、何かなし室内にただよっていた。

勇を鼓して縄をもち彼女に近づく。ハッとしたように刹那、彼女は身を退いて心持肩に力を入れて身構えた。

「緊縛ポーズをいよいよとりますが、縛った貴女をただとるだけです。私を信じるか信じないかは、あなたの胸次第です。構いませんか？」

無言で彼女は頷いた。鋭敏な処女感覚が、私を信ずるに足る人間として、嗅ぎわけたのであろうか。

「髪がその俤では余り乱れておりますから、少し横毛だけでもピンで押さえますわ」

菊田アツ子は旅館備えつけのノリばった浴衣に手を通し、ゴワゴワした感じに少し眉をしかめながら、三面鏡に向った。豊かな髪を櫛で梳くと手際よく軽く巻いてピンでとめて行く。

このどちらでもいい動作の間に、彼女は心の動揺を鎮めようとしているのかも知れないのだ。

「もういいでしょうか？」

私は長いめの縄を握って、その背後に近づいて声をかけた。

「ええ」

蚊のなくような、殆んどききとれぬ声が彼女の唇から洩れ、それから窪んだ瞳が私を正視した。

「もし縛った縄が強すぎて、痛かったら遠

慮なくいつて下さい。プレイフオトですから苦痛を与えるのが目的じゃありませんから」

どうも言葉が丁寧になって、いつものように磊落にハナシが出来ない。私は高貴な育ちのお姫様でも縛るかのように、やっと菊田アツ子の浴衣に手をかけて、静かに剥いだ。

シミひとつない柔肌はすべすべと、つき立ての餅のように柔かく、しゃぶってしまったような欲望にかられた。

そっとかけた肩の手に、微かな震えが伝わってくる。

「あの大丈夫でしょうかしら……」

何か大丈夫であるというのであろうか。緊縛の刹那、乙女の胸にはいい知れぬ不安と恐怖が伴って、そういわせたのかも知れない。

「ええ、大丈夫ですよ」

私もまた、何が大丈夫なのか、それに応えることによって、彼女に安堵感を与えてやる。

彼女の手をとって、静

かに後手に廻す。マニキュアできらきら光る美しい爪が、私の眼を突きさすように射る。

胸に二本の縄をかけ、その縄を後手に廻して縛った。そのポーズは如何にも初歩的なものであった。横坐りに坐った全裸のポーズで正面をむかせ、私はカメラに戻る。

ファインダーを覗くと、菊田アツ子はじりじりと身をくねらせて、カメラより顔を背けてうしろを見せていた。

「どうしたのですか？」

私は構成したポーズが崩れたのに、やや不満を抱いてきいた。

「あのう、カメラ・ハントにおのせになるんでしよう。私、顔が判っきり出ますと、もしどなたか存じている方にでも本を見られまして、気付かれるかと思ひまして……」

処女の恥らしいの、もっともな言葉だった。

「困りますか？」

「ええ、やはり」

「じゃあ約束しますよ。正面から撮った貴女の顔のはっきりしたものは絶対のせないって……それならいいでしょう。さあ、こちらを向いて」

「約束を守っていただけますか？」

「緊縛フオトの顔はのせません。約束します



よ。でもヌードは我慢して下さいよ」

「すみません」

菊田アツ子はチラリと微笑をこぼして、元の通り体をにじらせて、私の方に正対して相対した。

白い柔肌はいつしか仄かに薄赤く色づいて腕の縄目がムッチリした肌にくびれて喰い込んでいた。伏眼がちに彼女は顔を垂れていた。やはり約束はしても、カメラは直視出来ないのであらうか。それに向ってよく似たポーズ許り、私は数枚シャッターをきった。

徐々に体を左から右へ廻して貰って、次々とシャッターを押してゆく。閃光がパッパッと断続して彼女の肌に刹那的な白い光を投げた。

一通り撮り終って、私はこの初歩のポーズを解いた。赤く染まった手首や腕の縄目の跡に眼を落して、彼女は黙然とその俛の姿勢を維持していた。

大切なこれれものを取扱うようにして緊縛すると、どうもS的要素のある私には、もう一つグッとくるものがない。いわば綺麗ごと過ぎぬからである。この舞姫にも似た美女を思いきり虐めて見たい衝動が心の底から湧き上がってくる。

私は無然として煙草をふかしていると、菊田アツ子は、おずおずと声をかけた。

「あのう、もうなさいませんか？」

「いや、やりますよ。しかし、どうも貴女が余り淑やかすぎて、何だかやり難い事は事実だなあ」

「私でしたら構いませんことよ。ほかのモデルさんになさる様なことを私になさっても」「そうですか——」

間の抜けた返事をして、私は独りで苦笑した。第一印象が未だに残滓として心にオリをのこしているの、もひとつスツキリとプレイの陶醉境に入りきれないでいるのだ。いつもの私らしくもない、独りで遅疑逡巡している私自身が、われながら不甲斐なかった。菊田アツ子は今日こうして自ら進んで自分の意志できているのだ。何の遠慮があらう。充分に腕をふるってこそ、彼女自身、SMの世界に飛び込んだ意義があるというものだ。

私の躊躇は徒らに、彼女を失望させるに過ぎないのではなからうか。そう気付くと、私は潔ぎよく感傷を振り切って立上った。

「じゃあ、やりますよ。逆吊りをやろう。そううだ、それがいい」「えッ、逆吊り？」

「そうですよ。カメラ・ハントにのせていませんが、私は大体吊ることが好きなタチでしてネ。あなたも吊り上げて上げる」

「怖いですわ」

「怖くはないが、我慢は必要ですネ。今他のモデルにすることなら行なっていっていいでしょう。だからやるんです」

一足飛びに緊縛プレイの極致へ走っていった。じめじめした感傷は一気に吹きとばして私なりの考慮から、思いきったプレイを要求して見たのである。

菊田アツ子は、この乱暴な私の提案に、かなり驚いたらしかった。

「あなたお一人で、そんなこと出来ますの」

「やろうと思えばやれますよ」

「何も身につけないのですの」

「そうです。いけませんか」

そろそろ、日頃の辻村隆本来の強気な面が出てきた。

「いけなくはありませんけど、いくら何でもそれじゃ」

「いいえ、構わないんです。カメラ・ハントにのせるフォトなんて、謂わば氷山の一角ですよ。制約ばかり多い、カメラ・ハント用フォトのことばかり考えていたんじゃ、いいも

のは撮れないし、SMプレイの醍醐味だってありやしないんです。フォトをとるための緊縛ではなくて、プレイそのものに全精力を集中して、いいのがあれば撮る。元来本筋はそれなのに、私の場合、いつもハント用フォト許り脳裡にあって、最近はおざなりのものが多いのです。だから、フォトはどちらでもいいんです。あなたのその柔らかい肌に、ひしひしと縄目を喰いこませて、流行り言葉でいえば『骨まで縛って』やりたい。そんなたかぶった気持なんです。よし、逆吊りがうまく出来ても出来なくても、それはいいんです。要するにプレイの谷間に耽溺したくなったんです。それが貴女の本来の目的でもあり、また望むところなんでしょう」

一気呵成に喋ると、私は気分がラクになつて来た。ともすれば気圧されていた気持がずっと雲散霧消してゆく思いだった。

菊田アツ子は私の言葉を、一言一句注意してきいている風であった。辻村隆本来のプレイボーイ的言辞が、いつしか彼女の精神をSMの境地へと導入していったのであろうか。彼女の顔は、はてったように赤味が帯びて来つつあった。

「わかりましたわ。お好きなようになさって

も結構ですわ。お任せします」

「よろしい。やりましょう」

水を得た魚のように私はいきいきと蘇がえつて来た。先刻のようにもう手ぬるいことはない。私はかなり力を籠めて、縄を彼女に巻きつけていった。不思議な肌の持主だった。締めればぐいぐいと、いくらでも皮肉に縄がくい込んで締まってゆくのだ。胸や腕の縄は私の強烈な強縛りによって、皮膚に陥没してすっかりかくれてしまっていた。

彼女は軽い呻きを微かに洩らしたが、ゆるめてくれとはいわなかった。このふわふわと弾力のある肌は、縄の喰い込みによって、その辺りはゴム風船のように張り切つてムチムチと盛り上り、清楚な淑女は緊縛によって一変して爛熟した女体に変貌していった。両手のいましめもかなり強く、しっかりと本縛りに結んだ。

床の間の前部に飾り横木が入っている。この五十六、七キロの美女を吊して、果してそれに耐え得るや否や、私は不安ではあったが一度私自身、それに飛びつき、両手で横柱を抱えて、足を浮かせて、私の七十三キロの体重で試みて見た。ミシリと音がしたが、両側がしっかりかかっているのか、折れそうな気

配はないが、横柱をぬりこめた壁の、その周辺から、さらさらと軽い音を立てて、壁砂がこぼれおちた。

確かめ終つて彼女の横坐りの位置へ戻ると彼女の両足を伸ばさせて、足首にタオルを巻きつけ、その上から別の縄でしっかりと二本の足を揃えて縛り上げた。菊田アツ子は私のこの作業を好奇と不安で凝視していた。

縛り終つて、私の手は彼女の背にかかり、一方の手を太腿のうらに掛けて、よいしょと横抱きにすると、横柱のはぼ下まで抱えて来た。ついで机の上の、湯呑みや灰皿をおろしデコラの机をその下にもつてくると、座布団を二枚敷いて、その上に彼女を抱きかかえてのせ上げる。足首の縄を横柱にかけてズルズルと引張り、やがて力をこめてゆくと、下半身が宙に浮き出し、机上で前半身の均衡を支えている。右手で縄を引きながら、左手は両脚を抱え上げるようにして、牛歩の運びで徐々に両足が横柱に近づいて行く。

彼女の腰も既に宙に浮き、辛うじて全身の重味を首筋で支えている恰好になって、私は引き絞った縄を、ぐるぐる横柱に巻きつけ、しっかりと止めた。長い脚線は一直線になお長く伸び、肉付きのよい太腿は、ピツタリ

と両腿をすき間もなくしめ合って、豊かな腰の線へとつづいている。胸の辺りを抱きかかえるようにして、足で机を前部に押しやり、静かに手を離す。畳上わずか二十センチの辺りにアツ子の首は垂れ、長き黒髪は、黒き藻のように畳上に乱れてこぼれていた。

アツ子は齒を喰いしぼり、必死に堪えているのがアリアリと見てとれた。急拠カメラをとりあげ、夢中で数枚、けいさい不可能としりつつこの逆吊りをカメラに納めた。眉宇に苦悶が流れ、閉じた目じりがけいれんしていた。

私は再び机を押すと、彼女をかかえて、その首を机上にのせた。縄を解いてゆるめるとずるずると体は落ちてゆき、深い溜息が大きく赤い唇から洩れた。

私の呼吸も激しく切迫していた。この刹那にすべてを賭けて、全身全霊を打ちこんで逆吊りに狂奔した、僅かの数分が、私にとってSMの探求者のみかじっている、悦楽の短かいひとときであったのだ。

五十六キロの菊田アツ子を一人で逆吊りしようと思ひ立ち、その作業中は、それこそ我を忘れて力を出し切っていたのが、終了と共に疲労がどっと身内に押し出されて来た。

のろのろと彼女の縄をとき、自由の体にしてやると、もう机を元の位置に戻すのすらうとましく、私はその場にへたり込んだように坐ってピースの煙を天井に吹き上げていた。

かたわらの菊田アツ子も放心したように、その場に坐っていた。時折、縛られた腕が痛むのか、無心にそこへ手をもっていつては揉んでいた。くっきりと鮮やかな淡紅色の縄跡が、胸に腕に手首に烙印したようにいつてあって、それが弥増す白い肌に反映して、何かの模様のような錯覚にすら捉われる。

「すっかり疲れちゃった。もうよそうか」

「ええ、そうね」

同調するような返事であったが、緊縛は唯この二ポーズに過ぎなかった。もっと、いろいろの縛り方を彼女に試みたかったが、遺憾なる哉、私の肉体が、今の逆吊り作業によって、余りにも疲れ過ぎている。彼女にとっても逆吊りは確かにキツかったに違いなかったが、幾分あっけない気持もあったのであろうか、遠慮するような口吻で、

「でも、私なら構いませんことよ。少しお休みいただいたら、すぐ気分よくなりますわ」と、それはプレイへの物足りなさを謙虚ながら、いい表わしている言葉に違いなかった。

た。いい終って内心羞恥に燃えたのか、深くうつむいて、傍らに投げ出された縄のはしをくるくる巻いていじっていた。

「そうかい、じゃあ元氣を出して、もう少しだけ続けようか」

私は氣をとり直しふり立たせて、やっくらサと立上り、煙草を灰皿でにじりつぶした。要請に応じて行動するのなら、この純潔の楚々たる美女を、もっとも醜いポーズに縛り上げて見たい、野獸的な欲望に再びかられ出したのである。

床柱を背にさせて、柱のうしろで両手を縛り、乳房を思い切り突起させるように胸で、縄をX字に交叉させ、柱にぐいぐいと押しつけるように巻きつけていった。

左の足首に縄をつけて床柱に廻して引っ張ると高々と上る。その縄を右の足首に廻してこれも引き絞る。無慚なポーズへの作成に、私はプレイする欲びにヒタヒタとひたりながらこの残酷なポーズへの作業をつづけていた。菊田アツ子の閉じた両の睨から、苦悶とは異なった、陶酔の情緒がただよい、苦痛の呻きとは異なった悦楽のおえつが洩れたのを私は逸早くSM探求者特有の坎から嗅ぎとっていた。



楚々たる深窓の佳人は、数刻を経ずして、被虐にのたうつ妖艶な成熟の麗人に変貌していた。淑やかさをかなぐりすて、赤裸々に呻き、悶える彼女に、私は菊田アツ子の心底

× × ×

深く潜んでいた真の人間性を見出した思いだった。自分のその表面の社会的な教養と道徳が重荷となって、彼女自身、奥深く内攻していたMへの願望をはかしきれず、悶々としていたのではなからうか。それを抉剔して彼女は反ってスツとしたようにサバサバと明るく変貌したかに見えた。

私はその場を片付け終り浴場に立った。なまぬるい湯に、熱い湯を入れ足して、浅い湯舟で足を伸ばしていると、声もなくアツ子が入って来た。凡てを許容した女の、虚飾をかなぐり捨てた親しさが、その露わな全身からあふれていた。

私が湯から上ると、黙って背を流してくれた。

「私も洗ってやるよ」

言葉はどんざいに、いつものようになっ

てきている。

「すみません」

素直に背を向けた彼女に、私は思いきり石鹸をタオルにぬりたくって洗い始めた。まざまざ残っている縄跡を、こすりとうろと

とするかのよう——。

午後三時頃の筈なのに、風呂場はまるで夜の谷間のように暗く、青白い蛍光灯が微

かな光を私達に投げているに過ぎなかった。

洗い終ってジャブジャブと湯を背にかけ、私はうしろよりそっと抱きしめて見た。抵抗もなく、彼女は抱かれた俚に、じっと身を柔かくしていた。

「編集長が分譲フォトに、お願いしたいって

言ってたけど、なってくれる」

「考えておきますわ」

「そら、今でなくてもいいよ返事は。ところでプレイどう思った？」

返事はなく、じっとアツ子は私に抱かれた俚になっていた。

「怖かった？」

首を振って否定する。

「じゃあ、楽しかったの？」

「……………」

返事を求めようとする私の方が酷だったかもしれない。アツ子は未だ、先程来のあのプレイのムードに酔っているのではなからうか。

「誰にでも、こんなことなさるの？」

突然彼女はこんな質問を、首をねじって私に投げかけた。今度は私が黙ってしまう番である。返事に困っていると、重ねて、

「ねえお返事して。こんなことなさるの？」

「いや、殆んどしない。単なるフォトプレイが多いんだよ。でもあなたとは始めの出会いからして異なっていたので、何か滅茶々に破壊して見たい気持ちにかられたんだ」

私のカメラ・ハントを読んだら、この嘘はすぐバレるかも知れないが、その場で私はこんな返事しか出来なかった。

「貴女は淑女であり過ぎ端麗すぎたんだよ。」

およそ私のしるモデルやカメラ・ハントの女性達とは違いすぎた存在の人なんだ。その端麗さを何かぶつこわして、あなたの本当の人間性の奥を探って見たかったんだ。私は疲れていたし、先程もう止めようといったのに、むしろ貴女から誘って来た感じに、これは未だ奥があると感じたのさ。間違っていたらご免ね。被虐の願望がなかったといえる？」

「ご想像に任せますわ。私辻村様を随分ひどい方だと思えます。それでいてちっとも憎めない。こうして自分からお風呂へ入って来たり、今はもう自分で自分の心が分らないの。張りつめていた心の琴線の、その一本がプツンときれたみたい。でもよかったとも思えますの。何が何だか自分でも分りませんわ」

菊田アツ子は抱いていた私の両手をそっと解くとスルリと体をぬいて湯舟につかった。

閉じた眼に不可解な微笑が浮かび上った。

× × ×

ホテルを出ると、ムツとした昼下りの熱気が肌にべとつくように迫った。車を出して助手席の扉を開き彼女をのせると、私はここから彼女の住む、三重県上野市まで送り届ける気になっていた。

「家まで送ろう。電車やバスで揺られるのも大変だろう」

「えッ、でも伊賀の上野ですよ」

「そう、上野市までさ」

「ここから……。そりゃ大変ですわ」

「今日の強烈なイメージを、もう少し貴女と二人もちつづけていきたいのさ」

「私は有難いけど本当にかまわないかしら」返事せず、私は膝に行儀よく揃えた彼女の手をぐっと上から握った。

ラジオのボタンを押すと、橋幸夫の『雨の中の二人』の歌が流れて来た。

「雨が小粒の真珠なら」

恋はピンクのバラの花……。

雨もまた優しい、甘いムードの歌である。

菊田アツ子はハミングで、唄に合わせて『雨の中の二人』を口吟んでいた。

「何処までも……何処までも……何処までも……」

最後は遠く二人で相合傘で消えてゆく二人の行方を暗示するかのように、繰り返しながらその唄は消えていった。

桜の宮から蒲生町四丁目に出て大東市を走り、車は阪奈有料道路に入る。最近のりかえた小型のコンテッサは、快調にエンジンを吹かせてピンアップカーブの阪奈道路をつ走り、奈良へ入って、市内を巡還して天理へ向う道をヒタ走る。天理市の標本インタチェンジより、新らしく出来た名阪国道へと進む。車の往来はまばらになる。山辺の青々とした田園風景が視界を流れて行く。

夕焼けが山々を赤く染めて路上に茜色の濃い鮮紅を落している。

菊田アツ子は私の肩に首をもたせ、思いがけぬドライブに恍惚としていた。稍々とりすました最初の印象はすっかり影を潜め、アバンチュールにフト誘われて、ひとときの快楽に自分自身を見出そうとする現代の発渾とした娘に変わっていた。これが彼女のいつわらぬ本当の姿なのであろうか。

名阪国道を走って四十分少しで、上野市のインタチェンジに入る。伊賀の城の辺りに、新らしく出来た伊賀湯泉のヘルスセンターが見える。

「ここで一寸とめて下さいません」

土産物ショップの前で停車すると、彼女は何か買物をして戻って来た。

「伊賀の名物ですの、養肝漬^{ヨウカン}っていつて、瓜の中にいろいろとつめて漬け込んであるんです。あのショップの人、私の友達ですよ。」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

十月号より増頁値上げ

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌を毎月確実に御入手されるためには是非月極予約下さるよう、お願い致します。毎月製本完成と共にお手元までお届け致します。

○御予約下さるのには、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛に予約購読料をお払込みの上、何年何月号から何月号まで何月分送れとお申込下されば結構です。

○局留にて毎月雑誌の受取りを御希望の方は、最寄りの郵便局を御指定下されば、毎月二十五日にお受取りになれるように、局留便にてお送り申し上げます。

一寸わざと見せつけてやりましたの」

菊田アツ子は楽しそうに笑った。彼女が買物に立った間に、私は大阪で買った彼女の土産ものの栗おこしの包装のテープを外しすき間へ、さっと数枚の紙幣をすべりこませて元戻りにしておいた。僅かの小遣程度だが、手渡したとて受取らないかもしれないと思ったからだ。恐らく彼女は家に帰りつく迄気がつかないだろう。

彼女に道順をききながら、徐行しつつ上野市内を走る。

「今度ゆっくり上野市へ遊びにいらして下さいネ。有名な伊賀の忍者屋敷や、俳人の松尾芭蕉の旧跡など、ご案内しますわ」

「ああ有難う。いずれきつと来るよ。どうとところで夕食一緒にして行かない?」

「有難いのですけど、大分おそくなりましたので失礼しますわ。ああ、ここで降して下さいませんか?」

いきいきと菊田アツ子は喋って、街中の一面でそういった。駐車禁止地区でもなし、ゆっくり車を止めて、私も外に出た。夏の日もさすがに暮れなずんで、そよ風が頬に快よかった。

車の中で手を握り合ってから車外へ出たの

で、今更路上で喋々囁々も憚られた。

「あのう、お叱りにならないでネ。私本当のこと白状しますけど、もうまもなく結婚するんです。それからイトコが死んだなんてウソです。ご免なさい、ウソついちゃって。今日のこと永久に忘れませんわ。さよなら……」

あッと驚いて、訳ねようとする私を振切るようにして、さよならの声は既に数歩はなれて聞えていた。逃れるように駆け去った彼女の後姿を、私は呆然と見送っていた。

結婚……。いとこのハナシはウソ……。

これはどうなったのだ。何もかも分らなくなって、私の頭は激しい混乱に襲われた。

ならば、最初のハナシからすべてウソなのか? しかしあの端麗さは、貞淑さは……。

それとも、結婚もウソ、やはりイトコは自動車事故で死んでいるのか……。最後になげ掛けた謎めいた一言が頭脳の片隅に引っ掛って、改めて女は所詮魔性のものであるような気がして来た。

黒髪長き柔肌をくねらせ、長き漆黒の髪を藻に乱してのたうった菊田アツ子との、強烈なイメージを謎に包んで、私は今、茜に染まる夕空の下、名阪国道をひた走りに引返して行った。

女相撲物語

カッ卜・海野美津男提供

花の女斗美たち

(8)

奮斗士好太

「きのう、ヘビイにいじめられたんだって、ほんと?」

津野さんが練習場へ、飛び込んでくるなり息をはずませながら私に尋ねました。

私が、小林さんにけいこをつけてもらったあくる日のことです。

体育大会の第一日なので、選手の人たちをはじめ、二年生、三年生の人たちもほとんどその応援に出かけたので、練習をしているのは、私たち一年生だけで、ほかにはマネージャーの笠原さんが、私たちの監督と、体育大会二日目の応援の連絡のために残っているだけなのでした。

津野さんの云う「ヘビイ」とは、もちろん

小林のことで、ヘビイ級などと云う時のヘビイです。

私は、そんなことを云われて、びっくりしました。

「ウウン。いじめられやしないわ。誰がそんなこと云ってたの?」

「だって、たったいま、水野さんから聞いたところよ」

「何かの聞きちがいよ」

「アラ、それじゃ、あのひとにかつがれたのかしら。またやられたわ」

「そうでしょ」

私は、ヒロちゃんが、また何かオーバーなことを云って皆をびっくりさせたんだと思い

ました。

「ぶつかりげいこをやっただけよ。きのうわたしが四股ふみやっていると、ヘビイが呼んだのよ。それで行ったら、マワシ締めるのを手伝ってちょうだいって云うの。締め終わったら、あのひとの屈伸運動なんかを見てたらいきなりわたしの方を見て、いちばんぶつかつてこないかって云ったのよ。そりゃ、ヘビイのことだから、笠原さんなんかに教えてもらうのよりはらんぼうだったけど……。でも、いじめられたなんてウソよ」

「ヘエー。ぶつかりげいこなんかやったのネエ。スゴイじゃない」

津野さんがうらやましそうに云いました。



と云うのは、私たちは、まだ押しの型の練習をしているだけで、まだほんとうのおつきりげいこはしたことがなかったからなので、私たち同士の押し合いげいこには、そろそろもの足りなくなっていたのでした。

その誰もまだやったことのないおつきりげいこを、私がだしぬいたようにやったのですから、津野さんがうらやましがるのも無理はないのでした。

「残念だなア。わたし、きのう休まなかったら、きっと小林さんにおつかって行ったんだけどなア」

津野さんはまだうらやましそうに

「で、どんなだった？ ヘビイは、やっぱり強い？」

「強いわネエ。思い切っておつかって行っても、テンデ感じないのヨ。最初なんかスゴク大きく見えちゃって、何にもしないうちに、

とてもわたしなんか相手になれそうもないって気持ちになっちゃった」

「ヘエ。やっぱり彼女イバルだけあるのネ」

「はじめはまるっきり夢中だったから、自分がどんな型をしているのか、わからなかったし……。でも野川さんなんかきて、そばから教えてもらえたし、そうしてからは、なんとか押して行けるようになったワ」

「スゴイじゃない」

津野さんはまるで自分のことのように興奮しています。

「ヘビイって、ブクブクふとってるから押しにくかったんじゃない？」

津野さんが、へんなことを聞くので私は

「そんなことないのよ。ちっともブクブクなんかしてないわ。あの人のマワシ締めるのを手伝ってそう思ったんだけど、スゴイ筋肉なのよ。こう腰を構えて力を入れるでしょ。そうすると、モモのあたりとか、お尻なんかだって筋肉がムクムク盛り上がって、ピンと張り切っちゃうの。スゴいわ」

「そう」

津野さんは、すっかり感心しています。私は、津野さんに説明しながら、きのうの出来ごとを思い出していました。

私をうながして土俵へ入った小林さんは、二三度軽く足ならしの四股をふんでから、

「さあこい」

まるで男の人みたいなかかけ声をかけると、土俵の中央で構えました。

「いやだワ」

私は、胸のなかでつぶやきました。

「こんならんぼうな言葉づかいをするから、相撲は野ばんだなんて悪口云われるんだワ」

そう思うと、せっかく張り切っていた気持ちがくじけそうでした。

「さあ」

小林さんは構えを崩さず、もう一度私に声をかけ、そして、両手で横マワシのあたりを

「ポン」

と、たたいて、私をうながしました。

力んだ両肩に首がすっかり埋もれて、そののどもとからグッと分厚い胸が盛り上がり、その台地の上に張り切った二つの豊かなふくらみが突き出しています。

太い腕、たくましい太モモのあたり、そして、さっきまであんなにやわらかそうにセリ出していたおなかまでが、ピンとゴムマリのように緊張して、指で突いても弾かれそうなのでした。

大きなからだが一層大きくふくれ上がって見ているうちに、だんだんのしかかってくるような気持になるのです。

そして、それと反対に、私のからだ小さく縮まって行くようなのです。

まるで象に、小犬が向かって行くみたいな劣等感を感じて

「とてもダメだワ」

と、あきらめかけましたが

「でも、ここで逃げ出したら、わたしだけでなく、ヒロちゃんや、津野さんや、松田さん

や、一年生ぜんぶの恥になるわ」

思い直し、身構えると、歯を喰いしばってぶつかって行きました。

「バチッ」

裸と裸が火花の散るほど……ぶつかったつもりでした。

しかし、私の体当りは、小林さんの腕に軽く受け止められ、そして逆に突返されてしまいました。

「ダメダメ。そんなんじゃ、ぶつかることにならないわよ」

小林さんは怒ったような云い方で

「顔をよそに向けて手だけで突張ってるじゃないの。それじゃカーテンだって動かないワよ。もっと頭を下げて、両ヒジをグッとからだにつけて、両方のオッパイがくっつくくらいに、ヒジではさまなきゃダメなのよ。手より先に頭が当たらないきゃ、ぶつかることにならないわ」

小林さんはちょっとらんぼうな教え方で、「じゃ、もう一度よ」

また土俵の中央へ戻って身構えます。

私はいままで笠原さんなどから教わっていたとおり、そして上級生たちのけいこで見ていたとおり、ぶつかって行ったつもりなの

でしたが、やはり、ほんとうにぶつかるというのは初めてなので、無意識のうちに手の方が出てしまったのでした。

「ソラッ、来いッ」

と、いう小林さんの声に応じて、またぶつかります。しかし、それもまた、小林さんの氣に入らなかったらしく、押し止められてお説教です。

「ヒジを両わきからはなしちゃダメなのヨ。突張るんじゃなくて押すんだから」

小林さんは、自分で、その型をして見せました。

太い両腕でグッと両わきを締めると、豊かな二つのふくらみが寄せ合わされて、胸の中央に深い谷間がきざまれるのでした。

しかし、私の胸にはうすい皿のように貧弱な、小林さんなんかにくらべたら、とても乳房とは呼べないほどのふくらみしかないのです。

力一ぱい両腕ではさみつけたところで、寄せ合わされて谷間をつくるなど思いもよりません。

ピタリつけた両ヒジの内側にゴツゴツしたアバラ骨を感じるほどなのでした。

小林さんは、なおようしやなく

「もっとアゴをひいて、背中を丸くして」

てっぺ的にシボります。

そして、三回目。

「バチッ」

と、ぶつかって、今度はどうやら合格らしく、額のあたりに小林さんの弾力に富んだ胸の厚さを感じ、両手を小林さんのわきの下に型どおりに当てて、力一ぱい押し進みます。

「ソラッ、押して押して」

突然、傍から声がかかりました。

いつの間に入って来ていたのか、マワシ姿の野川さんが、私のぶつかるのを見ていたのです。

しかし、私が必死になって押しているというのに、小林さんの大きな体は、いっこうに後退しないのです。

小林さんの胸につけた頭が、乳房の谷間に埋もれて、息苦しくなるほどになっても、両肩のあたりの筋肉がやきつくように熱くなるほど力を入れても、小林さんは、少しばかり上体がそるだけで、足の方はまだ一メートルと退っていないのです。

たまりかねて、思わず右手が小林さんのマワシに伸びかけます。

マワシを握って吊ってやろうとか投げてや

ろうとかというつもりではなく、ほんとうの苦しまぎれで、何か少しでも手がかりになるものが欲しい気持ちからなのです。

「ダメダメ、マワシを引いちゃダメ」

たちまち野川さんの注意が飛びます。

あわてて、マワシへ伸ばしかけた手をひっこめ、肉の厚い小林さんのわきのあたりに戻します。

心臓がまるでのもどで脈打っているようになって、息が切れ、そしてだんだんからだが浮上って、おしまいにはつま先立ってしまう始末です。

「ちょっと止めて」

野川さんは、そう声をかけて近寄ってくると、頭を上げた私に

「ア、頭を上げないで、押している時のようにしてごらん」

と、私に押しの体勢をとらせると

「そんな腕の方ばかりに力を入れるから押せないのヨ。もっと腰を下げて、もっとヒザを曲げて」

とテキパキと悪いところを直してくれました。そして

「そんなに、つま先立ってたらカーテンだっ

てコバちゃんを押しつぶそうとしてがんばってるみたいだったワ。逆に下から押し上げるんじゃないと相手を後退させることはできないのよ」

べつに新しいことを云われたわけではなくて、みんな今までに教わったことだけなのですが、いざやってみると、そのとおりにはなかなかやれないものだ、つくづく思ったのです。

それでも、教わったとおりに腰を下げヒザを曲げて低い体勢をつくり、押し上げるようにして押し進みますと、さすがの小林さんの重いからだもズルズル……と少しずつすけれど退がって行くのです。

嬉しさに、いっそう勢いづいて力をこめると、ようやくのことで一足前に進めました。

「そうそう、その調子ヨッ」

野川さんの声もはずみます。

やっと型を覚えかけた嬉しさに、ついまた腕だけで押そうとすると、

「腰を落してッ！」

またキビシイ野川さんの注意です。

グイと腰を据え、おなかに力を込めて押し

の構えをとりますと、マワシのずっしりとした肌ざわりが、私の股と腰とを力強く支えて

くれるのでした。

そして、私が力を込めれば込めるほど、それにつれて、支えてくれる力もまた一層大きく、力強くなってくれるのでした。

まるで、私以外の何かの力が、私を助けてくれるような感じなのでした。

誰かが、私のうしろからマワシの結びめのあたりを押してくれるような気持さえするのです。

「マワシを締めてるのは、腰の構えが中心なんだということを、からだに覚えこませておくためのよ」

教えてくれた今井さんの言葉が、やっとわかったと思いました。それこそ、ほんとうにからだで覚えたとしても云うのでしょうか。

でも、ちょっとゆだんすると、さっきのようにならぬにその教えを忘れかけては注意を受けるのです。

しょっちゅう腰に力を入れて構えているのは、ほんとに苦しいのですし、また少し押し進むのが止まりかけると、つい腰に力が入りかけるのです。

「それでいいのよッ。その構えを忘れないでッ」

その声にはげまされ、必死の思いでようや

く土俵ぎわへ。汗がダラダラと額を流れ下って目にしみます。それをてのひらでぬぐって横マワシのあたりへこすりつけながら、また待ち構えている小林さんの胸へめがけてぶつかって行くのでした。

そんなことを思い出しているところへ、ヒロちゃんがやって来ました。

早速津野さんがつかまえて、口をとがらせます。

「また、あんたにだまされたワ」

「アラ、何の話なの？ いきなり、そんなこと云って」

「ホラ、さっき、あんたが聞かせたでしょ。テルちゃんが、ヘビーにいじめられたって。あれウソだって云うじゃないの。ぶつかり合いこしただけなんだって……」

しかし、ヒロちゃんはケロリとした顔で「そうヨ。誰がいじめられたなんて云ったのよう？」

「まア、あきれた。あなたが云ったのヨ」

「アラそんなこと云わないわ。あたしはただテルちゃんが投げとばされてケガをしそうになったって云ったのよ」

「同じようなもんだわ」

津野さんはおこっています、ケガをしそ

うになったというのは、全然デタラメでもないのでした。

野川さんに指導してもらったあとは、コツをのみこめたというのでしょうか、

「バシッ」

とぶつかって、そのままグイグイと押し進む——そんなけいこができるようになったのでした。

そして、金子さんや榎本さんや、あとからヒロちゃんの顔も見られるなかを、ヒヤかしとはげましの声を浴びながら、少しばかり得意になってぶつかって行ったのでした。

しかし、何回目だったのでしょうか、私が小林さんを土俵ぎわまで押して行きますと、小林さんは、いきなり体を横へ開きながら強い突きおとしをかけたのでした。

不意をうたれた私は、アッと云う間もなく宙がえりするような形で勢いよく転がってしまいました。

何しろそんなことをされるとは思っていないで、少しばかり得意になって腰の構えを忘れていたため、ひとたまりもなかったのです。

転びかけて

「アッ、危いッ」



と、手をつこうとしたのがかえって悪く、ガクンとヒジを打ち、それから背中に呼吸も止まるほどのショックを受け、つめたい砂の感触を肌で感じながら、しばらくは起き上がれないほどでした。

「だいじょうぶ？」

と、ヒロちゃんがあわてて飛んできて抱き起してくれました。

「ウン、ウン」

うなづきながら、やっと起き上がります。

ヒロちゃんに背中の中を砂を払ってもらいながら汗だか涙だかわからないものが顔中をぬらし、ているのをぬぐいました。

「コバちゃん、いきなりそんなことしちゃだめよ。この子たちは、まだぶつかりげいこやったことないんだから」

と、野川さんに叱られて、小林さんは

「ごめんネ、つい気合いがのっちゃったの」

とあやまりました。

「アラ、皮がむけちゃったようよ」

ヒロちゃんに云われて、急にぶつけたヒジがピリピリと痛みましたが、それでも私は、他の誰よりも先におつかりげいこをやったのだという満足感で、その痛さもチョッピリなぐさめられるのでした。

「しかし、テルちゃん、うまくやったわネエ」

津野さんはまだうらやましそうです。

「ほんとよ。ナニサ、ニヤニヤして」

ヒロちゃんも、また私のお尻のタテミツをにぎって、それをゆさぶりながら口をとがらしています。

私は、べつにニヤニヤしていたわけではないのですが、津野さんやヒロちゃんがうらやましそうにするので、思わず口のおあたりがゆるむのでした。

すると、津野さんは

「ネエ、これから一番やってみない」

と、いきなりヒロちゃんの腕を引っ張りましました。

ヒロちゃんも、さっそく

「OK。でもあなたが相手じゃ、ちょっと物足りないわね」

と、へらず口をたたきながら、土俵へ入ります。

私が

「また、笠原さんに叱られるわよ」と云いましたが、

「ナニサ、自分だってさんざん勝手なことをやったくせに。だまって見てらっしゃい」

たちまち津野さんに云い返えされて、一本とられてしまいました。

土俵に入ったふたりは

「サア、どの手で負かしてあげようかしら。」

すぐ負かしてしまったんじゃ、おもしろくないわネ」

「何云ってんの、正々堂々とやるのヨ、逃げてたりしちゃダメよ」

などと、前口上だけは勇ましく型ばかりの四股もそこそこに、簡単な仕切りから立上るとまず猛烈な突っぱり合いになりました。

ピヨコンと飛び上がるような、おかしな立ち合いでしたが、突っぱり合っているかたちも、手だけを伸ばして顔を引くようにした、ちょうど私が小林さんに注意されたとおりのスタイルなのです。

「これなら、今私に取り組んだら、津野さんとやっても、ヒロちゃんとやってもゼツタイ勝てるわ」

私は、ふたりの取り組んでるのを見ながらすっかり自信ができました。そして先輩が指導してる時のような気持になって、この勝負を見守りました。

突っぱり合ったふたりの掌がパチンと音を立ててぶつかりますと、ヒロちゃんの方の力が強かったのか、津野さんがヨロヨロと一二歩後退しました。しかし津野さんは例の柔軟な腰で直ぐ立ち直ると、図に乗って突いてくるヒロちゃんの手を払いのけ、目標を外され

て前のめりになったヒロちゃんのふところへす早く喰い下がってしまいました。

もろ差しになられたヒロちゃんは、何とかマワシを引こうとして、まるで津野さんの肩越みたいな格好で手をのばしますが、なかなかとどきません。

しかし、津野さんの方も、もろ差しにはなつたものの、抱きついたみたいな型なので、かえって自由がきかず、攻めに出られないようにモタモタしているのです。

ヒロちゃんはなかなかマワシを引けないと知ると、こんどは、津野さんの両腕を外側から抱えて、力まかせに振りまわしたり、こね上げたり、何とか不利な態勢をばんかいしようにと必死です。

このヒロちゃんの強引な戦法がだんだん効き目をあらわして、ヒロちゃんの胸に喰い下がっていた津野さんの顔が少しずつ上がってきました。

そして、とうとうヒロちゃんの両手が津野さんのマワシにかかりました。

津野さんも苦しくなったのか顔を上げてしまい、ふたりの真赤になった顔が双方の肩の上にのぞきました。

ヒロちゃんが、いきなり吊りに出ました。

しかし、津野さんの片足が上がったところまでで、それ以上は吊り切れません。それでもヒロちゃんは強引に吊り上げようとし、からだをそらせて一歩ふみ込もうとしました。ちやうどそこへつま先立ってヒロちゃんの吊りをこらえていた津野さんが、苦しまぎれみたいに足をかけたからたまりません。アッと云う間もなく、ふたりが重なったままドシンと音を立てて倒れたのでした。

下敷きになったヒロちゃんは、思わず「グッ」と声を出したほどの、ひどい転びようでしたが、それでも津野さんの手を借りず、自分で立ち上がりました。

「どう？ 鮮やかなもんでしょ」

さすがに、息をはずませながら、津野さんはとくいそうです。

ヒロちゃんは

「こんなの小手しらべよ。こんどはようしやしないわよ」

と強がりやを云いながらも、やはりくやしそう

で「サア、行くわよ」

と、津野さんの構えも待たず、いきなり突っかけました。

このヒロちゃんの意気どみにつられたのか

津野さんも構えのとのわのないのについフラフラと受けてしまい、猛烈な突っぱりをまともに受けたからたまりません、二三発突き合ったと思うと、たちまち土俵の外へ突き出されてしまいました。

今度は逆に、ヒロちゃんがとくい満面です。
「どう？ ちょっと本気になれば、このとおりよ」

と、私の方を見ます。

「今のは呼吸が合わなかったわ。仕切り直しよ」

津野さんが抗議をしますが、ヒロちゃんは「だって、あなたが受けたじゃないの。負けてから文句を云いっこなし」

と、受けつけません。

私も、ヒロちゃんの突っかけるのが早すぎたと思ったのですが、津野さんだって突張り合いをしてから負けたのですから文句は云えないと思いました。

「じゃ、こんどは決勝よ」

ヒロちゃんは、すっかり勢いづいて

「やっぱり実力がモノを云うのね」

「勝負がついてから云ってちょうだい」

津野さんがやり返えて、三回目です。

意気ごんだ二人が、先手をとろうとして向

うみずに突進したからたまりません。

「ゴッソッ」

ひどい音がして猛烈なハチ合わせです。

土俵の外で見ていた私にも聞こえたくらいの大きな音で、ふたりは

「アッ」

「イタァー」

と云いながら頭を押さえて、津野さんは尻もちをついてびっくりかえり、ヒロちゃんはヘタヘタとしゃがみこんでしまいました。

「だいじょうぶ」

私が、あわてて駆けよると

「ああ痛いワア。頭が割れちゃったかと思っただ。あなたって石頭ネエ」

ヒロちゃんが涙をためながらも、まだへらず口を忘れません。津野さんも

「そっちの方が、よっぽど石頭よ。あああ目から火が出るってほんとうね」

云いながら起き上がって、ヒロちゃんとふたりで、半分ベソをかきながら、その顔をお

たがいにおかしがって笑い出しました。

私も、おかしいやら気の毒やらでしたがついつられてふき出してしまふのでした。

「何やってるの？」

何時の間に来ていたのか、松田さんが立っ

ていました。

涙をためながら笑っている津野さんとヒロちゃんを、ふしぎそうな顔で眺めています。

私が説明をしますと、松田さんはちょっと心配そうに

「ケガはなかったの？」

と尋ねましたが

「笑ってるところを見ると、だいじょうぶらしいわね」

ふたりの顔をのぞき込むのでした。

「どう？ 勝負をつける」

額をなでながらヒロちゃんが津野さんに声をかけました。

「止しなさいよ。そんなヤセがまんして」

私が云いますと、津野さんも

「おあずけにしておきましょうよ。あたし目がくらんじやった」

「アッラ、だらしないのネエ」

と云うものの、ヒロちゃんも、ぶつかったところを一しうけんめいもんでいたので、

「痛いんですよ」

松田さんが聞くと

「ほんとのところ、頭がガンガンしてたまらないの。傷ついてないかしら？」

たちまちヒロちゃんも弱気になって

「痛み分けてところね。……残念ながら」と、どうやらこの勝負は引き合いになったようでした。

「ガタン」

戸が開いて、笠原さんと西田さんが入ってきました。二人とも何だか興奮しています。

「ア、みんな揃ってたのね」

笠原さんは私たちを見まわすと

「こっちへ来てよ。明日のことを打ち合わせするから」

と呼びました。私はドキンとしました。

明日のことと云うのは、体育大会の応援のことなのです。

二日目の明日は準決勝と個人戦があるので、もし団体戦で敗けて個人戦だけになった時は、私たち一年生は応援に行かなくても良いということになっていたのです。

明日応援に行くというんじゃ準決勝に残ったのかしらと、となりにいる松田さんと顔を見合わせますと

「アノネ、準決勝に残ったんだって」

と、無口な西田さんが、何時になく浮き浮きした調子で口を切りました。

「ワアすごい。ほんとですかア」

津野さんが歓声を上げました。

「ソウヨ」

と笠原さんも嬉しそうで

「だから明日の打ち合わせをするのよ」

と、それまでこらえていた笑いを抑え切れなくなったように、一ぺんに顔がほころびました。

「スゴイじゃないのッ」

とさすがの松田さんもすっかり興奮して、私の腕をつかんでゆすぶります。

「だから、あんな新聞なんかウソッパチだって云ったのヨッ」

ヒロちゃんも顔を真赤にしています。

新聞の予想に私たちのチームが一言も取り上げられていないというので、すっかり腹を立てていたのです。

「優勝するかしらネ」

とヒロちゃんは自分が選手になったみたい な意気込みで

「サア？」

私が首をかしげると

「優勝するって云ってよ」

と、またタテミツに手をのびしかけます。

「イヤよッ」

とその手を振いのけながら、やはり笑いが止まりません。

津野さんも笠原さんに何かいっしょうけんめい説明しています。

やがてその興奮がひとしきり静まったところで、笠原さんがくわしい内容を聞かせてくれました。

一回戦はN市のC高校とぶつかって4対1で軽く一勝。

一敗は今井さんだったそうですが、もう勝敗に関係がなくなったあとだっただけに今井さんもちよっと油断したのかも知れません。

野川さんの機敏な動きや、小林さんのボリュームが断然目立ったそうです。

二回戦は、新聞で優勝候補の一つにあげられていたS市の星華高校でした。

さすがに強く、野川さんが一勝したあとは金子さん、池田さんと負け続けやはり今年も二回戦の壁は破れないかと思ったそうです。

しかし、小林さんが大健闘。一七二センチ七五キロという巨体を誇る星華の三年生選手を相手に、突張られ、寄られ、絶体絶命のピンチを必死にこらえ、のしかかって寄り倒そうとするのをけんめいのうっちゃりで逆転勝ちしたのが大殊勲で、この勝敗に相手はすっかり動揺し、逆にこちらは勢いづいて、次の大将同士の一戦は固くなった星華の選手は今

井さんの鋭い押しにあっけなく土俵を出てしまったのだそうです。

「明日の準決勝は大した相手じゃないから、決勝まできつと行けるわよ」

笠原さんは、珍らしく頬を赤くしてしましたがどこか淋しそうなところもありました。せつかくの晴れの舞台に出られなかったのが残念だったのでしょうか。

「優勝できそうですか？」

ヒロちゃんがまだそんなことを聞きます。

「さア？それはわからないわ。でも決勝まで行けたら大成功じゃないの。候補にもあがってなかったんだもの。……そのかわりあんなたちにうんとがんばってもらわなくちゃなら

ないわよ。決勝まで行ったのに次の年は一回戦で負けちゃったりしたら恥さらしだわよ」

笠原さんにそう云われて

「だいじょうぶですわ。わたしゼツタイ来年は選手になります」

ヒロちゃんは、ますます張り切ります。

「まあせいぜい、がんばってちょうだい」

笠原さんはそう云ってから

「じゃ明日は、みんな都合いいわね」と念を押し、私たちがうなづきますと

「それでは……九時十分の汽車で出かけるから、九時までに駅前集合よ。試合は十時半からだから、それで行かないと間に合わないわよ」

と云って私たちの顔を見まわしてから「遅刻したら厳罰よ」
「ゲンバツって何ですか？」
津野さんが聞きますと笠原さんは「それはヒミツよ。そんなこと心配するより遅刻しなければいいでしょ」
ヤブヘビだった津野さんは首をすくめて舌をペロツと出しました。
「駅までバスで十五分として……それまでにあなたとこへ呼びに行くわね」と、ヒロちゃんが云いました。
実はこの計算が間ちがいのもだったのです。
(未完)

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しせ) 〇〇〇円

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

五、愛人の手で介錯される娘

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 略号(のゆ) 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しき) 〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンダーの乱舞
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しえ) 〇〇〇円

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号(しい) 〇〇〇円

- 一、ヒマシ油強制下刺実施
- 二、進しり出る緑の浣腸液
- 三、女体浣腸用責衣の応用
- 四、両足吊りイルリガートル浣腸
- 五、羞恥責め絵巻
- 一、灌水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

< S M 雑 感 >

北 山 一

このごろ気づいたこと



暗かった視界に明るさが生まれた。

ブーンと軽いモーターの音。スクリーンの小さな四角の中に写し出されたのは、殆ど全裸に近い若々しい女体。ムチムチと脂ののった艶やかなポリュームに思わず惹かれる。

クローズ・アップ——魅惑の女体には縄目がまつわりついている。胸の隆起の上と下に二巻ずつ、張りの強そうな細縄がキッチリと喰い入っている。仰向けに囚われた女の膚の輝やき。そして、被縛美女の表情が写る。

大塚啓子！

私は、一瞬、息をのんだ。紛れもない彼女

である。髪を長くしていたころの、特写フォトにあったようなポーズだった。

暗転、そして次のシーン。

若妻風の花模様の布片を幾らか身につけた女。この方は縄目も多い。可憐なムードの身体つきで、撓やかな腕を背高に捻じ上げられ文字通りの高手小手縛りの背面を、膝をついた俯伏せの姿勢で、痛々しく見せてくれる。近代的ムードの、やや愁いを含んだ美貌は、正しく梨花悠紀子であった。見馴れたヘアースタイルも懐しく、やはり前のシーンの被縛女体は大塚啓子だったのだなと思った途端、

再び暗転して第三のシーンに移る。

もう一度、大塚啓子の登場、今度は本縄の高手小手の正面像で、胸からウエスト、腹部までキッチリと縄目が掛かっている。

大塚啓子と梨花悠紀子の被縛美で眼を奪って置いて、新しいストーリーが展開する。

若い女がベッドに寝ている。顔も肉づきも極めて肉感的だが善良そうな女で、パンティ一枚の裸身は、何処かで見たような女だ。

悪魔が一人現われる。黒ずくめのタイツ姿で、頭には角のようなものが生えている。軽い身のこなし、小柄で細い体つきから、女悪魔という感じだ。悪魔は眠っている女の枕もとに立って、女の顔を覗き込む。黒い手を伸ばして女の頸にまわし、じわじわと絞め上げる。女は眼を開き、恐怖に顔を歪め、何ごとか叫ぶ。悪魔は手を放し、枕許の布を取っていきなり女の唇を割って猿轡を噛ませる。

女が逃れようとする。悪魔は女を追いつめ組み伏せ、髪を掴んで振り廻す。そして縄を取り出し、哀願する女の手首を背に捻上げて縛りにかかると。

悪魔の右手に鞭が握られている。黒い柄に一メートル位の黒い編み紐のついた鞭だ。そして、その足許に縛り上げられた女が転がっ

て、身悶えている。頸、胸、腹から腿まで、細縄が幾重にも厳しく巻きついていて、僅かに左右に揺れるだけで、女は抵抗の自由など全くない。猿轡は無くなっているが、女はもはや声もなく戦慄するばかりである。

いきなり、女の胸へ鞭がとぶ。続いて腹。そして腿。黒いマスクから覗く悪魔の瞳は、美しく輝やいている。柔軟な全身に充分な反動をつけ、悪魔はスポーツを愉しむ若者のように、美しく鞭を振る。緊縛裸女は縛しめの中で鋭くのけぞって、何やら叫びながら、ムチムチした隆起に鞭を受け止め、はね返している。

女の膚が光って来る。だが鞭はやまない。悪魔の顔にも、汗が浮かんで来たようだ。もう、女は睨をとじ、唇を少し開いて、うっとりした表情を見せ、酔いしれたようにじっとしている。

悪魔は女の顔を覗き込む。髪を掴んで顔を起こさせるが、手を放すと、女はグッタリしてしまふ。女の胸の鼓動を見るが駄目のようにだ。悪魔は諦めたように立ち上がったが、腰の辺から、庖丁に似た剣を抜く。そして、その切れ味を見たのち、逆手に振りかぶってから、仰向いている女の胸を狙って力一杯突き

立てる。その途端、画面が消えて明るくなり機械の音がやむ。

x x x

これだけの映画が二〇円の内容である。昔懐しいピープショウで、残念ながら題名は無い。神戸あたりで作って西日本に流しているのではないかとの話だが、今やかましい著作権の問題もありそう。KKの存在、大塚啓子嬢、梨花悠紀子嬢の活躍が全国的にひろまることは同慶の至りだが、何か晒し者になっているようで可哀想でもある。私が見たのは四月末、長州湯本温泉の観光ホテル四階の娯楽場の奥に三台並んだ右端の機械だった。

修学旅行の生徒たちに大層喜ばれているとのことだった。

○

春先のテレビで紹介された全国の奇祭の一つに、泥んこ祭りがあった。

豊年を祈願しての行事で、村の中を歩く神の使徒に泥土をぶつけ、それが当たった者の作柄は良いとされている。だから子供たちなどは夢中になって泥の塊を力一杯叩きつける。

今年は神官の某氏がその役を演じた。四〇才前後と思われたが頭から顔の殆んどを覆った全身白装束で、左右から付添の男に抱えら

れて歩いた。顔を上げることもできない。どこから泥が当るかわからないからである。頭の先から足の先まで、全く泥んこになると、足の運びも思うままにならず、七転八倒の有様で、息も絶え絶えに引廻されていた。

もし、これを女性にやらせたら、どうだろうか。汚れ役だが、KK誌の関係では古川裕子、梅川幸子、竹野ひろ子、山本阿津子の諸姉なら魅力満点ではないか。

収穫の豊かなことを願うなら、神に泥を投げるのはおかしい。台風その他作物の敵にこそ泥をぶつけるべきではないか。台風は女性名であったこともあるし、日頃おびやかされている山の神の使徒を、やっつけるのも痛快ではないか。

頭から包んでしまうのだから、一見して女らしい体つきの方が欲しい。かなり激烈なりんちでもあるから、体力がなければいけないし、マゾ性の強い、根性のある人がよい。できれば、悲鳴や呻き声の美しい人がよいだろう。仮に、現在のモデル陣から人身御供を求めるなら、大塚啓子嬢をトップに挙げなければならぬ。刺青の美事な山原清子嬢もうってつけかも知れない。だが私は、日頃から好感をもって賞しているモデルの東浦ひかるに

白羽の矢を立てたい。

×

×

×

祭もいよいよ最高潮となった。間もなくメイ・イベントの「破魔やらは」が始まるうとしている。鎮守様の境内はおろか、部落中が騒然となってきた。いろはにもじった名称だが、物識りの説明では阿魔やらいが訛ったもので、要すに罪のある女を追放するという残酷ショウなのだ。しかも今年の魔女は、短大を出て洋裁学校を卒業したという東浦家の長女ひかるだから、部落の若者ばかりでなく、女や年寄たちまでが喧ましい。

「もう、そろそろ支度せんと、いけんのでしよう？」

ひかるが世話人に話しかける。

「まだ二時間ほどあろう」

「ううん、いいわ。時間があつたら、ウチを晒し者にしといたらい。皆さん、待ってはるんでしょ？」

ひかるは群衆の求めに応えるため、世話人を促がして仕度にかかる。三日前から社殿にお籠りして身を潔めた彼女は、髪を束ねて後へ垂らし、白装束を纏っていた。その総てを自らの手で潔よく脱ぎ棄てて、その場に正坐する。眼をとじているが、純白の豊満な女体

が流石に小刻みに顫える。世話人が背後へ廻りマジックインキで、ひかるの素肌に「五穀豊穰」と書きつけ、次には前へ廻って、胸から腹にかけて「破魔やらは、〇〇神社」と書いた。ひかるはじっと耐えていたが、乳房も腹も大きく波うっていた。

「さ、身仕度しなさい。下着を重ねておかんと、泥がはいりこんだり、転げて怪我したりするからな」

「いいんです。でも、これだけ許して」

ひかるは黒いメンスバンドを、ピッチリとはいていた。

「そんなもんだけじゃ、いかんぞ」

「ううん。どうせ悪魔になって退治されるんやもん、ウチ、覚悟してます。大抵のことやったら、音を上げたりしません。皆さんが喜んでくれるように、できるだけじかに泥をぶつけて貰います。折角ウチが選ばれたんやから、ほんまに苛めて貰った方がいいわ。少しくらい怪我したって構いません」

ひかるの申し出は、直ちに容れられた。ひかるの純白の肉体は何箇所かに黒い色を際立たせただけの素肌を、粗末な灰色の囚衣で包まれた。これは江戸時代の女囚の衣服を形どったもので、この単衣の腰紐は荒縄の帯だっ

た。そして、同じ色の頭巾がかぶせられた。丁度花嫁の綿帽子のようであったが、これは顔に直接泥土が当たらないようにする配慮で、この頭巾が落ちないよう、頸の所を縄で厳重に締められた。

両足首を一尺の間隔でつなぎとめる縄の輪が嵌められた。

「履物は何にしようか？」

「ウチ、裸足で歩かせて貰います」

ひかるは呆れるほどに神妙だった。最後に両手を背に廻して括られるのを待ったが、世話人の指図で両手首を前で括り合わされた。世話人は、ひかるの胸の膨らみの上下に縄を締めつけ、上膊部を固定した。そして、ひかるの肩を押した。

社殿から境内へ跣足で引立てられたひかるの姿に、人々はどよめいた。何ともいえない衝撃が、群衆の背筋を走った。胸と下半身のヴォリュームが誇張されて、囚衣の中央の若い女体は一目瞭然だった。女囚としては余りにも浅間しく、女としては残酷の美を極めていた。

介添役の一人は、ひかるにしつこく言い寄ってくる女癖の悪い青年で、ひかるの態度を恨んで苛め役を買って出た男だったから、手

首を括った縄尻を邪慳に曳いてひかるを痛めつける。他の一人は青年団女子部の副部長で何かにつけてひかるをそねんでいる娘だったから、わざと肩を小突いたり、篠を手にして背中や尻を撻ったりした。

ひかるは、引廻しの開始までの一時間余りを、御神木の銀杏にぐるぐる巻に縛りつけられ、立ったまま項垂れて、晒される。首から紙をぶら下げられ、それには、**穀つぶし**と書かれていた。

「母ちゃん、あれなあに？」

「あれはね、穀つぶしよ、破魔やらはの」

「何で縛られてんの？」

「悪魔だから。お米なんかを食べちゃう悪魔だから、退治するの。これから、うんと酷い目に遭わせて懲しめてやるの」

女の子の間に母親が応えている傍では、若い男女が囁やいている。

「やアねえ、あんなの。誰？縛られてる人」

「ありや東浦のひかるだって」

「へえ、ひかるちゃん？あの人。ひかるちゃん、よくOKしたわね。あたしなら死んだってやだわ」

「面白いで、今年は。ひかるを泥んこにしたるわ」

ひかるは群衆に晒されながら、案外平静だった。

やがて太鼓が鳴った。

引廻しが始まると、人々はそろそろと蹤いて歩く。鎮守様の地域は決して狭くない。子供達は歓声を上げて駆け寄って来る。泥土をぶつけるのは小学生以下の子供となっているのだが、中学生も高校生も、中には大人までがひかるの被縛美に泥を投げる。

「坊や、一寸貸しな。こうやるんだよ」

介添人の娘は、田圃のあぜで立っていた男の子から下肥用のひしゃくを借りると、いきなり泥水を掬って、ひかるの頭へばしゃりとかぶせた。皆は、わあっと歓んだ。ひかるの頭巾に泥が残り、水が泌みて髪から肩が濡れた。

「さア、泥だ、泥だ。穀つぶしの悪魔を泥んこにしたら、豊年万作だよ」

介添人が叫んだ。泥が飛ぶ。泥水の飛沫がはねる。

立て立て、立つんだ！うっ、うっ！

「泥だ泥だ、穀つぶしに泥を喰わせたれ！」

「う、うわっ！いやっ！ううわうっ！」

「わーい、わーい、泥喰ったア！」

穀つぶしの紙の札は濡れて破れた。ひかる

は泥人形のように、泥土をボトボト垂らしてよろめいていた。介添人の男も女も、泥水がはねて汚れていた。汚れるほど彼らは昂奮し残酷さを増して行く。そして、その仕打ちに子供たちの歓声上がるのだ。

映画「越後つっし親不知」で佐久間良子が田圃の泥の中へ顔を押しつけられ殺されるというシーンを思い出したのか、介添人の女はひかるの肩を抑えて泥田に膝まづかせ、頭巾ごと泥水の中へ突込んだ。苦しみに耐えかねたひかるが伸び上がるうとしたが、それを逆用され突飛ばされたため、ひかるは泥田の中へ腹這いにつんのめった。囚衣の裾の乱れで大腿から下腹部のあたりまで泥にまみれ、ひかるは鮎のように喘いだ。

ひかるは泥酔者のように曳かれて歩いた。介添人の男が縄を肩にかけて曳いた。だから、膝をついたら最後、泥人形はズルズルと引摺られてしまう。ひかるはやや反り身になって、手首から曳かれていた。

約一時間後、引廻しの終着点の御神田に辿りついたとき、ひかるは意識不明の状態だった。ただ気力だけでモゾモゾと蠢いていただけだった。

一坪ほどの土地の三方を竹矢来で囲んで、

三尺位の丸太の杭が一本立っている。ひかるは、この杭に四つ這いに繋がれた。括られた両手を突き、肩を荒く喘がせ、頭を垂れて、犬のようだった。

ひかるは、腹を絞るように嘔吐した。どす黒い水の中に汚い泡があった。

泥の頭巾がとられ、汚水に濡れた黒髪が現われた。顔から首筋までまだらに薄汚れている。縄が水を吸ったため、手首や上体を縛っていた縄はナイフで切りほどいた。泥んこの囚衣を剥取られると、白い素肌が現われた。ことに、ひかるの膚が雪白なだけに、背中の「五穀豊穡」の四文字が特に目を惹いた。

頸に犬の首輪を嵌められ、鎖で杭に繋がれたひかるは、獣のように這っていた。

ひかるはどす黒い吐瀉の中へ、グタッと倒れ伏してしまった。胸と腹だけが別の生き物のように動いている東浦ひかるを見て、人々は「今年の泥んこ祭は面白かったなァ」と心で肯いていた。

ひかるは遠のいて行く意識の中で、誇と自己愛を感じ、できれば来年も出させて貰おうかなと考えていた。

○
テレビで『じゃじゃ馬馴らし』を放映する

このことで、その日は朝から楽しみにしていた。というのは、以前、新聞の芸芸欄で舞台稽古の有様を見たとき、岸田今日子が小池朝雄に捉えられ、上体を抑えられて尻を平手打ちされる写真があったためだった。特異なマスクで、豊かな表現力を誇る岸田今日子だけに、さぞかし面白い調教場面が見られるだろうと期待していた。

突如、若い女の悲鳴、そして勇ましい怒声が上がった。転がるように舞台へ現われたのは妹娘に扮した三井美奈、続いて姉娘に扮した岸田今日子が鞭を手にして追いかけて来る。

三井美奈は、役柄らしく極めて淑やかで美しいが、これがまた派手に縛られている。豪華なコスチュームの上から太目の紐で胸高に縛しめられ、両手は後に廻して背に高く括られているため、伸びやかな腕が充分に肘を張って曲げられている。岸田今日子の衣裳も立派だが、髪を振り乱して恐ろしいほどのじゃじゃ馬ぶり。

別に恋の鞘当てという訳でもなく、妹の優等生ぶりが気に入らないという所らしい。縛られた妹が悲鳴を上げて逃げ廻るのが愉しいらしく、掛声をかけて鞭をとばす。ドレスの上からでは大した痛みもないせいかな、岸田今

日子は三井美奈に容赦なくピシピシと鞭を浴びせる。縛り工合からいっても、台詞からみても、何事かを白状させる目的よりも、狩猟と同じ遊戯の趣きがあった。

中央に置かれた大きなテーブルの周囲を逃げ廻る妹、後姿を見ると一応の後手になっているし、これを追い廻す姉は猫がねずみを弄ぶように、鞭を鳴らし、声を荒らげて迫って行く。

なかなかよい場面だった。ただ父親に抱かれて退場するとき、縛しめを解かれる前に左手首が抜けたのが惜しい。青木順子なら最高の演技者といえよう。

期待した岸田今日子の尻打ちは形ばかりであり、調教ぶりが心理的效果はともかく、視覚に訴えるものは少なかった。いささか物足りない分は、やむを得ず、しのぶが自らの体で作り出してくれた。岸田今日子の瞳や唇、三井美奈の初々しさには及ばないとしても、女らしさを露呈したしのぶが、後手にされ、両足を括られ、肌色の肉の塊になったまま眠りに落ちて行ったのは、かれこれ午前二時を廻るころだった。

(おわり)

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 一〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 一〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足趾と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

(最終回)

黒 湊 嬰 一

△ 希臘神話の再編成 V

ヤ オ

ビブリオテーク

希臘神話に基づくテセウスの人間像は、政治的に優れ、義侠心に富む、智勇兼備の文化的英雄である。女性関係が乱れていた一点を除けば完全無欠な人格と言いたい。この問題に就いても筆者は当人の責任よりは寧ろ不運なのだったと考える。同時代人であるドーリヤ人の英雄ヘルクレスが、ギリシャ劇中に、名誉慾の固りみたいな、自己本位で馬鹿力の大食漢として登場するのと好対照である。

メラニッペー以下のクレテ人男女はテセウスの命令で解放された。併しその中には既に

ギリシヤ人と結婚して、アテネに留る事を希望した者も居る。

ビブリオテーク

希臘神話は、アンティオペーの死後、アリアドネの妹ファイドラがテセウスの正妃になった事を伝えている。留った者はファイドラだけだったのではあるまい。

ギリシヤ劇の伝える処では、テセウスはアリアドネの身替りたるファイドラと結婚し、デーモポーンとアカマースの二児を儲けた。このファイドラが前妻アンティオペーの子ヒュポリトスに恋してテセウスの家庭を破滅させるのだが、それは二十年後の事であり、本篇とは無関係だから省略しよう。

アテネに残ったクレテ女の中には、この戦

役で寡婦となった者も少くなかった。

彼女等はエレウシスに集って地母神を祭り、戒律を守って信仰の余生を送った。エレウシスの秘儀と呼ばれる農業女神デメテルの信徒の起源である。

矢傷を負ったコルキュネは破傷風を併発しナクソス島附近を航行中に死んだ。四十一才だった。アリアドネは嘗て父母の骨を埋めた思い出多いこの島に乳母を葬った。その墓はプルタルコスが「今も残っている」と記している。

クレテ遺民は、単なる海賊の集団から、国家組織を再建するに足る人材を回復した。艦船はクレテ島に航行し、クノッス宮殿を再建

して無政府状態に在った島に秩序を取り戻した。この挙はテセウスに依って援助された形跡があり、以後クレテとアテネは友好的だった。アリアドネの弟カトレアスがミノス五十六世としてクレテ島を治めた。だが全盛時の海上帝国が再現出来なかったのは止むを得ない。植民地は失われ、フェニキヤ人とギリシヤ人が海上に乗り出していった。クレテ島自体もギリシヤの一地方程度にギリシヤ化され、カトレウスの後を継いだデウカリオンの子イードメネスは、ギリシヤ諸王の一人として、「槍の名手イードメネス」の名の下にトロイ戦争に登場して来る。或はカトレウス以後クレテ王は代々イードメネスを称したものであろうか。

余談だが当時のギリシヤ諸王は好んでクレテ婦人を妻に迎えている。クレテ文化に憧れたものかもしれない。トロイ戦争の主将アガ멤ノンと、その弟メネラオスもクレテ女の腹から生れている。要するにこれ等の結婚を通じてクレテとギリシヤは同化されて行ったものと思われる。

クレテ遺民の大部分は、海上帝国再建の夢を他の土地に求めた。メラニッペを首領とする一派はフィリスチン人としてパレスチナ

を領し、子孫は五百年に亘ってこの地を占めた。モルパディアは転戦の功賞としてテルモドン河一帯の旧植民地を賜り、その子孫にはトロイ戦争の女傑ペンテジレアが出た。

更に多くのクレテ人は、シチリヤからイタリアに移住した。ギリシヤ人の言うチレニヤ人、ローマ人の言うエトルリヤ人がそれで、考古学的発掘から見ると紀元前十四世紀頃からエトルリヤへの移住が増加している。ギリシヤの伝説ではローマ市の起源も先住ペラスゴイ人に帰しているから航海民族クレテ人の植民である事は略々確実である。エトルリヤは紀元前四世紀にローマに亡ぼされる迄イタリア及びシチリヤで強盛を誇った。

アリアドネはこの何れにも属さなかった。

エウクシノミアとエウクサンテイオスの母もアリアドネに従った。人数は多くなかったが、クレテ三神の宝器を擁し「東方に誕生した愛の神を発見する」エウローペの予言を確信する一団がキプロス島に渡った。

ビブリオテーケー
デイオニッソス
希臘神話ではアリアドネが葡萄酒神と結婚

した事になっている。一方キプロス島の伝説ではアリアドネがこの島に滞在した事が推測される。キプロス島は美と愛の女神の誕生地として知られるが、アマトウスの森にあそ社

にはアフロディテ・アリアドネが祭られている。果して両者は同一人格だろうか。

アリアドネはこの島から更に東方へ渡ろうとしていた。フェニキヤからユーフラテス河上流に出て河舟を建造し「世界最大の都城」バビロンを訪ね、愛の神が其処でも発見出来ない時は遙か東方の大河に臨んだ神の都に至って東の果を窺めようという大計画だった。(これはインダス河畔にドラヴィダ人が建てたモヘンジョ・ダロ等一連の都市国家に当る)

アリアドネはこの島で意外なものを見た。千人以上の群衆が小さな堂宇を中心にして踊っている。踊りには一定の旋律があり、楽隊も備っているが、すべての者が熱狂し、陶醉していた。

「オーナロス殿ではありませんか」

果して葡萄酒神の信徒だった。嘗てナクソス島で見た小教団とは似てもつかぬ大組織に成長していた。世界的大天災が信者を急増させたものであろうか。併しその信徒は余にも多くの人種が入り混っていた。

「アリアドネか。変ったね。驚いたよ」

アリアドネは五年間の出来事を語った。フェニキヤの労役。エジプト出国。モロク神。アテネ進攻等何れも驚嘆すべきものである。

且つオーナロスはトラキヤで自身を犠牲に供して信徒を救ったアリアドネの行為を忘れてはいなかった。

オーナロスの方もこの間にアリアドネを驚かすに足る布教活動をしていた。^{ヒプリオテケー}希臘神話に言う^{ディオニッス}葡萄酒神のインド遠征である。世界動乱の間に教義普及を目的とする東方向脚が試みられた。併し結果的には失敗だった。

「君が東方で愛の神を求めようとしても無駄だろう。東方には破壊と混乱の他何も無い」

世界最大の都城バビロンは瓦礫の山と化し廢墟の中に白骨が転っていた。この破壊を行った者は軍国ヒッタイトのムルシリユシュ一世という事だった。オーナロスは屈せずに更に東を望み、大河の畔にあると言う都市国家群に向った。だがアريان民族の波は既にこの地方を掩っていた。都市は荒掠され、ブルネット系の死屍数百体が広場に転っていた。発達した道路網や上下水道。高大な城壁。神殿を中心とする立派な政治組織を有したらしい都市群が何故突然滅亡したかは解らない。然もこの暴挙を行った連中は都市の動産だけを持ち去る事で満足し、城内に居住しようとはしない程の野蛮人だったと思われる。

近代の発掘でモヘンジョダロやハラッパは

紀元前千五百年頃急速に滅亡した事が知られた。窯業と貿易に基礎を置いたインダス都市国家群の衰亡原因は世界變動に依る森林資源の焼失であり、その結果輸出品の陶器が作れなくなり、城壁の煉瓦も焼けなくなった為であらう。地震で損壊した防壁が修理不充分的間に野蛮人が侵入したらしい。

オーナロスが城内に入った時、殺戮された住民の死屍は未だ腐朽せず、惨禍の凄じさを感じるに充分なものがあつた。後手に縛られ、頭を斧のようなもので割られた男女が、広場に山積され、大浴場には手足を縛られた惨殺体が漬けられ、樹木や屋根からは足首を縛った死体が逆吊りになっていた。外傷が無い処から察するに放置されて死亡したらしい。オーナロスとその信徒は死屍の縛を解き市の中心部に合葬して去った。

最近の発掘でモヘンジョダロから巨大な合葬穴が現れた。その頭部には何れも致命傷となつた外傷が認められた。市街の各所からは明らかに縛られて殺されたと思われる白骨が少し宛発見された。虐殺の後で何者かが大部分の死体を簡易埋葬した事を想像させる。

「私は東方布教を断念した。トラキヤに行つてストリュモン河流域の住民を教化する心算

だ。余り永くない余生をあの地で送ろう」

トラキヤに興つた^{ディオニッス}葡萄酒神の信仰が物凄い勢で全ギリシヤに拡るのは七百年後の紀元前八世紀である。

「トラキヤに行かれるのであればヘレスポントス迄わたし達の船でお送り致しますよう」アリアドネは東方を窮める決心を変更しなかつた。寧ろ目標を一層拡大した。メソポタミヤとインドが駄目ならそれを通り越した東に行こう。陸路東行を海路に改め、黒海から植民地テミスキラに出て裏海に進むのだ。

キプロス島にはレバノン杉の森林が焼け残っていた。これは船舶建造に必要な資源である。黒海航行は丈夫な新造船を必要とした。十月号で既述した如く、当時の黒海は北東部に於いて裏海に連結し、更にアラル海からバルハシ湖に繋り、パミール高原の麓に及んでいた。即ち舟運を以て地中海から直接中央アジアに達する事も可能だった。同時に此の交通路は古代西アジアの彩陶文化が黄河流域に達した経路でもあつた。

だがフェニキヤ人が既にキプルス^{キプロス}の資源に着目していた。フェニキヤ人の大植民時代は開始され、至る所でクレテ人に交替しつつあつた。愛の神を発見する処ではない。森林伐

木樵と銅山鉦区樵で忽ち争闘が始った。

アリアドネは交渉の為にシドンを訪問し、イシュタール女神の祭祠タイアと再会した。併し嘗ての性愛の女神は世界災変を経て、恐る可き偉力神に成長していた。

「天を震わせ 地を揺すり

空をも焦がす いなづまと

大地に注ぐ 火の流れ

見よ我こそは イシュタール

天の女王の イシュタール」

(バビロンのイシュタール讃歌)

女神の頭には黄金の牛角が生えていた。女祭祠タイアは半狂乱の態で天災終熄を祈願していた。アリアドネは交渉を断念し、船舶新造を諦め、補修に足るだけの杉材で満足しなければならなかった。

アリアドネは東行に必要な食糧確保の目的でエジプトを訪問した。ナイルの天恵の国は新しい統治者の平和政策もあって国力を恢復しつつあった。ハトシエプスト女王はアリアドネを歓迎し、余り裕福ではない麦を無償で贈ってくれた。

「他人の欠点は、幾らでも指摘出来るものです。自分で責任を負うようになって政治の難しさがよく解りました。わたしの理想とする

平和主義が永久に貫けるものかどうか。天災から諸国民が立ち直った後にも通用するか。

わたしの息子のトトメス(三世)さえ反対なのです。子供が成長したらわたしを殺して軍国エジプトを再現するかも知れません」

聡明な大女王は理想を追いながらも現実を見失わず、将来を洞察していた。アリアドネは偉大な女君主の中に寂しそうな影を認め後に心を残しながらエジプトを去った。

一四八九年春。葡萄酒神ディオニソスの信徒をトラキヤに上陸させた後、アリアドネの一行はテミスキーラから裏海に向った。テルモドン地方を領するモルパディアがアゾフ海迄案内した。

「丁度よい時機に決心なさいました。天災以来コルキウス北方の地型と気候は急変し、水路は急速に狭くなり、乾燥が始っています」

モルパディアの説明に依れば黒海と裏海を繋ぐ狭水路はあと数箇月で陸地化するだろうという事だった。

紀元前千五百年代の大変動は此の他にも多くの桑田蒼海を演じた。サハラ砂漠に相当する大湖水トリトンも同じ時に大西洋に流出して大乾燥地と化した。

黒海からバルハシ湖に航行したのはアリアドネの一行が最後だった。東地中海はその直

後に乾上って陸地となった。水系に遮られていたアリヤン人種は洪水の如くイラン高原に流れ込んだ。同じアリヤン民族はアリアドネが航行した水系と平行に陸地をタリム盆地に向っていた。彼等は後に西域人としてオアシス文化を作り、東洋と西洋を繋ぐ橋の役を果たした。

水路は狭くなり船は航行出来なくなった。東方は高い山に遮られている。

「船を棄て、山を越えて東に進みましょう」

クレテ三神の宝器を擁して一行は世界の屋根に挑んだ。雪を踏み、氷を割って進んだ。食糧は塵雲から降下する炭水化物の凝固したものだけだった。全く同じ頃。ハビル人は同じ物質たるマナを食べながらアラビヤの砂漠を放浪していた。

山を越えた脚下に広大な沃野が見えた。後代のタリム盆地である。高さ百米に及ぶヒマラヤシーダの森林が災変を免れて残り、一筋の大河が盆地を貫いて東流していた。

「あの杉材で船を作り、あの河を下って東の果へ行きましょう。河の流れる先には必ず海があり、河口には人が住んでいるものです」

麦が播かれ、家畜が放たれた。巨材を二本並べて竜骨を作り、一年を要して方船を建造

した。男手が不足な上、釘も銅板も無く、クレテ風の建造方式は採用出来なかったが、河を下るのはこれで充分と思われた。クレテ三神の宝器を飾り、食糧を積み、揃って乗り込んだ。アリアドネは葡萄酒神の信徒から貰った良質葡萄の種子を大切に持っていた。時に紀元前一四八八年初夏。アリアドネは二十六才。義母エウクシノミアは二十七才。義弟エウクサンティオスとその許婚者クセノディケは共に十二才。一行の人的構成も略々これに準じ、女が多く、男は幼少者に限られた。クレテ王国の血統を保存しつつ人口増殖を計ろうとすれば少年達の成長を待たなければならぬ。

方船の下って行く河は後代のタリム河だが当時世界最長の水流で、総延長七千紮に及び末端は黄河上流と連結していた。アリアドネはこれを知らなかった。ストリユモン河やスカマンドロス河。ナイル河下流程度が彼女の知識の限界だった。

出発の朝。アリアドネが太陽神の黄金円板を祭っていると七年ぶりに厚い塵雲が切れ、太陽が短時間だが姿を見せた。クレテ遺民は瑞兆を感謝し、前途を祝し合った。併し航程は前兆の如くではなかった。長流

は何処迄も続いた。船は損傷し食糧は不足した。一旦姿を現した太陽も再び塵雲に隠れ、大河の兩岸は荒涼として人影もなかった。「内陸地方は冷え易いので他処より早く雲が切れるのでしよう。海に近い場所も次第に晴れ、大天災の終りが来ると思われます。東方には新しい時代の新しい世界があり、其処で愛の神も発見出来るでしょう」

アリアドネは、皆を励ましながら船を進めた。此の年の末近く、大河の水は黄色の泥流と変わり、流速も緩慢となり、河口近しと思われた。支流が幾つか見え、その奥には不規則な煙が騰り、人の住む気配が感じられた。併し都市は勿論、家らしくものも見当らなかった。右舷側には壮麗な山体が威容を示して岸に迫っていた。(後代の泰山である)

此の夜。今迄平穏に吹いていた西の微風が突然東北の烈風に変った。世界動乱に際して吹いた西風を除けば、シロッコ風程度しか知らない地中海の航海者を驚愕させるに足る季節風だった。平底の河船は凌波性に乏しい。アリアドネ以下、必死の操船も空しく、一支流に押し流されて遂に擱坐した。三神の宝器を揚陸し、幼少者を救出するのが精一杯だった。水練に長じたアリアドネはよく人命を救

ったが武器は悉く失われ全員が疲れ果てた。すべての者が岸に上り、身を投げ出していと、忽ち地中から湧き出たように武装者の一団が現れた。最悪の条件下だった。アリアドネの脚力も発揮出来ず、エウクシノミアの武略も振い得なかった。悉く無抵抗で捕えられた。濡れた身体の上から荒縄を打たれて後手に縛りあげられた。一人残らず数珠繋ぎに連縛され、黄土に倒れ伏して喘いだ。

朝が来た。太陽は昇らないが雲を透して白光が拉り、四辺が明るくなった。アリアドネは縛られた半身を起して相手を観察した。

青麻の粗衣。乱髪無帽。風体も骨格も貧相だった。武器は石斧や木槍で、指揮官らしい者だけが青銅の短剣や鉾を持っていた。彼等が話し交す言葉はアリアドネの博識を以てしても全く理解出来ない種類のものであるが、その抑揚や態度からは緊張した空気が察知された。

「大変な事になりました。この尽では殺されるばかりです。縄が解ければ彼等の武器を奪って血路を開くのですが」

エウクシノミアは、縛られた経験が無かった。屈辱と憤怒に幾分か恐怖も混えて慄え気味に言った。

「穏和しく縛られたのだから、すぐ殺すような事はしないでしよう。慌てずに時機を待ちましょう。此の程度の縄目なら時間さえあれば解いてみせます」

幾度も急場を免れた経験のあるアリアドネは故意に平静を装って見せた。併し言葉が解らないので相手の意図を窺い得なかった。

アリアドネ達は河岸から曳き立てられた。

兩岸は崖になり、丘陵へ続いている。アリアドネは歩かされながら相手の態度を眺めた。そして迅速に判断した。鞭や棍棒を持っている者は一人も居ない。乱暴な動作や威嚇的行為に出る者もない。縛られはしたけれど、これは何とかなりそうだ。

丘陵の上に木造建築が数棟建っていた。土壇を築き、高床式の平家を建て、屋根の上に千木を配し、相当立派なものだが煉瓦も屋根瓦も使ってなかった。且つ建物らしいものは見渡す限り此の一面だけである。よく見ると黄土の崖に横穴式洞穴を掘った住宅群が有った。昨夜、地の中から武装兵が湧き出したように思ったのはその為だった。そして木造の貧弱な建物はどうかやう宮殿らしい。

縄尻を把っている者がアリアドネの肩を軽く叩いた。平伏せよという合図のようだ。ア

リアドネは膝を下し、中腰に坐った。エウクシノミア以下も従順に見習った。

土壇の上に白鬚の老人が現れた。白衣に錦冠を戴き、杖を持ち、威厳と気品を兼備していた。モーセに似た処もあるが遥かに穏和な顔をしていた。王だろうか。その老人は真直にアリアドネの方を見ながら壇を下りた。

「乙女よ。何処から来たのか」

アリアドネは、突然の衝撃に驚いた。クレテ語でもアケーヤ語でもない。言語でさえない。意識の中に飛び込んで来る他人の意志そのものだった。見上げると老人の両眼は、火のように燃えていた。口は全然開かれていない。刺すような意志の輻射はどうやら、あの眼から放たれているようだ。

「クレテ島、クノスの都から来ました」

アリアドネはミノア・クレテ語で答えたが老人は解らないという風に首を振った。

「大河を溯った遙か西の方。大陸に囲まれた地中海にある島。太陽を祭る都からです」

アリアドネは読心術^{テレパシー}を即時に理解した。意識の中に越えて来た地方を思い浮べながら言った。老人は頷いた。

「そのような遠くから何をしに来た」

老人の質問は簡単だった。

「大きな災変が西の世界を荒廃させました。その際、新しい世を支える愛の神が星と共に東方に降臨されたと聞き、その神を求めて東へ進み続ける内に此の地へ着いたのです」

老人は感嘆したような表情を浮べた。

「君は悪人ではないようだ。寧ろ稀に見る聖女かもしれない。臣下の乱暴を許されたい」

老人は、杖で左右に合図しながら、何か命じた。言語と意志を使い分ける事が出来るらしい。臣下の者が寄って来て一同の縛しめを解いた。

「名は何と言う」

老人はアリアドネに隣の席を与えた。

「アリアドネと申します」

「難しい発音だ。愛蓮と呼ぶ事にしよう」

老人の知識や思想は比較的単純らしい。

「君の求める愛の神が此の地で見つかるか否かは解らない。併し君達が留る気なら、見る通りの貧しい国土だが滞在するがよからう。だが働いて貰わなければならない。此の地方も大きな星の衝撃を受け、火と水に荒らされて了ったのだ。我々は農地の整理に皆で働いている処だ」

老人は感応波を送りながら説明を始めた。

「私の本名は解らない。颱風^{タイフーン}が吹き荒れた

時に一切の記憶を無くして了ったのだ。皆は私を堯と呼ぶ」

老人はタイフォンとヤオだけを発音で示した。アリアドネにはそれがティフォンとヤーヴェーに聞えた。

書経等の記す処に依れば、「堯の時代に輝かしい星が現れた」その直後に、「太陽は十日間沈まず、森林は焼失し、害虫が全国に満ちた。洪水は山麓を取り巻き、小丘は水中に没した」これは太陽の位置に関する只一箇所を除いて旧約聖書と一致する。シナイ半島と黄河河口が経度九十度離れている為である。

世界変動に際し紅海を襲ったのと同性質の満潮堆積が太平洋にも起った。その波濤はアジア沿岸を洗い、黄河の遙か上流迄押し上った。堯帝が治めた水は単純な黄河の氾濫ではなかったようだ。ヴェリコフスキーは百万単位で生命が失われる地震や洪水が支那では幾度も記録されているのに住民の印象に殆んど残らず、堯時代の災変だけが特筆されている点に疑問を投げ掛けている。

「私が何をしたのか全く記憶がない。気がつくとは私は泰山の頂上にいた。数万の民が私の後に従って山腹に群った。麓は洪水で洗い流され、何も残らなかった。私を信じて従った

者だけが助ったらしいのだ。天の神は雲の上に現れ、私にヤーオーと呼び掛けた。民は私に王号を贈ってくれた。私は自分にその資格があるとは思わないのだが」

堯は高きを意味する字である。ヤオの音に對して後代の者が当てたものだろう。

アリアドネは堯帝を、シナイ山のモーセと比較していた。東洋の聖賢君主は神懸りにならず、謙虚に天子の職を執行している。

洪水が退いた後で堯帝は民と共に泰山を下り、治水工事を始めた。大臣に任せられた鯨が実務を執り、堤防を築いた。黄河本流は大きく過ぎて手に余る。治水は支流が本流に接する附近から手掛けられた。

「民は疲れている。堤防は何度作っても壊れる。奥地に満ちた水は減らない。太陽は現れず、凶作が続く、誰もが餓えている。君達を見て縛ったのも気が立っていたからだ。民が道德的崩壊を起さないのは、此の社会では真実しか通用しない為に他ならない。私は他人の考えている事がすべて解る。それで誰も嘘を言わなくなった。併し嘘の言えない社会が本当に良い社会かどうか断言は出来ないが」

アリアドネは、黄河上流で見た太陽の再生を思い浮べた。

「太陽は必ず現れます。太陽神を迎え、雲を払う祈願をさせて下さい。わたしがクレテに伝えられた舞を奉納しますから、皆揃って共に囃して戴きたいと思います」

堯帝はこれを許可した。

「成功か否かは問わない。君は太陽の再現を確信している。それだけで充分だ」

沈滞した民心を鼓舞するには、何か儀式的な祭典でも行つて、陶醉と興奮を誘う必要があった。堯帝は始めて自戒を破った。但しアリアドネは、風向の変化や気温の低下、雲の移動方向等を見て、此の地方にも間もなく太陽が現れると判断していた。

クレテ遺民は祭壇を作り、太陽神の黄金円板ヒュペリオンを飾り、地母神の蛇連環を地に拡げた。堯の民は全土から集った。彼等は乏しい醗酵性飲料と楽器のすべてを持っていた。祈祷の後で、言語の通じない二つの民が各自の国語で交々歌い囃した。

アリアドネは壇上で牡牛の舞を踊った。高々と跳躍し、旋々と転回し、天地狭しと乱舞した。クレテ遺民は熱狂し、堯の民は感嘆した。堯帝自身も雰囲気圧倒された。アリアドネは自らの踊りとその効果に酔った。夕方から夜半へ、更に朝へと舞い続けた。感覚は

麻痺し、慣性だけで撓ね返った。時間の観念も無くなった。一日も一年も区別がつかない程に無我の境地へ没入した。

冬の季節風は極地の冷気を黄河下流域に吹きつけ、下降気流を生ぜしめた。厚い塵雲が切れた。南に向って急速に流れた。

アリアドネは薄れ行く意識の中で嵐の如き響きを聞いた。それが群衆の歓声である事を判別する知覚は既に残っていなかった。エウクシノミアが事態を察して駆け寄った。

「太陽が現れました。あの歓呼の声が聞こえませんか」

エウクシノミアの声が遙か遠くに聞えた。

アリアドネは義母の腕に崩れ込んだ。

「愛の神。未だ発見していないけれど、エウローペ様の予言された神が、わたしの願望を叶えて下さったのですね。でも疲れる事を知らない程に鍛えてある筈のわたしが何故立てなくなったのでしょうか。どの位踊ったのかしら。呼吸が苦しいのです」

アリアドネは身体の変調を自覚しながら意識を失った。労役と転戦に次ぐ流浪の旅は、地位に伴う責任感の心理圧迫もあって、知らぬ間に二十六才の身体を蝕んでいた。

此の記念すべき太陽再生の日は紀元前一四

八八年の冬至だった。(近東方面では同じ年の十二月二十五日に太陽が復活した。何れも神聖な日として後代に伝えられている)

堯の国土は考古学に言う竜山文化圏の東部に位置し、その国民は漢民族ではないが類似の原蒙古種だったと思う。H・G・ウエルズの説から類推すれば、新石器文化の初期に世界中の海岸地方へ拡ったブルネット人種の一派だったかもしれない。堯・舜・禹三代の後継に伝説的王国たる夏王朝が続くとされているが、夏王国が実在したなら山東省一帯の黄河下流地方だったろう。その文化を受けて上流の殷が興隆し、遂に夏王国を征伐して河南省から山東省に亘る地域を政治的に統一した。殷墟は近代の発掘で有名になったが、此の時代迄が漢民族以前の東夷文化で、メソポタミヤのスメル人に相当する。メソポタミヤのセム人に比すべき漢民族が上流から現れて殷を亡し、周を建て、もう一廻り大きな統一を成したのが前十一世紀。更に上流の非漢民族国家たる秦が黄河全流域を統合したのは前三世紀である。斯くの如く文化は下流から、征服は上流から拡張されて行った。これ等の変遷を通じて東夷族は漢民族に吸収されたのであるが、その一部は固有の文化と宗教を持つ

て東方海上に去った形跡がある。では何処に逃れて新しい文化を拓いたのか。

アマゾン・又はアマツオルネス。

アフロディテ・アリアドネ。

これとアマテラス、オオヒルメとの間に共通語源が有るか否か。

筆者は此の問題を論じようとは思わない。

ギリシヤ語のエウクシンは『暗黒』を意味して『根の国』に通じ、エウクシノミアの語根にイザナミが含まれ、エウクサンティオスにはスサノオが含まれるかどうか。

筆者は斯かる妄説に興味を持たない。

アシユナロスはアシナツチであり、

クセノディケーはテナツチであり、

母親と同じ名を持つ娘のクセノディケーはクシナダ姫なのか。

エウクサンティオスと同名の長子はイソタケル(五十猛)であり、故郷の島の名を冠した末娘のシチリヤ(ギリシヤ音スケリア)は須勢理姫になり得るか。

何れにしても筆者には関係がない。

太陽神の鏡。地母神の珠。海神の剣。

此の結合に特殊な意義を認めようとする者も居る。併し天と地と海の三幅対は古代宗教に普遍的なもので、東洋神話独得のものでは

ない。

イザナミとヘラの性格的類似。

夜見返り（蘇り）伝説の共通性（イザナミとエウリュディケー）

黄泉大食い（冥府の食物を食べると現世に戻れなくなる事。イザナミとペルセフォネ）

テセウスとオオクニヌシの逃亡説話。

古神と男女神の分掌関係。

その他、東西神話の類似点を揚言する者も居るが、これ等は世界中の神話に共通の要素である。筆者の書きたいものではない。

筆者が描写したいのは、

一途に愛の神を求めて、東方へと留る処も知らずに進み続ける、純情にして篤信な、永遠の処女の姿だけである。そのアリアドネの遍歴も漸く終りに近附いた。

太陽の再生を仰いで堯の民は勤労意欲を燃え立たせた。大臣鯨の設計とアリアドネの測量で堤防は大規模に築かれて行った。クレテ人の大部分がこれに協力した。地中海人種は東夷族たる堯の民と多くの類似点を持つ。頭髮も皮膚の色も近かった。言語が少し宛解るようになると共に親近感も増して来た。アリアドネ一人だけが群星中の太陽の如くに際立っていた。

古い年代記を読むと、堯帝は暦の制定者だった事が解る。併し筆者は暦の改正者だと思ふ。世界災変に依り地球の自転と公転が狂い南北軸も傾斜して、再び星の観測が出来なくなるになった時には一年も一日もその長さが変化し、東西の方位も移動していた。ヴェリコフスキーは南北が逆転したと言っている。要するに従来の暦は価値を失った。堯帝は「義及び和に命じ、陰気の住家・朦朧の谷」に於いて黄道十二宮・白道二十八宿・朔望点、四方位等を観測せしめた。

「欽若昊天。曆象日月星辰。敬授人時」

観測の基線は長い方がよい。天文学者は黄河上流高原から遼東迄、朔北の砂漠からインドネシア迄派遣された。アリアドネは東端の観測基地を分担し、クレテの技術を傾注して成果を収めた。

紀元前一四八七年春。此の観測旅行に従っていたエウクシノミアは、東方の大半島で造船に適した杉材を発見し、アリアドネに命ぜられてクレテ風の大船を建造した。十三才になったエウクサンティオスが総帥に擁せられ東南の海を探検する先発隊は出航した。

四年が経過し、アリアドネは観測を終えて泰山の麓に帰って来た。治水工事や都城建設

は相当進捗しているものと思っていた。併し期待は外れた。堯の民は貧窮した俚であり、城市は未完成、山麓に築かれた多くの新墓の前で多人数が哀哭していた。何か大事故の発生を思わせる雰囲気だった。

「堤防は地震に遭って欠壊してしまいました。数千の民が溺れ、鯨大臣は責任を負って世を早められました」

新任大臣の舜が説明した。アリアドネは驚愕の余り血を吐いて卒倒した。四年間の辺地生活で進行した病勢は既に肺の深部を犯していたらしい。

丁度此の時、東方探検を終えたエウクサンティオスがクレテ遺民と共に帰還した。アリアドネは瘦衰を隠す為、軽甲弓箭の正装姿で出迎えた。

「東方にはクレテに五十倍する大きな島を囲んでエーゲ海諸島よりも多くの島があり、その中央には地中海よりも静かな内海があり、海洋性気候の影響か、塵雲は厚く地を掩い、太陽は未だ現れず、恰も天地が割れる以前のようです。併し重い塵は漸次下に沈み軽い塵は上空に消えて間もなく明空が望めるものと思われまふ。本土に相当する大島には多くの火山があつて間断なく火を吐き、蠅の

△日本版▽

頒価一〇〇〇円(送共)

略号「美5」

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあつて苦悶する女囚八一葉
 木乃々子連続四葉(美木乃々子)海老縛りと答打ち。牢内にて
 折檻を受ける女囚(美木乃々子)非人に縛り上げ
 連続四葉(美木乃々子)十二葉(美木乃々子)
 られる哀れな女囚八連続十二葉(美木乃々子)
 子〇海老責めに放置され全身蒼白となつた
 女囚八二葉(美木乃々子)〇非人に不浄縄
 を掛けられいたぶられる女囚八二葉(美木
 乃々子)〇荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
 える女囚八連続八葉(美木乃々子)〇算盤
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
 女囚八四葉(美木乃々子)〇荒縄で乳房も
 くびれるまで縛られた女囚八三葉(美木乃
 々子)〇土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八
 四葉(美木乃々子)〇算盤責めと石抱きの
 拷問八四葉(美木乃々子)〇囚衣を剥がさ
 れ竹のささらで打たれる女囚八四葉(美木
 乃々子)〇刺青を晒して木馬責にあう女囚八
 三葉(山原清子)〇海老縛りでムチ打ちに
 喘ぐ女囚八四葉(山原清子)〇海老責に苦
 悶する女囚八四葉(山原清子)〇竹の棒に
 て折檻される女囚八三葉(山原清子)〇全
 裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八六
 葉(山原清子)〇碟台に括られた人墨姐御
 吊りにされた女囚八一葉(山原清子)〇足首を上にして逆さ
 以上合計七十四葉

「よく調べて下さいました。其方は更に多くの船を建造し、これを浮橋としてクレテ遺民の半数を連れ、その島に先発して下さい。先ず離島を、次に岬角や海浜を占め、決して奥地進入を焦らないよう。原住民と争ってはなりません。大切なのは人数を殖やす事。嘗てのクレテ王国がそうだったように通婚を避けてはいけません。これは数代を要するでしょう。其方には葡萄樹の種子を譲ります。半島の杉苗と共に適地を見つけて植えて下さい。わたしも此の国の干拓工事が終わったら残りの民と共に三神の宝器を擁して出発します。わたしは三神の祭祠として生涯を独身で通す心算ですから其方に男の子が出来たら養子に譲って下さい。だがエウクシノミアはどうしましたか」

「残念な事に母上は東の島で昨年亡くなりました。地中海風に巨石を以て塚を築き、厚

く葬って参りました」

エウクシノミアは三十才だった。

以上の会話が如何なる文献から引用されたものかは説明する必要もあるまい。

東方の島にある古代遺跡からは葡萄の種子が発掘される。その中には現代種に劣らない優秀品種がある。神話中で男神が女神の追跡を免れる目的で投げた^{えびかつら}蒲陶は山葡萄の類ではなかったらしい。又、千引石^{ちびき}に相当する巨石構築物は西部各地に残っている。

エウクサンテイオスを送り出した後でアリアドネは床に臥した。クレテ医学の知識を持つ彼女は自分の病状が回復不能のものである事を既に自覚していた。

堯帝がアリアドネの病氣を見舞いに來た。

「私は帝位を譲る決心をした。治水工事は他の有能な者に代って貰わねば完成しない」

アリアドネは堯帝を押し止めた。既に或る重大な決心を固めていた。

「讓位は思い止まって下さい。陛下以外の方には工事は出来ても人を纏める事が出来ません。舜という方は、立派な人格者のようですが、国を治めるには未だ若過ぎます。あの方がもう少し成長する迄陛下が位を保たなければなりません。手段がもう一つだけ残っています。

ます。此の国には重大な工事に人柱を立てると聞いています。胸を患って最早先の見えてゐる此の身を役立てて下さい」

殷墟の発掘に際して宮殿や王墓の地下からは多くの人骨が出て來た。門や柱の位置に坐った者が多く、人柱と推定された。その中には五百人の一軍隊を整然と埋めた王城もあった。東夷文化に人柱は重大な要素だったと思われる。

「死んだ後迄役立つ事が出来て満足です。但し一つだけの心残りは、生涯をかけて捜し求めた愛の神が遂に見つからなかった事です」アリアドネは身体を清め、白無垢の絹衣裳に着替えていた。堯帝が自ら手伝った。

「予言は正しかった。愛の神は発見されたのだ。殺し身^レ仁^レ。私達の思想では高貴な精神が肉体を離れると神になる。君が捜し求めていた愛の神は君自身だったのだ。太陽を世に呼び戻した君は今後数千年の間、愛の神、太陽の化身として尊崇されるだろう」

アリアドネは名誉欲など持っていなかったが純真に領き、満足の微笑を浮べた。

舜は死んだ鯨の子の禹を技師に登用していた。禹は工法を改め、堤防を高くする代りに排水路を開いて奥地の水を黄河に落す方法を

採用した。これは成功の見込があった。

「此の国土を災害から守りましょう。此の民が他処に移住してもわたしを祭って下さる限りは愛の手を差し伸べます。身体が浮き上らないように固く縛って下さい」

人柱の穴は水路の中央に掘ってある。アリアドネは自ら指図して井桁の枠に自身を縛らせた。

禹が青銅の斧を振って支梁の綱を断った。掘り抜かれた土壁を支えている柱が外れ、水圧が堤を押し崩した。山谷に満ちていた水は排水路に向って流れ込んだ。

「すべての上に愛を。永遠に」

激流の響から微かな声が聞き分けられた。

堯、舜以下数万の民が感謝と祈願を捧げる眼前で広大な湿地は急速に減水し、次第に干上って沃野に変わる相を呈し始めた。アリアドネの姿は既に見えない。渦を巻いて流れる水流の底へ永久に消え去った。

これを以て、三十一年の生涯を普遍の人類愛で貫いた永遠の処女の物語を終る。

時に紀元前一四八三年夏。

希臘神話に於いてアリアドネの形見とされている^{ヒタリオテレー}（北）^{コ罗纳・ボレアリス}冠星座が北天に高く輝く季節だった。

（終）

「ガラスのある部屋」

水玉によるS幻想詩2章

夜乃探郎

ちまたにあめのふるごとく、がらすのおもてになみだふる。そは、やはだをもつ、おとめが、かお、はてらせ、はるかしさにみをふるわせ、いとかなしき、けっしょうを、たいないより、ながすなり。そはあやしきなみだ。

—探郎たわむれに唄う—

な部下でもあった。

○ 剛矢四郎は、N物産商事会社・社長という肩書を、夜になるとぬぎすてガラスの部屋のある別宅に入る。もはや彼は温厚篤実な一流実業家ではなく、耽美な快楽を得るためには悪魔に魂までも売りかねないハイド氏に変貌していた。——鬱蒼たる庭と高い石垣にかこまれた淋しい一角。羞恥狂乱図をひめているとは関係者の他、だれ知る者も無い。

△1▽

総ガラス張りの天井。その部屋で剛矢四郎はソファに深々と身をしずめ上を見ていた。厚い一枚ガラスはパイプによって特殊な支えがされてあり、優に二、三人がのってもびく

ともしない仕掛がどこされていた。下の部屋からは天井ともなり二階の部屋にあっては床ともなる仕組をするために、かれは多額な費用をかけた。△二階の部屋の戸があく。▽ 剛矢四郎は身体をのり山した。鎖の端を男に握られて首輪をされたヴィナスが、よろめきながら入ってきた。そのありさまをガラス越しに眺める彼の表情はまるでドラマを演出する舞台監督のそれを思わせた。

「ああ」

女の不安と危惧に打震える声が、かくしまイクをとおして、剛矢四郎の部屋にある拡声器より、はつきり捕えることができた。

「下から見られる旦那のためだ。さあ、精一杯の名演技を頼みますぜ」

これは役者くずれでもある三太の声だ。

△すべり出しは上々だ▽ 剛矢四郎は、快心の笑みを口元にただよわした。

「おい、もっと股をひろげるんだ。花園が旦那によく見えるようにな」

彼の言葉が続く。

ガラス一枚にふさがれているが、芳香が生々しく意識される。

やがて、三太は女をころがし、その足元に顔を近づけた。

女は面をのけぞらせ「ううッ」と息をもらし、両足をつっぱねた。

○ 剛矢四郎は、責めにガラスを応用した部屋を設け、日夜、羞恥責めの構想にふけつていた。社会的な地位と、秘められた異常な才能とがこれを可能ならしめた。この部屋で次々と凌辱される数人の美女達は、金で契約された哀れな女奴隷に過ぎず、使用人たちは忠実

（二階の部屋の内部では）栗の花の匂いが、一杯に立ちこめていた。

女は、からだを汗で濡らした。三太はようやく身を起すと、

「これからが本番だ。さっき言い付けたあれをはじめんだ」といった。女は白い胸をおろんとさせて

「もう堪忍してッ」とわめいた。

「何もかも承知で来た筈だぜ」

三太は鎖を強くひっぱった。首輪の下の白いのどぶえが圧迫されてへぐ、ぐうっVという音がし、女の中から透明のなみだが、みるまにあふれた。

弟の学費をみつぐという事情、それを望まれば否とは云いがたい弱みもあった。だがいくら考えても現実にこのいやらしい男と、それがいやなら言葉に出すのも恥かしいことを強要される。——女は美しい顔をゆがめ肌を朱にそめもだえた。長い漆黒の髪が乱れもつれて、男の欲望を一層かき立てた。

「どうした。旦那だって白・黒を見る興味が無いわけじゃない。きっと許可するぜ。それとも——」

「ほ、ほかのことなら、どのような、おいしいつけでも……。でも、これだけは、どうか、おゆるし下さいませ」

むせび泣きながら女は嘆願した。

「まったく虫がよすぎるあまだ」

三太は八畜生めVと、大きく波うつていふくよかな乳房を、足の裏でぎゅうとふみつけた。

（下の部屋で）剛矢四郎は愛用のスコッチをかたむけながら美女と野獣のあやなすむごい光景を鑑賞していた。このような時、かれの胸中には見渡す限りの雪山をどろだらけの足を持つ巨人が傍若無人にあれば汚す異常な幻覚が、はてしもなくひろがってくる。

美しい花はズタズタにふみにじられ、畜生の世界にひきずりおろすことで快楽の別の華が魔影をのぞかせることになるのだ。

ガラスの彼方^{かなた}で妖しく動く白いはだかとブリーフひとつの黒ずんだ身体のもつれは、そのまま剛矢四郎が創造した八悪Vの舞台でもあった。そして、かれの真上で「人間水族館」を展開させるのだ。

「あぁッ！」

絶叫をあげると、女は眼をつりあげのけぞった。三太が、うす赤くどがった乳首を思い切りひねったのだ。

「いーたーしーまーす。あぁ、もうー」

女は弱々しく身体を起し、ガラスの床にしがみこもうとした。

剛矢四郎は、机の上にあがり、少しでもガラスに近づこうとした。部屋は天井を低く作

ってあるので、女の胸をくねりつつかがむありさまが、つい彼の鼻先に見えた。

女は意識の混濁したはてに、剛矢四郎の血走った顔がじわじわと足下のガラスをとおして広がってくるのを、ぼんやりと不思議な生物でもながめるようにみつめていたが、一瞬正気付くと、さあっと顔に血がのぼった。

「いつまで、ぐずぐずしているノ」

三太の叱咤が、その背にとんだ。

「旦那様が、あぁ、こんなに近く。……………」

……………とても」

女はブルブルふるえて息をはずませた。

三太の手がまた、残りの乳首に迫った。

……やがて、女は強く目をつぶり、腰に力を入れた。「フーッ」という声が、のどからもれた。シュル、シュルという音が、甘酸っぱい湯気の匂いをともなうて——。

△2▽

二階の部屋の戸があく。剛矢四郎は次に出演する一組を期待のこもった眼で見上げた。

かれは、よほどの事でないと直接に女奴隷に手をくださなかった。剛矢四郎の頭で想像された物がそれにふさわしい舞台によって浮彫^{うきぼり}されることで満足していた。いわば彼はサデリストであると共に異常を唱う詩人であり秘苑を夢みる演出家でもあったのだ。特に美少女が羞恥を全身にくねらせて、遂に失禁^{しっしん}。

またはいやいやしながらも、やがては観念し、壮麗な激流の詩をかなでる光景は、たまらなく心情を妖しくかきむしった。

重たげな島田のかつら、華やかな衣裳をまとった青木君子が濃いドーラン化粧をほどこされた顔を伏せて現われた。眼が長い睫毛のかげで充血していた。M家政学院の生徒であり十八才。

倒産した家のために意を決して剛矢四郎と契約した。それだけ、その蒼白な美貌には深い覚悟はにじんでいたが、かよいカラダ全体は緊張に、こまかくふるえていた。

「お嬢さん。もう、こうなったら、少しでも旦那さまのお眼を楽しませて、よろこんで頂くより方法はありませんよ」

田川有次は、昂奮のあまり油切った顔を赤くさせて言った。田川は君子の家に居た下男であつたのを、解雇されると共に剛矢四郎の手によってひろわれたのだ。かれは、思いもよらず高嶺の花でもあつたかつての令嬢を責める役が廻ってきたことに有頂天になっていた。

「おだまり」

君子はキッと彼に目をむけると叱った。

「もうお嬢さんも、こうなったら単なるドレイさ」

田川は美少女のからだだからただよう脂粉の

香に鼻腔をふくらました。

「パン」という音がした。気丈な君子が男の頬を打ったのだ。怒りに上気する少女の顔は凄絶な美しさに輝いていた。

「この部屋は一度入ったら、旦那さまがスイッチをおさない限り開かない仕掛になっている。時間がかかるだけ、オレも楽しみが長いというものだ」

田川は、叩かれたことがむしろ責めのふんざりになったと、唇にみだらな影を宿した。「どうして手錠も首輪も付けず、この部屋に引っぱってきたか。それ落花狼藉」

かれは言葉を終るが早い、君子の背後から飛びかかり、羽交締めにした。とつぜん田川の豹変に「ヒイツ」と彼女は悲鳴をあげた。――裾が割れ、緋の襦袢がめくれ湯文字が、まるで炎のように燃えるのを剛矢四郎の眼は吸われるように追った。△序曲は雲助と小町娘という所か▽かれはつぶやく。そして二人の働きが、演出通りに追ばれてゆく事に満足した笑みを浮べた。△それにしても、もう速進剤は、女の体内に充分に廻りきったことろだ▽

○

――どの男の手にも触れさせたことのないムネのふくらみが、田川のでのひらの下で忙しい呼吸をあらわにさせている。かれは、そ

の弾力をしびれるような思いで楽しむ。

「あどけない顔をしてるくせに、もうオッパイ一人前だね」

田川はぎゅうと、その隆起をにぎりしめ、乱暴に左右にふった。

「あっ」

かれはまゆをしかめて後にのけぞり、しりもちをついた。手には血がにじんでいた。君子にかみつかれ、肱てっぽうをくったのだ。「畜生、こうなったからには手加減はしないぞ」

田川は狂ったように、さげんだ――。

剛矢四郎の構想は「美少女空中散水」にあつた。それは株式総会の帰途、車の中からまばゆいばかりの銀の空をながめている内に幻想された白日夢だった。

△空中遙ルカニ張ラレタ「ブランコ」ニ華美ナ日本髪、着物姿ノ美少女が大ノ字ニ縛ラレソレが風ニユラレテ動クゴトニ髪を包ム紅ノテガラガホロゲテ、シットリト汗バミホンノリト色ズイタウナジノアタリニタレカカリ、肌ガハダケテ緋鹿ノ子ノ長襦袢ガ艶メカシク見エル。ヤガテ、白ク光ル象牙ノニ柱ノ彼方ニケムル秘泉ヨリ霧雨ガ降ル▽それはあまりにも耽美的な風情だった。

△フイクション▽

「西^{にし}陣^{じん}の妖^{よう}精^{せい}」

保藤 久人

△其の一▽

堀川通りを北上して今出川通りを西へ。駅前から車で走る道すがらは、特有の街並みも少なく、整備された広い道路に終始して有名なチンチン電車もなくなり、寺門以外に古都の面影をとどめていない。

だが、もし歩いて、人に道を問うたなら、物静かななまり言葉で「上る・下る」を連発されて、それでなくとも方向音痴の自分などたちまちまごつきウロウロするだろうと、素子はふーっと、頬笑みたくなってくる。

そして、結婚以来の百日余り、真から心の安まる日もなく、自己の存在理由にさえ空し

さを覚えるような婚家を離れて久しぶりに、もっとも深く知り合った友と一緒に居るといふことが、これほど、感情をなごめ得るのかと、自分の、この日頃の心根が、涙ぐみたいばかりに、いじらしくなってくるのだった。「ここよ。ほら、そこがお店なの」

すぐ前方を指差しながら、先に降りる甲田ふみ子の身体が前かがみになり、その拍子に小粋な模様を散らした茄子紺地の御召に包まれた腰のあたりが、まん丸くふくれて後に残り、ゆっくりと外へ出て行った。

素子は、思わず目を細めていた。まばゆいのだ。

素子の知っているふみ子の全軀は、ことごとくが柔軟だが弾力に富んでいた。しかし、

いま見たそのあたりの量感は、かつて知ったものに比較出来ぬほど著しい成熟を示し、なまめかしいばかりに肉感的で、女にのみ見られる淫らさが惨んでいるように思えた。

それは、素子にとって、驚きであると同時に、ギョッと、身体の内芯に響きつつ、ただちに、過去へ連がって行く要素を秘めている。「早く、降りなさいな」

ふみ子のうながす声に、瞬時の追憶よりさめた素子は、狼狽し、後姿からの妄想を恥じて頬を熱くし、その自意識で、さらに耳朶まで血色を走らせていた。

始めて見るふみ子の生家、織物問屋亀甲商店は、連綿と続いているという言葉通りに、広い間口も堂々として、近在する同業者を圧

しているかに見えた。

「こつちよ。そこをちょっと下るの——」

ふみ子は店とは逆に細い道へ素子を誘う。

ウフッ——と、素子は笑った。

「何エ……何がおかしいのん？」

おっとりとしたふみ子の表情が、急に引き締まり、綺麗な目元が厳しくなった。

素子の大好きな、ふみ子の顔である。

「だってエ——。また上る・下るが始まったのだもの——」

「いやな人！ 京都へきて、そんなこと氣にしたら、暮らせへんがな——」

車を降りてから、ふみ子の声に京なまりが多くなった。素子には、それも嬉しい。

やわやわとしてふくらみのある声音は、その主が、ふみ子であることを立証している。

少し行くと路地、暗く奥深い道があった。

が、そこを過ぎると、吃驚りするほど古風で立派な建物が、重々しく、威風を四散させて、しっかりと大地に根を下していた。

「まあ——。こんなところ？」

素子は目を丸くして、ふみ子を顧みた。

「ホホホ。まるで、街の中にできた離れ島みたいやろ。表はあの通りスマートやけど、裏に廻れば、時代もんで古色蒼然！」

「本当だわ。黒光りしている！」

素子は珍らしそうにキョロキョロした。

平屋建だがずい分広い。

座敷うちには冷氣がよどんでいた。

「少し、陰気な感じね」

「少しやあらへん。雨が続きとじめじめして身体の中までカビが生えそうやわ」

「でも、この、どっしりとした感じ、凄く素敵だわ。ほら、この床の間なんか——」

白いスカートを氣にしつつ行儀良く坐り、

「むかしの豪商の奥座敷。わたしは、虫のつかない、大事な大事な箱入り娘——」

と、素子は、コロコロと可愛いく笑う。

「そんなとこで落ちついたらあきまへん。こは母屋。うちの部屋はまだ奥のほうエ」

「あらッ。まだ、奥があるの？」

縁に出ると中庭があり廊下が続いていた。

「この廊下を境いにして、向う側がうちらのお城や。もとはお祖父さんの隠居所なの」

その離れの八畳間の障子際に、ふみ子は、

しっとりと坐った。

顔は、能面に化したように無表情だった。

素子は気味悪そうにしばらく眺めていた。

その凝視を軽く受けて、やがてふみ子は柔かく頬をくずし、ゆっくりと障子を開けた。

「まあ……キレイ！」

広い庭に視線を釘付けて、素子は感嘆の奇声をあげていた。一面に、五月の陽光を浴びて、牡丹が王者の花びらを開いている。

「すごいじゃない。ここ、フーコのお部屋なんですよ。素敵だわ。豪勢だわ——」

「モッコは、ほんとに、そう思う——？」

潤いのある声——素子はふと、ふみ子の表情にかすめる翳を感じたが、昼間なのに点してある蛍光灯の加減かと見た。

「思うわ。こへ泊めてくれる？」

いいながら、素子もまた淋しい顔をした。

今朝がたままでの憂色——帰って行かねばならぬ婚家、夫の三好を思い出していたのだ。

「モッコに提供します。そやけど、一晚寝たらうなされて、もういやや言うのと違う？」

「エエッ！ 何か……あるの？」

意味ありそうなふみ子の言葉に、素子は急に、おかしな気分になってくる。何かあるとしても決して不思議でないような、そのような佇まいの建物なのだ。

「ホホホ。嘘よ。少しおどしてみたの」

ふみ子は戯けて明るく笑ったが

「お昼の仕度をさせます。しばらくお庭を見て——。そのあとで、モッコの話をゆっくり聞かんらんし——」

と言いつつキラッと光る眼で素子を見た。全姿から、ゆらゆらッと、妖気が発するのかと素子は感じた。ゾクッと身体が慄える。

しなだれ掛って行きたくなる——かつての彼女との秘めやかな接触の経歴を、十分に五官のうちによみがえらせることのできる——そのような風情が、ふみ子の四囲にみちみちているのを知り身体の芯が熱くなるのだ。

ふみ子が去ると素子は縁側に出て坐った。

花の王は絢爛と咲き誇り、見るからに豪華で美々しく、薫りとともに一帯を制圧していた。だが、すでに盛りを過ぎたものもある。

その一つが、彼女の見守る中で、風もないのにハラハラと、崩れるように、大きな花びらを散らせていった。

素子は、凝縮した瞳を、今、黒い土の上に落ちたばかりの花びらに据えつけていた。

まるで、自分の明日を占っているようで、急に、言い知れぬ佗しさがつのってくる。

「どうしたん？ 悲しそうな顔をして——」

足音もなく戻って来たふみ子は、涙を滲じませている素子の肩に、そっと手を置いた。

「朝から見ると、するすると、花卉が動いて咲くのが分る。そんなんは、以前のモッコみたいに生き生きとして大好きやった」

ウィッと、低くむせんで、素子はふみ子の豊かな胸に頬を預けていた。そして、重なってくる唇を、貪るように受け止めていた。

△其の二△

私立大学の講師をしているという、ふみ子の夫、敏行を混じえて、夕食後遅くまで、憂いを忘れて面目おかしく語り合った末、素子は、奥座敷の縁近くにのべた絹夜具の上に、ひとりひっそりと横たわっていた。

目を閉じたが、疲れているはずなのに、睡れそうもなかった。

昼間の、ふみ子との戯むれに似た一と刻が、かつての追憶を倍加する勢いで、四肢の隅々までよみがえり、燃焼のない青白い淫火が、身体の芯を疼かせるのである。

あたりは静か。いや、静かとは言えない。夜気の中に、たった一つの画一的な騒音がかなり姦しく鳴り轟いているのだ。

——機織（はたおり）の音である。

ただ、昼間の、生きた人間が去来して作り出す騒々しさとは違っていた。

カタッ、カタン。カタッ、カタン。

単調なその音は、四囲どこからともなく、地面を伝たい、空気を震わせて、まるで、何事かを訴えるかのように、この、古くいかめしい建物目指して迫ってくるのかと思う。

意識すると、変化なく持続する、その響きは、人の心から、怯えに似た戦慄を誘い出す要素があるように思えた。それでなくとも人の気配のなくなった時刻、奥深い座敷でのひとり寝は、寒々として、言い知れぬ不気味さを覚えるのだ。

素子は暗い中で瞳を大きく見開いていた。機（はた）だけが生きていると思った。

機織だけが目覚めて、正確な音を刻みながら、豪華絢爛な絵巻物にも似た、華麗な西陣織を織り続けているのだろう。

それは、このあたりが、工業地帯とはいいながら、煙突一本あるわけでなく……伝統の地、西陣の本当の姿であることを、語りつつ教えているようにも思えるのだ。

昼間、ふみ子は、彼女の素肌をまさぐりながら、そのことに触れた。

「このへんは、西陣機織の中心やから、一日

中、糸織る音でやかましいエ。モッコ、寝られるかしらん。うちのお祖父さんなんか、機（はた）の音が子守唄で、あの響きがないとねられへん、言うてたけど——」

その通りだろうと素子は思う。

機音（はたおと）の絶えた西陣は、このあたりに住む人びとにとっては、悲哀を意味する。この騒音を忘れては、明日からの生活にも困ることだろう。

「うちはずい分古いらしいのエ。途中、何回か代がわりしたらしいけど、その元を辿って行くと、この西陣の生え抜き——ついでに、

西陣の歴史も教えてあげよか——？」

そのような、堅苦しい話題が登場するふん囲気ではなかった。

遅い昼食を済ませたあと、庭に面した障子を明け放ったふたりは、華やかな彩どりで、大きな花が浮き出しになっている絹夜具に横たわり、互の白い足を絡めあっていた。咲き薫る牡丹が見えた。

まるで、人の世から隔絶した別天地——のような中で、素子は登仙となり、瞬時寸時に宙天を遊飛しながらも、確かに、ふみ子の声を聞いていた。

「モッコも知っているやろ……応仁の乱（註

一四六七〇応仁元年）。あの時、西軍の大將やった山名宗全という人が、この辺一帯に陣どらはったんやて——。それで、西陣というようになったそうや。長い戦火で、何も無くなってしもた焼跡に、もつとむかしの、平安時代からの伝統をひく織物司が、住みつかはったということや。七十年ほど経った頃には織り屋はんも三十軒もできてたちゅうことやが、うちは、代がわりしながらも、その頃から続いているらしいのエ」

何故、急に、ふみ子がこんな話を持ち出したのか、素子には見当もつかない。

織物問屋の娘とはいえ、彼女が、古い歴史に精通しているのが奇妙に思えた。仲が良くなってからの彼女は、生家のことを話題にするのを極端に嫌がったものである。

「その頃、印度や中国の新しい技術もどんどん入って来て、織り物もだんだん栄えて有名になり、織り屋はんも急に増え、僅か三十年ほどの間に、たちまち十倍になってしもた」

素子にとっては新知識であった。

歴史がそのまま、この建物の、くすんだ太い梁や黒光りした柱に伝わっているようで興味があったが、彼女の意志に反して、からだは、何も聞きたくないと拒否するように、激

しいくねりを続けていた。

「今ではもう、もの凄いな数や。機音の聞える地域もむやみに拡がってしもて、どの辺までが西陣の町や分らんぐらい。そやけど、西陣機業というのは、元来が手内職のような家庭的な零細企業やろ。有為転変……四百年もの間には、きつといろいろなことがあったやろと思うわ。うちなんかも、何度も何度もひっくりかえってしもたらしい。けど、そのたびに起き上がって、織り子はんから親方はんと言われて——今のようなお店になるまでは、きつと、弱い者いじめの搾取の上に、どっかりと胡坐（あぐら）をかいてたのやと思うのエ。ほら、こんなにして——」

ふみ子は、征服するような勢いで素子の唇を、犯すように激しく奪った。

素子は、声を封じられてうめきつつ、悶えて乱れた。急激に変貌するふみ子の動向に、微かに怯えおののきながらも、彼女のからだは、相手に甘えて弛緩してゆく。

「浮き沈みが激しいので、泣いた織り子はんも多いのエ。その方がたの怨みがつのり積って、今もなお、うちの家はこんな具合に、織機の中に捕えられて、年がら年中、ガタンバタンという機音に責められどおし——」

物の怪が、急に、ふみ子の魂に宿ったのか——と、思いながらも、素子のからだは、非情味のある荒々しさを迎合するかのよう動き、神経は、受感を貪欲に吸収しようと、末端までが、尖鋭な触角となつてうごめく。

最早や、ふみ子の声も表皮を撫でて素通りにて行き、言い尽せぬ甘美が漸増してゆく。そして、恍惚とする心のどこかで、先程ふと垣間見た、ふみ子の佻しげな白い顔は、この古い建物に潜んでいる陰性が、彼女の感情に働らきかけるせいなのだろうかと思つた。

——昼間の感覚は、なまなましい。

素子は、情念を断ちきるように首をふつてまた目を閉じた。すると、機音は一きわ騒々しく、頭の芯まで侵す勢いで響いてくる。

自然に、彼女はまた、ふみ子の声の断片を丹念に探りつつ繋ぎ始める。

と、その言葉のすべては、彼女の内部に燦ぷりとどまる情感につながり、更に過去に通じているのだ。思えば、ふみ子との出会いも五年前の秋、西陣織で始まつている——。

△其の三△

その年の初秋、素子は高校の修学旅行で関西地方を巡っていた。奈良から観光バスを連

ねて京都へ入った。京都では二泊し、翌朝再び、バスで大阪へ向う予定だった。

京都遊覧のその日、東山の名所を、小刻みに忙がしく通ったバスは、やがて、神宮道の大鳥居をくぐり抜けて平安神宮に到った。

素子が、恒例の八秋の染織見本市Vが開かれていたのを知ったのは、その途中である。バスガイドが、左方を指差しながら、そのことを告げた。

女性には、本能的ともいう衣服への強い愛着心がある。とくに和装……華麗優美な京呉服と西陣織には、郷愁に似た憧れを覚える。

素子もまた、そのひとりであった。

京都の見本市といえば、その代表のようなものだ。素子の幼ない知識も熟知していて彼女は、たまらなく、一度覗いて見たいものだ——と思つた。

翌日の午後、僅かな自由時間を利用して、

彼女は、三人の友を誘つて、岡崎の勧業館へ走つた。

△絢爛！ 伝統に映える豪華な祭典V△世界

に誇る染織芸術！V などという、歌い文句そのままに、室町市場の△織協Vを母体とした、在洛諸団体所属商社の発表展示品は、会場一杯に咲き誇り、集中された衣裳の粋は、

たちまち、素子たち若い女性の心を奪った。京染呉服・西陣織物・服地・関東織物・白生地・其の他小物まで——。

素子は、自分などには無縁に近い豪華華美な和装の品々を、ただ呆然と眺めていた。いくら見ても見飽きぬほどの興味があつた。

元禄前後に（註元禄元年一六八八）友禅染を発明したという、宮崎友禅斎の胸像を、前日、知恩院内で見してきたことも刺激になつたのであろうか。知らぬ間に、友とも離れひとりになって、目眩めくばかりの織帯の前に佇立していた。

袋帯——金糸銀糸を主体に、多彩な経緯（たてぬき）を配して、瑞雲に静海波・五葉の松に翔鶴。その一つ一つを取り上げれば何の変り映えもないありきたりの模様なのに名のある図案家の作を、巧緻な織手が織り成したのであろうか。

思わず目を見張るほど、色彩感覚も充実し構図にも均整の妙が保たれているのだ。

素子は、麗々しい中にも、尊厳と優雅を兼ね備えたその帯を心の底から欲しく思つた。「どうしやはりましたん？ あれ、キレイですよ。そのかわり、値段も高いけど——」不意の言葉と、明く冴えた笑い声に、ギク

ッとして振り向いた素子は、そこにも花が咲いたかと、ハッと息を吞んで立竦んでいた。

白地に大胆な線画を配した、モダンな薄御召を着た若い女性が匂やかに微笑んでいる。

素子は、真赤になり、無意識のうちに、渗じみ出る汗をゴシゴシとこすっていた。

お互に、気安さを感じたのか、素子は、それからしばらく、未知の女性の説明付きの案内で場内を歩きながら、一体、この人はどういう人なのだろうか——と、しきりに考えていたものである。

素子が甲田ふみ子という名を知ったのは、旅行から帰って十日ばかり経ってからである。あの帯の出品商社、亀甲商店の娘で、自分より一つ年上だという。ふたり並んで写した写真が、手紙に添えて送られて来たのだ。交信が始まった。そして翌年、ふみ子は東京の大学に進学して単身上京して来た。

何故ふみ子が、数多い地元の学校を嫌って遠くを選んだのか、その理由は分らなかったが、やがて、素子も短大に進み、半年も経った頃には、もう、そんなことはどうでもいいような状態に、ふたりの仲は進行していた。「モッコ。叔母さんの家で気兼ねして暮してより、はよ（早く）うちのアパートへ来た

らええのに——。まだまだ、その気になれへんの？　うち、淋してかなんのに——」

ふみ子の学生生活は、呆れるほど気配なものであった。2DKのアパートも贅沢である。

学校へは、割合真面目に通っていたが、その他は、素子から見ると、まるで、女王のような豪勢な生活なのだ。

そして素子を片時も手離したくない様子を言葉に出し、しきりに彼女を誘うのである。

素子は、中学半ばから郷里を出て叔母の家に寄宿し高校に進学した。

地方都市の子女に有り勝ちな一般的な風潮……都会憧憬の気持もあったが、一つには、新しい兄嫁に馴染めなかったためでもある。

叔母の家での生活は決して楽でなく、短大は、ほとんどアルバイトで、その費用をまかっていた。

貧しく育った素子には、京都の織物問屋のお嬢さまである、美しいふみ子のことごとくが物珍らしく、憧れの対象だった。

産れながらの立場の相違の不合理さから、ふみ子を羨やむ気持も確かにあったが、心安く接しているうちに、丸ろやかで鷹揚な人柄に、次方に魅かれてゆき、やがて、ふみ子のすべてが尊貴敬愛の対象となり、それを意識

すると、妙に心が慄えおののくことも知っていた。

素子の容姿に渗じんでいる清々しい感じが相手に誘う気持を抱かせるのか、中学の終り頃より、異性と同じぐらいに同性の熱心なファンもあり、高校に入ってから、女子学校であったせいもあり、その傾向は、一段と強くなっていたようである。

だが、異性を意識しない訳ではなく、同性との秘めごとが、遂には儚ない性の享楽にすぎず、倒錯的なものであると承知していた。

しかし彼女を取り巻く四囲は、ともすればその変異な方向へ魅き入れようとする。

ふみ子を知るようになってからの素子は、同じことなら、あの令嬢に——と、ひそかに心で思い始めていたのだ。

何時何処で、どうして覚えたのか、ふみ子は、すでに、同性を愛おしむ術を熟知していた。素子とて、その心の動きが分らぬでもない。

「モッコ。うちに遠慮してるのと違うのん？　うちへの気兼ねならやめてや。うちはモッコが好き。それだけやわ。モッコの自由を束縛する気はあらへんし、モッコが来たかて、うちの支出に変わりあらへんのエ。とに角、ここ

にいる間、うちは自由や。気尽に暮そ」

こう言つて、ふみ子の誘致に積極的になりだした頃は、ふたりの間に、微妙な感情が交錯するようになっていた。

だが、お互に異性を嫌つた訳けではなく、相手の自由は尊重した。

「ええ具合な、一番安全な享楽や——」

ふみ子は、よくそう言つて笑つた。

このあたりの、心身の成長途上では、ふたりとも、極く良識的な道を歩んでいたのかも知れない。だが、素子の方が溺れていった。ふみ子への崇敬心が、一入強まってきたのである。

△其の四▽

清楚で品のある容姿と、優しく明るい気性を見込まれて、素子が、短大在学中より続けていた家庭教師の地位から、一転して、妻の座に坐つたのは、早春のことである。

一年前に学校は終えていたし、甲田ふみ子も、同じ頃京都へ帰つていった。

夫の三好は、小さいながら会社を持ち、別に、いくつかの会社の重役として名を連ねている温厚篤実な男で、再婚だった。

先妻は、娘の誕生も待たずに亡くなり、ま

だまだ元気な母がいた。

彼が四十近くまで再婚しなかったのは、娘の由子や自分の世話を、母が見てくれるという重宝さと、独り暮らしの気尽さを楽しんでいたといえぬこともないが、真実は、もっとも自分に適した相手が、見当らなかったためといつてもいいだろう。

お祖母さんばあの由子は、片親の家庭に有り勝ちな偏向気味の性格のままに成長し、中学生になる頃には、自我の強い、変屈な、可愛げのない少女となり、父親の三好でさえ、一体、この娘の真意は、どのあたりにあるのか——と、眉をひそめ、行く末を案じて困惑するほどになっていた。

短大に入つたばかりの素子は、叔父を介しての依頼を断りきれず、この由子の家庭教師になつたのである。

どういふものか、由子はすっかり素子が気に入つたらしく、日を重ねるうちに、甘えて頼る素振りさえ見せ、素子もまた、自然に妹に対するような情愛が湧いてくるのだった。

素子と一緒にいる限り、由子は、至極素直なしおらしい娘になりきっている。

思春期から青春期にかけて、急激な変動を体得しつつ、人間の女としての成長過程を辿

って行く娘心には、全く、測り知れぬ部分がある。あるいは、当時すでに、同居こそしてないが、密接なつながりを持っていた甲田ふみ子に対する素子の、微妙な感情の綾を、感じやすい少女は敏感に察知して、同性を慕う心が、淡い恋情となつて芽生えていたのかも知れない。

それだけに、導びきの至難さを痛感し、素子は、責任の重大さに辟易して辞意を告げたものだが、由子の人間的な成長を喜ぶ三好も祖母も、すっかり素子を信用して聞き入れず、素子もまた、自分を姉のように見てすがつてくる由子の慕情に負けて日を重ねた。

またたく間に一年が過ぎた。

その間に、素子は叔母の家を出て、ふみ子のアパートに転住し、そのことを、正直に三好に報告した。

三好は、何も言わなかった。そればかりでなく、ふみ子連れれてくるように——と、奨めるぐらいだった。

由子は明るい乙女になり、成績がグンと上つた。するともう、三好家では家族ぐるみ、素子を別な目で見えるようになっていた。

短大を卒てからも素子は、三好の關係する会社に勤める傍ら、常に、由子の家庭教師兼

相談係りのような形で、三好の家に出入していた。

三好から、結婚を申し込まれたのは、その頃のことである。

素子は、はっきりと拒絶した。

ふみ子との接触は続いていたが、それが、変異な形態であると自覚しながらも、放棄する意志はさらさらなく、彼女は、三好の求婚に対しての拒否の意のうちに、この事実を匂わしたものである。

三好は笑ったようであった。そして、ひとたびは、素子の意向を認めたかに見えた。

だが、ふみ子が突然に京都へ帰ると言い出したことから、思惑と反して、素子の身边にも急激な変化が生じ、彼女は、ふみ子への断ち切れぬ思いを胸に秘めて、再び叔母の家へ戻らねばならなかった。

三好から、叔母夫婦を通じて正式の縁談が持ち込まれ、今度は素子も、すげなく断ることは不可能だった。

実際に、素子の観察した限りの三好は、自分には勿体ないほどの紳士で、その上、家族ぐるみの好意もひしひしと感じとれるのだ。

それは、女としての、明日以後のしあわせを約束していると言ってもおかしくはなかった。

た。それでもなお、素子には、ふみ子を恋うる気持は強く確在していた。

ふみ子との生活は、実りのない享楽……快樂の虚影にすぎない。が、妖しく匂い立つ官能の燐火は、最早や、素子にとって捨てることのできぬほどに成り果てていたのだ。

何故、こうも深く溺れたのか、彼女には、自己の本意さえよく分らなかった。

ただ常に、ふみ子に相対すると「王者と貧者」を意識することは確かであった。と言っても、その事実を卑下したことはない。何となく、そのような形を、自分の心が望んでいることだけは知っていたし、納得もできた。

現実に、その日頃のふみ子には、素子の心理動向に即応するかのような生態が、自然のうちに、形造られてきていた。

情感が満ちると、ふみ子の白い顔は美しく上気し、和ごやんでいた頬が鋭く引き締まる。

綻ろんでいた口許が、キョツと結ばれると同時に、表情も、際立って凄絶と変貌する。

描かれたような優美な眉が、直線に変化するかと素子は見るのだ。

熾烈な動きが一過したあと、その容姿から推量し得ぬ奇怪な言葉が紅唇から吐き出る。

語句は卑猥であった。

が、ふみ子の口から、京なまりで飛び出してくると、単に、みだりがわしいだけでなく異様になまなましく、ある種の情意をともなう、素子の内芯に尖刀となって突き入り、その作用で、異質の血が燃えてくるのだ。

素子の眼からキレイな涙が溢れでる。

、その果てに、自己の魂の所在に恐れおののきながらも素子は、ふみ子の強い醜行や恥戯にさえ、全霊の盲従でこたえようとする。

素子の涙は、甘い屈伏といえた――。

そのふみ子も去り、翌年……つまり早春の二月、素子は三好と結婚したのだ。

素子が夫の奇矯の性を知ったのは、新婚三日目。まだ、旅行途上の夜のことである。

すでに、心身共に三好の妻であり、前夜は同じ湯の中ですべてを委ねていた。

男の技巧で、未知だったらしい感覚をも、探ぐり得たかと思うほどだった。

それなのに、三日目のその夜――。

クッションは柔かく快適で、寝台を取りまく周囲も清々しく、秘めやかな夜にふさわしいムードが、淡い光茫の中で、なよなよとふたりを包んでいた。

光りが鮮烈なものに急変したのが端緒で、不意に、夫が這い始めたのである。

全軀を異常に紅潮させて舌を垂れ、熊のように、自分の身体の上をぐるぐる廻る夫の奇態に、素子は真実、男が雄獣と化したのかと愕然として瞬時に、全血が凍結するかと怯え全身をなまめくる這う不気味な触感に、神経を慄わせ、四肢を硬直させていた。

そして、引き裂くばかりの強い腕力を脚部に感じたとき、夢中で、何かを叫んでいた。

イヤ、イヤッ、と、小さく口走り全身で拒否し、カッと、恐怖の瞳目（どうもく）を続ける彼女の眼前に、その声を封じようとするかのように、夫のからだ荒々しく迫って来た。

彼女にさえ不可解な、狂風に似た強烈な反逆の魂塊が、突如、奥芯から噴出してきたのはこのときである。

顔を手で覆い、襲撃を防いでいた。

凝縮して一本の棒と化した彼女の身体は寒々として全身的な戦慄がとめどもなく続く。

その時の心機は素子自身、詳らかでない。

「フーコ！ ああ、フーコ……助けて——」

と、祈りともつかぬつぶやきとともに、思い切り、膝を縮めて蹴上げていたのだ。

素子は、男を憎悪し、男の行動を嫌悪しつつ、冷えた床を転（どうく）がて、慟哭（どうく）していた——。

三好の家での、妻としての素子の日々——

夫は優しく、継子（ままこ）は姉かと慕い寄り、義母は感謝を含めた慈愛の瞳を注ぐ。

生活の表面には、何の濁りもなく、和気だけが満ち満ちていた。

だが、夫を容認することのできなくなった妻に残されているのは、人間としての悲哀だけではないだろうか。

かと言って、由子や義母の情味を思うと、到底離婚に踏みきることでもできず、素子はただ、夫の性を憎くみ恐れた。いや、彼女が真実に恐れていたのは、変質したような己れの性だったのかも知れない。

もう自分は、三好には無意味な女なのだという、強い自覚の上でなお、去就を定められぬ現実に、人間的な失意を覚え、焦慮のうちに自己を嫌悪し、そのような苦悩の日が続いて、素子の心身は次第に憔悴（しょうすい）していった。

別れてから、わざと音信を避けていた甲田ふみ子から、不意の便りがあったのは、そんな頃である。

ふみ子には在学中の弟があり、家を継ぐ必要はなく、身辺は自由なのだが、昨秋、気に入った相手がいて婿取りしたという。

是非、遊びに来い——というのだ。素子の慕情は奔流となった。

ふみ子になら、何ごともありのままに話すこともできる。

素子は、思いあまるこの日頃を、訴えるように書き綴った。七日目に返事がきた。

素子に宛てたものとは別に、三好宛の一文もあり、四、五日素子を預りたい——と記してあった。三好は、微笑とともに承諾した。

——朝の新幹線に乗った素子は、午前うちに京都につき、甲田ふみ子と再会したのだ。

△其の五▽

果てもなく、乱れて続こうとする思いに疲れ、うとうとしていた素子は、ふと、自分を呼ぶ声をきいたように思って、目を開いた。

もう深更——機音も絶えて、夜気に包まれた四囲は、静寂そのものであった。

その中から、地霊にも似た低いうめき声が何処からともなく湧き出ているのを知った。

「モッコ。アアモッコ！ う、むむむ……」

ふみ子の声——素子は愕然として、疲れて痛む眼を大きく見開いていた。

「う、モッコ！ モッコ、ううう……」

素子は、飛び上る勢いで起きていた。

家の中の様子は、良く知らなかったが、それでも、我れ知らず隣りの襖（ふすま）を開いていた。

呻きむせぶような声は少し近くなった。
だがその時、素子はふッと、足を止めていた。ふみ子には、夫がいる――。

ふたりの夜の床に近づく無粋はしたくなかった。しばらく彼女は佇立していた。

しかし、ふみ子の声は、しきりに自分を呼んでいるのだ。まるで何かを訴えるように。

声の状態が異常であった。

何か、容易ならぬ事態……急な病か（やまい）と彼女は思った。そう思うと、心が騒いだ。

躊躇（ちゅうちよ）することなく、次の部屋に手探ぐりで入った。と、向うのフスマから、鋭い光線が放射して、長く足許に伸びている。

ふみ子の夫の存在を意識して、自然に足音を殺す動きとなり、何かしら、良からぬ悪癖の所業をするようで、急に高鳴ってくる胸の動悸（どうき）を押えながら静かに光りに向っていた。

細い隙間に目を当てた素子は、そのまま、化石したように棒立ちになった。

が、それも一瞬、たちまち無気力状態になって、くたくたと崩れ、それでもなお目を離すことは出来ず、浅間しい四ツ這の姿勢で、四肢をふるぶると震わせ、全神経を片方の眼に集中させていた。

素子には、到底信じるのできぬ光景が

明光の中で華々しくも展開されているのだ。

六帖間――その中央に、派手な花模様（さいだん）の夜具が敷いてある。まるで、祭壇であった。

柔軟なその祭壇の上に、妖神に捧げるイケニエに似た形でふみ子が曝（さら）されているのだ。

素子を、失神寸前に到るほど驚かせたのはふみ子の奇怪な形態と、戯（あそ）ぶれている敏行の動作であった。

ただ伸びているのではない。四肢の先端には、色鮮やかな紐（ひも）が絡まり、その端は、遠く部屋の四隅、鴨居（かもい）に埋め込んである蚊帳（かや）の釣手金具に及び、引き締めてあるのだ。

頭と胴体は、柔わ柔わとして蒲団に沈み落ち付いていた。けれども、四肢は何れも、付根から、斜上方に突き上っている。

その姿は、この上なく無慙なものなのに、華美な夜具の上の、無防備な白さは、吃驚するほど鮮烈で、素子は、ふみ子の本当の美しさを見たように思ったものである。

だが、素子の心はと惑っていた。ふみ子の有様は、見てはならぬ、想像するだけで胸の痛む質のものなのだ。

それを敏行が――。

見るに耐えず、逃げ出そうとしながらも素子は、一步も動くことができなかった。

瞳は、まん丸くなって敏行を追う。

男は何やら奇妙な小道具を手にしていて。それが、鳥羽根であり、太筆であると知るのに、かなりの時間を要した。

その姿は、亀の子に似ていた。

甲羅（こうら）を下に、ひっくり返えされた亀が、必死の無駄な足掻きを繰り返している……美しただけに、一そう凄まじく、妖氣（はら）を孕んでいるのかと思う。

素子の額に冷たい汗が滲じみ、腋の下をゾーッと不気味な冷気が吹き過ぎてゆく。

素子にとって、ふみ子のすべては変えることのない「王者」でなければならぬ。

そのふみ子が――。

踏み込んで男を制することもできず、素子は、絶え間なく衝き上げてくる苦渋を噛み殺して眉根を寄せ自分の激情に抗（か）らい続ける。

憤激と恐怖と、苦々しい思いの時が過ぎ、やがて、素子はとうとう耐えかねて、居たたまれずに、這いながら後退していた。

かつて旅の宿で、三好が自分に試みたのと同じに敏行が動き、ふみ子からだを揺するだけで、声を出す術を失っていた――。

「モッコ。よう寝られた？」

奇怪な窃視（せつし）による刺激で寝不足となり、神

って端坐していたふみ子の女人像が、暴虐により、微塵と破壊された事実に向直し、クラクラと眩暈を覚えた。

ふみ子への失望は、みずからの絶望に通じる。彼女は、始めて美しい相手を嫌悪した。「わたし、頭痛がするの。どこへも行きたくないわ。しばらく、ひとりにしておいて——」

「何でえ……眠れなかったの？」

ふみ子は、微かに目で笑ったが、

「まあええわ。昨日の今日やから疲れてるやろ。昼間、ゆっくり寝てたらええ。そのかわり、晩には寝かせてやらへんさかい、覚悟しといて——。何で、やて。今夜、うちの人、宿直……泊まり番やもん」

凝然とする素子を置いて、ふみ子は明るい笑いを撒き散らして去って行った——。

△其の六△

「何や、知ってたんかいな。見てたんやな」
ふみ子は目尻にシワを寄せてケラケラ笑った。ゾクツと、素子の魂まで魅き入れる妖艶さがあった。

あの六帖の部屋、同じ夜具の上である。

心で憎悪し激しく忌避しながらも、このところ何カ月か、悩み苦しんだ素子の精神は、

む革のべらべらをとってつけて、これが口の中を塞ぎます。鼻孔に当たるところにはネジ式にして、これをゆるめると呼吸がしやすくしめると呼吸出来なくなり、ネジを外して鼻の穴にいろいろなものを押し込んで鼻責め出来るようになっているのです。

尚腰から下も太腿、胫のところ、それに足首とそれぞれしめ金をつけて、革具をつけてありますが、フォトを発表する都合上これは下半身をカットしました。

妻が妊娠した時、この全身拘束具によって出っぱってくる腹部を強く圧迫すればどうなるだろうと、怖い予感にふるえ乍ら、そのくせ、そんな想像を抱いております。

妻のフォトのうしろの壁面にはあってあるフォトは、先月辻村隆氏の対談にもあったように、妻にゼラシーを起こさすため、ああして、妻の友達や、ボクの会社の同僚の女の子のフォトを大きく引伸してはってあるのです。先月対談で白状してから、少し

自己を嫌悪する以上に、ふみ子を求めてやまなかった。

「何も、おかしいことあらへんやないの、夫婦やもの。好きなことしたらええのと違う」

効果はウスれましたが、又新しいキメテを考え出そうと、今一生懸命考えております。

全身拘束の模様については以上の通りです。これにスレーブマシンをミックスして使用したり、今作製中の鉄製の手枷、更に首枷を使つての、拷問的なフォトも順次発表しますから御期待下さい。

若しこの拘束具を使つて見たいとおっしゃる夫婦プレイの方がありましたら、編集部の方へ御連絡下さい。うまくボクと連絡つきましたら、いつでも無償でお貸しします。

今のボクにとっては、妻のみゆきを対象にして、こうして次々と新しい責具をつくってゆくのが一番の楽しみです。ボクも今では鼻責めより一歩前進したような気がします。

では今月はこれで失礼します。

「だって、あんな……フーコに、幻滅！」

ふたりきりでいると、素子はいじり顔で忘れて寄りかかりたくなってくるのだ。

「うちな、モッコの手紙見たとき、もう、た

まらんほど、モッコがいじらしうなッて」

そういういたわりの言葉に、素子は弱い。

たちまち、グツと熱いものがこみ上げてきて、思わず、胸に頬を埋める。

「そうやけど、モッコはほんまに、真底から三好はんが嫌いやの？そうやあらへんやろ。うちにはよう分ります。あんなことしゃはるので、妙に気になっただけや、違う？」

「——」

「逆に考えて見たらどうエ。それほど、三好はん、モッコを愛してはるのや。だって、そうやろ。ゆうべ見てたんならよう分るやろ。もし、うちが力を入れたら、男は、たちまち一巻の終りやがな——」

ふみ子は、一しきり笑ってふと黙った。

人声が途切れると機音が急に迫ってくる。

「あの音かて、うちの子供の頃からみると、ずい分変わったように思うのえ。やっぱり、年々進歩してるのやな。同じような音やけど。モッコかて、もっと進歩せんとあかへん……」

素子は、休む暇のないふみ子の肢体の巧妙な動きに、次第に神経を蝕まれてゆく。

もう、ふみ子の声も機音も、意識から薄れて行きつつあった。

「この家で育ったうちの身体には、あの糸織

る音が泌み込んでしもうてる。うちが、たとえ短期間でも、あの音を忘れて暮したいとおもた気持……モッコには分るやろう。京都を離れて、モッコと暮してた間が、うちの青春の満開期やった。楽しかったエ」

素子の目に、涙が滲じみ始めていた。その涙は、彼女の感情の推移を表明している。

「ゆうべのこと。モッコはうちがコロッと変身したとおもたやろ。無理もない。でも違うのよ。ほんとはこの家……ほら、あの燻んだ天井に泌みている妖気のせいや。家の古さに比例して、ぎょうさんのおかたの、怨嗟と嫉妬と羨望と……ほんの少しの感謝と。それらみんなが入り混って、チロチロと青白く燃えてるのや。ほら、そこの床柱かて、磨かれて光っているのと違う。魔性の妖光を発散してるのや。家中で、このお部屋が一番以前のもので、妖気が乗って人の性も変わるらしい」

素子の背筋を戦慄が貫き通る。

「妖気が人の魂の中に入り、妖精になって燃え上ってくるのえ。モッコかて——」

皮膚をふるわせ忘我の中で、ふみ子の声の断片をまさぐりながら、素子は、そんな馬鹿な——と、首をふって否定する。

だがもう、そんなことはどうでも良いと、あらぬ言葉を口走って悶えていた。

ふみ子の圧迫が鋭くなっても、手と足とが引き伸ばされても、一向に気にならず、ふみ子の身体には、言葉通りに、機^{はた}の魔性が乗り移ったのだと、微かな意識で思っていた。

素子の魂は、その妖魔に翻弄^{はんろう}され尽したように、フアフアと空間をさ迷っていく——。

「もう宜ろしおす。お入りやすな！」

ふみ子の声は、突発的な異常事態への宣言でもあったのか。

寸前の陶酔から呼び戻された素子は、驚愕して跳ね起きようとし自己の形を確認した。無慈悲な形態は、昨夜のふみ子と同じ。

叫ぼうとした。が、口をふみ子が閉ざした。

ふみ子とは違う別の触覚……もうひとりの姿が、自分を攻めつけるのを意識し、手が、足が、痛い——と素子は思った。

が、その痛覚も始めだけ……やがて彼女は痛みを忘れて跳ね、弓のようになっていた。

男を、夫の三好だと知った。

事の意外性に仰天しながら、驚くことよりも先に、知り得たばかりの新感覚に恍惚として、唇を離したふみ子が、妖しい微笑で見守る中で、自分が奇怪と断定して怯えた夫を、

抵抗もなく受け入れていた。そして、夫に委ねつつ素子は自分の四肢は妖気に絡まれ、魔性に捕えられて引き伸ばされている——と、己が心に教えていた。

△其の七△

ふーッと、よみがえるように目覚めた素子は、自分がまだ、そのままの姿で、放置されているのを知った。

不思議と気にならない。彼女は、己れの心情の微妙な移行をいぶかりながらも、じっとしていた。身体中に快よい^{けだる}気憊さが残り、ただ、涙もなく涙が出てくる。

ふと彼女は、自分の真実の心が求めているのは、このような形態では———と思った。すると、その自意識だけで、心が小波^{さざなみ}だつてくるのを自覚し、急に、今まで知らなかった羞恥感で、身体を火のように熱くした。

何処かで声がした。

ふみ子と三好と、それに、宿直でないはずの敏行の声も——。

「うち、大体は察してました。三好はんは、モッコとうちのことをお知りになってから、余計にモッコが好きにおなりどすやろ。そやから、あの連絡をいただいて、すぐ、手を打

たなあかんと思いました。それに、このうちのひとがえらい乗気どすねん。でも、モッコのこと、よう知らせてくれはりました」

「あなたとは、そういう約束でしたから」

夫の声。自分の知らぬうちに、夫とふみ子の間で何かの約束があったのか。そう言えば深く理由も告げずに去ったふみ子の態度もうなずける。ふみ子の不可解な行動の裏には、夫の依頼があったのかも知れない。

「このひとかて、三好はんとうよう似て、ホホホ。そうやから、うちのお婿さんになってもらいました。あらッ、お礼の——？ さあどこが宜ろしおす？ お好きなところへどうぞ——。ああ、この人ならかまいませんのよゆうべ、特別のサービスをしてあげましたし——。三好はん、このひとね、あなたのようなお友達が欲しかったんどすって、ホホホおかしなひとどすやろ」

夫の声は聞えなかったが、動作は想像出来た。

「三好はん。モッコのこと、一番良く知っているのはうちどす。コツがあります。モッコには、次々と新しいことを教えまひよ。時々ふたりでお越しやすな。うちのひと喜んできます。この家が宜ろしおす。何しろ、妖精の

こもっている部屋ばかりやから。オッホッホモッコには、ええ暗示になりましたなあ。さあ、もう一ぺん、モッコのところへおいきやす。うちはここでこのひとから、ゆうべのお礼をたんとたんと（沢山）いただくの」

人の動く気配に、素子は堅く目を閉じた。何故か羞ずかしく、一生懸命、縮まらぬ身体を縮めていた。その様子は、誰の目にも欲心を抱かす艶やかさと、言い尽せぬ可憐さが同居していた。

「そうやけどあなた、今度のようなのは偶然どすエ。三好はんやモッコやからええけれど他の方とのこんなおつき合いは、承知しまへんから——。分ってますな！」

敏行への言葉を最後に、ふみ子の声も消え素子は、夫の視線を痛いほど意識した。

奇体にも、見られていると思うと心が震えた。自分の心機^{しんき}の激変にあわてながら彼女は、この、「西陣の家」に来てよかったと思う。

素子は、今きいたふみ子の言葉を心の中で嬉しく^{はんすう}反芻^{はんすう}していた。

そして、ふみ子は矢張り自分の王者……いや、この古い家に巣喰^{すく}う妖魔の女王だったのかしら——と、ぼんやりと思った。

ふいに、暎の裏に、大輪の花が、ぐるぐる

廻りながら浮んできた。

牡丹——あの雄大な花こそ、甲田ふみ子の裸像を飾るのにふさわしく思えた。

紐を絡ませた姿態のままで夫に抱かれながら、素子は、明日は朝から、奥庭の縁に坐つて、機音を古代からの絃楽ときき、あの美事

な牡丹が、大きな花びらを開いて行く様を、見尽したい——と、考えていた。

(41・5・8)

「私 も 一 言」

おもだか・しの

西条操さんの『想うこと』あたりから始まった論争のにぎやかな事、これ程多くの方々が真剣に本誌のありかたを考えて居られるとは。私もこの道を歩む者として少々発言を御許しただきたく筆を取りました。

私の専攻は今さら申上げるまでも無く江戸時代の御仕置で、本誌の読者同人の中でも、おそらく最も同好者の少ない官権被虐愛好家の中のさらに小さな特種部落に属して居りますので、時折掲載していただく拙文もはたして何人の方が読んで下さるものやら真に心細いかぎりでございます。

さてこの一年ばかりの間の皆々様の御意見

を拝見して私が第一に感じました事は、この何とか審議会などと云う方面からは変態人種の巢の様に云われ悪書の標本として目のかたきにされて居る本誌の同人の方々が、実際には大変健全でノーマルな人ばかりだと云う事です。

この道について思う通りの意見を発表するのは少々気の引ける時勢とは申し乍ら今少しまともに変態的な方や色気抜きのSM愛好家の発言がうかがえると思つて今まで待つておりましたのに又々七月号にも黒井さんの、これは又何とも健康そのものの様な御意見が冒頭に出ており、まことに四面に楚歌の声を聞

く心地がいたしました。

黒井さんは本物のSMが存在しない世界に住んでおるからこそSMがたのしいといわれますが、これは一体どういう事なのか私には理解出来ません。

私自身を例に引くのは、いささか気が引けますが、私は特高警察の家庭訪問が一家に取つてどういう意味を持つものか、子供心に感じておびえた事もあり、太平洋戦争たけなわの頃、特高課の調室を見学させられた事もあります。

その時調室では大学生位の人が布張りを取り去った枠だけの椅子に裸体を縛付けられ口ソクで陰囊を焼かれており、部屋中に爪をこがす様なにおいが立ちこめておりました。

これを見せ付けられた私の心中のおそれとあてがれ。この心理はどうこじ付けて見ても情事の前戯やプレイのムード等とは異質のものだと思います。

この心情のさらに強烈なものを体験したの

が『直腸検査のことなど』に書いた麻酔無しの手術の時です。

現在、特高警察は昔語りに成りましたが東京都内の交通事故死者数は江戸時代の江戸地域刑死者数とはほぼ同数であり、ガンその他の成人病も日夜私共をおびやかしております。

ことに私の様に特異体質の者は、いつ麻酔の使えぬ外科処置や鎮痛剤の利かない痛みにおそわれるか、まったくわかりません。

この様に私の性向は不可能の次元に立つ空想か画空事では無く体験によって誘導されたものでございます。

又御仕置にあてがれをいただき始めたのも小学二年生頃からの事で当時の大衆雑誌や少年雑誌等には、かなりひんぱんに疎などのさしえが見られた様で、たまたま同級生に見せてもらった少年雑誌に御姫様が疎にされた画が出ていたのを見たのが、そもその始りだった様に思われ、この方も思春期のはるか以前からの愛好者です。

しかし成年にたっしてからはこれらの嗜好とセックスが結び付いて現在にいたっておりますが、私に関するかぎり、あくまでもSMが主であり普段は実現出来ないSMの代用というよりもむしろ、SMの自慰の役をセック

スがつとめて居るといふわけでございます。

したがって最近の本誌の中で、私が主として読んでおりますのは、高野原美さん、黒田寿さん、牧高志さんのもの、『アリアドネ』『心痛む遍歴』等で、有名な『花と蛇』は読んで居りません。

又、六月号の『吊り責め考』は大変面白く拝見いたしました。『心痛む遍歴』は大部分色々な方面から問題になっておる様で、私には文章の事だの文法上の問題などの事は、よくわかりませんけれども内容はけっこうなもの

で、現在の世相から見ても又考証の点からいっても外国の物語りにされたのはよい事だと思います。

むろん私自身の好みからいえば、少なく明治時代の日本の御話か、それ以前の話にしたい所ですが、きめの細い行きとどいた文章は毎回のしみにして読ませていただいで居ります。

又『アリアドネ』は嗜好の問題など超越して面白く、最近の本誌を支えているのはこの二篇では無いかとさえ私は思っております。

◎本誌二〇〇号突破記念◎△原稿募集▽

▽内 容△

- 一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
- 一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
- 一、SMの他、フェティッシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
- 一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を発揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

- 一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は一切御自由です。
- 一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
- 一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
- 一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
- 一、〇以上の内容規定にて、奮って御応募下さらんことをお待ち申し上げます。



「臨月妻」に感激！

——妊婦ヌードモデル出でよ——

瀬沼四郎

七月号「奇クサロン」十五ページの写真を
見て、思わずアッと息をのんだ。ビーチボー
ルのようにまん丸い、すごく大きな腹をして
いる若い妊婦の裸身が、見事に写っているで
はないか。とうとうやったか、と目を見張る
思いだった。近來にないヒット作である。

A・T生氏の「臨月妻の緊縛フォト」とあ
る説明文を読むと、この腹の中には三九〇〇
グラム近い胎児が入っているわけだ。標準が
三キログラムだから、三・九キログラムとい
えば、ほとんど巨大児に近いといえる。三キ
ロ八百匁で普通のところ、優に一貫目を超
える胎児を持っていることになる。分娩直前

であろう。子持ちのヌード妊婦ヌードとし
て、出色の出来ばえなのは、怪しむに足りな
い。

六月号「読者通信」に、島根のY生という
方が、これも奥さんの臨月腹の写真を編集部
あて送られたことが出ている。七月号十七ペ
ージによると、「最近読者の方の中から、
自分の妻の臨月腹を撮影したから、といって
こられる方が少なくない」という。それらの
「印画紙に焼き付けられた写真を見ていると
その膨らんだ臨月腹の素晴らしさには、思わず
感嘆の声を挙げる程である」というのだから
妊婦マニヤたるもの、まさに垂涎の叫びをあ

げたくなるというものである。内部に子を含
んで、ぶっくりと太くなった女の腹を、鮮明
な印画紙の画像で十分に観賞したいと思う。
それにつけても、「特別のマニアではない
が」(Y生氏)といわれる方までが、妊婦フ
ォトをとられ、投稿されることには、まった
く感謝の外はない。「万一、貴社から分譲写
真にでもと希望されましても、我々のプライ
バシーを守るため、御希望にそえませんが」
(A・T生氏)とおっしゃるのも、やむをえ
ないことと思う。誌上に発表してもらっただ
けでも、ありがたいと思わねばなるまい。

編集部におねがいしたい。臨月腹の提供者
のお許しが得られるかぎり一枚ずつでも写真
を誌上に掲載して下さい。Y生氏のものも、
A・T氏の残りのものも、是非誌上で見られ
るようにして下さい。つぎに寄稿されるもの
で、いいものがあれば、毎号でものせて下さ
い。妊婦マニアでなかった方も、次第に臨月
腹のすばらしさに魅了されてくる人もあるか
も知れない。七月号の写真などは、たしかに
そういう効果をもち得ると信じている。

もしこれが、グラビア華やかになりし二年前
であつたら、と小生は口惜しくてならない。
十五ページの写真が、このすばらしいA・T
氏の「臨月妻」がグラビアを飾っただろうに
と思うと、まことに残念である。しかしこれ

も悔んでもいたし方のないことだ。遅かったとあきらめるより外はない。

最後に、編集部撮影用の妊婦ヌードモデルを志願する臨月腹の女性があらわれないものだろうか。妊娠した増田みゆき夫人を辻氏が撮影されて、早く新しい分譲写真があらわれないものか、と切実な思いをこめてねがっているのだが。妊娠可能な条件にある、若い読者の女性の、特別な奮起をおねがいしたいものである。

例によって勝手なことばかり書いたので、お許しを乞わなければならぬ。ただ最後にもう一つ、「分娩ショウ」などというものもあってよいような気がする。羽鳥さんも書いておられたが、胎児は女性の内臓の一部だという説が成り立つものとするれば、「生体（生胎）解剖ショウ」と言ってもよいだろう。いわゆる関西ストリップが、出すものを出しつつくして、これ以上見せるとしたら、腹を断ち割って腸でも見せるより外はなからう、などと言われている今日、また堂々と、「生胎解剖ショウ」と銘打ったものもあらわれているのであるから、たとえば無痛分娩を見せる「生胎解剖ショウ」というのがあっても、ちっともおかしくはないと思う。しかし、これは、たった一度しか出来ないという欠点はあるが。

もちろん、考えてみると、胎児Ⅱ内臓の一部を体の外に出して見せる、という意味での「生胎解剖ショウ」Ⅱ無痛分娩ショウとか、さらに本当の解剖に近い「帝王切開ショウ」などというものが、実現する可能性は皆無に近いわけである。だからこれは小生の夢Ⅱ願望と空想にすぎない。しかし、そういう場面の空想はあってよいような気はする。こんな小生のつまらないたわごとでも、取り上げて下さる寄稿家があれば、さいわいだと思ってあえて書き記した次第。いま一度お許しを乞いたいと思う。

妊娠は女性の神秘である。男性のあこがれの一つの極限である。物好きと思われるかも知れないが、妊婦マニアの一人として、三・九キロもの胎児を内蔵して、大きくなり得る限度まで膨らみ切った、臨月の妊娠の、はち切れそうに巨大な腹部の写真から受けたショックに駆られるままに、小生はこの文を書いたに過ぎない。

今度こそ最後に、もう一度、A・T氏への感謝と、一日も早く実現してほしい臨月腹フォトの新しい分譲とを期待して、筆をおきたい。

現在在庫『本誌既刊、限定版写真集』案内

- 限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフ集
頒価 一〇〇〇〇円 略号「限二」
- 限定版写真集「美しき縛しめ」第四集
頒価 一〇〇〇〇円 略号「美4」
- 限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版
頒価 一〇〇〇〇円 略号「美5」
- 限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」
頒価 一〇〇〇〇円 略号「美6」
- 限定版写真集「刺青の魅力を探ぐる」
頒価 一〇〇〇〇円 略号「美7」
- 限定版写真集「女斗緊縛競艶写真特集」
頒価 一〇〇〇〇円 略号「美8」

『女奴隷の貞操帯』

麒麟児 久



—
たしか外界は、いま冷たい北風が吹いているか、雪でも降っているはずだ。カレンダーの日付はそうになっている。だが、私は二年ばかり前から太陽の光も夜の星空も見ることがない。窓一つない部屋。ココがどこにあるのか、それさえ私は知らないのだ。

ただ私が知っているのは、東京都内のどこかの大きなビルの中だということだけだ。冷暖房も通風もよく効いて、年中春のような暖かさである。住み心地は至って快適だが、それも私のためではない。

ここは、ある大組織の秘密クラブの中だ。大広間のサロンと、鉄格子のはまったハレム。酒場や賭博場に、遊戯用の拷問室——大

小様々の部屋があつて、迷路のような廊下で繋がっている。

私は、その部屋の一つ一つの面白さも、愉しさも、恐ろしさも、残忍さもよく知っている。なぜなら二年半ばかり前の数カ月間、私もこのクラブの会員だったのだから。

そして、いまは足を鎖につながれて、重い鉄球をひきずっている。つまり奴隷に墮たされ

てしまったのだ。

私の使役は酒場のバーテンだ。しかしシェーカーの振り方も、カクテルの造り方も知る必要はない。客たちが、神酒と呼んでいるものを売りさえすればよいのだ。

この秘密クラブは、安サラーマンの来られるところではない。大会社の社長か重役か大金持の遊びあきた好事家やアブノーマルな嗜癖者のつれづれをなぐさめる慰安所だ。

そういう、お偉方紳士の名誉と秘密を守るために、ここでは男達は全部、私のような奴隷や使用人まで一様に、外人レスラーがよく使うグロテスクな覆面をすることになっている。若くて美しい女奴隷たちと、顔を仮面で隠した男たちの集団。

私の居る異臭のただようバー。このカウンターやボックスに坐る男達は、みんな大人しくて世話がやけない。唾のようにだまりこみ、厳粛で陰鬱な顔をしている者。阿片中毒患者のように放心の眼を恍惚と見開いている者。みんなが、ジョッキやグラス代りに尿瓶を使用する。掌でじっくり暖め、舐めるように味わったり、やけに鯨飲したりしている。

ここで聞かれるのは、酔っぱらいの喧嘩でも歌声でもない。会員達に愛飲物を提供する

女たちの、くるしい呻きと唸り声だけだ。

私は三年前、始めてこの風変りな酒場を訪れたときのショックな印象を思い出す。

その時——私は杉原一郎といって、資本金二億五千万円、毎日の新聞に株式相場が載る会社の重役をしていた。私をここに連れてきたのは馬淵孝という取引先の商社員だった。音で読むのが正しいそうで、国籍は第三国人ということだった。

「杉原さん、そんな厭な顔をしないで、すこしだけつき合ってくださいよ。オイ君、ぼくには新鮮なホットでくれ、特大だよ」

バーテンが、指で二つかと訊ねた。

ここには、杉原が注文した酒以外には置いていない。

「この人はいらないんだ。一つでいいよ」

普通の酒場なら洋酒やグラスの詰った棚になっっている壁が、カーテンになっている。バーテンが開けると、ザラザラとした粗いコンクリートの壁に、若い美女が五人、鎖でハリツケにされて鉄環にひろげた四肢を拘束されていた。腰の裏側に弓なりに曲げられた二本のパイプがあつて、伸びきったお腹を思いきり前につき出している。

「このクラブから逃げ出そうとしたり、規則

を破った女たちです。この男が針で眼をつぶしてしまったんですよ」

馬淵からあごで示されたバーテンは、咽喉の奥でくっくつと干枯びた笑いとも呻きともつかぬ奇声をもらした。覆面の中で、おち窪んだ濁った眼が、残忍な光に輝いていた。

バーテンは、女達の下腹に手を当てて調べような格好をしたり、強く指圧したりしたが、いくら強要されても、五人の女は馬淵の注文した一立ちかく入りそうなタンブラーを一杯にすることはできなかった。

彼はいら立って、短い竹鞭で、むき出しの女体を情容赦なく乱打した。

目に泌みるほど真つ白で深い蒼味を帯びた肌が真赤になった。女たちは、許してとも痛いともいわないが、身をくねらせて、かなしげな弱々しいうめき声をあげた。見えない瞳から泪がしたたり落ちた。

バーテンは、自分のつけた赤い鞭痕を愉しげに觀賞してから、首を折って胸だけをあえがせている無抵抗な女たちに、五合入り尿瓶に、氷塊の浮いた塩水を二杯ずつ無理に飲ませた。女たちは顔をゆがませて、むせび苦しみながらも、唾えさせられた尿瓶の中の塩水を一滴も残さず腹中に収めた。塩で舌と咽喉

を灼れて、女たちは真水を求め、いよいよ排泄分の補充と促進に協力することになってしまふ。

カーテンが閉じられた。

「杉原さん。ここでは、女達に同情やなさを掛けることは厳禁されています。あの女達は、我々の愛飲物製造器としての生存価値しか認められていません。役目は忠実に果す義務がある。そりゃ人間のことだ。水道の蛇口やビヤ樽の栓を抜くようにはいかない。お客がない時には、お客が現れるまで我慢して待っていないければならないし、今夜のように満員なときは、無理をしてもお客の注文に応じなければならぬ。できなければ、勤務怠慢でいまみたいに折檻される。魔法瓶に入った醗酵したものもありますが、誰でも鮮度のいいのを好みますからね。その生理的調整が非常に難しい。あんまり我慢したり、せき立てられたりして、病気になるって死んだ女も随分いますよ」

コンクリートに磔にされた美女。盲目にされた眼窩一面に青黒い隈ができて、両頬はげっすりこけ、蒼ざめた額には脂汗がにじんでいた。しかし彼女達の肉体は、病的な荒廃の翳につつまれていても、全身にはみずみずし

い弾力と色艶が感じられた。まだ二十才を超えてはいまいと想像される。化粧はしていませんが、女優のように美しい素顔だった。

絶えず唇をもぐもぐさせて、うわごとのような苦痛の呻きを洩して、首をうなだれ、ひどく衰弱して、鉄環にだらりと両手でぶらさがるようにしていた。

その時、私はカーテンの奥にかくされた女体をもう一度見たいと思った。

「勿体ない、実に勿体ない！」

私は心中の想いを声に出していった。

「勿体ない？ 何が、ハッハ。杉原さん。あれくらいの女なら、選りどり見どり、ここには、もっと美人で軀もいい女がうようよ居ますよ。そうして何んでも貴方の御用をきいてくれますよ。但し一人の女に絶対に惚れないこと。それがこのクラブの規則ですよ」

馬淵はそこで話を中断して、目前のバーテンを指差し、実例を示して警告した。

「あの男だって、一年前までは、有名な会社の部長だったんですがね。クラブの女と惚れ合って駆け落をやらかそうとしたんですよ。結局リンチを受けて、宦官みたいな身体にされ、おまけに唾にされてしまったんですが、いまではやっこさんも、結構愉しんでいます

よ。去勢されると男って陰険になるものらしいですな。ああやって小便臭い女をいじめては、喜んでいるんですよ」

その時の私は、そのバーテンを残忍でいやな奴だと嫌悪したものだが、その私も馬淵の忠告を破って、前任者のバーテンと同じ運命を辿ったのだ。

私はもう杉原一郎という名前も、シャバに残した妻子のことも、会社のことも忘れてしまった。いまでは、人間の皮をかぶっただけの、いじけた悪魔だ。去勢されて男の機能を失うと、私の性格もやはり陰険になった。憔悴した女奴隷たちに排泄の責を科しては喜び、小さな鞭で虐める権利を行使することに生甲斐を感じる男になってしまった。

女をさいなむ悦楽。女の苦悶の美しさに憑かれた私。公衆便所の臭気がしみて体臭になってしまった私だが、しかし私が最初からそうであったわけではない。

いまでも独り寝の固い布団の中で、ふと涙ぐむこともある。私のしつこいどす黒い悲しい思い出——その時だけ、私は昔の私にたちもどる。

ユミ——私のユミは、このバーで一年間働かされて、膀胱が腐って死んでしまった。

てしまったのだ。

私の使役は酒場のバーテンだ。しかしシェーカーの振り方も、カクテルの造り方も知る必要はない。客たちが、神酒と呼んでいるものを売りさえすればよいのだ。

この秘密クラブは、安サラリーマンの来られるところではない。大会社の社長か重役か大金持の遊びあきた好事家やアブノーマルな嗜癖者のつれづれをなぐさめる慰安所だ。

そういう、お偉方紳士の名誉と秘密を守るために、ここでは男達は全部、私のような奴隷や使用人まで一緒に、外人レスラーがよく使うグロテスクな覆面をすることになっている。若くて美しい女奴隷たちと、顔を仮面で隠した男たちの集団。

私の居る異臭のただようバー。このカウンターやボックスに坐る男達は、みんな大人しくて世話がやけない。唾のようにだまりこみ、厳粛で陰鬱な顔をしている者。阿片中毒患者のように放心の眼を恍惚と見開いている者。みんなが、ジョッキやグラス代りに尿瓶を使用する。掌でじっくり暖め、舐めるように味わったり、やけに鯨飲したりしている。

ここで聞かれるのは、酔っぱらいの喧嘩でも歌声でもない。会員達に愛飲物を提供する

女たちの、くるしい呻きと唸り声だけだ。

私は三年前、始めてこの風変りな酒場を訪れたときのショッキングな印象を思い出す。

その時——私は杉原一郎といって、資本金二億五千万円、毎日の新聞に株式相場が載る会社の重役をしていた。私をここに連れてきたのは馬淵孝という取引先の商社員だった。音で読むのが正しいそうで、国籍は第三国人ということだった。

「杉原さん、そんな厭な顔をしないで、すこしだけつき合ってくださいよ。オイ君、ぼくには新鮮なホットでくれ、特大だよ」

バーテンが、指で二つかと訊ねた。

ここには、杉原が注文した酒以外には置いていない。

「この人はいらないんだ。一つでいいよ」

普通の酒場なら洋酒やグラスの詰った棚になっっている壁が、カーテンになっている。バーテンが開けると、ザラザラとした粗いコンクリートの壁に、若い美女が五人、鎖でハリツケにされて鉄環にひろげた四肢を拘束されていた。腰の裏側に弓なりに曲げられた二本のパイプがあって、伸びきったお腹を思いきり前につき出している。

「このクラブから逃げ出そうとしたり、規則

を破った女たちです。この男が針で眼をつぶしてしまったんですよ」

馬淵からあごで示されたバーテンは、咽喉の奥でくっくつと干枯びた笑いとも呻きともつかぬ奇声をもらした。覆面の中で、おち窪んだ濁った眼が、残忍な光に輝いていた。

バーテンは、女達の下腹に手を当てて調べような格好をしたり、強く指圧したりしたが、いくら強要されても、五人の女は馬淵の注文した一立ちかく入りそうなタンブラーを一杯にすることはできなかった。

彼はいら立って、短い竹鞭で、むき出しの女体を情容赦なく乱打した。

目に泌みるほど真っ白で深い蒼味を帯びた肌が真赤になった。女たちは、許してとも痛いともいわないが、身をくねらせて、かなしげな弱々しいうめき声をあげた。見えない瞳から泪がしたたり落ちた。

バーテンは、自分のつけた赤い鞭痕を愉しげに観賞してから、首を折って胸だけをあえがせている無抵抗な女たちに、五合入り尿瓶に、氷塊の浮いた塩水を二杯ずつ無理に飲ませた。女たちは顔をゆがませて、むせび苦しみながらも、唾えさせられた尿瓶の中の塩水を一滴も残さず腹中に収めた。塩で舌と咽喉

を灼れて、女たちは真水を求め、いよいよ排泄分の補充と促進に協力することになってしまふ。

カーテンが閉じられた。

「杉原さん。ここでは、女達に同情やなさを掛けることは厳禁されています。あの女達は、我々の愛飲物製造器としての生存価値しか認められていません。役目は忠実に果す義務がある。そりゃ人間のことだ。水道の蛇口やビヤ樽の栓を抜くようにはいかない。お客がない時には、お客が現れるまで我慢して待っていないければならないし、今夜のように満員なときは、無理をしてもお客の注文に応じなければならぬ。できなければ、勤務怠慢でいまみたいに折檻される。魔法瓶に入った醗酵したものもありますが、誰でも鮮度のいいのを好みますからね。その生理的調整が非常に難しい。あんまり我慢したり、せき立てられたりして、病気になるって死んだ女も随分いますよ」

コンクリートに磔にされた美女。盲目にされた眼窩一面に青黒い隈ができて、両頬はげっそりこけ、蒼ざめた額には脂汗がにじんでいた。しかし彼女達の肉体は、病的な荒廃の翳につつまれていても、全身にはみずみずし

い弾力と色艶が感じられた。まだ二十才を超えてはいまいと想像される。化粧はしていなくても女優のように美しい素顔だった。

絶えず唇をもぐもぐさせて、うわごとのような苦痛の呻きを洩して、首をうなだれ、ひどく衰弱して、鉄環にだらりと両手でぶらさがるようにしていた。

その時、私はカーテンの奥にかくされた女体をもう一度見たいと思った。

「勿体ない、実に勿体ない！」

私は心中の想いを声に出していった。

「勿体ない？ 何が、ハッハ。杉原さん。あれくらいの女なら、選りどり見どり、ここには、もっと美人で軀もいい女がうようよ居ますよ。そうして何んでも貴方の御用をきいてくれますよ。但し一人の女に絶対に惚れないこと。それがこのクラブの規則ですよ」

馬淵はそこで話を中断して、目前のバーテンを指差し、実例を示して警告した。

「あの男だって、一年前までは、有名な会社の部長だったんですがね。クラブの女と惚れ合って駆け落をやらかそうとしたんですよ。結局リンチを受けて、宦官みたいな身体にされ、おまけに唾にされてしまったんですが、いまではやっこさんも、結構愉しんでいます

よ。去勢されると男って陰険になるものらしいですな。ああやって小便臭い女をいじめては、喜んでいるんですよ」

その時の私は、そのバーテンを残忍でいやな奴だと嫌悪したもののだが、その私も馬淵の忠告を破って、前任者のバーテンと同じ運命を辿ったのだ。

私はもう杉原一郎という名前も、シャバに残した妻子のことも、会社のことも忘れてしまった。いまでは、人間の皮をかぶっただけの、いじけた悪魔だ。去勢されて男の機能を失うと、私の性格もやはり陰険になった。憔悴した女奴隷たちに排泄の責を科しては喜び、小さな鞭で虐める権利を行使することに生甲斐を感じる男になってしまった。

女をさいなむ悦楽。女の苦悶の美しさに憑かれた私。公衆便所の臭気がしみついて体臭になってしまった私だが、しかし私が最初からそうであつたわけではない。

いまでも独り寝の固い布団の中で、ふと涙ぐむこともある。私のしつこいどす黒い悲しい思い出——その時だけ、私は昔の私にたちもどる。

ユミ——私のユミは、このバーで一年間働かされて、膀胱が腐って死んでしまった。

ユミは私と一緒に、この秘密クラブの掟をやぶって死んだのだ。私は、自分の最愛の女に塩水を飲ませたり、鞭打の刑罰を与えなければならなかった。それが私達二人に科せられた私刑だったのだ。ユミは、私が殺したも同様だ。それから私は人間が変った。

——皆さん一つ、私と可哀そうなユミの話聞いてやってくれませんか。

二

狭い交錯した廊下を会員たちが、奥の方に進んでいく。人波に押されるようにについていくと、迷路のつき当りに観音開きの紅いドアがあった。中に入るとき、赤いチケットを一枚支払わなければならない。このクラブの入口ではチケットを売っている。赤いのが一万円、黄色いのが千円で、クラブの中ではそれが通貨として取引される。

大広間は、豪華なナイトクラブかサロンのような造りになっていて、色とりどりの花やかなボックスが並び、噴水のあるプールや熱帯植物の木蔭や正面奥には円形舞台がある。シャンデリヤで飾られた王朝風な絵模様の天井から、目もあざむく照明が輝いて、足許のペルシヤ絨氈を浮び上らせている。

香水や脂粉の匂いがふくいくとただよってくるが、広間には女達の影はない。

女達は檻の中にとじこめられていた。

広間の四囲に鉄格子になっていて、その一つ一つに女達が佇んでいる。

杉原一郎は、馬淵の案内で鉄格子の前の通路に沿って一周した。

濃い化粧をした挑発型から、清楚な素人臭い女。個性的でエキゾチックな顔立から、知的な容貌、純情可憐な感じ、静かでもの淋しそうな顔、男好きのする愛嬌のある女と、馬淵が言った通り選りどり見どりの美人揃いでそれぞれ特徴を持合せている。ひろく開いたドレスから肩や胸を露わにしている女。艶めかしい和服姿、清純なB・G風、看護婦の白衣や女学生のセーラー服、太腿をちつくかせた支那服、きりっとしたボーイッシュな服装——それぞれ個性にマッチした衣裳をして男たちを誘っている。

高級コールドガール、飾り窓の女——。

しかし檻の中の女たちは、すべて優雅な身のこなしをしている。やさしい微笑と上品な会話で控え目な媚態をしめし、かつての赤線時代の街を歩くのとは、全く感じが違う。それに、ここでは盛装した美人を眺めて、

あのオッパイが果して本物か偽物かといらざる心配をする必要はない。

鉄格子に新聞紙大の貼り紙があつて、そこに彼女達の裸形や肌の色艶を色々なアングルから撮影したカラー写真があるし、バスト、ヒップ、ウェストから微妙な軀の具合まで正確なサイズが提示されてある。

「杉原さん、彼女達を買う紳士方は、いずれも遊びあきた通人ばかりでしてね。普通の愛し方では満足できない。そこで、このハレムの女達は、男のどんな気まぐれでも、残酷趣味でも、倒錯した遊びのお相手でも、つとまるように特殊な仕込みを受けています。その代りコールドガールを呼ぶような料金では、言うことを聞きませんよ。檻から出して酌をさせるだけで黄色いチケットが五枚、自由にするには最低の女で赤いチケットが五枚、いずれも一時間単位ですがね」

通路を金ピカの服を着たボーイが鍵の束を持って会員達に混って歩いている。取引がまとまると、鉄格子の鍵を外して、女達をお客に引き渡している。

馬淵は白地に赤い帯をしめた和服の女を、杉原はセーラー服を着た美少女という感じの女を選んで、まずサロンで酌をさせることに

した。

馬淵の女は腰の線があらわに浮き出た軀をすりよせて、よく喋り、耳もとで二人がささやき合っている、忍び笑いをもらしている。杉原の女は、美しい眉をひそめて一くち口をつけただけのビールのコップをテーブルに置いたまま、すこし離れて坐っている。濃紺のスカートで膝頭をつつんで行儀よく坐り、両手を膝の上に重ねて俯向き、杉原がやわやわとした肩を抱こうとすると、身体を固くする。「この人、ここに来て、まだ二週間目よ。色々とは込まれてはいるけど、あんまりいいじゃないでね」

「杉原さん。説明書きに、大きな赤いハート型のマークがあったでしょう。あれは、パージンの印ですよ。だが生娘もいいが、ここでは逆にやっかいでしてね」

馬淵と女は顔を見合せて、意味ありげに笑った。しかし杉原にはその意味が判らない。

セーラー服の女は、睫毛の長いいういし横顔だった。膝黒の艶々とした髪が肩中まで波打ち、薄化粧のふくらした頬に白桃のようなうぶ毛がある少女だった。耳うらから頸すじにかけて抜け出るように白い肌が羞恥で濃い紅色にそまり首を縮めて震えている。

その時、サロンの照明が薄暗くなって、強烈なライトが正面奥の舞台に絞られた。

広間のあちこちから、迫力のある立体音が響いてドラムにまじって女の呻きと獣の咆哮に似た男の胸をかきむしるような妖しい音楽がながれだした。

会員たちに、オペラグラスが貸し与えられた。ライトの輪に全裸の女がうずくまって、全身をつつむほど長い髪で床を鞭打つように踊りながら、徐々に顔をあげていった。

部厚い肉感的な唇。大きい濃艶な目をぎらつかせて、暗い客席を睨みつけながら、熱い吐息を吹きつける。眉を金粉でつり上げて描き、それがライトにキラキラ輝いている。

偉大なバストとヒップ、胸がくびれた官能的な肉体だ。上体がそりかえり、膝がしどけなくひらいていく。仰向けになったとき、はだしの臍は舞台の床を踏んでいた。

女がうめき声をあげ、しだいに息をひきとるような劇しいあえぎに昂まっていく。男心をそそのかすような声、息づかいだった。

女は『性生活の知恵』で使われた人形のポーズを幾組か独演しているのだった。

「杉原さん、これから面白いんですよ」
そういう馬淵の声もかすれていたし、馬淵

に抱かれた女も、みずからしがみついて荒く息をはずませている。

杉原の少女は、両手でおおった顔を膝に伏せて、とても恥しく見ていられないという風情をして、背中をかすかに震わせている。

舞台では、ぐったりのびきって胸をあえがせていた女が、ゆるゆると身を起して、中腰の姿勢になったところだった。

今度は右手に長い縫針がにぎられている。眼をしかめて、女はウウとくいしばった唇から、苦痛の呻きを洩した。口に含んでしめされた四本の針が双つの乳房を十文字に縫っていた。

つづいて吐き出された紅色の舌にも、女は縫針を裏側から一気に突き刺した。

女はヨガの行者か？ しかし顔も軀もまぎれもない日本人だ。女は舞台を降りて広間をまわり出した。

女は杉原たちのボックスの前まで来て、立ち止まった。制服の少女は蒼ざめた顔をそむけた。ライトが真正面から汗でぬめる胸を照し出す。真っ白な双丘に赤い花が咲いたような乳首——その色濃く広い乳輪が始まる乳房の尖端に、十字架型に縫針が埋まっている。肉を縫って頭を出した針の両端が光線にチラチラ

光って、絹糸のように細い血が四すじ、したたっている。

凝結した紅い乳頭を、馬淵がひっぱった。尖端をひっぱられて、重くそりかえった球形は、その美しい曲線はずませて波打ち、躍った。

——痛っ！ 許して。

女は一瞬眉に皺をよせ、眉をつり上げた。憎悪の目で、馬淵をとがめたが、逆に男から睨み返えされると、瞳に怯えた色が走って、うらめしげな哀願の表情にか変わった。

馬淵の話では、この女もバーの女奴隷と同んなじで何か罰則にふれて特殊な芸人に仕込まれたという。

女は自分で針を抜くことを許されていないらしい。客席を廻っては、針をつき刺してものが言えない舌をうごめかし、金魚のようにぱくぱくさせる口唇からよだれをたらしながら、甘い媚びと哀れみを含んだ視線で、会員達に、早く抜いてくださいと魅惑的な胸をさし出して懇願した。そのために女は、馬淵がしたように、男たちから好きなように軀をな

ぶられなければならなかったし、舌と唇の使えない肉体で、お客の煙草を啜えて煙を吐き出す曲芸を披露しなければならなかった。女が舞台にもどると、客席からわれるような拍子を送られた。

ステージに中世紀風の燭台が立てられ、五本の蠟燭に火が点けられた。

その一メートルばか

り後ろに、女は前にちらばった長い髪の毛を顎をしゃくって背中にとらし、仰臥した。男を誘うポーズをした腰をつき上げて、片手でつかんだ透明な葉ピンを、中身ごとくわえて呑み込んだ。

のみこんだガソリンに点火して唇から火焰を吹く『人間ポンプ』、その異常体質者の芸人だけに許された危険極まりない芸当を、人間ポンプとは違った、きわどい方法でやろうというのだ。

オペラグラスに、恐怖と緊張でこわばった女の顔が見える。

パーツと舞台が音を立てて、炎上した。

女はたてつづけに全部で五回火焰をふき片手ににぎった濡れタオルで炎を叩き消した。広間におしめない拍手喝采がどよめき、女は舞台にさし出されたビールをガソリンと同じようにゴクゴク飲み込んだ。

つづいてビールの霧が噴出して、五本のローソクを一本づつ消していった。

客席から大道芸人に投げ与えるように、黄色いチケットが舞台めがけてばらまかれた。

三

猟奇的なショーに煽情された会員たちは、



満員の広間から女を抱きかかえるようにして鉄格子の奥へと姿を消していった。

杉原が買ったセーラー服の女は「ユミ」という名前だった。彼女を一時専有するため、彼は赤いチケットを八枚支払った。

鉄格子の奥は、トルコ風呂と連れ込みホテルを一緒にしたような部屋だった。手前の部屋はよく磨かれたタイル張りの床に、小さな浴槽と洋式トイレ、円形の大きなクッション椅子が置かれている。奥の間は、寝室になっていて、艶めかしいツインベッドがある。

トルコ風呂の個室に似た方が寝室よりずっと広く、天井から滑車のついた鎖がぶらさがり、壁には鉄環や鉤があったり、色々な鞭やロープが掛けられている。

ユミが壁のスイッチを押すと、シャッターがおりて、鉄格子が見えなくなった。

暖房がよく効いて、かすかにしめった空気も混って、汗ばむほど暖かい。

「ここでは安心です。覆面をお取りになりますせんか？」

少女は佇んだまま、やさしく訊ね、円形クッションに腰掛けた杉原の仮面を脱がした。

「鉄格子の看板には、十九才と書いてあったね。まだここへ来て二週間しか経っていない

という話だが、どうして、こんなところへ来たのかね？」

誘拐されて来たのだろうか？——それとも自分から身売りしたのだろうか？——杉原は歌手の田代美代子によく似た愛くるしい顔立の女を見上げた。

真正面からみつめられて顔を伏せていたユミがきつと杉原を睨んで強い口調でいった。「ここでは、身上話やプライベートな話は、一切禁じられています。規則をやぶると、わたし達罰せられるんです。それより早く御用意をなさらないと、一時間ぐらい、すぐたってしまいますことよ」

頬をぼーうと紅潮させて、彼女は杉原を誘った。パッチリ涼しい目もとに精一杯の媚びをこめているつもりだろうが、顔を半分そむけるようにして、そっと男の手をにきって、起き上らせようとする腕はふるえている。あたたかいふくらとした白い手だった。駆全体に、きこえない固さと含羞が感じられる。

明眸可憐で清純。眼もとや口もとには、あどけない自然の愛嬌がただよう美貌。色白で華奢な感じの肢体に、濃紺のセーラー服がよく似合う。

「お風呂に、お入りになりますか？」

「う、うん。そうしょうか」

ネクタイを解こうとする杉原をさえきってユミが衣服を脱がせてくれる。杉原が脱衣されていくにつれて、少女の動作はためらいと羞じらいで、指さきのおののきが、膚に伝わってくる。

彼は夢中になって抱きしめ、花びらのような唇を奪った。目を瞑って吸われるままにしているが、腕の中でユミは無意識のうちに上体をのけぞらせ、白い指をそりかえらせて男の胸を押しつけるような動作をしている。

格別に抵抗とも反発とも感じられないが、抵抗したいのを遠慮しているような、諦めて身を委せているような——その隠しおおせな心像が表情や動作ににじみ中ている。

「よくが嫌いかい。好きになれといっても、勿論無理な話だがね」

少女はびっくりしたように顔をあげた。

「い、いえ、決して、そんな。許して下さい。わたし達はお客さんに嫌やな顔を見せたり、つらがったりすると罰せられるのです。ただ、わたくし、こわいんです。まだ慣れていなくて、すみません。お許し下さい」

ユミは怯えた眼で、必死に哀願した。「お願いです。誰にも言いつけないで」

「罰せられるのかい？」

それ以上は言わず、ハンケチで口紅を拭くと唇を開き、小さな舌さきをうごめかせて積極的な接吻を求めてきた。

「君も服を脱いだら、どうだい」

「ハ、ハイ。すみません。この傑セーラー服姿の方がいいという、お客さんが多いものですから」

「でも、君も一緒に風呂に入るんだろう？」

「え、ええ」

ユミは男から離れると、顔を伏せて、もし身を揉んでいる。あいにく、この部屋のどこにも、脱衣する美少女をかくすような屏風も衡立もない。

「ぼくが脱がしてやろうか？」

「い、いえ、結構です」

顫えた声で拒み、娘は杉原に背中を向けてつつましく脱衣した。

手足はすんなり細い感じだが、思いのほか肉付がゆたかである。ふくらむべき箇所は充分にふくらみ、引きしまるべきところは引き締った均整のとれた軀をしている。ハイティーンだけに、皮膚はピチピチ弾力がみなきり全身から匂うようにみずみずしい官能美を散らせている。

乳白色に輝く肌と鮮烈な対照美を見せている黒いストッキングが、まき落された。

まぶしいほど白く、健康なバラ色を底にひめたバックスタイルだが、肌目のこまかい艶々とした背中から、シミ一つない形よく発達したピップにかけて、鞭痕とも咬傷とも判別できぬ痣模様が、薄っすらちらばっている。

セーラー服の下に、こんな素晴らしい肉体が隠匿されていたのか。しかしその眼を楽しませる感動も、たちまち消えて、杉原は不気嫌に言った。

「その貞操帯のようなものは、とることは出来ないのかい？」

お湯の中から覗みつけるように言われて、胸を抱いておずおず浴槽に歩み寄っていた娘の爪先が止まって、そのまま崩れ込むようにしゃがみこんでしまった。

口ごもって、何かつぶやいたようだが、あまり小声すぎて、杉原には聞き取れない。

固く唇を閉ざして、みるみる身体中が濃い薔薇色に変わった。

ますます固く身体を縮めて、いまにも泣き出しそうな顔をして、おどおど不気嫌な男の顔を見詰めているだけである。

大きな赤いハート型のマーカー。その意味

を知らないで、杉原はユミを買った。しかしいまとなつては、むっちり締ったういういしい生娘の下腹に喰い込んだジェラルミン製の貞操帯。それは処女の肉体を觀賞する男の眼を失望させないように、バタフライ大の極小サイズだが、やはり杉原は、それを開きたいという押え難い欲望を覚え、軀中の血が炎のように煮えたぎるのだ。

「どうしたんだ。一体？」

裏切られた想いで、怒号に近い声だった。

「ハ、ハイ。これはずすことは許されてはいません。この鍵は、わたくしも持つてはいませんのよ。わたしにも、自分ではずす自由は与えられていません。これをおはずしになる殿方は——、わたくし月に一度競売に出されますの。そのとき落札して、わたくしをお買い上げになった人、そのお方の御用が済むまでは、こうやっていなければ、なりませんの」

少女は、おそろおそろ男の顔色を盗見しながら、哀れっぽい沈痛な口調で語った。

「そんな莫迦な！ それでは、ぼくは、ここへ何しにきたんだ！」

馬淵が「やっかいなものでしてね」と笑った意味が、やっと判った。先刻からの不気嫌

が狂暴性を帯びた怒りとなって、やり場のない失望と鬱憤に、彼は嘔鳴り声をたてて、沿槽のお湯でも、そこらじゅうにぶちまけてやりたい発作に駆られたが、四十男の分別がそれを抑えた。

殺気だった男の視線に、射すくめられて、気のやさしい小心な娘は、バスの前にかがみこんだまま、顔に手をあてて、しくしく泣き出した。いたけない幼女の泣く姿に、そっくりだった。

「判ったよ。泣いてばかり居ないで、一緒にお風呂にでも入りなさい」

杉原のおだやかになった口調が、デリケートな乙女の神経を刺戟したようだった。

「赦して下さい。わたくしにも、どうすることもできないの。お氣持が晴れるのなら、どうか気が済むまで、わたくしをぶつなり、何んなり、好きなようにしてください。わたしには、それしかできないのです」

顔をあげ声を願せてもだえるユミ。その泪がいっぱい溜った双眸には、切迫した万感の想いが苛酷なまでにこめられている。そこには、怯えて許しを乞う女奴隷の卑屈な哀願もあった。やるせないあせりや痛恨が、またそんな自分自身に対するいいようのない怒り、

情けなさが、更にその裏側には杉原という男に対する隠蔽し切れない憎悪と呪いが、そういう複雑多様な感情が熱い渦となって、繊細な少女の胸をさいなみ、はり裂けんばかりに瞳孔を見開かせ、無念の涙となつてとどめなく流れるのだ。

それがいたけない少女という感じの娘だけに、あどけない愛くるしい眼と口、顔全体がやさしく微笑みかけてくるような容貌の持主だけに、杉原には、その切なく痛ましい心中が一層いじらしく思えてくるのだった。

ユミは涙にむせびながらも更に続けた。

「あなたのように、お怒りになるお方もありますが、大抵のお方は、もっと外の愛し方をされますの」

彼女は、心の激情に自分で自分が抑えられなくなったようだった。清純可憐な顔や、控え目なやさしい心づくし、しとやかな身のこなし、杉原が彼女に感じていた好ましいイメージを疑わせるような、捨鉢でみだらな態度を見せた。

外の愛し方、杉原にも想像できた。

「でも、ユミ、嬉しいのよ。殿方がお喜びになること、お愉しみになることは、みんなユミにも嬉しい、嬉しいことなの」

杉原は、なんとも居たたまれない痛ましい氣持になった。真赤に泣き脹らした瞳。長い眉毛にたまつて光る涙滴。ユミはちっとも楽しそうな顔なんかしていない。彼女自身に言い聞かせる諦念と絶望の響きが、言葉とはうらはらの哀愁の翳が、杉原の耳に突き刺り、胸を抉って、彼をこの上なくやるせない想いにさせるのである。

可哀そうなユミ！ 君はどうして、こんなところへ来てしまったんだ？

口先まで出かかった言葉を、杉原は危うく噛み殺した。そんな愚問を發して、何んになるうか。一層ユミを傷つけ、悲しませるだけではないか。

「泣いたりして、ごめんなさいね。貞操帯のこと許して下さいさる？」

お湯の中で軀の重力を失って、小さく軽く感じられるユミ。肌は白く柔かで、それでいてピチピチした弾力がある。四肢の細そりとした割には、よく發達した胸を示している。

丸々とみごとにそりかえって格好がよいがまだ固い生娘の乳房だった。淡紅色の小さな暈の乳首を尖らせている。

美少女を拘束する小さな貞操帯。それはユミの処女性を保護するためでも、古風な十字

軍の騎士達の気持でもない。それはできるだけ高く売るために強制されたものだ。処女を売る人身売買のケースは、外の世界にもあるが、この秘密クラブでは、貞操帯があるために、鉄格子につながれたどの女達より、ユミはより酷く虐められ、より狂った倒錯の遊び道具にされるのではないかと。彼女の処女性が目当の男はむろんだが、そんなことには無関心な嗜癖者にしても、ここへ来る限り手いらずの処女に魅入られているはずだ。彼等はいずれにしても最後の欲望がみたされない分だけ、外の方法で満足しようとなねち淫虐ないたぶり方をするのだらう。貞操帯で邪魔された分だけ、外の女たちより虐使して、快楽をかすめ取ろうと必死になる会員達。抵抗することも許されず、もだえ苦しみながら私刑同様の愛撫をのがれようと手を合せるいたけない女奴隷の風景——ここでは、バージンであるということは、不幸なことだ。

「俺は、そんな男になりたくない」

杉原は、知らず知らずのうちに、声を出して、苦しそうにつぶやいた。

「何んのこと。あなた、やっぱりまだ怒っていらっしやるのね。お客さんに御満足していただけないと、わたし、ひどく叱られるの。」

ね、気嫌を直して。ユミ、あなたを愉しませるためなら、どんなサービスでもいたしますわ。さあ、急がないと、本当に時間が来てしまいますわ」

甘えた媚態より、その裏側にある刑罰を恐れる女奴隷の悲哀さを、杉原は強く感じてしまふ。

杉原は、肩中までふさふさとたれた豊かな黒髪をなでてやりながら、ためらったすえ、思い切って訊ねた。

「ユミ。君はバージンで居たいかい？」

見上げた双眸が、かなしみをいっばいたたえて、じっと杉原を見詰め、首がゆっくりと何回も横に振られた。

四

秘密クラブの会員達は、特殊な嗜癖者が多い。したがって、その相手にされる女たちも手当や休養に長時間を要するのであらう。クラブ一週間に一回程度の間隔で開かれた。

その都度、どこからともなく電話が掛ってきて、待合せの時間と場所を知らせてくる。

国鉄の駅前であったり、銀座裏のバーであったり、場末の映画館や深夜の公園のベンチであったりした。待っていると約束の時間通り

正確に迎えの車があらわれて杉原を運んだ。クラブの規則で目的地に着くまで、特殊な麻酔薬を嗅がされて睡らされることになっている。気が付くと、覆面をされてクラブのロビーにあるソファに寝かされているのだった。

二回目の夜、バスから先に出ると、ユミは美しい小瓶に入った香油のようなものを駆けように塗り出した。麝香の匂いがして、線や輪郭のまるくやわらかい乳房や腹部が、ヌルヌルと光った。湯上がりのばら色にしっかりとるおい、ういういしい処女の香気がたちこめる肌に、異様にかがやく油脂のお化粧をほどこされて、煽情的というか、毒々しいというか、強烈に官能を刺激する眺めだった。

くるりと後向きになって、背中につれた長い濡髪をかきあげると、ユミは、はにかんだ微笑をこぼして、香油を杉原に手渡した。

「背中とお尻を、お願いしますわ」

ほつれ毛のねばりついた匂うように、美しくなまめかしいえりあしだった。

「こんなものを塗って、どうするんだ」

少女は哀艶な眼の色をして、はずかしそうに訴えた。

「ユミ、鞭でぶたれたいの。お客さんは、あ

なただけでないでしょう。だから、あとの人のために油を塗って、あんまりひどい傷がつかないようにして置くの」

あとの客——ユミの肉体を取引するのは、旧赤線時代と一緒だ。今夜も杉原の外に、あと何人かの客を取らされるだろう。その男たちのために、赤い鞭の縞模様をつくる楽しみを残して置こうというわけか。

また、杉原は神経が苛立って、痛ましい気持ちになる。

「鞭打は楽しいのかい。ぼくには、そうとは思えないが？」

ユミは、習慣になっている怯えた卑屈な眼で、杉原の顔をうかがってから、顔をゆがめて、ききとれぬほど弱い声でいった。

「いいえ。痛いだけです。慣れれば、快くなるとお客さんが言うけど、ユミにはまだ痛いだけ、鞭うちの喜びは判りません」

「それなら、無理をすることはしない。やめて置こう」

「嫌っ！ 早く、この油を塗って。痛がるユミがお嫌い？ でも、お客さんは、ユミが痛がったり、泣いたり、悲鳴をあげたりする方が喜ぶのよ」

杉原も、美少女の誘いにサジスチックな欲

望をそそられないわけではない。

今夜も広間では、特別ショーとして売上げ成績の悪い女たちが円形舞台に連れ出されて会員達から徹底的に鞭打を受けた。ムチ打用に肉体を売り、鞭打が普段着のように慣れた女達——それだけに情容赦のない残酷な打たれ方であった。黒髪で宙吊りにされたり、さかさずりにされた白い女体。それが空中できりきり舞いして躍り狂い、許しを乞う。ムチ打は、かわるがわる女たちが血をふき、気絶するまで許されなかった。

その始めて見る凄惨な光景に、杉原は異常な昂奮を覚えた。自分がムチをにぎっているかのように、無意識のうちに握りしめていた掌に力がこもって、ベトトリ汗をかいた。いじめられる女の顔や、のたうちまわる白い女の軀に、不思議なしびれるような美しさがあること知った。

しかしあれは、視覚だけの病的な官能美の世界であつたのか？ 円形舞台の裸女たちには、ちっとも同情しなかったのに、とりすがって鞭打をせがむ目前のユミを、杉原はなぜか鞭うつ気がしない。

このきよらかな処女を倒錯の犠牲にするのは罪だ。杉原は、ユミのつぶらな夢見るよう

な瞳を、ばら色の頬にえくぼができて、こちらまで思わず微笑まされるような愛くるしい口もとを眺めていると、いとしさがつのつていよいよはげしい罪の意識に苦しめられる。

このあどけない美少女が、ムチ打たれてもだえ狂う姿を想像すると、杉原はめくらめくような快感に歯がカチカチ鳴り出す。それはどんなに甘美で夢魔のような恍惚の一瞬であることか。その強度な愉悦は、とうてい円形舞台でさいなまれた女たちとは比較になるまい。

しかしユミを買う外の会員達には、この上ない快楽の刺激剤となるはずの、彼女のういういしさ、みずみずしさ、痛々しさが、杉原の場合は反対に、外の女達には感じたドス黒い嗜虐の情欲をさえぎってしまうのだ。

つまり、杉原はユミを恋していたのだ。四十五才にもなつて杉原一郎氏は、ロマンチストというわけか。彼は自嘲のにがしいを浮べた。

ユミはタイルに四つんばいになって、黒髪を頭からさかさまに被るようにして、白くつやつやとした背中をむき出しにした。

「お願い。早く油を塗ってムチうってください。そうすることが、このクラブの規則なの

です。あなたにお逢いしたはじめての夜、あとでわたくしすごい折檻を受けましたの。あなたが鞭打ってくださいならなかったのは、わたしの身体に魅力がないからだ。サービスやテクニクが悪いからだ。みんなわたしのせいにされて、まだ調教が足りないんだって罰を受けたのです。あんな恐ろしい目にあわされるくらいなら、あなたに鞭打たれるくらい、なんでもなくてよ」

早く早く、とまるいこんもりしたお臀をふって催促するユミ。それは、恥も外聞もない女奴隷のポーズだった。

「ユミ、君は、それを侮辱だと思わないのかい？」

杉原は、いいよのない怒りにかられて、無意味に近い質問をした。

ユミは、うらめしそうに杉原を睨め、ヒステリックに叫んだ。

「あなたのように、トルコ風呂の真似事みたいなことだけで満足する人は、ここには居ないのよ。みんな支払った分だけは、わたしから奪い返そうとガツガツしてわたしを責めたり、もてあそんだりするわ。でも、この女にされてしまった以上、何をされても、どんなひどいあさましい要求をされても、仕方が

ないことなの。それでもユミ、そういうお客さんの方が、気が楽なの。ユミが何もしなくても向うから勝手に好きなことをしかけてくれるんだもの。それに較べるとあなたは、わたしは何かも、リードしなくてはいけないわ。男の人に鞭打をせがんだり、この女たちができるサービスを自分から誘ったりリードするなんて、女のわたしにどんなにつらいかなさけない気持がするか、どんなに残酷なとか。あなたに想像できて？」

ユミは泣くまいと、必死に歯をくいしばって顔は痛恨と悲憤にゆがんでいる。彼女は男の視線に耐えられず顔を伏せた。

杉原は、その感極った表情に、脆く崩れていく女奴隷の宿命——心中ではきつと歯ぎしりして反拗しながらも、クラブの罰則に呪縛された恐怖が淑やかな女的美徳や誇りを一つ一つ剥奪していく姿を如実に見た。

彼はうつ伏せた水々しい肌に丹念に油をすり込み、両手を揃えて括り天井から鎖でぶらさげた。彼自身も体の内側をかきむしられるようないらだちと腹立しさを感じていたが、それは少女をさいなみたい欲望とはまったく別個の沈鬱な感情だった。

「遠慮しなくてもいいのよ。思い切りぶって

——あなたがやさしく打てば、あとのお客がよろこぶだけだわ。どうせ傷だらけにされるなら、わたくし、あなたにぶたれたいの」

もの悲しそうにいう、そのしみ入るようなつぶやき。哀調を帯びた声は、杉原の心に触れ彼を感動させる。しかしそれに比例して、ユミのいじらしさ、かなしさが、杉原の胸にせまり鞭打つ手をひるませてしまう。

鞭に対する恐怖は、ユミの全身にあらわれている。すんなりした両手をつり上げられていなかったら、逃げ出したいとたまらない顔付をしている。恐ろしさに鞭打たれる前から固く眼を閉ざして震えている。

肌にムチが鳴るたびに、弾力的な白い胸と腰をもった少女は、身をくねらせ、くいしばった唇から苦痛の呻きがもれた。

「ユミ、痛いんだろう？ だいぶ膚が赤くなっただけ」

「ううん。まだまだもっと強くぶって、ミミズ服れがついてなくて、あとで調べられて、よけい酷く罰を受けるだけですもの」

杉原はいわれる通り強く打った。呻きが悲鳴にたかまり、ユミは顔をくしゃくしゃにして泣きわめいた。

五

杉原一郎は、重役といっても東証第二部上場会社のサラリーマン重役である。

彼の月給袋などクラブに三回も行けば空っぽになる。一回顔を出して一時間ユミと鉄格子の奥で逢いびきすれば、十萬円の遊興費は覚悟しなければならぬ。妻と三人の子供の父親として家庭も守らなければならないし、会社の接待費を流用するにしても、限度がある。彼は給与の前借りをしたり、友人に不義理な借金をしたりして、苦しい金のやり繰りをしていた。

それでも、杉原は週に一度ずつクラブが開かれる毎に、ユミの許に通っていた。

ユミは逢うたびに、貞操帯を付けていることが死ぬほどつらい、これさえなかったら、こんな犬畜生にもおとるあさましい鬨り者にされずとも済むかも知れないのに、と涙まじりに訴えるのである。

「わたし、できれば、あなたに貞操帯をはずしてもらいたいの」

たとえ金銭で取引される処女性ではあっても、それをユミから求められることは、彼に情愛をよせている証拠ではあるまいか？

そんな風に解釈して、杉原は、これが俺の人生で最後の恋なのだと、情熱に胸がときめくときもある。そんなときの彼は、蠟燭の燃え尽きる瞬間の、炎のひたむきな激しさに似ていた。

しかし恋に溺れてしまうほど、やはり杉原は若くはない。会社や家庭や打算があつて、ユミを一人の女奴隷として冷徹に眺めている事もある。彼女の処女性を尊重しても、そのために大金を投じるほどの執着も感じない。そんな彼がユミから、どうしても離れられないのは、ユミの持つ痛ましきだった。

と同時に、胸がかきむしられるような切ない気持の裏側には、ユミの持つ痛々しさに、彼女をなぐさみ物にする会員たちと同じ悪魔的な欲望を抱いているもう一人別な杉原——それがユミの許に足を運ばせる一因になっているのも確かだった。

しかしその相離反するように思われる感情の辿りつく終着点が、ユミに対する恋情であることを、彼は知っていた。したがってユミの痛々しさを愉しもうとする嗜虐的欲望は、鉄格子の中でユミに直面すると、たちまち同情、憐憫という感情に変貌してしまう。いや愉しみに出掛けていることは事実だったが、

それより自分の愛する女が、会員たちの共有する女奴隷であり、彼等に捧げられた生贄であるというみじめさが、彼を傷つけあわてさせる。

無駄なあがきだと知悉しながらも、何とかしてユミを救ってやりたい護ってやりたいと想いわずらう。そしてどうしてやることもできない不甲斐のない自分自身に切齒扼腕して、杉原はひとり身悶えする。せめて助けてやれずとも、ユミが哀訴する貞操帯なりとも、一日も早く自分の手ではずしてやりたいと思うのである。

六

そんな或る夜——。

指定された時間にクラブに行くと、ユミの鉄格子に錠戸シヤツターがおりていた。巡回しているボーイに訊ねると、あと三十分くらい待ってくれという。

杉原は賭博場にある酒場に入ってウイスキーを飲んだが、その味の何んと苦かったことか——消し難い嫉妬と独占欲に、彼はさいなまれていた。

このクラブも昔の女郎屋と同じで先客があれば、待つか、外の女を買うより仕方がない

が、このクラブが特殊なだけに、ユミがどんな虐められ方をされているか、どんな破廉恥な奉仕を強要されているのかと思うと、胸がさわいで気が狂いそうになる。生きた心地もしなくなる。酒の酔いではまぎらせることのできない、単なる嫉妬以上のドス黒い心痛であった。

賭博場では煙草の煙りが立ちこめ、ルーレットが廻り、話声や哄笑にまじって女たちの悲鳴が天井に反転している。

手足を片方ずつ一緒に鉄枷を嵌められた女が四つん這いになって、背中に男を乗せ、はだかの臀を鞭打たれて追い廻される競技場がある。どの臀も炎症を起して真赤に腫れ上がっている。不自由な四肢をよろめかせ、押しつぶされて床にくっつきそうになった腹をあえがせ、ゆれ動く下向きになった乳房をもみしだかれ、つねられて、女たちは苦しうに息を切らせて這いまわっている。

大きい車輪に磔にされてぐるぐる廻る裸女を狙撃する射的場や、尖に針の付いた矢を射る弓戯場がある。

杉原はキューピットの持物のように小さな弓矢で、回転する女体を射った。矢は波打って廻る白い胸と腹に当って、羽根が震える。

女は賞金代りに矢の当たった数だけ、鞭打ってくださいと、もの哀れに懇願した。

約四十分後、杉原はユミの個室に居た。

ユミはまぶしそうなやさしい笑顔を示して彼を迎えた。髪もお化粧も入念にし直して、先客の痕跡をかくそうとした心づくしが窺れるが、杉原には心なしか、もの憂げに、だるそうに見える。それに泣き腫らした跡のある赤い眼。長くそりかえった睫毛に、かすかな涙の玉がのこっている。セーラー服の胸当のない白い咽喉の下や頸すじにかけて、お白粉ではかくせないキスマークのような歯型がしるされている。

その男の魔手にほんろうされた名ごりが、杉原を不快にした。

「ぼくで、何人目だ」

「嫌っ！ そんなおっしゃり方。酔っているのね」

ユミは、見るも悲惨な顔をして杉原を睨めた。彼女は懸命に不機嫌な男をとりなそうとあせても、どうしたらよいか、その技巧も言葉も知らない。おびえたような眼差しをなげかけて、佇んだまま、とりすがるような瞳でおどおどしているだけである。

その軀や動作から発散する痛々しさは、杉

原を苛立せる。この可哀そうな少女の気持をくみとり、ちっとも憎んでなんかないのに、酒場からずっと抑圧されていた嫉妬に繋る怒りを、このいたいけない女奴隷に爆発させたくなってしまう。

杉原は狂暴にセーラー服のホックをひきめくった。その夜ばかりは、ユミは身をもんで抵抗した。ビリッと布地が引き裂ける音が走って上体があらわになり、引き倒すような荒々しい手つきで、スカートのひき落された。

「見ないで！ お願い」

黒いストッキングと貞操帯だけにされたユミは、男の手をはねのけると、うしろずさりしながら、涙ぐみ、身をよじって厭っ厭っをくりかえした。

羞恥と狼狽に赦らみ、ひきつった苦渋に満ちた顔。ユミは、軀中に脈打って走るミミズ腹れの真新しい鞭痕を平気で見せるほど、このクラブの女に慣れ切っていないのだ。

つつましかで敏感な心を失っていない処女は、じりじり壁ぎわまで後退していく。背中が壁でさえぎられたとき、ユミはそのまま崩れ落ちるように蹲踞まり、お尻を壁にくっつけるようにして、顔をおおった。

杉原は歩みよって鎖の痕が赤黒く残った手

首を力委せにたぐりよせ、大きな円形クッションにひきたて、その上に俯向かせた。

「ずいぶんとサービスさせたものだな。油も塗らないで、こんなに酷く鞭うたせたのか。

どんな男だった？ 若い、いい男だったか」

嫉妬が、愛情と紙一重で裏表になっている憎悪が、杉原にいわせる怨言だった。

肩から臀部を一面に埋めつくした鞭模様がどんなにおぞましい様相を見せているか。

何度も失神しかけたユミは、その時の焼けつく痛感で知悉している。いまでも熱っぽく疼くのだ。それをながながと寝そべらされて男が眺めるままに展示していなければならぬ辛いさ、あさましさ。そのうえ杉原から口で責めらる情なさ、いくら泣くまいと思っても、自然に涙がしゃくり上げてきて気のやさしい彼女は身を震わせた。

しかし杉原は杉原で、はらわたを抉られるうな愛憎の苦しみに、歯ぎしりして耐えていた。それはすべて、ユミを愛することから生じた煩悶だった。

彼がムチ打つときは、ユミの顔色や軀を確かめながら、手加減を加える。が、この第三者につけられた鞭痕は、凄惨きわまりないものだった。

——かわいそうなユミ、どんなに痛かったことか。

杉原はユミが不憫でふびんで、悲しみのド底につき陥される。その憐憫と悲哀が深ければ深いだけ、一方には嫉妬に狂った憎悪の念も深いのだ。彼は理性でも感情でも判っていないが、何の罪もないユミにつらく当りたくなる。

ユミを可愛い、いとしいと思う恋慕の情さえ杉原を兇暴な発作に追いやってしまう。その抑え難いものが、心の中では涙ぐむ想いの彼なのに、そんな思いとは、うらはらに、ユミをねちねちいじめてしまうのだ。

「鞭うたれてから、何をされたんだ。えッ、一つ一つ説明してみろよ、喜んでサービスしたんだろう」

「いやっ嫌っ！ もう勘忍して」

泣きじゃくる少女は、躍り上がるように顔をあげ、無限の怨みと哀しさをこめた眼で、杉原にうったえる。

せっかく杉原を迎えるために、心をつくした化粧も涙で崩れてしまっていた。

ユミはどこも縛られてはいない。いつものように香油を塗ってくれともいわない。観念してばら色の軀をひらいている。片腕で眼だ

けを覆って杉原の眼下に仰臥している。

鞭が襲うと、ほとばしる呻きと悲鳴でくいしばった唇がひらき、身を左偏右偏させて転ろがりまわるが、逃げ出そうとも、自由なもう一方の腕で防ごうとも、止めてともいわない。鞭が離れても、傷ついた背中や臀をこすられる苦痛に顔をしかめている。

顔を蔽った腕のあいだから涙をこぼして無抵抗で従順な女奴隷の姿態をさらしていた。

「どうだ。お尻や背中を打たれるより、痛い。前の男もこうやってひどく打ったか？」

杉原はサジスチックな満足など微塵も味わえなかった。そういう彼自身がポロポロ涙をながしている。彼は駆け寄ってやさしくいたわってやりたい気持とは、まるきり正反對なことをしている自分を知りつくしている。

ユミに、この俺の気持は判るまいな？

ユミを鞭打つこと、それは結果的には、杉原の狂わしい愛情の告白に外ならないのだ。

彼は、愛情をこういう乱行に変えてしまう秘密クラブの組織が恐ろしく、呪わしく、孤立した自分を感じる。

四十五才のこの歳まで恋をしたことのない杉原が、恋のテクニックを知るはずもない。

彼は、年にしては純情卒直な表現と動作でぶ

つかっていった。

「ユミ、許してくれ。こんなひどい目にあわせて、しかしぼくは君を愛しているんだよ。心から君を。ここは本当に、恐ろしいところだ。そうして君は本当に可哀そうな女だ」

杉原は少女の胸に顔を埋めて、むせび泣いた。近頃すっかり白髪のかえた杉原の髪を抱きしめてなぜながら、まだのどをひきつらせてしゃくりあげながらも、ユミはやさしく心にしみ入るような声でささやいた。

「いいの、ユミにもあなたの気持が判っているわ。あなたは、やさしい人よ。わたしだって、あなたが、あなたが、好きなの」

最後の言葉だけ、あたりの気配におびえたように慎重に途切れ途切れにつぶやいたが、ユミの眼は酔ったようにうっとりして、杉原の心をうった。この心きよらかな処女は、心にもないお世辞を言ったり、嘘をついたりする女ではないことを杉原は知っていた。

「だって、ここでは外のお客より、ひどく鞭打れることが、あなたへの愛を証明することになるんですものね」

杉原は目がくらくらするような感動と感謝の気持で、胸がいっぱいになった。

痛さを我慢して鞭打の強度によって外の男

たちと区別しようとするユミ。その痛ましい気持に、杉原は胸が切なく、はらわたを抉られるような悲痛きわまりない気持になる。

「でも、愛し合うことなんて、ここではない、許されないことですわ。あなたの一生を破滅させることになりますものね」

涙にぬれた唇があえぎ、淋しい佻しいユミの笑顔だった。

七

一カ月経って、ユミの競売の日が来た。奴隷市場はサロンの円形舞台で開かれた。ざっと三十名ばかりの処女が居並び、一人一人台上にあがって年令や軀のサイズ、愛戯の嗜好や特徴を述べながら、裸形を展覧して、「どうぞ、わたくしを女にしてください」と手を合せて哀願するのである。

どの女も二十才前の水々しい美人揃いだ。鞭を手にした競売人の命令にしたがって、白い歯をのぞかせて咽喉の奥まで見せたり、身をくねらせて、はっとするほど美しい乳房や腰の曲線をえがいたり、貞操帯をはずして四つん這いになったお臀を高く客席に向けてつき出したりした。

まだ成熟していない、小娘という感じの幼

い顔が多かったが、どの女も甘い媚びの微笑や、精いっぱい痴態を示して、買い主の購買力をそろうと必死になった。そのぎこちないが、羞恥も屈辱感も忘れた懸命な身のこなしは、貞操帯を恐怖し嫌厭する一途な想いが、悲痛なほどに感じられた。

だが客席は意外なほどわかなかった。台上まで近寄って覗き込んだり、オペラグラスに両眼をこすりつけるようにしたりして、あけっ放しのばら色の肌を觀賞して、眼の法楽を愉んでいるだけである。サロンには昂奮の熱気が孕み、生ツバを呑み込んだり、なやましげな溜息がもれて舞台の美女に気もそぞろになっっている様子だが、威勢のいいセリ売人の掛け声に調子を合せる会員はない。

それは競売値段が法外に高いからだ。このセリ市では最初に売り手が一定のせり値を説いて、その価格以上で会員たちがセリ合う売買だった。そのセリ値は初夜権と共に向う一カ月間落札した女を独占できる権利も含まれている。女のよし悪しによってまちまちだったが水揚げ料としては高すぎる価格だった。ほとんどの処女が売れ残り、ユミの番が来た。指定されたセリ値は常識では考えられないほど高かった。

杉原は頭をかかえこんで、椅子にくずれ落ちた。眼の前が真暗になったような心地だった。彼の内ポケットには二百万円しか入っていない。それも無理算段した高利の金だ。もうこれ以上は、会社の金でも流用しなければ一文も都合できなかった。

彼がユミの競売に参加したのは、彼女への恋に賭ける狂熱——その無垢な生娘を外の男にけがされたくない独占欲だった。

客席は黒覆面で埋めつくされて、人相の判別はつかないが、きっとユミは喉も裂けんばかりに見開いた瞳をさまよわせて、杉原の顔を血まなこになってさがしとめ、彼の声がとびだすのを、いまかいまかと待ちこがれていることであろう。

だが、杉原には、どうしてやることもできない。切齒扼腕——買い主があらわれないことを望み、いたむような未練を覚える。その一方には、哀れな処女奴隷の境遇を想うと、たとえどんな男にしろユミを貞操帯の呵責から解放してやる買い主が出現するのを望む気持もする。どっちに転んでも杉原には、息が詰まり胸が痛む一瞬だった。

買い主は現れなかったが、杉原は嬉しいのか悲しいのか複雑な気持だった。ユミはけが

されなくとも済んだが、また向う一カ月間、処女であるがゆえの虐待に身を委せなければならぬのだ。

クラブの経営者は売り急ぐ気配はまったくない。あわてずとも新鮮な処女の色香に憑れた男たちが何度も足を運んで金を落す。じつくり稼ぎながら、杉原のように熱中した、もっと別の金持の買い主があらわれるのを、機が熟すまで待とうというのか。

杉原はそっと上眼使いに舞台を眺めた。ユミは客席を振りかえり振りかえり、台上を下りるところだった。うなだれて悄然と肩をすぼめた後姿の淋しさが、杉原の目に沁みだした。

八

競売日から一カ月半ばかり、杉原はユミに逢うことはできなかった。セリ市の一週間目に、ユミが鉄格子の中で舌を嚙んで自殺を企てたのだ。

杉原はユミの不在を淋しがった。いまではユミの居ない人生など、彼には考えられなかった。

自殺が未遂に終って生命に別状はないと聞かされただけで、彼女との面会は許されなかった。それでも彼は何んとかユミを見舞って

やりたくて、自分の手で一時間でも看護してやりたくて、一週間ごとにクラブに無駄足を運んでいた。

長い苦しい一カ月半がすぎて、ユミの鉄格子の錠戸が開いた。すこしやせて心なしやつれては見えたが、薔薇色の頬には思ったほど暗い翳も憔悴の色も窺えなかった。

ユミはうれしげな、ひとなつかしげな表情を全身にうかべて杉原を迎えた。

「ユミ——助かってよかったな」

杉原は、元気なユミを見て心がはずむと同時に、胸の片隅には手放して喜んでいいのか疑問に想う悲しみに似た感情も潜んでいた。

どちらからともなく抱き合って接吻したとき、杉原は異様な唇の触感に愕然となった。

「二度と自殺できないようにされたの」

口唇をもぐもぐさせたユミの発音は不明瞭で聴きとりにくい。彼女は、はにかんだような、いたましい微笑を見せて口をひらいた。

ユミの小粒で真珠の玉を並べたような歯が一本残らず抜き取られていた。

「ひどい！ あんまりひどすぎる！」

杉原は大きな鉄槌で脳天をがんと一撃されたようなショックを受けた。このクラブ全体に対して、軀中の毛穴という毛穴から血が噴

き出すような怒り。彼は思わず両手をにぎりしめ、身体が震えた。

「ぼくは警察に密告するよ。ユミを、こんなひどい目にあわせた奴等を、このまま許して置くわけにはいかない」

この一カ月半の間、杉原は何度それを考えたことか。その度にクラブの報復や私刑が彼を脅かし、事件が明るみに出た時、会員として取調べを受ける自分の名誉を考えた。四十五年間コツコツ地道に築き上げた地位は一夜にして崩壊するだろう。家族や会社や、そのあとの人生を想うと、彼のはやり立つ気持もくじけてしまった。しかし、いまは正義感と義憤が、強烈な炎となって彼の胸を灼き、自分でもびっくりするほどの勇気が出た。

「お止しになって、そんなことしたって無駄なことよ。警察だって、ここまでは手がとどかないんだって話だわ。前にも何遍もあなたのように、警察に訴えた人があったけど、皆んな殺されるか、奴隷にされてしまったのよ」

ユミは、蒼くなって立ちすくんでいる。その真実にみちた声。

このクラブの会員たちは、政財界の大物も多数まじっていると杉原も聞いている。ユミ

の言う通り、事件はうやむやにもみ消されてしまいかもしれない。これまでの杉原なら、その黒幕に脅えて泣き寝入りしたかもしれないが、いまは最後で一度の恋にすべてを賭けてみる覚悟だった。

杉原は、怯えて心配そうなユミの顔をしみじみと見詰めた。

清純であどけない顔立ちの美少女の口もと、ふるいつきたいほど愛くるしい、この顔が、心の底から晴々とした明るい笑顔を現わせたことが一度だってあったろうか。いつも、ものかなしげな淋しい微笑を浮べて、ぎこちない控え目な媚びを見せると、黒い長い睫毛が伏せられてしまう。夢見るような黒い瞳も臆病そうにおどおどしたり、涙ぐんでばかりいる。

それに、たとえ哀切な聲に沈んでいても、微笑むと白い歯がこぼれて、それを眺める者をほほえませ、心をなごませ、胸に灯をともし。あの美しく愛くるしいえくぼや口もとの風情も、もう二度とは眺めることができなくなってしまう。

杉原は、この笑顔の美しい少女が、心おきなくバラ色の頬を綻ばせ、つぶらな明眸や可憐な口唇が、その本来の愛くるしさで彼にさ

さやきかける笑顔の幻影を想う。そのために、彼は決然と戦わねばならぬ。

「ユミ——勇気を出すんだ。ぼくは、どうなってもいい。やるとこまでやってみるんだ。だから、もう二度と死のうなどと思っちゃいけないぜ」

ユミは、杉原の胸にぶつかってきて、うるんだ陶酔の眼で、からみつくように彼を見上げて、歯のない唇をうごめかした。

「ユミは、あなたのお気持だけで、死ぬほどうれしいの。わたし、どうせ一度死んだからだよ。どうなったっていい。あなたのためなら、いのちだって差し上げますわ。でもわたし、あなたまで捲きぞいにしたくないの。ね、警察だけは言わないで、お願い。わたしあなたと、ときどき来てくださるだけでうれしいの。あなたのことを想って鞭打たれあなただけを想って睡りますわ」

「しかし、君……」

白い手が伸びて、杉原の口をふさいだ。涙ぐんで、いじらしく首を振り、軀中をみもたえさせて、思いとどまらせようとユミは必死になった。

いつものように入浴後、ムチ打が終ると、遠慮勝ちだが、思い詰めた表情で、杉原の手

を引っぱって寝室に誘った。

「ユミ、さっきばくのためなら、いのちもいならいと言ってくれたね」

「ええ、もしあなたと一緒に死ねたら、わたし、どんなに幸せか知れないわ。わたし、いくら奴隷だって、誰にもいまみたいなことするの厭よ。けがらわしい、つらいことですわ。いくら我慢しようと思っても吐き気がするの。でも、そんなことくらい、ここでは何んでもないことなのよ」

ユミは杉原の胸の中で、突発的にくっくつと嗚咽した。鞭痕が赤く残った肩や背中がはげしく波うって、起した顔にかすかなまどいたようになって、シーツをかきむしって一層激しく慟哭した。

「ユミ、ばくの大好きな可愛いユミが、そんな気狂いどもの犠牲になるのかと思うと、ぼくまで死にたくなる。しかし、どうせ死ぬなら、やっぱり警察に訴えよう。失敗して殺されようが、どうされようが、死ぬ気なら、もともとじゃないか」

「でも、でも、あなたには奥様や子供もお在りになるんですもの、いけませんわ」

「ぼくは、君を誰にもけがされたくはないと思つて、あの夜二百万円用意してきたが、ダメ

だった。あの時は貞操帯さえなければ、君の苦しみもすこしは楽になるかと思つていたが結局ここに居るかぎり、君は一生、会員相手の女奴隷だよ。ぼくは妻も子供も可愛いのが君を離したくない。君のない人生は考えられないんだ。だから、いいかい、一か八かやってみようじゃないか」

ユミは力無くうなずいた。

「いいわ。でも警察に訴える前に、ユミを一度本当に愛して、わたし死ぬ前にあなたの花嫁になりたいの。こんな貞操帯、ヤスリ一つあれば、はずせないことないわ」

九

ユミの貞操帯は、永遠に杉原一郎によって脱されることはなかった。

彼女が言うヤスリ——小型のヤスリを杉原はポケットに用意はしていたが、それを使う機会はなかった。クラブの中で使用すれば、その場で露見して、即刻二人に私刑がみまうことになる。やはり警察に密告するのが先だった。

しかしその結果は、杉原一郎という男が或る夜突然行方不明になって、去勢され読唇術でしか喋れない人獣Vが誕生しただけだった。

た。

警察が無能であつたわけではない。当時杉原が自分以外に知つてゐる会員は、馬淵孝だけだった。彼も一緒に参考人として出頭し、事情聴取を受けた。二人の情報にもとずいて都内に大掛りな調査網が極秘のうちにはりめぐらされた。杉原がひそかに手帳に控えて置いた車のナンバーも役に立なかつたし、警察の必死の捜査にもかかわらず、何んの手掛もないまま迷宮入りになつてしまつた。

杉原が警察に出頭したその日から、クラブからの連絡電話は一度もなかつた。

その代り、月のない暗闇の夜、クラブから迎える車が来て、帰宅途上の杉原をピストルで脅した上麻酔薬で睡らして誘拐した。

彼とユミに対する私刑は、クラブの規則通り厳正非情に決行された。

このクラブの経営者が誰であるか、私はほぼ見当がついてゐる。きつとどの会員も馬淵孝以外の会員を知るまいと思われるのだが、いまの私には、そんなことは、もうどうでもよい。それを知つたところで、私にはどうすることもできないのだ。

私は昼も夜もうつろな眼をして死んでゐるのか生きてゐるのか判らない。私のこけた頬

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

にかすかに血の気がさし、眼に生氣が甦えりあばら骨が出た胸がときめくのは、この竹鞭で、はだかの女をいじめる時と、死んでしまったユミのことを思い出す時だけだ。
私は二年半前の拷問室の凄惨な光景を思い出す。重い鉄扉以外はすべて部厚いコンクリートで囲まれた真四角な箱のような部屋。
そこでユミは訊問を受けた。あの時ただ一言「こんな人知らない」とさえ言えば、私に對するリンチの執行人に選ばれて命じられた通りにさえすれば、彼女は助かったかも知れない。

しかしあのやさしい天使のような心を持った少女は、鎖につながれた私にとりすがってさめざめ泣き「愛している、愛している」と気が触れたように絶叫した。

そのために身も心も処女の理想像のようなユミは、貞操帯をはずされて、惨鼻な木馬責めにあわされた。

私は一カ月ばかり生死の境いをさまざまに、どうにか動けるようになり、ユミを愛することも、愛をささやくこともできない軀にされたときユミが手渡された。

あの高貴な細工物のような、ふくらみとみずみずしい容姿は荒廃して、貞操帯のなくなっていたユミは、ポロ布のようになっていた。うぶ毛が光る薔薇色の頬はゲッソリそげ落ち、眼窩が窪んだユミ。蒼ざめた顔のなかでつぶらな愛らしい瞳だけが、私に無限の愛をささやきかけていた。

私はそのけがれを知らぬ神様のような眼を針で突かねばならなかった。私は咬む舌さえあれば自殺しただろうが、卑怯者の私は、私のために木馬責めに耐えてくれたユミを裏切って、彼女を盲人にしてしまったのだ。私は拷問に負けてしまったのだ。

それだけではない。それからも私は愛する

ユミを自分の手で虐待しなければならなかった。ユミはそのため勝腕が腐って死んだ。私の気持を察して、私をかなしませまいと呻きも、悲鳴も、怨言一つ言わなかった、いじらしいユミ。彼女は、私が殺したみたいなのだ。

ユミが死ぬまでは、私はまだ人間らしい心もあった。懺悔と贖罪の涙や悶えも知っていた。ユミ以外の女にもやさしかった。しかしいまは、すっかり外道に堕ちた。それでも、ユミを思い出す時だけ、私は涙ぐみ、私の心はきよめられる。

私もやがて、この世から消されるだろう。

私の前任者が消されたように。

あとどれだけの寿命か知らぬが、私には死の不安もない。死は深い眠りだというが、死んでも、いとしい私のユミを思い出せることができるかどうか。本当にあの世というものがあって、ユミに逢えるかどうか、神や仏も信じない私には判らない。

ただ一つだけ、死ぬ前にしたいことが私にはある。或る詩人がいった。一杯の冷たい麦酒と雲を眺めている自由な時間——両方ともここにはない、それだけのことだ。

△完結▽

<手記>



S と M の 行 方

四 宮 吉 朗

私が奇クを初めて見たのは、確か昭和二十七年だったと思います。

当時、私は大学受験に失敗して、郷里である北陸の小さな町でくすぶっていました。

学園という微妙な糸のつながりを、急にプツンと切られた境遇の変化、又、試験の失敗からくる自己能力の否定、という人生の激動期或は揺籃期ともいうべき一時期に翻弄されているといった時でした。

内容は余り精しくは覚えては居りませんが

『戦争と性欲』と題したものであったように記憶しております。紙質も悪く、いかにも安っぽく、三文雑誌そのものでした。しかし、それからというものは、私は奇クを手にした時だけ、何か快い落着きを感じ、期待しているものに、じかにさわった様な充足感を覚えたものです。

その間、十有余年。奇クはそれなりに、進歩と云うか、当然そうなるべき方向へ、突き進んできた様です。小説『花と蛇』は、その

意味で一時代の結集篇とも言うべきものではないでしょうか。

最近号の誌面を賑わしているものに、夫婦SMプレイや、カメラルポ（私はSM以外は興味がありませんので、SM以外は割愛させていただきます）などありますが、SM小説も『花と蛇』以上のものは、今しばらくは出ないのではないのでしょうか。だから、奇クの今後のSMの行方というものは、創作は勿論のことですが、これにプラス臨床記録の二本立て押し出してゆく他はないでしょう。

縛ることに対する人体の抵抗力、体力からくる忍耐力、散華に対する意志力、殊に女性に縛られ、責められて、崩壊するに至るまでの美、崩壊してからの美との差異、マゾとそうでない人との違い、微妙な変化。Mの追求のその果ては、人間の常識をはるかに越えてゆくのではないのでしょうか。そこまで見きわめてみたいものだと思えます。

私はSM両刀使いなので、ともかく自分を実験台にMの実験をしました。といって、相手がいないので自分一人で悪戦苦闘の末の記録なのです。

縛られたい、責められたい。体中が、それを要求する、そんな或る日。私は必ずといっ

ていい程、素っ裸になります。肌刺す寒い冬の日、全然火の気のない部屋でも、ヒモが一本体に巻きつくと、それだけで寒さが体に感じなくなってしまう。ですから、足首、膝の上、胴、胸、手首、或は股間とがんじがらめに縛ると、全く寒さというものを忘れてしまいます。一度風邪をひいてはいけないうと思つてストープを小さくつけてプレーしたことがありますが、最高潮のとき、紐でくびれた腰の所から汗がにじんで、やがて滴りとなつたことがあります、本当に嘘のような話です。

私の家は鴨居がないので、四寸角の十二尺ものを一本買つてきて、洋服ダンスと押入れの一番上の段の敷居に渡して梁を造り、滑車と綿ロープと繃帯を準備します。繃帯は直接体を縛るときにだけ使います。(体にアザが残らないため)前方と左右には鏡を用意します。(三面鏡をばらしたものの)梁に滑車をぶら下げると、これで準備は出来上りです。

さて戸締りを確めて、外から見えないようにして、気分がのつてきたところで裸になります。そして膝の上を厳しく縛ってしまうともうどうにもなりません。次いで胴、臍の上を割合きつく締めて、次いで胸、これはあら

かじめ前以つて適当な輪を作つて(紐はなるべく多い方がよい)肩をすばめながら頭から入れてゆきます。乳房の所へきてから胸をはり腕を横に持つてゆき、手首は又、別の紐で引張れば勝手に締つてゆくように、先に輪をこしらえて、その輪を一番最後に後手でつこめばよいわけです。

この状態になつておいて梁からぶら下ることを考えれば、よいのですが、しかし、初め踏みはずすようにして降りる時は、とても不安で、本当に吊り責めの拷問にあつてゐるような気持になつたものです。

ともかく、この時は、宙吊りになることに成功したのですが、その一瞬、私は心の中で「快哉」を叫んでおりました。体は二十度位に前に傾き、後手の手首も滑車のおかげで、グーンと締つてきました。もし、このままで踏台をとられてしまつたら、自分一人では絶対にほどこことは出来ないでしょう。三方の鏡には見事な吊責めの姿態が写っています。

一番重量のかかつてゐるのは腹部でした。ヒモは腹を二つに折つてしまつたように喰ひ込んでしまつて殆んど見えません。下腹がぶーうっとふくれていました。この間、時間にして、ほんの二、三分。腹や手首はそうでも

ないので、胸に巻いた紐が痛いのと苦しいのとで、とても我慢できませんでした。よく映画なんかで見る後手吊りのように、とてもあんなに長い間、吊られておられるものはありません。殊に胸と後手だけで吊つたしたら、とても五分間と、じつと辛抱していただけるものではないと思います。

それで次に私が考えたのは、胸に紐をまわさずに、後手と二の腕の所だけに紐をかけてみることでした。先ず踏台の上にあがり、あらかじめ適当な輪にした幾重もの紐を後手から通して、二の腕の所までずりあげてゆきます。別の綿ロープで吊れるように背中の中で結びつけておいて、そのロープを滑車に通して、その端を胴に巻いてある紐の背中に結びつけます。手首も同様にして縛るのですが、手首を縛る紐は、この時二の腕を拘束してゐる紐の内側へ通しておくべきです。こうして吊りさがりますと、体に悲のようなものも残らないし、そう痛くも苦しくもありません。しかし、それでも、五分も経つと疲れてきて全身の力が抜けて、体が下へ下へさがらうとします。

私は大体一時間から長い時で三時間ぐらいの時間をかけて、このプレーをするのですが

やはり困るのは、高い台の上で作業をするので、次第次第に体の自由が奪われてゆくと、縛りの途中で安定を失って転落してしまうという事です。私は額に一度、背中にも一度怪我をした経験がありますので、マゾ気分の昂揚のまま、無理を承知で無茶な縛り方をした場合なんか、楽しかるべきプレーが思わぬことになることもあり得ます。

六月号の秋島とよ子さんも述べられておられますが、私も一度踏台が倒れて、どうにも出来なくなったことがあります。この時は、足首もぎっちり縛って、おまけに膝の上を縛った紐に連結して、ぎりぎりとしぼりあげて吊っていましたので、丁度逆エビで駿河責めの恰好になってしまいました。

顔は畳についているのですが、胸に巻いている紐が締ってきて、勿論手首を縛った紐もピンと張っているのです、五分も経った頃には痺れてきて手の指が、それとはっきり判るよりに硬直してきました。こうなったら、あせったら余計悪いと思って、出来るだけ畳についている頭に力を入れて体をうかすようにして、少しでも紐が締めつけないように努力しながら、どうすればよいか、冷静に考えてみました。

要は下になっている頭を使って、滑車の真下へ体の重心を運んで、足を上にあげて倒立するようにして、何とか手首の紐をゆるめて抜くより他、仕方がありません。そう考えると、一刻も早い方がよいと思い、前額で畳を押すようにして体を後へずらしながら、二つ折れになった足を蹴るようにして上へあげてゆきました。勿論、腕はますます痺れてくるし、指はもう感覚もありません。足首のくるぶしの所が紐でごりごりしごかれて、その痛いこと。膝と胴を縛った紐は益々喰い込んできます。

十分ぐらい経ったでしょうか。最後は死物狂いで、手首に力を入れて、もがきにもがいて、やっとのことで外すことが出来ましたがこの時、額に畳でのすり傷をこしらえ、手首は青黒く、胸にはミミズが這ったような赤い跡が何本も残りました。手の痺れは一週間位気になったものです。と、いうことで、やはりプレイは二人以上でやりたいものです。

それから、私が今一つ考えていることです。紐と水との関係です。紐は果して水に濡れてから、どれだけ締ってゆくだろうか、ということをも身を以て試してみたいということです。もう少し暑くなったら、実行するつもりです。

りですが、両手首をがっちり締めるとなるとどうしても、足を使わねばなりませんので、家にある風呂では、とても小さくて出来ません。と、なると、屋外ということになるので、すが、幸い、私の所は山の上に新しく出来たばかりの団地なので、家から五分も歩くと、小川があります。

この小川の辺りは人家は全然なく、近くに汚水処理場があるだけで、人目につかない絶好のプレイの場所です。この時は、足首も膝も胴も胸も、何重にも締めるだけ締めつけて手首も足を使って、高手小手式にしぼれるだけしぼって、淡い月の光のさす小川の畔に立ちたいと思います。

さて、そんな姿で、どうやって水のある所まで行こうか、ヨチヨチ歩きも出来ないでしょうから、うさぎ跳びで行くより他はないでしょう。途中でつまずいて転んだら危いと思いますが、それでも、なんとかしてでも、行かねばなりません。小川の水位は一番深い所でも、太股あたりまでしかありませんから、全身水に浸そうと思えば、体を横にしなければなりません。水の中へ倒れて、川の水をいやという程飲むかもしれません。

真夏の夜の夢として、私はそれを楽しみに

しています。

一方、Sの方はと申しますと、残念ながら書くべき資料はありません。女性を縛ったことは両三度ありますが、三人共、Mの反応を全然示しませんでしたので、無理に頼んで縛らせて貰った手前、どうしても、こちらが遠慮勝ちになって、うまくゆきませんでした。

私の妻は現在二十三才ですが、夫婦仲は至って円満で、将来の夢をいっぱい抱いておられます。結婚以来足掛二年になりますが、まだ一度も縛ったことはありません。しかし、妻は私が奇クを愛読していることは十分知っている筈です。何にしる毎月毎月買っている

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐じめ差しめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化し、ローソク、浣腸器などの小道具を用いマゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。

のですから、知らず知らずの中に蓄ってしまつて、相当量になっていきます。とても、かくしおせるものではありません。妻もたまには、何気なくパラパラと目を通すこともあるだろうと思われるのですが、今のところ、それについての話題はありません。

妻が子供を産むまでに、是非共素晴らしい緊縛フォトを撮影してアルバムを作成しておかねばと思っております。先にも申しました通り妻は、今二十三才なので、少くとも今年中か来年あたりまでに、緊縛して写真がとれるまでもってゆきたいのです。しかし、今のところ、そのきっかけが掴めないというよりまだ何ら飼育のきっかけさえ、掴んでいない状態です。ただ、平常の妻の言動からして、私の願いをムゲにしりぞけるような妻ではないという自信を抱いておりますので、いずれ近いうちに実現できるものと思います。

私の理想としております、新宮明夫氏夫妻や増田喜代司氏夫妻のような夫妻プレイを展開できる間柄になってみたいものです。私はSM両刀づかいなので、前記二氏のように誌上で自分のプレイの姿も掲載してほしいという気持も強いのです。何とか妻に対する諒解をとり得たなら、ベテラン辻村隆先生の御指

導を頂いて、写真撮影を成功させたいものと願っております。

さて、一身上のことは、これぐらいにして次に私の十数年来の愛読誌奇クの将来について一言させていただきたいと思います。

要するに、これからの奇クの行方としては甚だ潜越な申出で申し訳ないと思いますが、今のところ、編集者とモデル嬢と読者の三者が互いに密接に三位一体となって進むことは勿論ですが、全国のSM愛好者のための編集者全国のSM愛好者のためのモデル嬢としての自覚と義務を、しっかりと肝にきざんでいたきたいものです。

奇クの行方。ああそれは、奇クが読者の生活の中に、極く自然に溶けこんで、知らず知らずのうちに、血となり肉となってゆくことでしょう。生活の中の重要な一部分として、夫婦の秘密の快楽の指導書、マニアの心のよりどころとして、そのセコンドにおいて、彼等を神秘性のあるものへと、高めてゆくことにあるのではないでしょうが。

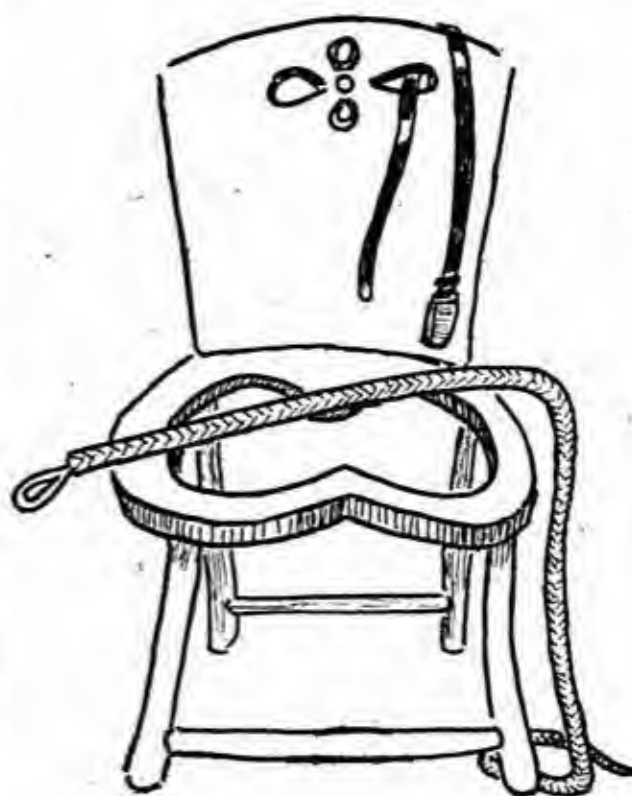
その意味において、最近の『読む雑誌』としての奇クの歩みは、我が意を得たりというべきでしょう。今後とも一層の内容の充実を願ってやみません。

連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

第二十一章 女囚ミシユリーヌ (一) V

西 条 操



婦人看守イヴェット・ヴラディは、第三監舎の当直デスクに陣取っていた。出入簿やなんかを繰りながらも、彼女の思いは階上の労役場に飛んでいる。今日この頃の労役は刺繍だ。女らしい仕事だから少しは心も休まるとはいえ、朝から晩まで精根すり減らすミシユリーヌ奥さまの姿を想うと、回転椅子にふんぞり返っているのが憚られる心地のイヴェットだった。明日は久し振りの非番日だが、その一日を刺繍して過ごすもりの彼女だった。ミシユリーヌを番号で呼ぶときには、どうしても声がふるえてしまうイヴェットでも

あった。彼女にとっては、ミシユリーヌは今でもミシユリーヌ奥さまなのだ。

そのミシユリーヌ奥さまと涙の再会をしてから、もうかれこれ一カ月――。胸つぶれる心地で腰鎖をつけて差しあげもしたし、声ふるわせて労役を命じもした。点呼担当のときには、足許に額すりつける背を鉄格子越しに見下ろして、脚も萎えて号令をトチリ、ジョアンヌ女史に睨みつけられもした。

そして一昨日の夕方にはついに、ミシユリーヌ奥さまの身検をやらされる羽目になったイヴェットだった。それまでは、カチ合わな

いようにとうまく立ち回って来たイヴェットであったが、ミシユリーヌが生まれたままの姿で眼前に「火」の字の姿勢を取ったときには、思わず眼を閉じて低く呻いたことであった。しかし、ミシユリーヌは微笑みさえ浮べて悪びれもせず、いとも神妙だった。後ろ向き四つ這いのときには流石に血の色が肌に浮びもしたが、うろたえるイヴェットよりは堂々としていたし、きびしさを失った婦人法務事務官を、むしろ責めて励ますかのような態度でもあった。

(ほんとに御立派なミシユリーヌさま。私の

方こそ恥かしい。すっかりしなくちゃ感付かれちまうわ——」

階上労役場から、キャスリーヌの大声が聞えて来た。ひよっとするとミシュリーヌさまが叱られているのでは——と胸が痛たむ。

ベルディーヌあたりは、まあ仕方ないとしても、あのキャスリーヌなんかも遠慮会釈なしにミシュリーヌを撲るのだ。マルチャーヌ課長のお墨付きもあることだし、人柄はすぐに分かることだから、そうそう痛ためつけもしないが、それでも、落度があれば容赦はしない連中が数人はいる。

今朝も今朝とて、雨あがりの道を歩いて来たキャスリーヌは、詰所当番のミシュリーヌに靴を磨かせたのだったが、底の泥が綺麗に落ちていないと怒って、詫びるミシュリーヌに往復ビンタ数発を与えたことだった。その光景を眺めてイヴェットは唇を噛み、同僚キャスリーヌを睨みつけ、化粧室に飛び込んで涙を押えたのだった。

明日は自宅へお連れして、ゆっくりと安らわせて差しあげたい。でも——。

イヴェットは自分の甲斐性なさ加減に涙ぐむのだった。

鉄階段を革サンダルの音が降りて来た。そ

れはミシュリーヌそのひとだった。イヴェットはハッとして腰を浮かせる。そのイヴェットに向って眼を伏せてうなだれ

「すみません——」と、恥かしそうに札を示した。その木の札は用便許可証で、階上労役場のトイレが故障しているため、数日来、各自の房へ戻って用を足すことになっている。

十センチ角に切った用便紙、その一枚を手渡すイヴェットの手がふるえた。

如何なる場合でも監視されるのが女囚の常なのだから、労役場のトイレには囲いなどは無い。ルーシーなんかが最初には泣き出したみじめさだが、そこを使えない今、束の間ながらもミシュリーヌさまにホッとさせてあげたい——。なにしろ、当直看守は規則によってデスクから離れられないのだ。それでもイヴェットは詰所へのインターフォンに、

「用便一名」と一応は囁やいた。詰所に居合わせる誰かが付き添って監視することになっているからだ。しかし、ジョアンヌ女史不在の今、わざわざおみこしをあげる者なんか居ないだろう。イヴェットはミシュリーヌに手で合図し、精一杯に明るく微笑した。

ところが、案に相違して、マジョーリが出て来て女囚の背を追った。マジョーリは珍ら

しいことに、さきほどから詰所で油を売っているようだ。ミシュリーヌが立ち止まって神妙に待ち、二人は並んで、一番向う端の十一房へ歩む。マジョーリが話しかけ、ミシュリーヌの横顔が肩越しにほころび、背に握る両腕が嬉しげな仕草だ。見送るイヴェットは口をとがらせ、ふと、淡い嫉妬にも似た感情を味わったのだった。

鉄階段を昇るミシュリーヌを見送って、マジョーリは紙片をイヴェットのデスクに投げた。片眼をつぶって笑い、ここにサインしろと指で示す。それは構外使役伝票で、帰監担当官名の欄に署名しろというのだ。

「私も明日は非番なの。ひとり連れて帰るところにしたわ。だけど午前中には片付いちまうから、なんなら午後はあなたにどうかしら？ 誰にするかはイヴェットには関係ないのよ」

イヴェットは無記入の伝票から眼をあげ、マジョーリを見詰めた。そして理解し、こみあげる言葉をおさえてペンを取り上げた。

「すごいあばずれかも知れなくてよ」「ええ。おまかせしますわ」

イヴェットは答え、早くも涙ぐむ。

「十一時半に、あなたの家へ護送して行くわよ。女囚の昼食は正午と決まってるの。いい

こと？」

イヴェットは微笑し、深々とうなずいたのだった。

マジヨリーは、戻って来たジョアンヌ女史を捉まえて、談判を始めた。

「そりゃまあ、ほかならぬあんたのことだから、いいとは思うけど——」

女史は、四五三号は未だ日が浅いから、と渋っているのだ。それに、このマジヨリーに身柄を預けた日には、おそらくその日は刑の一日に算入し難いていたらくだろう。しかし女史は渋りながらも拒否はしなかった。既に女史としても、根性を見極めるためとか称して、四五三号を自宅使役しているのだ。

「仕様がないうえ。気をつけるんだよ」

「はい。私だって、警察官の妻ですわ。捕まえるのにどんな苦勞が要るか、よく知ってますもの」

「そうじゃないの。逃げたりさせるとは思っていないよ。ことに、あの子は心配ないね。追っ払ったって戻って来るわ。私の心配してるのはね、甘やかせるなってこと。世間の眼はうるさいよ。きつく当つていた方が無難さ」

「はい。よく分っておりますわ」

「亭主や子供が折よく居合わせてカチ合うなんて偶然は起らないこつたろうね？」

マジヨリーは微笑して頭をふり、小さく舌を出した。亭主なんかと引き合わせてやったことはないが、親や子供との「偶然」を企らんだ前科は三度ばかりある彼女だ。

「食事だって、分際相應にしとくんだよ。おや、帰監はイヴェットにやらせるんだね？」

「はあ。あの、私、夕方にお客を招いてますから。イヴェットに頼んだんですの」

「そうお。あら、赤くなっちゃって。ははアなるほど。さては、いいひとが見付かったんだね。羨ましいこと」

マジヨリーはうまく逃げ、出て来てイヴェットにウインクし、成功を告げたのだった。

翌日、イヴェットは朝早くからそわそわしていた。昨夜、宙を飛ぶようにして帰宅して以来、準備おさおさ抜かりはなく、ミシュリーと奥さまをお迎えする支度は、母とともに万端を整えたつもりだ。

「まだかねえ」

時計ばかり眺めて母親マリアが呟やき、イヴェットもたまりかねて飛び出した。まだ十時にもなっていない。マジヨリー宅の入口ドアでの立ち話——。

「あらま、もう催促？ いままで、お仕事の

段取りを説明してたのよ。つらい仕事は始まったばかりなの」

「なにをやらせてますの？」

「まあ、叱られてるみたい。窓ガラス拭きというスゴイ苦役。見る？」

イヴェットはためらい、そして頭を振り、意を決してマジヨリーに言った。

「ね、マジヨリー。あなた、どうして御存知なの？ あのひとと私とのこと」

マジヨリーはじつと深い眸で見詰め

「あ、ちよつと待って」と、台所へ走った。

小さな家の奥の方で、幼い男の子の声が聞える。

「おばちゃん、ガラス拭き、とっても上手だね。キレイになって、ホラ、ないみたい」

「邪魔するんじゃないのよ」

と、少し年上らしい女の子の声もする。

「ね、おばさん。お水汲んで来たげるわ」

嬉しげに笑って話す声は、おお、ミシュリーと奥様——。耳澄ますイヴェットは涙こみ

あげ、走り込みたい氣持を必死に押える。

「おばちゃんは、とってもキレイだなあ。ボク、好きになっちゃった」

「そうお。ありがと」

ミシュリーと奥様の声は楽しげに、鼻歌でも出

るばかりの様子だ。

「どうして靴下を穿かないの？」

「あのね、坊や。おばさんはね、悪いことしたので罰を受けてるのよ。だから、靴下は穿かせて貰えないの」

「こないだ来たおばさんもそう言ってたよ。」

「どんな悪いことしたの？」

「それはね、坊やにはまだ分からないこと」

「ふーん。それで、いつ許してもらえるの？明日の朝？それとも、クリスマス・イブになつてから？」

「あのね、坊や。おばさんの罰は重いのだから、そんなに早くはゆるして貰えないの。」

「そうね、坊やがもっと大きくなって、学校へ行くようになった頃にはゆるして貰えると思うわ。さ、そこ、どいて頂戴な、いい子だと」

「ウン。おばちゃんにも、ボクみたいな子供いるの？」

答えるミシュリーヌの声は聞き取れない。

「……ね、坊や。イタズラしてママを困らせるんじゃありませんよ。大きくなっても、おばちゃんみたいに悪いことしちゃ駄目」

「あのね、おばちゃん。ボク、大きくなったら、死んだパパみたいになるんだ。悪いヤツ

ヲをみんな捕まえてやるんだよ、ウン」

マジョーリがエプロンで手を拭きながら、玄関へ引返して来た。

「ね、ちょっと入らない？」

「いえ、ここでいいんです。それより、さっきのことですけど……」

マジョーリの眸がやさしく笑った。

「イヴェットがそわそわと四監を気にし初めたので調べたの。その頃に四監入りしたのは四五三号だけ。そこで、警察官の妻の捜査活動がはじまったの。ホホホ。すぐに分っちゃった。二人とも、身元経歴の詳細な記録があるんだもの」

イヴェットは驚愕してあえいだ。

「そうですわね。すぐに分かりますわね」

「でも、心配しなくていいの。その気になつて両方を突き合わない限り分りっこないもの。あなた、よっぽどお世話になったのね」

「ええ。とっても。ね、マジョーリ。私たちのこと知ってるのは、あなただけかしら？」

「フォンテーヌには報らせてあるわ。それからモレシエンヌにもそれとなくね。それだけよ。あら、お湯が沸いたらしいわ。ちょっとお入りなさいな」

しかし、イヴェットは辞し去り、あと一時

間の我慢だと我が胸にいい聞かせつつ、歩いて五分の道に戻るのだった。

約束の時刻きっちり、ミシュリーヌは連れられてやって来た。

「要領よくやるのよ、イヴェット」

マジョーリは、はずしてやった手錠をカチヤカチャいわせながら、耳元に囁やく。

「ひとの目はうるさいのよ。なにをやらせたのか、よく考えて打ち合わせとくのね」

イヴェットは無言で感謝を示し、胸おどらせてミシュリーヌ奥さまの腕を取ったのだった。

「ほんとにいいんですのね？ここに坐つても——」ソファの前で女囚はためらう。

「かけた途端にビンタが飛んで来ちゃうんじゃないかって？」

「まあ——」

イヴェットは怨めしげに、はや涙声だ。

「お前、奥さまを撲つたりしたのかい？」

と、母親マリアが娘を睨む。

「まあ、お母さん。そんなこと絶対に——」

「ね、冗談ですわ。ごめんなさい。かけさせて頂きます」

ミシュリーヌはおずおずと腰をおろし、そして、眸をクルクルさせて深々と坐り直す。

母娘はそのかみの日々のことを感謝し、声詰まらせて慰さめるのだった。

「これ、頂いていいんですの？ ほんと？」
おいしそうに動く乳色の咽喉——眺めてマリアがハンカチを眼に当て、イヴェットも睨を熱くした。

「ごちそうさま。ほんとにおいしかったわ」
「ミシュリーヌさま。およろしかったら、いくらでもお召し上がりになって——」

「はい。じゃ、もう一杯だけ。こんどはゆっくり味わって飲ませて頂きますわ」

「ね、奥さま。もっとお楽になすって。お召し替えなさいます？」

ミシュリーヌは、嘗ての小間使いイヴェットの顔をじっと眺めた。

「それはいけませんわ。そりゃ、私だって、こんな服は脱ぎたいわ。でも、それは駄目」

イヴェットは悲しく諦らめた。いったん言い出したら、やさしいながらも確固として、ちよつとやそつとでは、あとに引かない奥さまなのだ。そのことは、イヴェットが一番よく知っている。

「あら、気を悪くなさったの？ なら、パツジつけて命令して下さらないこと？ そしたら服従いたしますわ」

イヴェットは涙を溜めた。

「そんな意地の悪いことおっしゃらないで。ね、お心のままになさって下さいまし。あらまあ、どうしてスリッパをお脱ぎになったのですの？ さ、このクッションを——」

イヴェットはミシュリーヌの足許にクッションを重ね、眺めて胸が一杯になり、荒れた足先をそつと撫で、涙をこぼした。その肩をミシュリーヌが手で押える。

「ね、あなたたちのお気持、ほんとにもう、神さまにお会いしたように有難いんですの。でも、いろいろとおっしゃって下さいますけど、私はもう、昔のミシュリーヌじゃありませんの。なんとおっしゃって下さったって、悪いことをした女です。自分のやったことを考えますと、ほんとにもう恥かしくて——」

「とんでもない」と、マリアが遮ぎる。

「ミシュリーヌさまは、昔も今も、いつだって御立派です。そうですとも」
「ほんとですわ。私たちにとっては、あなたは今でもミシュリーヌ奥さまですの。どんなことをなさったにせよ、奥さまがなすったんですもの、ちゃんとした理由があるに決まっています。そうですとも。奥さまのなさることは、いつだって御立派ですわ——」

ミシュリーヌは言葉に窮し、足許に跪まずくイヴェットの髪を撫でた。

「ああ、代って差しあげたい——」
叫んでイヴェットはしがみつき、獄衣の裾に顔を埋める。

「困ったわねえ」
ミシュリーヌはおどけて云い、そのくせ眸には涙を浮べつつ、イヴェットを抱き起こした。

「ね、担当さま。お仕事、いいつけて下さいな」

「また、そんなことおっしゃって——」
と、イヴェットは身を揉み、腕を絞る。

「冗談ですわ。ごめんなさい」

「ね、ミシュリーヌさま。せめて、ここにこうしていらっしゃる間だけは、昔のミシュリーヌ奥さまになって下さいまし。お願い」
ミシュリーヌは涙をこらえ、ソファで身動きたした。

「奥さま——」

「奥さまじゃありませんたら。番号が嫌ならせめて名で呼んで下さいな」

「いいえ。誰がなんと云おうと、奥さまと呼ばせて頂きます」

「そうとも。奥さま、わたしねえ、娘を毎

晩取調べてますの。奥さまに失礼な仕打ちをしたかどうか。そして、理由はどうか。あろうとも、短かくて十五分、ひどければ一時間というものは、奥さまのいらっしゃる方に向いて跪まずかせますのよ」

「まあ、そんな——何故、そんなことを」

「当り前のことですよ。それが人間の道ですもの。どうかさないまして？ 奥さま。碌なソファじゃありませんけど、御勘弁なすって下さいまし」

「冗談は、よして下さらない？」

ミシュリーヌは言うべき言葉に困って、ソファで跳ねて見せる。

「ホラ、ね。なんだかふーわふーわしちゃって、雲の上みたい。生まれて初めて腰掛けたような気持なの」

「さぞ、お疲れでしょ。こっちの話ばかりしてて、ちっとも気がつきませんでしたわ。お寝みになります？ ベッドも用意してございますわ。一風呂お浴びになります？ お体、流させて下さいまし」

ミシュリーヌは眼を丸くして仰天した。

「そんなの駄目よ。パチが当たるわ。ここでこうさせて貰ってるだけで天国よ。ほんとに勿体なくて——」

イヴェットは、またも悲しく諦めた。お迎えしたら、ああしてこうしてと、スケジュールは立ててあったのだが、いざとなると涙が先に立って、目茶苦茶な順序になってしまふ。しかし、なんと云っても、ミシュリーヌさまのお気持が第一なのだ。小間使いの身で奥さまの行動を左右することは出来ない。またの機会もあるだろう。でも、そう云って——

イヴェットは、精一杯の強さで云った。

「じゃ、そこで横になりなさい」

「はい。命令ですのね」

ミシュリーヌはニッコリとし、素直にソファで横になった。

「食事の仕度します。それまで眠りなさい」

「そりゃ、無理よ。だって、胸が一杯なんですもの」

ミシュリーヌは明るく答え、そして、真珠のような涙のせきを切ったのだった。

三人で食卓を心嬉しく囲み、マリアがしみじみと云った。

「娘があすこに勤めているなんて、ほんとに神さまのお思召しですわ」

それも、如何なる天の配列なのか、すぐに三監へ移されるなんて——。転属願を出さな

くてよかったと、イヴェットも神に感謝するのだった。

「あ、忘れないうちに申しあげておきますけど、奥さまは今日、床と家具をお磨きになったんですのよ。いいですこと？」

床も家具も、母娘で昨夜のうちに磨きあげてある。

「分ったわ。でも、スゴイ大犯罪ね。胸がドキドキしちゃう」

ミシュリーヌの明るい言葉に、母娘は声立てて笑い、そして、嬉し泣きするのだった。

「ね、イヴェット」

初めて呼び捨てにされて、イヴェットの眸が嬉しさに輝やく。

「さっき私を独りで放つといたわね。逃げるかも知れなくてよ。どうするつもり？」

「奥さま、奥さまが逃げよう——いえ、どこかへ行こうとなすっても、私、決してお引き留めは致しません」

イヴェットはキッパリと答え、母親マリアも大きくうなずくのだった。

「ね、あなたたち御存知ないかしら、コモ湖畔の邸のこと。その後どうなってるかしらねえ。私、あれから一度も行って見ないの」

ミシュリーヌは狭い庭を打ち眺めつつ、し

みじみと云った。館の庭は広がった――。

「お買いになった方も二年足らずで売りになりましてねえ――」マリアが答える。

「あんな成上がり者に、あんなお邸は向きませんわ」と、イヴェットが口をはさんだ。

「この娘ったらねえ、奥さま。折角お口添えて頂いたというのに、一年ほどで怒って辞めちまいましたねえ」

「私がいけなかったの。あんなひとに売っちゃうなんて、シャルルに申しわけなくて。あなたたちにも恥かしいわ」

「あら、奥さま。そんなつもりで申し上げたんじゃないかもしれません。でも、樫の柱にペンキ塗ったりなんかするんですもの」

ミシュリーヌは、そんなイヴェットを見やりつつ、コモ湖畔の昔をあれこれと想い起すのだった。

「制服着ていないイヴェットを見るの、何年振りかしら？　ほんとに綺麗になって。嬉しいわ」

「ホホホ。ほんとに仕様がないう娘なんですのよ。でも、ほんとに弟思いの姉でしてねえ。

奥さまのお躰けのお陰で、なんとかまあ、女らしくなれましたの。ほんとにいろいろと御恩ばかり頂戴いたしました――」

マリアは、またも昔のことを有難がるのだった。

「そんなに云って頂くほどのこと、して差しあげちゃおりませんのに――」

「とんでもない。これが頂戴しましたお金でもって、亡夫のお墓も自慢できるものを建ててやれましたし、フランスもなんとか大学へやれますし――。ホラ、この食器だって、奥さまのお陰で買えましたのよ」

ミシュリーヌは微笑んだ。自分のしてやったことをこんなにも喜んでしてくれる人々があつたと思うと、心暖まる心地だった。

「――で、あの邸、どうなってますの？」

「あ、そうそう。いまは、たしか何とかいう観光会社のものになってるそうですわ。コモ湖もいろいろと賑やかになって来てるそうですけど、お邸のあたりは、こういうものかひっそりしたままでしてねえ」

「その方がいいわよ、母さん」

「そうだよ。でも、お邸だって荒れるままなんだそうだよ。観光会社の方でも、いろいろと計画はあるんだそうですけど、立ち消えになって――。住むひともなく、なんでもねえ、奥さま。ホラ、アナトール爺さんたち夫婦がお守りしてるって話ですわ」

ミシュリーヌの胸の奥が痛んだ。水蒼きコモ湖に影映して、人影もなく荒れる古き館。

いまもお、庭の片隅ではベネディクチーヌ婆さんがポンプを押し、崩れた舟着場ではアナトール爺さんが小舟をもやっていることだろうか――。おお、シャルルと過ごした静けき日々よ――。

ミシュリーヌは熱い涙に頬を濡らし、明るく笑ってイヴェットに云った。

「ね、あなたのこと聞かせてくれない？」

イヴェットは、引き続いて動めたコモ湖畔の邸を辞めてから、学校に入って看護婦となつたのだった。サンレモの病院での若き医師との恋――。それも破れてイヴェットは、とつおいつ悩む嘆きの或る日、受持ち患者をあわやの危険に陥とし入れ、そのミスは表沙汰にはならず済んだものの、彼女は自発的に免状を返上した。そして――。

「弟が一人前になってくれますまでは、と思ひまして。え？　ええ、フランスは、いまミラノの大学ですの。ホテルの経営科。一流ホテルのマネジャーが弟の夢ですわ。どうなりますことか。ホホホ」

ミシュリーヌは再びソファに横たわり、イヴェットはいそいそと毛布をたくしこむ。

「奥さま——」と、思い詰めた風情だ。

「どうして、奥さまは、あんな男のところへいらっしやったんですの？ ああのジェラルにさえお逢いにならなければ——」

「そう。そうだったわねえ。イヴェットのいうとおりよ」

責めるようなイヴェットの瞳、それを仰ぎ見て、ミシュリーヌは長い溜息を吐いた。

「奥さまのなさることですから——そう思っ
て黙ってましたけど——でも、あのときだ
けは、思い切ってお留め申し上げなくちゃい
けなかったんですわ。すみません」

「私が馬鹿だったの。浅はかだったのよ、イ
ヴェット。あなたたちの面倒も碌々みないで
しっちゃって——。恥かしいわ」

ミシュリーヌは、まろやかな喉に長いまつ
げを閉じ、そのかみの日々を胸に辿った。自
分のおろかしさが悔いられてならない。

しかし、もう帰らぬことだ——。

イヴェットは寝顔を飽かずに見入り、つと
身を屈めて、白い額に接した。

「ミシュリーヌ奥さま、おやすなさいまし
——」

「おやすみ、イヴェット——。起してね」

ミシュリーヌは夢うつつに答え、まぶしげ

にイヴェットを見て微笑み、安らかな眠りに
落ちた——。

ミシュリーヌは甘い夢を破られて目覚め、
ハッとして起きた。ためらい勝ちに肩ゆすっ
たのはマリアだった。ミシュリーヌはあたり
を見回し、すべてを思い出し

「何時かしら。もう帰らなくちゃ——」

と呟やく。束の間の和らぎは過ぎ去ったの
だ。マリアがオロオロと涙ぐむ。

「奥さまをお起し申すなんて——。それも、
あんなところへお連れするため——」

マリアは、寝顔に見入ったまま、長いこと
ためらって跪まずいていたのだ。

「ずっと、ここにいらして頂けたら——」

「冗談いわないで。イヴェットはどこ？」

起し役を母親におしつけたイヴェットは、
盆を捧げて入って来た。ずっと寝顔を見詰め
ていた彼女の眼は、赤くはれぼったい。

「こんなに飲んだり食べたりしたら、今晚あ
たり困っちゃうじゃない？」

ミシュリーヌは笑っていい、母娘は眼頭を
押え、それでもミシュリーヌは素直に好意を
受けるのだった。久し振りの陶器茶碗、それ
を撫でつつミシュリーヌは思い悩む——。

ジュヌビエーブのことを打ち明けて、イヴ

ェットに探して貰おうかしら——。

ミシュリーヌは想いを断ち切る。もう、あ
の子のことは諦らめた身ではなかったのか。
ミシュリーヌは金髪を掻き上げ、ネットを
かぶった。これ以上の心配をイヴェットには
かけまい。

「もう時間じゃない？ 連れて帰ってね」

「まだ大丈夫ですわ。あ、奥さま。せめて、
せめてお髪にブラッシをおかけになったら」

「あら、誰に見てもらうの？ さ、早く」

しかし、イヴェットは未練氣にためらい、
まだ、なにかして差し上げられないものかと
焦燥に駆られる。

「こんどまたお願いするわ。でも、あなたた
ちはあなたたちで、お仲間同志いろいろとあ
るんでしょう？ 無理しないでね。気持だけ
で嬉しいんだから」

「はい」

「それからねえ、決して遠慮しちゃ駄目よ。
いまのあなたと私の間は、主人と女中なんて
なまやさしい関係じゃないの。私がいけなか
ったら、ビシビシ叱ってね。撲ってくれても
いいの。ほんとよ。それが、結局のところ、
私のためになるんだから」

イヴェットは深くうなずき、起ち上った。

「着替えて参ります」

「ええ。手数かけるわねえ、ほんとに」

ミシュリーヌは微笑し、成熟した女の美しさをイヴェットに眺めて眼を細め、その後ろ姿に云った。

「昔は昔、今は今よ。割り切らなきゃ——」

イヴェットは制服制帽を着て現われた。ミシュリーヌは立って迎える。

「ほんとに、ありがとうございました」

「奥さま——そんなこと」

ミシュリーヌは両腕を背にして二人に頭を垂れ、マリアがおろおろとうろたえた。

「でも、あなたの制服姿って素敵ですわ。とってもよく似合って——。ピカ一だわ」

打ち眺めてミシュリーヌは讚え、イヴェットの胸の古傷が痛む。我が愛を裏切ったあの医師も、看護婦姿を美しいの讚めてくれたこともある——。

「コモ湖のお邸でも、奥さまはそうおっしゃって下さいましたわ。エプロン付きの服がよく似合うって——」

「あら、ごめんなさい。制服でなくたって素敵ですわ。じゃ、はい——」

ミシュリーヌは眼を伏せ、両手をイヴェットにそろえた。忽ちイヴェットは身を揉む。

「バッジつけてるじゃありません？ けじめはつけて下さいまし」

「——ま、まだ——まだ早いですわ。あ、あとで——」

イヴェットはミシュリーヌの腕を抱き、マリアが顔を掩った。ミシュリーヌはイヴェットを引き摺るようにして歩き出し、マリアはついに崩折れたままだった。

ミシュリーヌは革サンダルを足首に締め、戸外へのドアの内側で、再び両手をそろえて促がした。

「そこに持ってるじゃないの？ お願いだからちゃんとして下さいな。でないと、突き飛ばして逃げますわよ」

イヴェットは意を決し、ふるえる手を手錠ケースにかけた。

「下手ねえ、あなたは。フィリスなんか、あつというまにかけてくれるわ。ジョアンヌさまに叱られますわよ。でも、これで安心ね。もう、すっかりあなたまかせ」

ミシュリーヌは自分の両手を見下ろしてニッコリした。

「お、おゆるし下さいまし、ミシュリーヌさま——」

「あなたは——担当さまったら、ほんとに分

からず屋ですのねえ。私は女囚。こうして頂かなきゃ、外を歩けないの。あたりまえのことですわ。ドアをあけて下さいまし」

イヴェットはハンカチを納め、黙ってドアを押した。

二人が並んで歩く姿を遠く見れば、着ているものの違いにさえ気付かなければ、曳かれているのはイヴェットの方だと思えたことだろう。

「あなたにこうして縛って貰ったのは初めてですわね。情けないどころか嬉しいわ。でも——ゆるくて頼りないこと」

女囚は自分の手錠を自分で締め、婦人法務事務官は革ロープを悲しく握り直す。

「私、ゆるして頂けたら、もう決して悪いことしませんわ」

「そ、そんなこと——奥さま」

「駄目よ、担当さま。番号で呼んで下さるなきゃ——。ね、ごらんなさいな。森が美しいこと。金色に輝いて——。もう、ずいぶんと日が短かくなつたんですのね」

「ね、ちょっと一休みしません？ 夕焼けがよく見えますわ」

「駄目よ。早く帰らなきゃ。さ、顔を拭いて颯爽と歩いて頂戴。ひとが見るわよ」

十月も半ば過ぎの森のはずれを、二人はそれぞれの感慨を胸に抱いて歩いた。

「ね、イヴェット。一度だけこう呼ばせて頂戴。イヴェット、仕合わせになってね、お願いよ」

「あなたも——」

「私のことは心配してくれなくていいの。いいひとが見付かったら、私のことなんか考えずに、自分の幸福を掴むのよ、いい？」

眸を見詰めながらミシュリーヌは云い、両手をあげて睨を押えた。手錠が夕陽に光る。

すれちがった娘は刑務所総務課あたりの職員か、やり過ごしてイヴェットはキッパリと告げた。

「いいえ。奥さまの御災難が終わるまでは、私もお苦しみを御一緒にさせて頂きます」

女囚ミシュリーヌは素直な感謝を湛えて微笑し、高いコンクリート塀が長々と灰色に見えて来た。

「さ、頭を立てて引き立てて頂戴。私はうなだれるけど——。ほんとに今日は嬉しかったわ。マジョーリさまにも、マリアにも、よろしくね。早いとこ連れ込んで、お帰りなさいな。今日は非番なんですよ」

「——はい。奥さまもお元気で——。これか

ら、寒くなりますわ」

「バカね。これで別れちゃうみたい。これからもずっと御世話になるのよ。明日になりやまた逢えるじゃないの。牢屋の冬は、もう経験済みよ、私。あら、困ったわ。夕御飯、食べられるかしら。無理しても食べなくちゃね。ホホホ」

門の守衛室の前で、苦手の保安課婦人看守が伝票をうさん臭げにひねくり回し、ミシュリーヌの手足をジロリと見て、フンと鼻を寄せた。意地悪い質問をしたところだろうが、女囚の手前がある。

若い娘が二人、所内から出て来て、持ち物をカウンターのひろげ、秋のコートの前ボタンをはずして両腕をあげた。職員といえども時々、保安課長の気分次第で、出入りに身体検査をされる。

保安課婦人看守はイヴェットに伝票を投げ返し、いまいまして娘二人の体に手を延ばしたのだった。

——十一月末の土曜日、ミシュリーヌは、午後の労役に追われる群から独り引き留められ、キャスリーヌの手錠を音高く受けて本館へ曳かれた。

「なにをボンヤリ見てるの？ イヴェット。

これ、二つばかり持って来てよ」

ジャンヌが鉄階段の中途から手真似で、嵌口具が要するという。足を踏んだとか踏まないとかで、女囚二人が声をあげていがみ合ったのだ。イヴェットは不安に駆られ、ジャンヌの指示を無視してミシュリーヌを見送り、当直デスクに駆け寄った。デスクの主は幸いにもモレシエンヌだ。訊ねないうちから小声で教えてくれた。

「警視庁へ移監よ、イヴェット。余罪取調べかしら？」

「まあ。絶対にそんなことある筈がないわ」「そうね。じゃ、なにかの証人なのね。あらまあ、風邪ひいてんの？ 声が枯れて——」

そう、イヴェットは風邪をひいている。ミシュリーヌ奥さまが獄舎の冬をお過ごしになる間は、居間にも寝室にも暖房を入れないと決めた母娘なのだった。マリアは、奥さまに申しわけないと泣きつつも寝具だけは御勘弁ねがったが、イヴェットは女囚並みの寝具で頑張る心意気だった。毛布をもう一枚ふやせる十二月が待遠しいイヴェットだったが、ミシュリーヌさまと同じ苦しみを味わっているのだと思えば、少しぐらい咽喉が痛いのは、むしろ嬉しいとさえ思えるのだった。

「あの、担当さま」

ミシュリーヌが地下通路で制服娘に云う。

「いったい、なんでしょうかしら？」

「思い当たること、あるんじゃない？ 私たち、お前を見損ってたかも知れないわ」

ミシュリーヌは唇を噛み、そして、処理室で囚衣を脱いだ。

「ここにスタンプ捺しといてやりたいわね。さ、いいよ。仮衣裳を着て——」

制服の娘はミシュリーヌのお尻をピシッと叩き、女囚はいそいそと衣服をまとう。逮捕されたときに着ていた冬のスーツ、それに手を通すと、忌むしくも悲しい思い出が甦った。生まれて初めての手錠をオフィスの同僚たちの眼前で受けた朝——あの悲しくも恐ろしかった日以来、既にもう一年になる。

ミシュリーヌは精一杯に着こなし、しわを引張り、素足にハイヒールを穿き、そして、伏せた顔を横向けながら両手を差し出した。

「いいわ。おいで」

制服娘は面倒なのか、顎をしゃくる。ミシュリーヌは刑務課のピンクドレスから、改めて警視庁への移監を言い渡され、高飛車な口調でお説教を受けた。両手を背に、うなだれて立っていると、防虫剤とカビの匂いがドレ

スの胸許から強く立ち昇った。マルチーヌ課長は不在だ。彼女がいれば、手錠なしにオフィスの中には入れてくれなかったろう。

総務課の片隅で壁際に立って待たされ、やって来た男を見るなり、ミシュリーヌは軽く声をあげた。それは、ロジェ・サンシール刑事だった。

「おい、久し振りだな。集金の残りがあるらしいんでな、ちょっと来て貰おうか」

ミシュリーヌを喰い入るように見詰めながら、サンシール刑事は横柄に云った。

「いったい、どういうことなんです？ まだ調べることに、おありなの？ ね、なんですか。教えて」

サンシール刑事は肩をすくめ、くわえ煙草を灰皿に揉み、あみだ帽子をかぶり直した。「ま、白ばくれてるのも今のうちさ。ツケが残ってたよなあ。俺たちはキチウメンなタチだわさ」

と、ポケットから手錠を取り出し、アゴをしゃくる。

「こら、別嬪。手を出せ。キラキラする腕輪をつけてやら」

ミシュリーヌは観念して両手をそろえた。またも、哀しい姿を町に晒すのだ。

「じゃ、たしかに。おい、来なよ」

刑事はキャスリーヌ婦人看守に片眼をつぶり、ミシュリーヌの腕を引き立てた。

ミシュリーヌは自分の両手をじっと見下ろしてハイヒールを鳴らした。思えば、男性の手で手錠を嵌められたのは、逮捕のとき以来初めてだった。ことに、このロジェは自分に思慕を寄せてくれ、所もあるうに拘置所面会室で言い寄ってまでしてくれた男だ。そう思うと、冷たい手錠の硬い感触にも、いままでになく安心感と信頼感があつた。むしろ、微かに甘まうさえもあつた。

「ね、いったい、なんの容疑ですか？ 教えて下すつたっていいじゃないの。私、全然心当りなんか……」

玄関を出て、正門への道でミシュリーヌは縄がりつき、荒々しく突き放された。

「うるさいッ。黙ってついて来るんだ」

と、ロジェは大声で呶鳴って、あたりを鋭く見回わしたのだった。

シュンとしたミシュリーヌは出門手続きを待ってうなだれ、ままならぬ両手で金髪を掻き撫でた。下着を整えさせて貰えないからスーツの着こなしはピッタリしないし、そのドレスはカビ臭くてシワだらけだし、顔には口

紅の跡すらもなく、両脚は素足、ハイヒールも薄汚なくヒビ割れて爪先が痛い。でも、それは辛抱するから、せめて、この手錠さえなかったら——。そうだわ、このドレスを着てこの門を出るんだけど、釈放されて出るんだったら——そして、このロジェが迎えに来てくれたのだったら——。

「こら、モゾモゾするなッ」

刑事の握る革ロープが引張られ、鋼鉄鎖が両手首にいきなり喰い込んだ。

「じゃ、お氣をつけて。御苦労さまね。おいこら、五五三号。綺麗サッパリ、洗いざらいゲロして戻っといで。おや？ ふてくされてるのねッ」

保安課婦人看守の太い手が、ミシュリーヌの頬に手荒らく鳴る。ミシュリーヌは、

「——はい——」と口惜しく答え、

「ま、ま、調べあげるのは、こっちの仕事ですから。さ、来るんだ」

サンシール刑事がとりなして、女囚は門を潜り出たのだった。

「あら、自動車なの？ 嬉しい。でも、パトカーじゃないのね。あなたが運転なさるの」「そうさ。乗りな」

ロジェ・サンシールは、森の中の大木の樹

陰で、小さなセダンを停めた。

「辛らかったろ」と口調も変わり、やさしくミシュリーヌの手を握る。

「なにがなの？ あ、これ？ 馴れてますのよ、私。あら、はずして下さるのね。まあ」

ミシュリーヌは嬉しげに手首を揉み

「おとなしくしますわ。お約束します」

と先回りして誓い、ニコリ笑った。その笑顔をひたと見詰め、ロジェは何か云いかけたが、思い直した様子でギヤを入れた。

「嬉しい。ほんとに嬉しいわ。ありがと。私を信用して下さいったのね」

ミシュリーヌは、はしゃいで、窓外を飽かず眺め、髪を撫でつけドレスをつくろい、窓をあけたり閉めたりさえして、笑い声すらあげた。

「いいわねえ、そと——は——」

ミシュリーヌの行く先は、おそらく警視庁の地下留置場、それを思っ彼女は溜息を洩らした。

「でも、仕方ないわね。私は、まだ社会へは帰れない身だもの。心配？ なら、手錠かけたらどうお？ 寛大ぶらなくてもいいのよ」ミシュリーヌは健気なことを云い、そして

刑事を明るくからかう。

「じっとしてろ」

「はい」

ミシュリーヌは神妙に縮こまり、そんなミシュリーヌの横顔をいとしげに見入ったロジェは、眼がカチ合っあわててそらせ、照れ隠しに眉寄せながら日除けを下ろした。

「ね、あなた。この前、おっしゃったわね。

私のためなら何でもしてやるからって。おぼえてる？ 逃がして下さらないこと？」

「こんど停まったら飛び降りろよ」

「あら、ウソよ。ごめんなさい。絶対に逃げませんわ」

「うむ。いいか？ 警視庁へ行く前に、ちょっと寄るところがある。一緒に、おとなしく来るんだぞ」

ロジェはぶっきら棒に云いつつも、はや、喜びと期待に胸が躍るのだった。

「検事局？ それとも裁判所かしら。どこにでも行きます。だって、私はあなたの囚人なんですもの」

疑いを知らぬミシュリーヌは純真に云い、男の血潮は一きわ高鳴る。

「でも、無駄よ。私、ほんとに余罪はないんですもの。疑われてて口惜しいわ、どんなことか知らないけど。でも、こうして連れ出し

て頂けて楽しいわ。クリスマスカードの封筒作り、しんき臭くて指がすりむけちゃうの、紙が固くて。あら、そうそう、そうだったわねえ、ホラ、あのときに私としたことが駄々こねたわね、手錠なしで町に出たいって。それ、おぼえていて下すったのね。嬉しい」

男の手が女の体へと動きかけ、やる瀬なく思い止まる。もう、そんな心配はないと思うものの、万々が一、こんなところで騒ぎ出されては元の子もなくなる。折角の計画と冒険が台なしだ。

「ね、悪いけど訊ねたいの。奥さまとはどうなりました？ その後——。あら、ごめんなさい」

「うるさいな。もうパリ市内だ。黙っててくれないか」

ロジェはサングラスをかけた。

「あら、このあたりは——そう、プロヴァンス街じゃない？ そうよ。私の殺人事件の現場なのね」

叱られても叱られても、今日のミシュリー又は口が軽い。男性と二人きりで語らうのは久しぶりなのだから、無理もなからう。彼女は、あばずれどもからも折紙付きの、芯底からの女なのだ。

「着いた。降りるんだ」

ロジェ・サンシール刑事が車を停めたのは自分のアパートの前だった。

戸惑いつつもミシュリーヌは、腕扼されるままに階段を昇った。

「こんなところへ連れて来て、いったい、何を調べになるの？ あなたおひとり？ 誰もいらっしやらないようね。あら、ここ、あなたのお住まいじゃないかしら。そうよ、まあ——」

純真なミシュリーヌも流石に不審がり、室の中央に立って見回し、男を責めた。

そんなミシュリーヌを、男がいきなり抱き締める。

「——ミシュリーヌ。逢いたかつ」

迫る唇を女はあらがう。

「いつか僕の云ったこと、おぼえてるだろ？ さっき、そう云ったじゃないか。だから——ああ、可愛いミシュリーヌ。嘘じゃない。空約束じゃなかったんだよ。女房とは完全に別居してる。ね、いいだろ？」

男は喘ぎ、ミシュリーヌは必死に悶えた。

「そ、そんなことおっしゃったって——。お願いだから、ちょっとだけ放して。あんまり不意なんですもの——。あ、勘忍。ちょっと

待って——」

ミシュリーヌは辛うじて振り放し、息弾ませて胸許を掻き合わせる。

「ね、ちょっとだけ、ゆっくりさせてよ。そして、事情を説明して下さない？ 私、警視庁でシゴかれるとばかり思ってたのよ」

「警視庁へなんか連れて行くもんか、ミシュリーヌ。明後日まで俺とここで過ぐすんだ。月曜の夕方にはコンピエーヌへ連れて行く。そのときになって俺にそんなことが出来るかどうか、自分でも自信はないんだが——」

利発なミシュリーヌは理解した。

「——まあ。じゃ、私の書類やなんか、みんなインチキなのね」

男はいきなり跪まずき、ミシュリーヌの脚に取りすがった。

「ミシュリーヌ、僕のミシュリーヌ。お願いだから、いう通りにしてくれ。ここまで事を運ぶのに、どんなに苦心したことか——」

それはそうだろう。検事局の移監命令書、刑務所へ交付する受刑証明書——それがなければ、刑務所側は身柄を再び受取ってくれないだろうし、連れ出されていた日数だけミシュリーヌの刑期が延びる。そしてまた、万一の連絡を慮んばかって、土曜日曜を含んで

の休暇取り——恋に眼が昏んだとはいえロジエの苦心には涙ぐましいものがあつたのだ。ミシュリーヌは感じ入り、何かに胸を打たれ、男を扶け起して深々と云った。

「——いいわ。そんなにまでして私のことを——。あなたの思いどおりになすって——」男は歓喜し、荒々しく唇をい、ミシュリーヌも応えて睨を閉じた。

「——ね、なにか飲ませて」と甘える。

まろやかな睨に男は口ずけし、金髪を愛撫し、強く抱擁してから漸く放して息も荒い。

「風呂に入れよ。化粧品もある。氣に入るかどうか分らんけど、別れた女房のお古じゃないぜ。僕が買った新品だ。足りないものがあるだろうなあ。辛抱してくれよ。風呂の支度をしてやるからな、これでも飲んで、ころがるなり、なんなとして待ってな」

ミシュリーヌは腰をおろし、感謝の眸で男を見送り、一口啜ってむせた。

「ああら、これ、きついわア」

「冗談じゃないぜ。水みたいな葡萄酒さ。一年ぶりのアルコールだから、ま、無理もないよな」

「ね、ふわふわし過ぎちゃって妙な具合よ。ねえ、聞える？ 宙に浮んでるみたい——」

「聞えるよ。お前の声ならセーヌの向うからでも聞えるさ。ベッドはもっと柔らかいぜ」

男の声が浴室から、水音とともに返る。

「おーい。俺、お前の香水だけは分ったからな、ミツコを貰ってあるぜ。ホラ、調室で初めて逢ったとき、お前、つけてたなあ」

男の言葉に、ミシュリーヌの睨が熱くなった。私のことをそんなにまで——。

浴槽に湯が音を立て、睨閉じたミシュリーヌは、女としての仕合わせに浸るのだった。

ロジェの鼻唄が途絶え、ミシュリーヌは陶酔からふと醒めた。

（いけないわ、こんなこと——）

彼女は忽然と立ち上がり、許しを乞う一べつを浴室の扉に投げ、音もなくドアを滑べり出た。

（ゆるして頂戴、ロジェ。そんなにまで想ってくれて、こんななまで信用してくれたというのに——。でも、そんなこと、やっぱりいけないことだわ。ああ、これからどうしようかしら。そう、交番へ行くことね）

ミシュリーヌは泣きながら廊下を急ぎ、曲ったあたりの室の前で、外出から戻って来た女とカチ合った。

スラリとコートを羽織って鍵穴に小腰屈め

る其の若い女性は、あのシュザンヌだった。

ミシュリーヌは夢かと喜び、物も言わずに取りすがる。

「ああ、シュザンヌ。よかったわ。私を捕まえて。お願い——」

シュザンヌも仰天し、背後を怖れるミシュリーヌの姿に、とりあえず自室へ連れて入った。

「どうしたっていうの？ こんなところで。第一、まだ仮釈放も早過ぎるわね」

婦人警官シュザンヌの眼が職業柄光って、ミシュリーヌの全身を鋭く観察する。

「さては、逃げ出して来たの？ まさかね」

「い、いえ、そんなんじゃないありませんのよ」ドアの外の廊下を男の足音が激しく通り過ぎ、ミシュリーヌは声ふるわせつつ事情を説明し、そして、頬を仄赤く染めた。

「ほんとね？ じゃ、訊ねて来るわ。待ってなさい」

「はい。お願いします。ああ、あなた、ここにお住まいなんですね」

「そうよ。ちょっと、手をお出し。気の毒だけど、お前は囚人の筈だものね」

シュザンヌは、ミシュリーヌの右手を飾り棚の柱に、手早く手錠で繋いだ。

シュザンヌが襲った室にロジェが居る筈もなく、彼女の行動は敏速だった。電話を入れるや、ロジェのインチキは忽ちにしてバレ、警視庁捜査二課はあわてふためいた。

「あら、おとなしく立ったままだったのね」シュザンヌは戻って来て云った。

「だって、私、女囚ですもの。お許しなしに坐われませんか」

ミシュリーヌは微笑して云った。もう、大船に乗ったとでも云う表情だ。

「それに、動くと、ホラ、柱に傷がつかますもの」

シュザンヌは溜息をそっと洩らし、黙って手錠を柱からはずした。

「早く刑務所へ連れてって下さいね」

「その前に警視庁へ行くの。ま、ちょっと一服しない？ おかけなさいよ」

ミシュリーヌは素直に従い、右手に手錠を光らせたまま、すすめられるものを嬉しげに飲む。

「ほんとに、神さまのお助けでしたわ。あ、そうそう。ホラ、お仕事、うまく行きました？ あなたのことですもの、きっと成功なすったにちがいますわね」

「ええ、まあ——」

「ようございましたこと。大変でしたわね、ほんとに。でも、私、黙ってたでしょ？」

「あら、そうね。お礼を云わなきゃ」

シュザンヌは、誇り顔のミシュリーヌに感謝し、ミシュリーヌは喜ばしげに笑ったのだった。

もちろんシュザンヌはそれ以上のことは告げなかったが、クラリスの巧妙な助けによって、シュザンヌは使命を達したのだった。

問題の手紙は、なんと、刑務所保管のセルマの所持品から発見されたのだ。聖書の布表紙に隠されていた手紙を発見した警視総監は飛び上って喜び、シュザンヌの手を固く握り締めてくれたことだった。

そして、シュザンヌはその上に副産物として、隠れた犯罪をも摘発したのだ。

同房だった四四六号のルイズ——そのルイズの犯行は発作的のものではなく、夫の情婦に多額の保険金をかけた上で、夫と共謀して仕組んだ計画的殺人らしいというのだった。

それが本当なら夫を逮捕しなければいけないし、ルイズは一事不再理とかで殺人の方は今のままだが、新たに詐欺罪が成立するかも知れない。

臨時賞与もタップリと、四週間の特別休暇

を楽しんだシュザンヌだったが、戻って来るなり、まだ捕まらないルイズの亭主を捜査して走り回っている今日此の頃なのだった。

「あ、そうそう。あなた、クラリスと一緒になれて？」

「いいえ。なにかあったんですの？ そりゃ一緒にになりたいですわ、あのひととは」

あんなに頼んでおいたのに——。シュザンヌの顔は、刑務所当局の不信義への怒りと、クラリスへ済まないと思う気持とで曇る。

パトカーがやって来ての心ないサイレンの音に、シュザンヌの面はますます険しい。

「あの——」ミシュリーヌは、おどおどとして婦警シュザンヌの表情をうかがった。

「ああ、そうね。じゃ、行きましょう」

シュザンヌは微笑を取り戻し、ミシュリーヌはホッとして両手をそろえる。シュザンヌの眉根は再びひそめられた。

「窮屈だけど後ろよ。辛抱するの」

このミシュリーヌの言葉によもや嘘はあるまいし、移監命令もどうやらインチキらしいし、脱走犯の扱いをするのは可哀想だ。しかし、ロジェが現われて全容が判明するまでは逃走罪の容疑者なのだ。

シュザンヌは吐息を洩らし、いと神妙なミ

シュリーヌの背で両手首を繋いだ。これで
もう、自分の住まいでの逮捕劇も三度目だ。

——何の因果でこうなっちゃうのかしら。

「念のため訊くんだけど、お前のいったことは本当なのね？ それから、その——つまりキスだけだったのね？」

「はい。ほんとですわ。お疑いなの？」

「ごめんね。さ——」

「あの、私、罰を受けることになりますかしら？」 ミシュリーヌは心細げだ。

「多分、大丈夫よ。そこ、敷物が破れてるのよ。気をつけて」

シュザンヌは腕を抱いてやり、パトカーの連中がシビレ切らして現われた。

警視庁捜査二課では、手空きの全力をあげてサンシール刑事を捜査するとともに、メグレ警部が直ちにミシュリーヌを取調べた。

「また会ったね、ミシュリーヌ・ダリユー」

警部は地下の調べ室でいい、ミシュリーヌは固い椅子の上で哀訴の色を浮べた。

「あの、私、あそこから逃げ出したんじゃないありませんの。ほんとなんです——」

「うむ。ま、調べりゃ分かる。きみ、楽にしてやり給え」

背後に立つシュザンヌは後手錠をはずして

やった。ミシュリーヌの陳述は首尾一貫して
いて、警部は深くうなずいた。どうやら、我
が課から縄付きが一人出る事になったらし
い。彼は溜息を洩らした。

「所持品は？」

シュザンヌ婦警は肩すくめて両腕をひろげ
る。ミシュリーヌの体から、ピン一本、糸一
筋も出るわけがない。白衣の男が現われて、
警部は席をはずした。

「脱いで。診察を受けるのよ」

ミシュリーヌは恨めしげにドレスを脱ぎ、
全身を医師の眼に曝らした。半地下室の窓が
ラス——その方に背を向けて四つ這い、観察
されるままに身を委す。シュザンヌが眼をそ
むけた。彼女にも、この屈辱は骨身に沁みて
いる。医師が首をふり、シュザンヌはホッと
した。

「信用しては頂けませんのね」

ミシュリーヌは悲しげに呟やき、シュザン
ヌは黙ってスカートを手渡してやった。

警部が再び入って来て、自ら調書のペンを
走らせる。

ドアが開き、背の高い男が覗き込み、警部
を呼んだ。立ち話する男を見詰めて、シュザ
ンヌの頬に血の色が染まる。男はアルベール

だった。迷宮入り寸前のマンデュー商店事件
のことらしい。

「レイモンド？ ああ、メルシェ未亡人か。

そうか、よんでいたっけな」

メルシェ未亡人！ ミシュリーヌが小耳に
挟んでビクリとした。

「——目撃者の女の子——えーと、なんてっ
たっけ。その子も一緒だな。ここはもう、す
ぐすむ。きみ、訊いてくれ給え。楽な気分
にさせて、もういっぺん思い出させるんだ。
無理だろうが」

「それが警部——。昨夜、なにか思い出した
っていつてますよ。まったく可愛らしくて賢
い子ですな、あのジュヌビエーブって子供
は——」

ミシュリーヌの腰が浮いた。おお、ジュヌ
ビエーブ！ 可愛いくて賢い子ですって！
そしてレイモンド・メルシェ未亡人——。
マンデュー事件で、いったい何かしら？ 私
のジュヌビエーブにちがいない。あの子がこ
こに、いまここに来ているのだ。いったい、
あの子が何を——。

ジュヌビエーブの名は電光の如くミシュリ
ーヌの胸に射ち込まれ、その名を口にした男
の方へと、夢中でまろび寄る。

アルベールの横顔に見惚れていたシュザンヌが二、三步追いつき、手首を掴んで利腕をねじあげた。アルベールに近寄る女にはきつい彼女だ。

「まッ。どうしようっていうのッ」

身を揉むミシュリーヌの両腕が背にねじられ、忽ち、非情な手錠が喰い込んだ。

「お、おねがい——あなた。でも、ああ」

「おとなしくしなさいッ。バカね。さ、かけてッ」

ミシュリーヌは我れにかえり、哀しく諦らめ、引き据えられた椅子で嗚咽をこらえた。

いまここで、こんな姿で、名乗りあげて対面させて貰えたとして、それが何になろう。

ふるえる背中をシュザンヌは見下ろし、黙って撫でてやった。苦笑してアルベールは去る。

「どうしたんだね？ いったい。いまの男を知ってるのかい？ ずい分と刑事に知り合いが多い女だね。きみは。アハハ」

シュザンヌの眸がキラリと光り、乳色のうなじを睨むように見下ろした。アルベールの前では淑やかなところを見せたい彼女だったのに。

「いえ。私、あの——逃げたかったんです」

「アハハ。嘘いい給え。この前は眼をつぶってダマされてあげたけど、もうその手には乗らんよ。ジェラールとかいう男は仕合わせな奴だ」

「すみません。あの——人違いでしたの」

「そうかい。ま、いいだろう。ところでと——」

メグレ警部は、ロジェが捕まって来るまでミシュリーヌを手許におきたかったのだが、逃走容疑が晴れたのなら、とコンピエーヌ婦人刑務所側が矢の催促を超越すので、午後もおそいが、その日のうちに送り返すことにした。

「そっちの責任だから、そっちで責任をもって連れて来いといってやがるんだ。口惜しいが、こっちの大黒星だからなあ。それに、新聞社がカン付いたらしい。シンシアがヘマやるもんだから」

警部はこぼした。

「あの、なんなら私が連れて行きますわ」

シュザンヌはいい、警部を気の毒そうに見た。警部も、一段落ついたら、進退伺いぐらいは出さねばならないことだろう。

ミシュリーヌはシュザンヌに連れられて二課の部屋へ来た。ミシュリーヌのことは全員

が知っていて、シュザンヌの支度を待つて立たされている間にも、男たちはもとより婦警たちも打ち眺めて、ひそひそと話し合った。

しかし、ミシュリーヌは必死の思いであたりを盗み見るのだった。求める姿は室内に見当らず、熱い涙を睨にこらえるミシュリーヌであった。おお、ジュヌビエーブ。神さまのお思召しがあれば、いつの日にか、晴れて逢えることもある。ああ、私のジュヌビエーブ。やっぱり死んではいなかったのね。いえ、お前が死んでいるなどとは、これっぽっちだって考えたことはなくってよ——。

「さ、行きましょう」

シュザンヌ婦警が腕を扼し、ミシュリーヌは未練を振り切った。眼を押えてあげる両手には、シュザンヌに嵌められた手錠がガツチリと硬かった。

うなだれて歩むミシュリーヌの眼に、地味なスカートと黒いローヒールが映った。

「あ、いいとこで逢ったわ」

シュザンヌが扉のところまで、そのスカートに声をかけ、革ロープを握り直した。

「ルイズ事件の記録、全部見付かったわ。デスクにおいてあります」

「ありがとう」

「じゃ、行って来ますわ、レイモンド」

かたわらの女囚はまたもわなないた。思わず頭あげて、詰め寄らんばかりに見詰める。

しかし、それはメルシュ未亡人のレイモンドではなく、婦人警官のレイモンドだった。

「ほう」と、レイモンドは肩をすくめる。

「ロジェが一目惚れするだけのことはある女っぷりだね。でも、わりかし威勢のいい女だこと。バンド締めさせた方がいいよ、シュザンヌ」

「ええ、でも——」

「さっきだって、アルペールにだかドアにだか、突進したそうじゃないの。用心した方がいいねえ」

大先輩の忠告にはシュザンヌも逆らえず、ミシュリーヌは室内に逆戻りさせられた。取寄せた腰バンドの黒革を、シュザンヌは気の毒そうに締める。分厚い革がギシギシ鳴り、前側中央の錠がカチリと手錠をくわえた。

「そうしといた方がいいね、シュザンヌ。俺も注意しようと思ってたんだ。なにしろ、大切な荷物だ。万一のことがあったら、恥の上塗りだもんね」

くわえ煙草の男が寄って来て、ジロジロ見ながらいう。

ミシュリーヌは唇噛みしめて口惜しく思った。レイモンドとかいう婦人警官は誤解して

いるのだ。しかし、その誤解を解くすべもない。それには、ジュヌビエーブの名を明るみに出さねばならないのだ。おそろしかったブランドンシェ検事、いかめしかった法廷、それからからも遂に隠し通せたあの子の名を、いまここで口に出ることが出来ようか——。

「おい、大丈夫かい？　ひとりで。俺も行くか？」

「駄目。この女囚は、男のデカには取扱いをさせられないの、剣呑で。警部さんの白髪のために駄目なの」

シュザンヌはやり返ししながら、スーツの上で腰バンドを隠してくれる。

「それに、このひとは心配要らないわ。独りででも帰って行くわよ。ねえ、そうでしょ、ミシュリーヌ」

「へええ。ヤケに肩入れしちゃったもんだ」

「そうか、分ったわ」とレイモンドが寄る。

「あなた、コンピエーヌで同窓だったのね」

「ええ、まあね。でも、このひと、すぐに転校しちゃったの」

シュザンヌとミシュリーヌとのいきさつは警部以外は知らない。

「じゃ、まあ大丈夫だよな。なにしろ、シュザンヌは女囚心理学の最高権威者だから。気を付けて行きなよ、ご苦労さん」

パトカーの後部シートにうずくまって、ミシュリーヌは首を垂れた。そして、走り去る窓外をときどき盗み見る。束の間の自由ははかなく破れ、こうして再び、あの鉄格子の中に戻るのだ。ミシュリーヌは身動きし、辛うじて眼頭を押え、腰の革バンドがギチギチと音を立てた。

「窮屈でしょ。レイモンドがいうもんだから仕方なかったのよ。辛抱してね」

ミシュリーヌは横顔をあげ、隣りで革ロープ握るシュザンヌに微笑み、かぶり振った。

「私、いまじゃもう、体に錠をかけられてる気持がどんなか、よく分ってるわ。でも、悪く思わないでね」

「とんでもございませんわ。私、あなたに縛って頂けて、ほんとに嬉しいんですの。いっぞやがありますとございました」

ミシュリーヌは、北第一署でかけて貰った情けに對し、またしても感謝するのだった。

「ね、教えて下さいませんか？　このままで連れて行って頂けるのかしら。それとも——」

「汽車よ——」

シュザンヌは溜息ついて答え、女囚の顔も悲しく曇った。

ノール駅前の広場にさしかかり、シュザンヌは意を決して鍵を取り出した。黙って錠をはずし、腰バンドをスーツの下から引きはがす。女囚は全身で喜び、いそいそと金髪を掻き撫でた。シュザンヌは革具をバッグに押し込み、女囚は更に歓喜する。

「あら。それじゃ、勘忍して頂けますのね？嬉しい」

「私ねえ、コートを貸してあげたかったの。でも、急だったもんだから——。さ、これを持って」

シュザンヌは、手錠の革ロープを束ねてミシュリーヌの手に押しつけ、さらに、しっかりとした表紙の大判週刊誌をも持たせた。

「そうしてりゃ、分りゃしないわ。はずしてあげたいのは山々だけど、手錠だけは辛抱してね。さ、平気な顔して歩くのよ」

シュザンヌは魅力タップリの笑いをパトカーの警官に投げ、ミシュリーヌは感謝に胸詰まらせつつその背の後ろからドアを降りた。

もう初冬とはいえ、コートなしの女性だっ
ていないことはない。靴下なんかは、よく注意しないと有無が分らないのがナイロンの有

難さ、そそっかしいのは週刊誌をハンドバッグだと思ってくれるだろう。帽子は、まあ趣味の問題だし、シュザンヌだってかぶっていない。ミシュリーヌの金髪は美しいし、化粧なしでも彼女は十人並み以上だ。

汽車は二十分の延着が告げられ、シュザンヌはいい難そうに囁やいた。

駅の化粧室の片隅に人目避けて独り立ち、ミシュリーヌは悲しく盗み見る。鏡の前には自由の身の女性たちが群がり立ち、ハンドバッグひろげて化粧直しに余念がなかった。

出て来たシュザンヌはホッとした表情を押し隠す。信用してはいるものの、やっぱり気が気でなかったと見えて、身繕いもそこそこの風情だった。

「ご心配だった？ 心配だったのは私の方ですわ、このまま放り出されるのかと思って」

ミシュリーヌは笑って両手を動かす。

「だって、無一文でこれなんですもの」
「そうね。迷子になってもすぐ分かるわね。あなたは？」

ミシュリーヌは頭を振って小声でいう。

「その時刻じゃありませんわ、ホホホ」
「そうだったわね。食事前に許可を貰うには大変だったわ」

シュザンヌはそのみじめさを思い起し、そんな世界へ連れ戻される女囚ミシュリーヌを憫れみこめて眺めた。そして、そこへ連れて行くのは他ならぬ自分なのだ。

婦人警官シュザンヌは気を取り直し、明るくいった。

「ね、なにか軽いものでもどうお？ あすこへ戻ったら、もう——」

「あなたが欲しいのなら、どうぞ」

二人は駅のキャフェの片隅に陣取り、自分の前にもおかれた茶碗を見て、ミシュリーヌは声をあげた。

「あら、私はいいいんですのよ」

「そんな強情張らないで。さ、手を出して」

人目憚りつつ促がすシュザンヌではあったが、鍵持つその手をミシュリーヌは拒み、頑くなに週刊誌を握り締めて、両腿の間から両手を出そうとはしなかった。

シュザンヌは諦めて、独り飲む。

「お怒りになったの？」

「ええ、すこしはね。もっと素直だと思ってたわ」

「ごめんなさい。でも——。私、嵌められる
ときが嫌ですの。それも、こんなとこで。ど
うしたって分ってしまいますわ」

シュザンヌは後悔した。自分では精一杯の好意で慰さめてやるつもりだったが、やはりそれは残酷なことだったのだ。

シュザンヌは自らを責め、半ば残したまま立ち上ったのだった。

二人は待合室のベンチで待ち、人々が現われては立ち去った。ふと、ミシュリーヌは涙ぐみ、自分が哀れに思えてならなかった。忙がしげに行き来する人々、ミシュリーヌにはその人々すべてが幸福に見えるのだった。ミシュリーヌは素足を深々とベンチの下に引き込み、うなだれて哀しく溜息し、その眸を僅かにあげて、人々の姿を見やった。

そして、ミシュリーヌは全身を硬直させて喘いだ。ピエールの姿が見えたのだ。ピエールは、とみに貫録もついで応擧な態度、微かにびっこ引く姿も堂々としていた。

ミシュリーヌは一瞬、まなざしを喰い入らせ、忽ちにして深く伏せた。しかし、その睨には、寄り添う妻コンスタンスの姿と、まっわりついてはしゃぐ三人の子供の有様とが灼きついていた。コンコースを通過して去り行く彼等——ミシュリーヌは再び眸をあげようとはしなかったが、彼等の後ろ姿はありありと睨に描かれるのだった。

一家をあげてパリ見物に来たのか、それとも、週末旅行の乗換えの一刻なのか、旅装も嬉々たる一家族の満ち足りた絵であった。

子供たちをたしなめつつ、なんと仕合わせげなコンスタンスだったろうか——。ミシュリーヌは、こみあげる胸の奥底に、一瞬、淡い嫉妬を燃やした。そのかみの日、伯母が風邪さえ引かなければ、あのコンスタンスの姿が、或いは今のミシュリーヌであったかも知れぬ。

去来する感慨といいようもない悲哀とにミシュリーヌは身じろぎもせず、スピーカーが音楽を中断してアナウンスが聞え、そんなミシュリーヌをシュザンヌがそつと促がした。

ミシュリーヌは卒然と立ち上がり、握っていた筈の革ロープが落ちて垂れ、シュザンヌの方があわてて拾って丸めた。手渡されて初めて気付き、想い醒めて女囚も狼狽し、もかく両手に手錠が音を立て、女囚は更にうろたえて、週刊誌を持ち直したのだった。

車中のボックスの向い席には誰も坐らず、婦人警官と女囚とは、二人掛けシートに二人だけだった。

「ほんとに助かりますわ。お情けは忘れません」

ミシュリーヌは、膝の週刊誌の下に両手を潜らせてうなだれたまま、小声でシュザンヌにいった。

「私だってイヤだもの。ね、一日も早く出して貰えるようにするのよ。体に気をつけて」

「はい。あの、あなたも、お元気で——」

「ありがと。悪いヤツラをジャンジャン捕まえるわ。あら——」

二人は声立てて笑い合った。

「ね、でも危ないことだけはなさらないで。私、出たら、お礼に参ります。そのときに、お墓に花を捧げるなんて悲しいですもの」

「あら、お礼参り」に来る気なのね。ホホ。

でも、もう悪いことしないでね。あら、あなたに、こんなお説教は要らなかったわ」

「もう、決して——。誓いますわ。私、どうしてあんなこと、やっちゃったのか、自分でも分からないんですの」

「そうね。私も不思議に思ってるのよ。でも世の中にはいろいろなことがあるわ。出直しなさいよ。私もできるだけのことは——。あなたとは不思議な縁があるのよ。お仕事を離れておつき合いたいわ。手錠持って追っ駆けさせるのは、おしまいにしてよね」

奇すしき二人の縁は、果してそうであった

ろうか。二人の女性には心を暖かく交流し合いつつ、それぞれの物思いにときどき沈んだ。女囚ながらも心打つ佳人ミシュリーヌ、この女はアルベールを知っているのだろうか。知っているとしたら、どんな風に――。

シュザンヌは疑いをおちまけかけ、そして思い止まって妄想を振り払う。見やる女囚の横顔は、夕暮の車窓に仄白く朧たけて、シュザンヌの胸には再び三たび、自分ながら馬鹿々々しいと思われもする不安がきざすのだった。

(いっそのこと、思い切って――)

と、ミシュリーヌはミシュリーヌで思い悩む。

(このかたなら大丈夫よ、きっと悪いようにはなさらないわ。でも――)

いとしのジュヌビエーヌは、今日、この手の届くところに来ていたのだ。ミシュリーヌは身もだえ、あわや口を切りかけた。

そこへ一人の男がやって来て、向いシートに腰をおろした。

ミシュリーヌは、ためらって思い止まる。

二人の女性には、ついに、最後のダメを詰め合うチャンスを失なった。

アルベールに寄せるシュザンヌの思慕をミ

シュリーヌが知ったならば、十年の後、アルベールは非業の死を遂げずに済んだことだろう。そしてまた、ミシュリーヌがジュヌビエーヌのことを打ち明けていたならば、或いは娘も生みの母を夙に知って、身を犠牲にしての悪の道に我が生み母を、知らず追いやる破目にはならなかったであろう――。

しかし、ミシュリーヌとシュザンヌは、それぞれの悩みを打ち明ける勇気がなかったのだった。

向いシートの男はセールスマン風、やがて中年女もやって来て、男の隣りに坐わった。

中年女は教師風、鋭い目で向い席を品定めし、ミシュリーヌの姿を無遠慮に観察し、脚を見定めて首を振った。ミシュリーヌは体を硬張らせ、頼みの綱の週刊誌を見詰める。まったく、イヤな女が来たものだ。

シュザンヌも露骨に眉をひそめ、男が陽気に口を切った。鞆から、何やら、瓶などを取り出す。どうやら化粧品らしい。

「いかがですか、マダム」

と、隣の教師風に小当りした。お世辞たらたらのセールス口調、しかし、教師風は相手にもしない。男はシュザンヌに鋒先を向けた。シュザンヌなら、男の讃辞も空々しくは

感じられない。

「いまのお化粧で、そんなに美しいんですからなあ、これをお使いになれば、そりゃもう光り輝やくというもおろかですよ――」

シュザンヌは苦笑し、瓶を押し戻した。男は肩をすくめ、真向いの本命ミシュリーヌに笑顔を向ける。うなだれた顔を覗き込まれてミシュリーヌは、ますます身を固くした。

シュザンヌは素早く、機先を制した。

「このひとは駄目。ルソーの心酔者で、熱烈な自然主義者。化粧品なんか持って行ったらハリ倒されちゃうから――」

「おや、お連れだったんですか。いや、それならなおのこと、我が社の製品を使って頂かなくちゃ。そうですか、お化粧反対論のお方ですか。いや、そりゃもう、あなたは化粧なしでも見惚れるほどにお綺麗ですよ――」

「いくら自然に還れただって、口紅ぐらいはおつけになったら？」

と、女教師風がジロジロと見る。

「お帽子やコートなしはまあいいとしても、靴下お穿きにならないのも主義のため？」

ミシュリーヌは体を熱くして唇を噛み、シュザンヌは女を睨みつけた。

(しまったわ。精神病患者にしとくんだった

わね。でも、なんとイヤな女——」

男はシャアシャアと続ける。

「いや、結構なことで。ゴテゴテしたお化粧
てものは全く見苦しいもんですからな。そこ
へ行きますと、この新発売のローションとパ
ウダーは、自然のままの美しさを優雅にきわ
立たせることに意を用いまして——。自然の
ままの美をですよ、お嬢さん」

「——結構です。要りませんわ」

ミシュリーヌは蚊の鳴くような声でいい、
男はなおもしつこい。

「ま、いっぺんだけ、お使いになって見て下
さい。いや、お代は要りませんからな」

と、ミシュリーヌの膝の週刊誌の上にケー
ス入りセットをおき、さりげなく素足を眺め
た。ミシュリーヌは泣きそうな顔で婦人警官
に訴え、シュザンヌは手早くケースを取り上
げる。

「駄目だと申し上げてますのよ」

「そうですか。残念ですなあ。わが社の製品
をお試み下されば、きっとお考えが変わるん
じゃないかと思うんですがね。あ、そうだ。
じゃ、香水なんかは如何で？ 有名なミツコ
をご存知でしょう？ あの匂いを基調に致し
まして、ぐっとセクシイ——いや、失礼、よ

り典雅でシック——そして、お値段の方は半
分ですぞ。え？ お嗅ぎになるのもお断わり
ですか」

鼻先につきつけられた香水瓶に、ミシュリ
ーヌは顔を横に伏せて拒んだ。

「じゃ、これは如何です？ ビタミンD配合
のマニキュア。勿論、無色ですよ」

ミシュリーヌは遮蔽物の下で、こぶしをふ
るわせる。

「お爪の手入れは化粧じゃありませんよ。身
だしなみでさア。むろん、お塗りになってな
いんでしょう？ サービスして差し上げます
よ。さー」

ミシュリーヌは男の無頓着さと熱心さが
恨めしくなった。何の屈託もない笑顔で、彼
女に両手を出せというのだ。社会から締め出
された身を示す手錠——その手錠の鋼鉄が、
除くすべもなく両手首に嵌まっているのだ。

ミシュリーヌは両手を膝の間に深々と沈め、
週刊誌を落とすまいと指先が必死だ。男の手
がその週刊誌に延び、ミシュリーヌは悲鳴に
近い声を洩らして上体を倒した。

「ほんとにしつこいのねッ」

ついにシュザンヌが男の手を制して、鋭く
きめつけた。意気どみに気おされ、男はたじ

ろいで、バツ悪げに顔を撫でる。

（まだ感付いてる気配もないのね。カンの鈍
い男なこと。でも、可哀想なミシュリーヌ）
「いまだき珍らしいお嬢さんですこと、お化
粧がお嫌いだなんて」

眺めていた女教師風が口を出す。

「ま、それだけ器量に自信がおりなんで
しょうけど。ホホホ。ね、お読みにならない
でしたら貸して下さいませんか？ その週刊
誌。いえ、古いのは分ってますわ。読み落と
したもんですから。いいでしょ？」

ネチネチと意地悪い言葉——ミシュリーヌ
は金髪振って頭をあげ、中年女をキッと睨ん
だ。おさえにおさえたみじめさが、怒りとな
って爆発したのだ。もう、どうにでもなれ、
という気持だった。

「どうぞ——」

ミシュリーヌは週刊誌を中年女の膝に投げ
た。シュザンヌが制止するひまもないくらい
に、衝動的で激しい動作だった。

手錠が光って鳴り、男は口をあけた。女教
師風は驚いた様子を示しつつも、薄い唇に意
地悪げな笑みを浮べて、満足そうだった。

「お分りになった？」

ミシュリーヌは両手を中年女に突き出し、

ガチャガチャ引張って音を立ててやった。革ロープがほどけて床に垂れ落ちる。

「おやめなさい、ミシュリーヌ」

「いえ、いわせて。このひと、知ってて意地悪したのよ。どう？ これで満足でしょ？

気になって今夜眠れないとお気の毒なもの。

「そうよ、私は女囚なの。逃げ出したんだけどこの婦人警官に捕まえられて、またぞろ刑務所へ逆戻り。珍らしいんでしょう？ よおく見るがいいわ。これが手錠というものよ」

「おやめったら。まあ、坐わるのよッ」

ミシュリーヌは矢庭に立ち上がり、シュザンヌが肩を押え、まわりの人々も驚いて眺めた。押えられながらミシュリーヌはさらに「それからねえ、商売で熱心なあなた。何年か経ったら、きっと買ったげるわ。でも、いまはご覧のとおり駄目。煉り歯磨きにもご用はないんだもの——」

女囚は涙声になり、くくつと鳴咽した。

「——靴クリームだって——ハンケチ一枚だって——いまは要らないの」

婦人警官は革ロープを拾いあげ、黙って立ち上がり、女囚の腕を抱き起した。

「したたかな女ですこと。綺麗な顔しててもやっぱりねえ。何年ですか？ 何の罪？」

「あなたには関係ないわ」

シュザンヌは中年女をビシリときめつけ、引き摺るようにミシュリーヌを促がした。

眼をパチクリとタマげていた男が、素早くミシュリーヌの手に何か握らせた。婦人警官と女囚とは、人々の好奇の眼に見送られつつドアを出て、連廊で一息ついた。シュザンヌはさらに化粧室へ連れ込む。

「バカね」

「すみません。でも、あんまり悲しかったものですから——」と、女囚は鼻を吸る。

「そうね。無理ないわ」

二人は見詰め合い、女囚は思い詰めた風情で両手をあげた。

「——ね、お願い。はずして」

ひしとミシュリーヌが眸で縋りつくのと、シュザンヌが鍵を取り出すのとは、同時だった。手錠と革ロープは、ショルダーバッグの中に納められた。

「あら、なにを握ってるの？ お見せなさいッ。まあ、口紅じゃないの？ これ——」さっき、男が押しつけてくれたものは、なるほど口紅のケースだった。

女囚は手首を揉みながら、うなだれて、黙って渡す。あの男の気持は痛いほどに嬉しか

ったが、囚われの女には所詮無用のものだ。婦人警官シュザンヌは溜息を洩らした。

「いいわ。お塗りなさいな。折角なもの」

ミシュリーヌは口紅を指先に睨を熱くし、感謝の眸を投げ、一瞬、シュザンヌの赤い唇を見詰め、黙って鏡に向いた。塗りながら、ミシュリーヌはホロホロと泣いた。

「とっても綺麗に塗れたわ。じゃ、悪いけど預かってくわね。きつと、取り戻しに来るのよ、いい？ さ、顔を拭いて」

ミシュリーヌはコックリとうなずき、ハンカチを返してニッコリ笑った。

「無理いってすみませんでした」

「いいのよ。あら、笑ったのね、よかった」

ミシュリーヌは、鏡に映る自分の顔を盗み見て、恥かしそうに笑顔を示す。

「でも、汽車の中って、ほんとに暖かいですわね」

シュザンヌは、ミシュリーヌの言葉に胸を刺される。秋の刑務所の体験しかないシュザンヌだが、あの鉄格子の中の冬の寒さは、充分に想像できる彼女だった。

シュザンヌは哀れさに胸迫り、自分の女囚を黙って見詰めた。

（私が連れて行くのね、あそこへ。可哀想。

「できることなら逃がしてやりたいけど——」
婦人警官シュザンヌは氣を取り直し、明るくいった。

「中はもっと暖かいわ。さ、入りましょう。

あら、バカねえ、ずっと遠くのハコへ行くのよ。それとも、自分のお顔をまだ見足りないの？ ホホホ。あ、コート、貸したげるわ」

ミシュリーヌは、このままずっとここにいたかった。しかし、そのうちには誰かが入って来るだろうし、自分はいいとしても、シュザンヌを立ちん坊にしては相済まない。ミシュリーヌは素直にうなずいた。

「はい。じゃ——。もう落ち着きましたの。

おねがいしますわ。あら、コートじゃございませんの。とんでもない——」

「バカね。またバッグを引っくり返させる気なの？ほんとにコートはいいのね？少し長過ぎるものね」

シュザンヌは、そろえて差し出す相手の両手を軽く叩き、嬉しげにいじらしい背を押したのだった。

席はあちこちに空いているが、二人並んで坐れるところはなかなか見付からなかった。

三両目でシュザンヌは諦め、とある空席にミシュリーヌを坐らせ、自分は少し離れた

ところに腰掛けた。バッジさえ示せば、席ぐらいはわけなく融通して貰えるだろうが、そんなことをする氣は勿論ないし、ここからでも、ミシュリーヌの金髪はよく見える。

その金髪と車窓とを半々に眺めつつ物思うシュザンヌの胸に、想うこともなく浮んで来るのはアルベールのことだった。彼女は頬を染め、そして、キッと眸を光らせた。

通路をやって来たのは、さっきの女教師風だった。ミシュリーヌを認めてニヤリとし、金髪の後頭部がピクリとわななく。

「まあ、ここにいらしたのね。やっと見付けたわ」

見上げるミシュリーヌの横顔が硬張り、シュザンヌは腰を浮かせた。

（ほんとに仕様のない女。逮捕しちゃおうかしら。みだりに話しかける罪ってのがあったんじゃないかって——）

「あのね、お借りした御本、お返ししようと思ひましてね。はいありがと。ホホホ。あらお連れのかた、どちらへ？」

ミシュリーヌの眸が後ろへ向き、救いを求めるまなざしを投げる。

「あら、口紅おつけになったのね。主義は主旨替え？ あーら、そして、綺麗な腕環をな

すっていらしたのに、おやめになったのね。アクセサリー派から塗りたくる方へ御転向ってわけ——」

シュザンヌは唇噛んで立上った。

「このひと氣分が悪いんですの。ですから、もう——」

「あら、やっぱりいらしたのね。当り前のことですわね。そりゃね、このひとが氣分よくないのは分ってますわ。だってねえ、ホホ。でも、もしものことがあったらどうなさるおつもり？ こんなにしていいんでございましょうかしら？ 腕環、返しておやりになったら？」

「御心配要らないですよ」

シュザンヌはキッパリといって睨みつけ、女は威厳に打たれたか、肩すくめつつもブツクサ呟いて去った。そして、婦人警官とその女囚とは、再び席を求めて歩くのだった。

夕暮どきのコンピエーヌ駅で、二人は化粧室に入った。女囚は、何も云われなくとも鏡に向い、束の間の口紅を落とすべく、護送者に紙をねだった。

「ほんとに嬉しうございましたわ。ありがとうございました。どうですかしら？ 綺麗に落ちました？」

護送の婦警はうなずき、女囚はキツパリと両手をそろえた。

シュザンヌは溜息をつき、バッグを探る手を止めた。誰か入って来たのだ。それは、またも、あの女教師風だった。

「あらま、やっぱりここでお降りだったんですね。そりゃそうですわねえ。ホホホ」

二人は唇噛んで睨みつけ、女教師風はどこ吹く風とばかりに薄ら笑い、ちらちら窺いながら悠々と鼻を叩く。

ミシュリーヌは金髪を掻き上げて後ろへ振り払い、両手でシュザンヌを促がした。

シュザンヌの手錠が音忍ばせてゆるくからみ、ジジ、ジ、と鳴り、横眼で眺めた女がさりげなくやって来て、満足げに笑った。

「あなたのお名前を、お教え願えません？」
シュザンヌは怒りを抑えていった。

「あら、御自分からお名乗りになるのが礼儀ですよ。でも、いいわ。私、この近くの婦人矯正機関に勤めてる親類を訪ねて参りますのよ。名前をお聞きになると吃驚なさるから申し上げませんけどね、ホホホ。じゃ、お氣をつけてね」

女は勝誇り、立ちすくむ女囚にさげすみの眸を投げ、体に不釣り合いなふくらはぎを太く

見せて立ち去った。

（へ、へん、だわ。私は警視庁の警官よ。違反を告げ口されたって平チャラだわ）

しかし、女囚は涙ぐみ、護送者に眸で訴えていた。意地悪い支配者の耳に入ったら、苛められる材料にされるかも知れない。それだけでなくともミシュリーヌは、今日のインチキ連れ出しで刑務所当局の心証を害しているに相違なかった。

「大丈夫よ。あなたの知ったことじゃなくってよ。さ、行きましよう」

シュザンヌは革ロープを握り直す。

「手を隠す？」

女囚ミシュレーヌは微笑み、哀しく首を振ったのだった。

シュザンヌは駅前でタクシーを拾った。警視庁の黒星なのだから、迎いの車を刑務所側が寄越す筈もない。

タクシートの運転手は口笛を吹き、後部シートに体をねじ向け、二人をジロジロ眺めた。

「どちらへ？」

「刑務所。分らないの？ 早く出して」

シュザンヌは、窓越しに集まる視線に眉を寄せ、運転手をきめつけた。

「へい、へい。だけど、あなたみてえに綺麗

なお嬢さんが牢番女なんかしくたって」

車は走り出し、縮こまっていた女囚も一息つく。

「お嬢さんみてえな方がいるんなら、あっしも御厄介になりてえぐらいなもんだ。けど、その女も、なかなかイカス別嬪じゃありませんかい？ その別嬪、なにヤラかしたんで」

「あのね男が恋しくて刑務所逃げ出したの」
ミシュリーヌが口を出した。観念してはい

るものの、あの鉄格子の中へ戻るのだと思うと、そして、どんな目に合わされるかと思うと、それが目前に迫って来たいま、その悲哀と恐怖を紛らわしたくもなかったのだ。

「——そしてね、男を殺して、このひとに捕まったのよ」

「お黙りなさい」シュザンヌが叱った。しかし、いまミシュリーヌが何の気なしに、冗談のつもりで言った言葉——それが何年か先にはそのとおりに、この二人の女性の身に現実のことと成ろうとは——。

「それからね、運転手さん。このひとは牢番女なんかじゃないのよ。パリ警視庁の婦人警官。凄腕利きなの。あなたも速度違反なんかすると……」

「お黙りなさいったら」

「はい。すみません」

ミシュリーヌはショげてうなだれ、シュザンヌにはめられた手錠を膝に見詰めた。

「そうね、もっとゆっくり走って頂戴」

婦人警官は素晴らしい、女囚の横顔をしばしば見やる。

ミシュリーヌは柔らかな胸で思いあぐねていた。今日の警視庁取調室で、背の高い刑事さん風の男は、たしか「メルシェ未亡人」といったつけ。すると、あのアンドリュウは亡

挿絵画家を募る

○本誌の内容にふさわしい挿絵を描いて下さる方を求めます。腕に自信のある方は、どうか奮って自作画をお送り願います。

○用紙は必ず白い画用紙に墨又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆画や青インクは製版できませんのでお避け下さい。大きさは御自由ですが、原寸或は二倍、三倍ぐらいが適当です。アミ目やハイライト版は最初は避けて下さい。

○今まで多数の御応募を頂きましたが残念ながら発表に耐えるものが認められませんでした。何卒傑作をお寄せ下さるようお願い致します。

くなったのか。おおジュヌビエーブ、どうして私はお前を手離してしまったのかしら。どんな風に大きくなって、どれだけ可愛らしいお前なの？ 一度だけ、一目だけ、逢いたいよ。きつと探し出すわ。それまで元気でいてね。そして、レイモンドさんを困らせるんじゃないわ。ああ、神さま、おねがいです。あの子をお護り下さいまし——。

ミシュリーヌは両手を胸にあげ、手錠の音とともに十字を切った。

(でも、マンドゥウ商店事件で、いったい何かしら？ それを知っておけば手掛りになるんだけど。教えて下さるかしら——)

ミシュリーヌは思いつめて眸をあげた。しかし、彼女が口を切る前に、シュザンヌの方が先に云ったのだった。

「体に気をつけるのよ。これから寒くなるけど、風邪引かないようにね」

「はい」ミシュリーヌは自分の言葉を吞む。

「じつはねえ、私、あなたのこと調べたの。どう考えてもひどいと思うわ、四年なんて。あなたみたいなひとを——しかも、かりそめにも伯爵夫人だった人をねえ——」

シュザンヌは声をひそめた。

「あなた、どうして上告しなかったの？ すればよかったのよ。あのね、内緒だけど教えてあげるわ。陪審員の女の中にね、貴族を憎んでる人がいたの、名前は云えないけど。弁護士さん、どうかしてたわねえ。その金持の令夫人たらね、スゴイ持参金つきで娘を貧乏貴族のとこへ嫁にやったのよ。ホーヘンツォルレン家のナントカのナントカの息子。でも、一年足らずで破鏡の憂目よ、家風がどうとやらで。だもんで、カッカッしてた最中だったのね——」

ミシュリーヌは微笑んだ。もう、過ぎ去ったことだ。なにをいまさら——。

「あの、私、お手紙は出しません。けど、出して頂いたら、きつとお訪ねします」

ミシュリーヌは静かに云い、灰色の高い塀が長々と見えて来た。

「ゆっくりやったって、やっぱり着いてしまいましたぜ。じゃ、別嬪さん、つらからうが辛抱しなよ」

運転手は金を受取り、正門前で立ちすくむ女囚ミシュリーヌの全身を眺める。

「出るときにはそう云ってくれよナ、迎えに来てやるぜ。俺、エドアル・モナースってんだ。あばヨ。鉄の腕環は冷たかろ、可哀想に

なア。そんな悪い女ア見えねえが——」

晩秋の夕陽はとくに沈み、冷厳な鉄門を眼前にして、ミシュリーヌは寒さに震えた。素足を吹き過ぎる夕風が、身に泌みて冷たかった。両手の手錠が冷え冷えと、ひときわ硬く骨身に泌みた。

そうだわ、イヴェットがいるのね、私には——。ミシュリーヌの胸に仄暖かいものが滲む。鉄門が重々しく開き、シュザンヌが無言で腕を扼し、ミシュリーヌは云った。

「じゃ、さよなら、シュザンヌさん。少し早いけど。あなたもお元気でね」

門の守衛室には既に事情は伝わっていた。連中は、音に聞えたパリ警視庁の婦人警官シュザンヌを皮肉な眼で眺めた。

「おや、またお越しですかい？」

男の保安課員はシュザンヌに片眼つぶる。

「こんどは何をお探しなんで？」

「しッ。あんたって口が軽いんだねえ」

保安課のスカートが男の同僚をたしなめ、意地悪い眼でミシュリーヌを眺めた。

「大丈夫ですかしら？ 私、こわいわ——」

ミシュリーヌはわなないて、シュザンヌにすり寄る。

「心配要らないってば。大丈夫よ。ちゃんと

証明してあるんだから」

シュザンヌはショルダーバッグを叩き、その中から取り出した書類を差し出した。

「何が大丈夫なの？ シュザンヌ。でも、あなたとはいろいろあったからねえ。そうだなきゃ、イヤ味の二つや二つは云わせてもらうとこだけど。あら、受刑証明書までこさえてちゃってる。警視庁って、ずい分と女には甘いんだねえ。その女囚の今日一日をさア——」

男が割り込み、事故女囚を好奇の眼でジロジロと眺め

「正午まではここに居たんだし、点呼前にここにいないじゃないか。その受刑証明は妥当と認めるぜ、俺は——」と請け合ってくれた。

「ふん、そうかい。さ、婦警さん、ワッパはずしてやってよ。身柄、もううわ」

「あら、ここで渡すんですの？ ああ、そうでしたわね」

「そうとも。思い出しただろ？ さっきからお待ち兼ねで御気嫌斜だよ。あんたたち、歩いて来たのかい？ それとも汽車がおくれたの？ 駅から電話ぐらい入れてくれなきゃ——」

カウンターに片肘突いて新聞読んでいたスカートがそういって、やおら向き直った。事故女囚ミシュリーヌを見据えて寄って来るその保安課の片手には、ぶら下げて持つ手錠が銀色に光って、スカートの横でカチャカチャ鳴っていた。

ミシュリーヌは、堪え難い心細さに胸しめつけられた。いつまでも嵌めていたいシュザンヌの手錠が取り去られ、ミシュリーヌは眸で取りすがる。その両手には、すぐさま、保安課スカートの手錠が荒々しく与えられ、音を立てて喰い込んだ。これで、この婦人警官、やさしかったシュザンヌの手から引き離され、冷酷な組織の爪に捉えられたのだ。

「——お世話になりました。ありがとうございます——」

「しおらしいこと云うじゃないの。さ、とつとと行くんだよッ、四五三号——」

ふり返るミシュリーヌの背が押され、なおもふり向く頬にビンタが鳴り、シュザンヌは手錠を持ったまま息を呑んだ。

（大丈夫とは思うけど。あの人には何の責任もないってことはハッキリしてるんだし——でも——）

素足も寒む寒むとよろめき、わなないて追

春川ナミ才画 マニア待望の素晴らしい倒錯画集

女性の逞ましい臀部の下に
うごめくことに最大の悦楽を

出すことは出来ないと自負いたします。

一、人間便器の構想

△トイレにて▽

作をものしました。予告以来十数旬、待望久しい画集が、ここにファンの期待にこたえて、絶妙の場面のかずかずを、展開いたしました。何卒、座右の宝典として保存下さるようお願い致します。かかる徹底したM画の集成は、天下広しといえども他には絶対に見

トイレの便器の上に仰向けた寢て口を開いた青年の顔をまたいだポニイテイルの髪を垂らした清楚な美しい女性が、遅ましいヒップをあらわして、人間便器である青年に御馳走を与えようとしているマニア垂涎のポーズ。かがんだ太股、脛がはちきれそうにふくらんで、この大胆な女性の魅力をいっぱいにしてゐる。

二、妖婦のいけにえ

 \wedge バーにて \vee

三、股間にて窒息

三、股間にて空息

△浴槽にて▽

肉づきのよいバスト、ヒップを誇る肉体美の裸身をすくくと浴槽に立たした美女の股間には青年の顔面が挟まれている。女が腰をかがめてお湯の中へ入ろうとすると男の顔はブクブクと水面に没してゆく。万力のような両股に挟まれた顔は、どんなにもがこうが、わめこうが、女の意のままに水に浸

四、股挟みダンス

り、また水面に弄ばれる。

△ホールにて▽

五、咽喉輪股間絞め

△応接間にて▽

敷かれた青年の咽輪には、重み
 感のあった美女の臀部が押し
 えつけ、ひろげられた手には、
 い膝とハイヒールが押さえつけ
 身動きすることもない。息も
 絶え絶えに頸を挙げて暴れるが、
 み足をバタバタさせて、断末魔の
 女は嘲笑をうかべて、男
 の動きを冷やかに楽しむのだ。

い立てられる姿を見送って、シュザンヌの胸は我がことのように痛むのだった。

シュザンヌは、体良く玄関払いを喰った。「ちょっと今ねえ、うちは取込んでるのよ。大したことじゃないんだけど」

電話で車を呼んでくれながら、保安課のスカートはシュザンヌに片眼つぶった。

「そのうちに分るかも知れないし、分からない

いかも……あ、モシモシ——。ね、黙っててよ、ね、余計なこと云っちゃった——」

そう、そのときコンピエーヌ婦人刑務所は四五三号囚ミシュリーヌのことともさることながら、もう一つの事故で取込んでいたのだ。第三監舎の婦人看守ジャンヌが、いささか飛んでもないことを仕出かしたのだ。

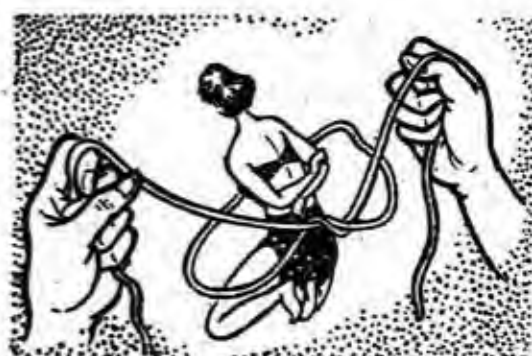
せながら、その窓全部に灯が点もっているのを見て、自分を迎えて責める準備かとおののいた。マルチャーヌ刑務課長もマルタ保安課長も、そして所長すらも退出の足を引き留められて、幹部はあらかた残っていた。しかし、それはミシュリーヌの帰獄のためではなかったのだった。

(未完)

断続の空間

エミ様に

三原 寛



途端に彼女の眼は、野性味を帯びてギラギラと輝き出した。土下座する男の頭を素足でグイと床に踏みつける。

「そう、こうやっていじめられたいのか！」

くるりと後に廻って、ドシンと馬乗りになる。太腿で腰を締めつけられ、お臀で煽られて四ツん這いで思わず二、三步よろめき出ると、今度は両肩越しに彼女の白い足が面前にヌツと突き出された。

男は首を捻って彼女の足を舐め廻すのだ。

満足気な笑みを浮かべた彼女は男の背から身軽に跳び下りると今度は男の背に片足を乗せ全体重をかけて一気に踏み下した。男は蛙のように醜く潰れる。忽ち後手に縛り上げられた男は彼女の足でゴロンと仰向けに返された。両手両足を縛られて荷物のように床に仰向き

になった男を彼女はマッサージ台に腰を掛けて獲物を楽しむかのように眺め廻す。

「さあ、たっぷりと料理してヤル。覚悟はいか！」

煙草に火をつけ一服始めた彼女の足の裏に舌を当てると彼女は足を動かして土踏まず、踵と万遍なくこすりつけて来る。やがて舌の端が足裏の指の付け根を這い廻り、指の間に舌の先がぬめり込んで行くと彼女はうっとり舌と眼を閉じ体をのけぞらして行く。二本の指を口に含んで指の間に舌を挟み込んで小刻みに摺動させ乍ら吸い込んで行くと彼女は身をくねらせて吐息を漏らすのだ。興奮した彼女が覆いかぶさって来る。大鷲が生贄を啄んでいる光景……舌肉がもっと柔軟な贅をまさぐり唇が湿った海綿を激しく吸う。後頭部が硬

い床に押しつけられる。ピクピクと痙攣が伝わる。向きを変えて、彼女の両手が今度は男の腹部を押えつける。舌は柔軟な贅から離れて、今度は、舌の先を丸く細めて消ゴムのように弾力のある感触で双丘の間をドリルして行く、濃厚なチョコレート粘性性のラムの土臭が口一杯に拡がる。遂に彼女はホームストレッチに入る。腰を一杯に引いて舌は再び柔軟な贅に包み込まれ、目も鼻も口もびったりと塞がれ両頬は太腿で締めつけられて窒息の苦悶に必死であがきのたうつ。騎手は最後の追い込みにかかり、両手一杯に男の腹筋を掴み上げて捻じ廻し乍ら、お臀に圧力を加えて行く。

遂に生暖い黄金の神酒は、飛沫を散らし奔流となって留めどもなく男の口中に注ぎ込まれる。

男の穢れに身を任せる事なく最高の快楽を得た報酬に最大の屈辱を以って止めを刺すことと思いを遂げた彼女は、ゆっくりとマッサージ台の上に身を横たえた。口一杯に拡がった噓せるような、神酒の香気に酔って異常な興奮を示した男は、息を切らせて床の上に身悶える。

「フン、もっと欲しいか？ まだ飲み足りない

いか／＼

嘲り乍ら彼女は腰を掛けたまま両足を男の下腹部に当ててジッと踏みつける。彼女の白い脂足が無慈悲に動いて、男を思うさまのたち廻らせる。

「お前には、これが相応なのさ。足で思い通りに冒されてるんだヨ／＼」

「女王様、もっと飲ませて……」

男が哀願するが、彼女は心地良さそうに足での玩弄を続けるだけである。

「それでは食べさせて下さい。食べさせて」

「食べる？ 食べるって何をさ！ アッハッハッハ、本当に食べるのか！」

「ようし、それでは、ここに来て頭をすりつけて、御願いで御覧！」

ひらりとマッサージ台に跳び上った彼女は長いプラスチックの靴ベラでトンと自分の足を叩いた。男は両手両足を縛られたままである。不自由な身体をくねらせよじり乍ら漸く台ににじり寄った男は、今度は散々苦心惨憺の末、身を起して台の上に乗れり出そうとする所を彼女は足を上げて蹴りつける。折角の必死の努力も水泡に帰し、男は再び床の上に醜くひっくりかえる。

「さあ、どうした！」

男は又、汗水垂らして同じ事を試みるが、簡単に彼女の足で蹴落されてしまう。遂には気力も尽き精力を使い果して身を起す余力も無くなる。

台から跳び下りた彼女は、すらりと脚を伸して鼻先に突きつける。片足を上げて足裏を眼の前に差し出される。くるりくるりと動かされる足につられて必死に顔を廻し舌を突き出す不恰好さを、彼女は大声をあげて笑う。

「さあどうだ！」

男の頭髪をわし掴みにした彼女は足の裏を顔に当てて引き起す。靴ベラがびしっとはじけるような音を立てて男の背中に走った。びーんと皮膚を裂く激痛に弓なりに身を反らした所を水平に空を切ったプラスチックの靴ベラが、張り切った腹筋にバシッと音を立て息を詰まらして前に崩れ落ちる。男の股間に足をこじ入れて腰を上げさせて置いて今度は尻肉を、右から左から息も切らせず乱打の雨を浴びせる。彼女の眼は嗜虐の悦びに輝いて来た。

「さあ、食べたくないのか！ 食べたかったら足にキスしろ！」

彼女の餌に釣られて身体中を打ち据えられ打ちのめされ乍ら芋虫のように彼女の足許に

這い寄って行くのだ。漸く彼女の足の裏に接吻を許され、散々哀願させられた挙句の果に彼女のトイレとして使って戴く事になり、冒瀆的な汚辱を口にする。

最後の仕上げとして彼女は男に最も恥ずべき行為を演じるよう命ずる。両手を腰に当て足を開いて傲然と立ちはだかった彼女の足下にひれ伏して男は不態な動作をのろのろと開始する。その間中、男は彼女に対する讃美と感謝の言葉、そして自己を卑下する言葉を唱え続けさせられるのだ。

「どうだ、こんなにされても、まだいじめられたいか！」

「ハイ」

「フン、それなら、またコイ！ 今日初めでだから手加減してやったけど、今度はヒイヒイ泣かしてやる」

湯舟から上った彼女の全身を丁寧にバスタオルで包み丹念にマッサージさせられ、それから床の雑巾がけをさせられて、代金を払った男は「ああ、久し振りに男をいじめていい気持だった。せいせいした！」と鏡台の前に坐った彼女の声を背に聞き乍ら個室の扉を押して、廊下を通して断続の空間から抜け出して通りに立ち、手を上げてタクシーを止めた。

奇クサロン、短信、7月号読後感など

須 渾 朔

7月号拝受、先ず、売行きやや向上とのこと、読者の一人として喜ばしいことです。「鬼六談義」「妹背」「牝犬の館」等、特に面白く読ませて頂きました。奇クの命運を担うという大傑作人気小説「花と蛇」を読み通さぬ私など、とても愛読者などと自慢(?)し得ないかも知れず、いささか気がひけないでもありませんが、これも私の趣向上止むを得ないので。逆転趣味的個所^{etc}発見、谷崎初期の本牧もの(本牧夜話、愛すればこそ、愛なき人々^{etc}戯曲多し)を一寸思い出させる個所に、いささか心ときめき、拾い読みさせて頂く程度なのに、作者の楽屋裏話を読み、全く面白かった次第です。先の「談義」中、「そういえば小説読物という雑誌があった」と書かれた、その卓越したユーモア^{etc}に感激かかるセンスを持たれる故、K誌はおろか、映画の人気成功を得られるのだ、と感心致しましたわけです。逆転趣味的と云えば、「本

牧もの」といい、「饒太郎」といい、出版不能らしい状態は、いささか淋しく、これは中村光夫の谷崎論などで有名ですが「饒太郎」を書いた若い日の文豪が、その頃は親交の佐藤氏に得意然と見せたところ、春夫氏の感想は、……^{etc}、こんないきさつだけでも再録の価値充分の筈なのに。「本牧もの」にしても「細雪」や「夢食う虫」の国民的文豪の名に価する作を書いた作者にしてみれば、若気の至りと恥とした心境は、今更局外者の私など述べるまでもないでしょうが、判るような気も致します。とはいえ、不世出の文豪をよりよく理解する上でも、これら作品群も欠かせぬのではないか、と考えたりします。こんなわけで、5月号、麻生保氏の短いご文章は印象に残りました。

最近の一傾向たる、勇敢(?)なK誌愛に燃えておられる方の尖鋭(?)な言には、気弱き私など、とてもついて行けぬ思いで、いささか憂うつでしたので、7月号「麻生保氏の意見」で、正直救われた感じです。判らないでもないのですが、ただ一行で「ほんもの」「にせもの」ときめつけるのもどんなものでありましょうか。それから読後評としていともあっさり作者を「サイコ」と片付ける記事もある。これでは何とも、大方の読者としては、後味もよくある筈もない、と考えるのですが如何でありましょう。よく俎上にのせられる夜乃氏にしても、奇クに新風をもたらししたのは事実であって、「旧号回顧」なども、昔の表紙数多くのついで、奇クを愛する人なら、誰しも楽しく、あのフォトを見た筈と思います。「パノラマ島」にしても、あした作品はなかったのですし、(実は何年前、奇クの常連作家をもじった作品があったことをぼんやり記憶していますが、あれよ、夜乃氏のものの方が印象的である)決して成功しているとは思わないにせよ、奇クが長く健在で、ファンとして奇クを読む、楽しさというようなムードは、「パノラマ」からよく伝って来るので、たとえアチャラカ的であったとしても才気は充分、(キクパンザイと花火があげられる。こんなアイデアだけでも才気充分)たまには、あしたものだって悪

くない、と思うのです。(別にアチャカラとは思わない。又、たとえアチャカラであったとしても、アチャカラのよさ、だってあるのである。もっとも誌全体から見ても、少しパランスを崩したのは事実です) 雑文であっても昔の変態趣向の誌の記事など、面白いし、時々あんな記事があってもよいのでは、と考えます。ただ余りドグマティックな書き方が多すぎると、読者としても腹が立たないでもない。「朝顔」をヒダリマキ、「珍学的」をブンガク、と読ませる駄じゃれ精神は判らぬでもないが、余りに頻発すると、やはり皮膚のむずがゆさを感じないでもない。もっともそんな、あくの強さ、が氏の個性でもありません。一番ひどい「珍学的」は、正直云って、沼氏の「手帖」のみが、私を奇クにひきつけさせた事情もあり、こんな作がのっているのに、いささか不信と憤慨を抱いた位でしたが、時々下手くそな創作をしている私には、その反逆的精神(?)のみは判るような気がしたのでした。創作にしても、女に犬の恰好をさせ、後足を上げさせるサディズム(一種の笑いがある。高級か又はその逆か、知らないが、……)がお好きらしい作者の「牝犬の館」など、乱歩ファンらしい、一種のム

ードが漂っていて、7月号では一番面白い作品品と思つた次第です。もし、この作品に秀抜奇想天外の「おち」でもつけられていたら、おそらく印象的な佳作となり得たでありましょう、と考えたものでした。(別に「おち」がある、なし、はこの作品の価値に余り関係もないでしょうが、夜乃氏のもつサディスティックなムードのなかには、一種の笑いとベースが含まれているのですから、或いは、その残酷趣味は、例えば巧妙なおちetcによって、更に生かされて来るのではないではないか、などと思つてみたまでです。これはおそらく私だけの趣味かも知れませんが)

その昔、「二百字讃歌」に大感激し、あのような凄いM作品に再会しないものか、と毎号期待して果さなかった者です。(何と印象的な逆転趣味、又、三者関係的Mであったことよ)が、最近M派の才人作家輩出、その軽快な筆力に、再び奇クへの期待を新にする次第です。5月号、田代氏の「みみずのたわごと、のラストの章」河津氏「妹背契」共にユーモアのセンスに恵まれておられるのもすばらしく、シリ阿斯な「二百字讃歌」と、その理由は審かになし得ませんがともかく時代の変化を考えさせられるのは事実のようです。

早くも7月号を手致し、あわてて書いてるうち、例によって、ごちゃごちゃとたわごとになってしまい、申し訳ありません。尚私は夜乃氏作品の熱心な愛読者というわけでもなく、余計な弁護など、大それたことをしようとして、この愚文を書いたわけでは決しないのですから念のため。又、夜乃氏他、勝手に奇クの作家の名をあげたり致しましたけれども、決してそれらの方々のちょうちんを持つような気持などなく、まして尻馬にのるような気持など毛頭ないのです。卒直に私なりの読後感を述べさせて頂いただけです。

最後になって、何とも申しわけございませんが、「読者サロン」で、赤畑修造様、貴重なフォトまことにありがとうございます。小生などご記憶下さって頂いていただけでも嬉しいですが、これは貴重な逸品全くお礼の申し様もない、感激を味わって居ります。今後ともよろしくお願い申し上げる次第でございます。

巨臀フォトは末長く、肥体フェチの小生の貴重な蔵品となることとごさいます。